



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学文学研究院紀要, 第165号, 全1冊
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 165
Issue Date	2021-12-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83541
Type	journal
File Information	00_165_all.pdf



北海道大学

文学研究院紀要

第165号

北海道大学文学研究院

2021

北海道大学

文学研究院紀要

第165号

北海道大学文学研究院

2021

目次

アイヌ語学の諸問題

——近年の議論と関連して——……………佐藤知己……………一左

ドイツ語から見たゲルマン語（6）

——3人称代名詞、再帰代名詞、所有代名詞——……………清水誠……………三左

比較宗教教典研究をどう立ち上げるかに関する覚書……………戸田聡……………六左

Creating Infidelity and Jealousy from Nothing: Iago's Rhetoric in *Othello*, 3.3.29-261

……………宮下弥生……………三左

『オブローモフ』と近代……………大西郁夫……………二七左

北海道太平洋沿岸における津波浸水想定域の空間分析……………橋本雄一……………二九左

ひらがなの天使……………中村三春……………一右

——谷川俊太郎におけるクレーとモーツァルト——……………後藤康文……………六右

『思はぬ方にとまりする少将』注解………………………………………

アイヌ語学の諸問題 —— 近年の議論と関連して ——

佐 藤 知 己

1. はじめに

筆者は長年アイヌ語の研究に従事して来たが、そろそろ定年も見えてきて、最近「何事も成さなかったな」という思いが非常に深い。筆者がお世話になった先生方、諸先輩の中にも鬼籍に入られる方が増えて来て、自分にももう時間がないことを痛感するこの頃である¹。学生時代から未解決のままの問題が数多くあるけれども、このまま、何の進展もないまま終わってしまうのか、と思うと残念である。今回は、筆者の研究に対する疑義として提案され、長年懸案であった諸問題の中から、現在の筆者の関心に直接関係のあるものを中心に若干の私見を述べたいと思う。これまでは学問的に納得できない批判に対しては時間が解決すると思って沈黙して来たが、どうもそういうものではないようだ。もう時間もないので、生きているうちに自分の考えをはっきり述べておかなければ、という気持ちが強くなったのである。とはい

¹ 先日、研究室の留守番電話のデータを確認しようとしたところ、先輩のアイヌ語研究者の切替英雄氏の「佐藤、てめえ、どこにいる？ 田中（利光）さんのことが気にかかるんで、確認してすぐ俺に電話しろ！」という元気な声が飛び出して来て、あやうく腰を抜かしそうになった。切替氏も田中先生も共に故人である。「ついに、俺にもお迎えが来たのか」と思ったからである。5、6年前の古い録音で、幸い、あの世からのものではなかったが、こういう体験をすると、もう自分に残された時間は少ないことを思わないわけにはいかない。

え、問題の解決とはほど遠く、まとまった論文には到底ならないが、このまま放置するには忍びない、というものがほとんどである。中途半端であることを申し訳なく思うが問題提起の意味で主要な点を述べて置くことにしたい。

2. 近年の議論から

2.1. アイヌ語の接続助詞について

中川（2009）は佐藤（2008）に対する書評であるが²、いくつかの興味深い問題を含んでいる。まず、中川（敬称略、以下同様）の論評から議論を始めることにしたい。中川は佐藤（2008）の接続助詞の部分について、次のようにコメントしている。

第6課「接続助詞」では「例文」として出されているものは3例しかなく、しかも肝心の接続助詞はそのうちの2例にはなくて、1例にwaひとつだけ挙げられているということで、その課の学習テーマを掲げるはずの「例文」という項目の役割をほとんど果たしていない。一方、それに対して「文法解説」はその後14ページ半も続く。しかし、実際には「文法解説」の中に大量の例文が駆使されていて、これをひとつひとつ覚えていくことで、語学の学習書としても十分な機能を果たしている。

中川（2009：108）

² ちなみに、中川の書評が載った雑誌『北方人文研究』も、以下で触れる奥田の書評が載った『北海道民族学』も、アイヌ語に特化した学術書についての書評を他には一切載せていないようである。拙著以外にも書評に値するアイヌ語学関係の専門書の出版が、これほどの長期間にわたってなかったわけでもないだろうに、拙著をそれだけ重んじてくれたのかもしれないが、これは学術雑誌として、他の書籍に対して、著しく公平性を欠いているのではないだろうか。いったい、どういう事情によるものなのか、関係者にお伺いしてみたいものだと思っている。

この中川の指摘は、不当とまでは言えないが、重要な点を見逃している部分があると思うので補足しておく。よく知られているように、アイヌ語には「接続助詞」と呼ばれてきた語類があつて、多くの形式を含むが、それらのうち、もっとも使用頻度が高く、また、それだけ、理論的にも問題を含むものが wa であるので、アイヌ語の接続助詞の、いわば代表として挙げたわけである。接続助詞は数が多いので、分類して代表的なものを挙げたとしても例文が相当な数になってしまい、本文でまた詳しく例文を挙げると重複してしまうので、それを避ける意味でも、wa の例文しか「例文」に挙げていないのである。なお、中川のこの部分の叙述は若干軽率な表現であると感じる。中川は、「例文」として出されているものは 3 例しかなく、しかも肝心の接続助詞はそのうちの 2 例にはなくて、1 例に wa ひとつだけ挙げられている」と述べているが、これだと、実際の書籍を見ていない読者は、「接続助詞の例文は 1 例しか挙がっていないのか」と誤解するのではないだろうか。しかも、「文法解説の中に大量の例文が駆使されていて」とあるのも、誤解を生む表現である。実際には、「継起関係」、「条件表現」のような項目に分けて、それぞれの項目の中で一つ一つの接続助詞の見出しを立てて例文を挙げて用法を示してあるわけなので、別段、接続助詞の解説とは無関係な例文の中から読者が勝手に接続助詞の用例を見いだして学ぶ、というスパルタンな仕様になっているわけではないのである。一般に対する紹介文としては誤った印象を与える、不正確な点があると思う。中川は、どうしてこんなことを書いたのだろうか。ちなみに、中川は奇異に感じたようだが、接続助詞の代表として wa の例文だけを先にまず挙げたのには理由がある。これまであまり問題にされたことがないと思われるが、後で述べる奥田の書評とも関連するので、ここで触れておく。例文は arpa「行け」(命令形)と nukar「見ろ」(命令形)を wa で結合して、arpa wa nukar「行つて、見ろ」という文を作ることができる、ということが実例で示されているのだが、このような接続機能が wa にはあるのである。つまり、日本語で「行けて見ろ」とは言えないところで、アイヌ語は wa を用いて命令形を接続できる、ということなのである。実際の例文を追加すれば次のようなものである。

- (1) ohaw pirkano ukopoye wa, itanki or o yan.
 汁 よく 混ぜる て 椀 中 入れる なさい
 「汁をよく混ぜてお椀によそいなさい」

あるいは、このような場合、ukopoye「混ぜる」にeci-「お前達が」という人称接辞が付加されるべきなのだが、後ろが命令文の場合は削除が可能である、という記述ができるかもしれない。しかし、これは少々、ad hocな解釈であると思う。なぜなら、アイヌ語においては、語用論的その他の要因によって、人称表示が自由に省略される現象、というのは、そう容易に見いだすことができない。逆に、命令形においては、人称表示が付くことはない。これらから考えて、やはり、waの前の節において動詞に人称表示がなされていないのは、人称表示が省略されたのではなくて、waが命令文を接続する機能を持っているからである、と見るべきであろう。このような日本語の「て」にはない機能をwaが持っており、あるいは他の接続助詞にも類似の機能を持つものがあるかもしれない、と考えたので、特に、命令文を接続するwaの用法として挙げたのである（3つの例文のうち、他の2つはwaによって接続される命令文だから「waの例文は1例しかない」のはあたりまえである）。この点について、本文中で特段に詳しい説明をしなかったのも、気がつかれないのもやむを得ないが、アイヌ語の専門家に対するコメントだと言うのに、書籍の体裁だけでなく、アイヌ語の専門家として、アイヌ語の接続助詞について、もっと何か言えないものか、と私は思ってしまう。また、アイヌ語の場合、他の言語のように、教えるべき中味はよくわかっていて、あとはそれらをどううまく教えるか、という技術の問題が大きい、というのとはちょっと事情が違うのに、その点を見逃した論評は誤解を招くと思うのだが。ともかく、わざわざ代表として挙げるからには、なんでも良いわけではなくて、例文を選ぶ側にもそれなりに思い入れがあるのだ、ということを一言述べておく。

2.2. アイヌ語の助動詞について

中川（2009）は佐藤（2009）における「助動詞」の取り扱いについて次のように述べている。

第9課「助動詞」で、佐藤氏は「wakkata ka a-eaykap.『水汲み(wakkata)を私はできなかった(ka a-eaykap)。』(口承文芸からの例)のように動詞としても用いられる」(81)のように、eaykap「～できない」を助動詞として挙げている(89)。その一方で、esinki「～に飽きる」のような語については、「動詞の助動詞的用法」という項目で取り上げている。私であれば両方とも他動詞の助動詞的用法として扱ってしまうところである。

中川（2009：109）

この部分の中川の説明は、やはり読者に誤解を与える恐れがあると思うので一言しておきたい。中川の叙述の仕方だと、佐藤が「助動詞」をアイヌ語文法の体系に認めていることは、あたかも言語学的にナンセンスな珍奇な分析であるかのように読める。しかし、注意しなければならないのは、アイヌ語の記述において「助動詞」という品詞を設定し、筆者が扱ったような諸形式を助動詞とすることは、金田一（1931）、田村（1988）でも行われていることであり、佐藤（2008）の独創でもなんでもない、ということである。そのような点をわざわざ取り上げて「他動詞の助動詞的用法として取り上げるべき」である、と批判されても、正直、当惑してしまう。もし指摘するのであれば、学史的な点に多少触れて、「佐藤のみならず、金田一、田村も助動詞という品詞を立てて記述するのが一般的であるが自分はこの分析には反対である」と述べていただきたいと思う³。ちなみに、筆者は拙著をまとめる際、学

³ ちなみに、助動詞というカテゴリーを立てることにあまり積極的でなかった中川は、その後、複数性に関する発表において pa という形式を助動詞として扱うべきであると主張している (<https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/m-2014/20150110-027/>)。考えを変えたのであろうか。あるいは助動詞というカテゴリーを狭く

習書，という性格も無視できないことから，先行の文法書（中川のものも含む）から主要な文法項目をカードに取り，共通するものはなるべくもれのないように取り上げる，という基本方針で項目を選定していった。したがって，項目のすべてが筆者の創案でないこと，言うまでもない。論評時には，アイヌ語学において一般的な概念，用語なのか，そうでないのかを明示した上で論評していただきたいと思う。そうでないと，筆者一人が責任を負うべきでない問題である，ということが普通の読者にはわからないと思う。

さて，中川の指摘は，叙述の仕方は別として，非常に興味深い指摘であると思う。つまり，どういう名前と呼ぼうとかまわれないが，アイヌ語には通常の動詞の用法とは異なる動詞の用法がある，ということの中川も認めているわけであるが，これをどう分析するのか。つまり，「助動詞」とか，「助動詞的用法」と呼んでいるものの本質は一体なんなのか，という点であろう。「助動詞的用法」と呼び変えても，何の解決にもなっていないことは明らかである。しかも，中川のコメントはどの動詞が助動詞的用法を持つかの条件も提示していない。それならば，助動詞的用法を持つ動詞の事例を列挙するほうがむしろ言語学的にはよほど妥当ではないか（語彙的性質を有する可能性）。ここでは，あくまでも仮説にとどまるが，筆者の考えを述べておきたい。中川が「他動詞の助動詞的用法」とわざわざ述べていることから明らかなように，助動詞的用法を持つ動詞は，自動詞ではなく，他動詞であることがほとんどである。もちろん，自動詞の例もあることはあるが，その種類は極めて少ない（岸本 2019）。これは，なぜであろうか。また，「助動詞」であるから，当然，人称表示とは無縁になるわけだが，これはなぜであろうか。

実際の用例から説明することは難しいので，仮説的な例で説明すると，次のようになる。まず，アイヌ語で「山菜を私達は食べることができる」にあたる一般的な表現は「助動詞」*easkay*「できる」を用いた次のようなものであろう。

限定しようと考えているのであろうか。いずれにしても見解を發表していただきたいものである。

- (2) kina a-e easkay.

山菜 1 複他動包括主格—食べる できる

「私達は山菜を食べることができる。」

しかし、かなり頻度は低くなると思われるが、次のような「名詞+動詞」を合成動詞として扱う「抱合」を二度繰り返して用いた表現も不可能ではないと思われる。この例では、kina が e に抱合されて、kina-e という合成動詞が形成され、これが名詞として扱われてさらに easkay という動詞に抱合されて kina-e-easkay という語を形成している。

- (3) kina-e-easkay-an

山菜—食べる—できる—1 複自動包括主格

「私達は山菜を食べることができる。」

また、easkay に人称表示をして動詞として用いた次のような表現も可能であると思われるが、類例は非常に少ない。おそらく、このような場合、動詞 easkay は kina e 「山菜を食べる」という動詞句を、「山菜を食べること」という名詞句として扱って、目的語としているわけであるが、kina e 「山菜を食べること」という表現は、本来は動詞句でありながら、名詞句として機能する必要上、主格人称接辞を取れない、というジレンマを抱えているため、アイヌ語の一般的な動詞の構造から外れていると言える。そのために、類例が少ないのだと考えられる（佐藤 2008：90）。

- (4) kina e a-easkay

山菜 食べる 1 複他動包括主格—できる

「私達は山菜を食べることができる。」

おそらく、もう少し頻度が高いのは、（区別は困難であるが）、kina e を抱合により、kina-e という自動詞とした形式であろう。自動詞はそのまま名詞

として機能するので、動詞の目的語としてはより普通の構造であるために容認可能性は上がると思われる。

(5) kina-e a-easkay

山菜—食べる 1 複他動包括主格—できる

「私達は山菜を食べることができる。」

これらの事例をどう考えるべきであろうか。解決すべき問題点は少なからずあるが、現時点では筆者は、アイヌ語の助動詞構造は、一種の「疑似抱合」の事例ではないかと考える。kina a-e easkay のような形式は、形態上はあくまでも句の形態を保っているが、おそらく、一種の「語」なのではないだろうか。この問題を考えるには、類似の他の諸形式について考えて見ることに役立つ。まず、kina-e-easkay は、形態的には語として最も完備した形式を備えているが、三つの語幹の合成であり、アイヌ語の単語として必ずしも通常の事例とは言えない。また、kina e a-easkay は、既に述べたように、主格人称接辞を欠く動詞を含む句が文中に現れる、という点でアイヌ語としては特異である。さらに、kina-e a-easkay は、この形式自体には問題がないが、この場合はたまたま、kina-e という抱合が可能であったが、抱合は当然のことながら基本的には語形成に傾いたプロセスであるから、このような抱合形式がいつでも、無制限に自由に作れるわけではない。たとえば、目的語に修飾語が付加された場合は、このような抱合形の自由な形成はほとんど不可能と考えられる。これに対し、kina a-e easkay という「助動詞」easkay を用いた形式は、e「食べる」に人称接辞が付いているために句として自由に目的語を取ることができる反面、easkay が人称を欠いているため、「形態的には句に近い構造だが、直前の句と構造的に密接に結合して、意味的には両者が一体化した一種の語彙的「語」として機能する」という解釈を受けるのだ、と考えられる。アイヌ語には、kes anpa「末端・つかむ＝追いかける」のような、形は句だが、意味的には語彙的な語と同様にふるまう「疑似抱合」という構造のあることが指摘されているが(佐藤 2021)、ここで問題とした、従来

は「助動詞」、あるいは「他動詞の助動詞的用法」と呼ばれてきた構造も、タイプは異なるが一種の疑似抱合である、と考えることもできるのではないだろうか。なお、この点で興味深いのは、受け身文における助動詞 rusuy「～たい」のふるまいである。助動詞であるから、人称表示された動詞句の後に置かれる。

(6) k-ekimne rusuy.

1 単主格—山へ行く たい

「私は山へ行きたい。」

興味深いのは、受け身の人称表示がなされた動詞句の後では rusuy は用いられない、という点である（佐藤 2008：205）。

(7) *huci oro wa a-en-omap rusuy.

祖母 所 から 不定他動主格—1 単目的格—かわいがる たい

「おばあさんから私はかわいがられたい。」

これはなぜだろうか。記述的には、「受け身文の主語にあたる不定人称マーカー a-「人が」と、rusuy「～したい」の願望者とが同一でないため」と説明されるが、ここで述べた疑似抱合の概念を応用すると、より踏み込んだ説明が可能と思われる。rusuy は純粹の動詞としての用法がなく、人称接辞を付けることができない形式である。この点で、いわば疑似抱合専用の形式であると言える。つまり、本来であれば rusuy を主要部とする動詞（いわば仮想的な一語）全体に付加されるべき人称表示が、一語化が不可能であるために従属部と主要部が分離し、助動詞の前の従属部（意味的に考えた場合。文法的には主要部とも解釈可能）の動詞句に表示されなければならないが、受け身文の場合は、受け身のマーカーである不定人称の a-「人が」は、動詞全体に付加される人称要素ではなくて、従属部の動詞にのみ付加されていると解釈しなければならないものである。従って疑似抱合の定義に反しているの

排除される、ということであろう。

以上のように、アイヌ語の「疑似抱合」とは、本来であれば、抱合を利用して一語化すべき事例であるが、形態的な理由でそれが不可能か、負荷が大きい場合、被抱合要素（この場合は動詞）を統語的要素（この場合は人称接辞）の付かない語幹のままの形にとどめておくことによって「形式全体が本来であれば一語で表現されるべき形式である」ということを示す、という文法的な手法であると言える⁴。最後に、このような仮説を支持する事実として、「自他の非対称性」にも言及しておく。抱合の場合、目的語抱合は普通に見られるが自動詞主語抱合は稀であることが知られている（佐藤 2008：225）。これを「自他の非対称性」と呼ぶならば、「助動詞」構造においてもこれと全く平行的な性質がみられる。既に述べたように、アイヌ語の「助動詞」は圧倒の多数が他動詞とみなせるもので、自動詞に由来すると言えるものは極めて少ない。例えば、以下のようなものである⁵。

- (8) e-hopuni moyre yakanakne huci iruska.
 2 単主格一起きる 遅い ならば 祖母 怒る
 「お前が起きるのが遅いならばおばあちゃんが怒る。」

「疑似抱合」は「抱合」そのものではないが、抱合と性質が似ているために、同様な性質を示している可能性が高いと思われる。以上、今後、さらなる検討が必要であることはもちろんであるが、「助動詞」、「助動詞的用法」という

⁴ 疑似抱合といってもおおまかに言って動詞の場合、格助詞の場合、助動詞の場合があり、それぞれにおける構造的制約も異なる可能性があり、より精密な記述に向けて今後も研究が必要である。

⁵ oar hopuni-moyre-an na 「完全に私達は遅れてしまうぞ」のような明らかな抱合の例もあるので、この例も、hopuni-moyre という、hopuni 「起きる」という自動詞が名詞として用いられて moyre 「遅い」に抱合された「自動詞主語抱合」の例とみるべきかもしれない。問題は多いが、hopuni の主語が全体の主語に昇格したものとここではみなしておく。いずれにしても、moyre 「遅い」のような自動詞が助動詞的に使用された例が極めて少ないのは、主語抱合の制約が関係している可能性が高いことになる。

規定をより明確化するために、一つの試案としてここで示した。

2.3. アイヌ語の合成語について

奥田（2009）はやはり佐藤（2008）に対する書評である。奥田の論評は言語学的な諸問題についての氏の鋭い理解力を示していて、もちろん、妥当と思われる点もあり、筆者にとっても読者にとっても有益なものではあるが、なかには誤解や⁶、意見の相違が大きい点もある。例えば奥田は佐藤の語形成にかかわる仮説について次のように述べる。

ただし評者の読解する限り、uray-us-nay や ye-ot などの uray/ye を「やな・を常在して持つ・沢」「～が膿を持つ」のように目的語に読まなければならない理由はよくわからなかった。たしかに、us「つく」のような動詞の主語と目的語とは意味上の強い対称性を持つので、どちらを主語とも解釈することができるという指摘は重要である。しかしアイヌ語の他動詞主語の抱合が場所の項を要求しない他動詞でも起こることは「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」（田村すゝ子、1973）もすでに指摘し本書の「第 28 課 抱合」も実例を挙げている。また本書が例示して

⁶ たとえば、ayne「～し続けた結果」という筆者の記述を批判して、「私達が行き続けた結果」暗くなる、では理屈が合わず、「私達が行き続けるうちに暗くなる」でなければならないので、「うちに」という意味も記述に加えるべき、と述べているが、「うちに」とは何か。「結果」という日本語を狭く解釈すれば確かに適切でない面もあるかもしれないが、「うちに」と説明することによって何かがより明確になる、という奥田の主張は言語学的には不適切であると思う。こういう説明をされると一般の読者なら「さすが、アイヌ語学者だ。アイヌ語がよくわかっていて深い理解だ」と感心するのかもしれないが、こういう説明で感心する言語学者はおそらく皆無だろう。言語学の役目は適切な訳語を提供することではない。一体、いくつ訳語を提供すれば「理屈が合う」のか。「晴れていくうちに出発しよう」というときに ayne を使うことはおそらくできない。そういう性質を「うちに」という説明で示すことはできないであろう。ayne は何かが続けて行われた「後」で、それと密接に関連して何かが起こる、ということを表すので、不適なわけである。むしろ、「～し続けた結果」という記述のほうが、「後」という意味をはっきり表示している分、この形式の記述としては、より一般性のある説明ではないか。

いる kamuy-e-p のように、句としての性格を認めなければならない名詞（句）のなかにも場所の項を要求しない他動詞は現れている。すると場所を主語とする用法を認めたとしても、アイヌ語の動詞と名詞の形成のルールは整理されないことになる。おそらく評者の理解が足りないのだらうと思われるので、さらなるご教示を乞う。

奥田（2009：36）

奥田がこの部分に鋭く目を留めて論評してくれたことには、この部分を密かに野心的な提案として発表した筆者としてはありがたかったが、奥田の論評の結論部分については全く納得できないので、少々、ここで反論を試みたい。この部分の見解の相違の原因は、概略的に言えば、句と語の区別に関する理解の仕方が違うためであろう。あるいは、言語の性質に関する基本的な考え方が異なることによるのであろうと思う。

奥田のように（社交辞令でなく）頭脳明晰な人物に対して「ご教示」するなど、筆者のよくするところではないが、具体的に説明すると、まず，uray us nay や，ye ot を句とみた場合は、「主語＋他動詞」という構造を認めてもちろ、問題はない。しかし、語となると話は別である。奥田が、「他動詞主語の抱合が場所の項を要求しない他動詞でも起こる」と述べているのは確かにそうなのだが、「ある、現れる」ことと、それが「普通に起こる、無標な現象である」ということとは、「同じでない」と筆者は考える。確かに、kamuy-e-p 「クマがたべるもの」という「句」を「語」として用いることは不可能ではないし、自然力主語を他動詞が抱合した、koy-yanke 「波が打ち上げる＝波で打ち上がる」のような例もある。しかし、よく知られているように、これらのケースはアイヌ語においては非常にまれなのである。特に kamuy-e のような、有生物＋他動詞、という抱合はアイヌ語においては決して一般的なものではない。kamuy-e のような他動詞主語抱合がアイヌ語において自由に起きるかのような前提に立った奥田の指摘は、明らかに事実反しているのである。「しかしアイヌ語の他動詞主語の抱合が場所の項を要求しない他動詞でも起こることは「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」（田村

すゞ子, 1973) もすでに指摘」という奥田の記述も不正確である。これを見ると、田村が既に合成名詞と場所の抱合との関係を主テーマとした論文を既に書いていて、同じ問題を詳述しているにもかかわらず、佐藤がそれを無視しているかのように読めるが、果たしてそうか。田村はここで他動詞主語抱合と合成名詞との関連など、何も論じてなどいないではないか。また、佐藤は、田村よりも先に他動詞主語抱合がアイヌ語にあることを発見した、と主張しているわけでもない。にもかかわらず、なぜ、奥田は、こういう書き方をするか。さらに言えば、他動詞主語抱合は、抱合全体の比率から言えば1%程度しか認められず、また、「主語+他動詞+名詞」型の合成名詞を見出し語として数多く採用しているアイヌ語辞書は、現時点ではまずないと言ってよい。これはなぜかという、まさしくまぎれもなく「句」の形をしているからこそ(主要部が自立的な名詞である場合は、抱合によって説明できない主語+他動詞という形をしているからこそ)、語としての位置付けが極めて不安定だからであると考えられる。奥田が「(主要部となっている名詞について—佐藤注) 場所を主語とする用法を認めたとしても、アイヌ語の動詞と名詞の形成のルールは整理されないことになる」と述べているのは、実は、アイヌ語において kamuy-e-p のような例が極めて稀である、という事実を、何ら正当な理由なく、代案を提示することもなく、ただ無視していることによるものなので、私にはそのままでは首肯することができないものである。もっとも、この点は既に述べたように根本的な言語観の違いによるものと考えられるので、議論は平行線をたどるのではないか、という予感もするのである。ただ、「一つでも例外があればその仮説は破られた」という論理は、別段、普遍的とも、科学的とも言えない、ということは言うておかねばならない。原子、分子レベルの、数学的原理によって極度に制約された物理現象でさえ誤差は免れない(原子時計ですら誤差はある)。いわば、奥田の立場は、例外が皆無でないから、現今の原子、分子の理論の説明は誤りである、と主張しているのと大差ないように思える。「例外があるか、ないか」だけを問題にしてい、「どの程度例外があるのか」という程度を無視しているので、公平性に欠ける判断と言わざるを得ない。注意しなければならないのは、誤

差というものが免れがたいものであるのだとしたら、「例外がゼロではないから正しくない」という主張は、原理的にはあらゆる問題に適用可能なのであって、どんなに不勉強な、無知な人間でも簡単に使用できる便利な批判の道具に過ぎなくなってしまう、という点である。従って、奥田が絶対的な判断基準として依拠しているこの種の前提が学問的真理でもなんでもない以上、代案も提示せずになされる、この論法を使用した批判は少なくとも言語学においては、学問的とは言えない、単なる誹謗中傷の類いに堕する危険が常にある、ということはここではっきり言っておきたいと思う。

2.4. アイヌ語の人称表示について

阪口（2020）はアイヌ語樺太方言の utara という形式について、人称表示との関連で論じたものであるが、拙稿（佐藤 1987）に言及している点がある。佐藤は樺太方言についてはその後、研究をやめており、三十年以上前の学生時代に、片々たる同人雑誌に書いた、論文とも言えないようなものに対して今頃言及がなされたことに、正直、当惑したが、気の付いた点について二三、述べておくことにしたい。阪口の関係部分は以下のようなものである。

さらに佐藤（1987）は、(A) utara は主語として用いられた例のみ、(B) utara は生物を表した例のみ（無生物を指示しない）、(C) utara に呼応する人称接辞は動詞に現れない、ということを明らかにしている。佐藤（1987）のこの (A) (B) (C) の3点について検討する。まず (A) に関していえば、目的語として用いられた例が数例確認できる。(B) に関しては、民話において擬人化された動物を含むが、やはり全て有生物を示している。(C) において「呼応する動詞の人称接辞」と言っているものは、複数標識 (a) hci のことである。この複数標識 (a) hci は選択的 (optional) に用いられるものであり、また特定の人称に呼応するものではない。そのため、義務的に表示される人称接辞と同列に扱うことはできない。議論の焦点を utara の用法に絞るため、複数標識の (a) hci との関わりは本稿では扱わないことにする。

また佐藤 (1987) は、utara が三人称複数の人称代名詞や人称接辞である可能性を示唆している。他方言との比較から、樺太方言の三人称複数人称代名詞は okay であることが推測される。実際、知里 (1973 [1942]) においては okay と報告されているが、本稿の対象資料では okay の存在を確認できていない。そのため、utara が人称代名詞である可能性も検討する必要がある。しかし、三人称の単数人称代名詞である anihi は【資料】において 4 例しかないのに対し、【資料】だけで 109 例出現する utara は、人称代名詞と同列に扱えるものだとは考えにくいように思われる。

阪口 (2020 : 189)

まず、筆者 (佐藤) が最も問題だと思ったのは、「(C) において「呼応する動詞の人称接辞」と言っているものは、複数標識 (a) hci のことである。この複数標識 (a) hci は選択的 (optional) に用いられるものであり、また特定の人称に呼応するものではない。そのため、義務的に表示される人称接辞と同列に扱うことはできない。議論の焦点を utara の用法に絞るため、複数標識の (a) hci との関わりは本稿では扱わないことにする」と述べている点である。佐藤 (1987) の主な主張は「基本的に、utara は -xci (現在では -hci と表記される) と共起しない」という事実を指摘した上で、その理由を種々考察したものなのであるから、「その点を扱わない」という阪口の態度は不可解である。その理由として、阪口は「義務的でない」という理由を挙げているが、これは明らかにおかしい。「義務的でない」のであれば、現れない場合もある、ということまでは言えるが、「ほとんど全く現れない」ことは説明できない。阪口のやるべきことはただ一つであって、佐藤 (1987) で行われた重要な指摘を検証し、佐藤の言う通りであるのか、あるいは見落としがあって、実は -xci (-hci) と共起する例が偶然とは言えないほど多く見つかる (すなわち、義務的でない、という性質に起因するランダムさを示している) のかを報告することであろう。「義務的でないから扱わない」と述べることは、検証もせずに「そんな事実は偶然かもしれないから重要でない」と断定してい

のと同じで、学問的な態度とは言えない。にもかかわらず、このような判断をしている、ということは、この点を認めてしまうと不都合な、何か学問的でない別の理由でもあるのであろうか。

また、「-xci (-hci) は特定の人称に限らない」という指摘は阪口の功績となる重要な指摘で、今後、さらに考察に値する問題とは思いますが、実は、佐藤 (1987) の -xci (-hci) の扱いは、基本的には服部 (2001/1961: 81-82) に従ったもので、必ずしも佐藤による独自の分析とは言えないものなのである。もちろん、服部の所説をもっと批判的に扱うべきではあったろうが、阪口がこの点で佐藤を批判すること自体は不当ではないけれども、阪口は服部を見ていないのだろうか。本来であれば先行研究を確認し、服部の所説とともに批判すべきと思う。

最後に、阪口が utara の用法を細かく分析して、3 人称だけでなく、1 人称や 2 人称の意味で用いられていると解釈できる用法があることを示しているのは utara の用法を解明する上で、高く評価すべき興味深い発見である。当然の疑問として、口承文芸における引用文ではない、口語資料にも類似の用法が複数あるのか、utara 以外にも「直示的」用法を示す名詞があるのかどうかも知りたいところであるが、筆者は樺太方言の研究から離れているので、自分で検証することができない。阪口の今後の報告を望みたい（本来であれば、未調査なら未調査、なかったのなら、ない、と書くべきであったと思う。なぜなら、口承文芸における引用文以外では例が「ない」ということになる、話法の問題として解釈すべき可能性も出て来るからである）。なお、これは小さなことだが、阪口は一貫して「直示的」という用語を用いて、人称代名詞的な機能を果たす utara という形式の用法を説明する。「直示的」という用語は、人称代名詞も含むので、この場合、不当とまでは言えないが、本来は指示代名詞なども含む、より広い概念であるので、やや不明確な印象を受ける。こんなことを言うのははしたないので、自分でも嫌なのだが、アイヌ語において普通名詞句にも人称代名詞と類似した機能を有する場合があることを初めて指摘し、詳しく取り扱ったのは佐藤 (1991) である。佐藤は「自称詞」、「対称詞」という用語を用いて説明しているが、用語が違うから言及

の必要はない、と考えているのであろうか。阪口の論文は、「utara は人称代名詞ではないが、自称詞や対称詞として人称代名詞と類似した機能を果たす」ということを中心的な主張としているのに、アイヌ語における自称詞、対称詞の問題を初めて組織的に扱った先行論文である佐藤（1991）には不思議にも一切、言及がないのである。言及すると、何か不都合なことでもあるのだろうか。なお、中川（2009：111）も佐藤（1991）には懐疑的で、「年齢が下の場合には親族名詞を呼格的に用いることはできない。目下への呼掛けは親族名称とは別な手段（例えば、名前〔ただし日本名〕を呼ぶ）によってなされる」（佐藤 1991：93）という記述に対する反例（ku-matkarkul「私の姪よ」）を挙げている。このこと自体は興味深い事実で、ご教示に感謝すべきことではあると思う。しかし、一方で、私が話し手に機会を変えて何度も調査した結果は常に一致しており、「名前呼ぶ」という回答が得られているのである。後述の奥田の場合もそうなのだが、「反例がある」ということだけを持って暗黙のうちに「記述が間違っていることが証明された」と誘導するかのような論法は、実情を知らない人には誤解を与える可能性があると思う。中川の反論を非専門家が読むと、たとえば、兄が弟に対して k-akihi「弟よ」と呼びかけることはアイヌ語では普通なのだな、と誰しも思うだろう。でも、話し手は、そうではなく、名前を呼ぶ、と一貫して回答しているのである。この場合は、佐藤の記述を、例外があるからだめだ、と、頭から否定するのではなくて、むしろ、反例が起こる場合の条件がないかどうかを明らかにすることが必要なのではないだろうか。中川、阪口、奥田にある種共通するのは、佐藤の調査結果を自分の資料で検証できる立場にありながら、その点には無言を貫いて、例外だけを挙げる、という批判の手法である。彼らは「自分達は例外を持っているから」という理由、あるいは筆者にはよくわからない何かある理由によって、話し手が一貫して「名前を呼ぶ」と答えた、という調査結果、utara が -xci と共起することは原則ない、という文献調査結果、2 人称代名詞が命令形と共起する例は稀少だ、という調査結果を無視するのである。彼らはただ単に佐藤の主張に反論しただけだと思っているのかもしれないが、これらは実はアイヌ語に関する事実の軽視そのものである。アイヌ語につい

での指摘なので、一見したところわからないが、いわば、ある治療方法の有効性について「効果がなかった事例があるので有効性は否定されました」と主張しているようなものである。「効果がなかった事例」はもちろん無視できないが、「効果があった事例」については口をつぐんで、反例のみを挙げて「この治療法は疑わしい」と主張することは果たして良心的な批判と言えるのか。

次に、奥田（2009）の佐藤（2008：128）における人称代名詞の記述に関するコメントを取り上げることにする。奥田は次のように述べている。

命令文に人称代名詞が用いられることが稀であるという指摘も興味深い。ただ評者の手元には白沢さんによる次のような例文がある。どうしてこの例文が稀な用法の例になるのか、もう少し著者の考えの背景を教えていただければよりありがたかった。

eani hem kul

あなたも飲みなさい！

奥田（2009：35）

この奥田の指摘は混乱している。「命令文に人称代名詞が用いられることは稀である」という佐藤の指摘に対して、「次のような例文がある」として、「どうしてこの例文が稀な用法の例になるのか」と述べている。しかし、「稀である」という事実の指摘に対して反論するとすれば、「稀でなく多数ある」ことを示さなければならないはずである。ところが、奥田は「例外がある」と述べて、反論としているのである。つまり、奥田は、「例外があるので命令文に人称代名詞が用いられることは稀でない。従って佐藤は誤っている」と主張していることになるわけで、言うまでもなく論理が混乱している。繰り返しになるが、もし、反論するのであれば、このような例が「多数」あることを述べなければ意味がない。公平のため、佐藤が実際に言っているところを示せば、次のようである。

なお, eani koppu en-kore 「お前, コップを俺にくれ。」という例文が一例あり, 命令文に人称代名詞 eani (「お前」) が用いられた例とみなすこともできるが, 非常に稀であり, あまり一般的でないと言える。

佐藤 (2008 : 128)

つまり, 佐藤がその時点で把握していた相当量の資料にも, 一例しか例がなく, しかも疑わしい事例であったので, その旨を記し, 事実の通りに, 「稀である」と書くしかなかったのである (ちなみに, この例文が疑わしいのは, eani は人称代名詞ではなく, e-ani 「お前が持っている」と解釈できることによる)。奥田がここでしなければならなかったことは, やはりただ一つである。アイヌ語において単文の命令文中で代名詞が共起している例が「多数」あるのかどうかを, 資料に基づいて調査することである。方言は問わない。どの方言であれ, 例が多数あるのであれば, 当該の方言だけが例外である可能性は低いから, 再考しなければならない可能性が高いであろう。奥田はそれができるはずなのに, なぜしないか。すると何か不都合なことでもあるのか。自分がたまたま持っている例を一例挙げて, 反例が一例あるからこいつの言っていることは眉唾だ, と非専門家相手にほのめかすことに, 一体, どういう意味があるのか。反例は一例なのか, それとも多数の反例を奥田は持っているのか, どっちなのか。なぜ, それを言わない。結果は問題ではない。奥田が正しいのかもしれない。しかし, 他の研究者が実際の調査結果に基づいて誠実に, 慎重に述べた事実の記述に対して, 対応する独自の調査結果をきちんと示すこともせずにこのようなコメントをすることが, 学問的に誠実な態度であると言えるのか。そもそも, 奥田は佐藤の指摘以前に, 二人称代名詞の分布の偏りの可能性について, 一度でも思いを致したことがあるのか。しかも「考えの背景を教え」ろ, ということであるが, これも不可解な表現である。「考え」も何も, 佐藤はここで「考え」など, 別に述べているわけではない。自分のデータには確実な例はなく, 従って稀である, と事実を述べているだけである。だとすると, 奥田の表現は「佐藤は命令文で人称代名詞が使えないと言っているが, 使われている例を自分は持っている。

従って、皆さん、信じてはいけませんよ」と言っていることになるのではないか。繰り返しになるが、相手が事実として提示している「稀である」という事柄に対して、「それは嘘だ!」と言いたいのであれば、「嘘だ!」と叫ぶ前に、「稀でない」ことを示さなければならないはずである。しかし、奥田はそうはせずに佐藤による「事実の指摘」に過ぎないものから、佐藤の「主張」なるものを勝手に創作して、「ほれ、この通り、実例があるから、佐藤の主張（実際は事実の指摘に過ぎないが）は誤りである」とアピールするのである。もちろん、反例は確かに貴重である。それを無視することはできない⁷。特に、反例が数多く存在する場合にはそれを指摘するのは当然である。しかし、反例が数多く存在するかどうかを伏せて（つまり、反例があまり見つからなかったりすると、何か不都合なことがあるわけだ）、ただ「反例がある」とだけ言うのは、事情を知らない人間に対する単なる印象操作行為でしかない。一般向けの商業広告のような世界では、このような反例の提示の仕方は、あるいは制作者の有能さの証明になるのかもしれないが、事実の究明が目的である学術的な議論においては厳に慎むべきものと思う。言語学の場合はあまり表面化して来ないが、重要な薬剤や治療法の適否が、商業広告の場合と同じく消費者への印象操作の巧拙によって最終的に決まってしまうとしたら、一体、どうなるのか。奥田の疑問に戻ると、アイヌ語の文構造を考える上で、人称代名詞の問題は頭が痛い問題である（このことは奥田もよく知っているはずである）。英語の人称代名詞と異なり、任意要素であるから、義務的要素である人称接辞が、任意的にコピーされたものである、と考えるのが一つの考え方であるが、そうなると、命令形は主格人称表示をそもそも欠いた形な

⁷ その後、自分の採集資料を再確認したところ、これまでのところ、一例、命令文と人称代名詞の共起とみなせる可能性のある例が見つかっている。aokay sine cep en-koreyan, 「あなた、一匹魚を私に下さい」。しかし、aokay 「あなた」が呼格的に使用されているとすると、単純に、同一節内に存在する命令形の主語と呼応している、と言えない可能性もあり、問題を含んでいる。ともかく、その後の確認によっても、当初の記述の通り、「稀である」、という事実には変わりはない。奥田の資料に数多くの反例が現れるとすれば、なぜこのような違いが出るのが、興味深い。その後の調査結果を発表していただきたいと思う。

のであるから、人称代名詞はどこから来るのか、という問題が生ずる。となると、「深層構造」に人称接辞を立てる、ということになるのだろうか。しかしこれはこれでまた、規則の順序付けのような大きな問題を含むものであり、簡単ではないだろう。日進月歩の統語理論に通じていない筆者には、これ以上の理論的考察を進めて行く能力はない。ただ、このような構造上のジレンマが、命令文（同一節内）における人称代名詞の出現頻度をやはり低めている可能性があることをここでは指摘するにとどめる。

次に奥田（2009）の、佐藤（2008）における主格・目的格人称変化に関する記述へのコメントをみることにする。奥田は次のように述べている。

沙流方言では動詞が「2 人称（単数）主格・1 人称目的格」の人称変化をする場合に、主格の人称が表れず「1 人称目的格」だけが表示されることが知られている。「第 34 課 雅語と口承文芸」では、千歳方言の場合「2 人称主格・4 人称目的格」の場合も主格の人称接辞が表示されず「4 人称目的格」だけが表示されることを指摘している。この観察は沙流方言の事実と異なっているだけでなく『アイヌ語千歳方言辞典』の巻頭にある人称接辞の一覧表とも食い違っており、また本書の示している例が意味上の命令表現だとも解釈できるので、議論を呼ぶかもしれない。しかし評者の手元には次のように確実な平叙文の例があり、本書の記述を支持しているので紹介しておく。

“ukasuy pirka iku ratci iku eci-ki kusne na” sekor e-itak kor

「いっしょにりっぱな酒宴和やかな酒宴をなさってくださいよ」とお前はいいながら

kamtaci ka sine tara *i-sere* oro wa amam neyakka sine tara *i-sere* ruwe ene an i.

麴もひと**俵私に背負わせ**それから穀物でも一**俵私に背負わせ**たのである。

奥田（2009：35）

この奥田のコメントは、一見、佐藤の記述を支持しているように見えるが、実は違う。それは「本書の示している例が意味上の命令表現だとも解釈できる」という表現に表れている。「佐藤の示している例は確実な例ではなく、自分が発見した例こそが確実な例である」と主張しているのである。この論述の問題点は二つある。一つは、奥田は佐藤の記述が中川の記述の訂正、もしくは補足になる可能性を把握しているにもかかわらず、佐藤の記述は不十分だ、と言っていることである⁸。奥田は佐藤の記述は本当の意味での中川に対する批判の根拠になっていない、と主張しているが、これはおかしい。ここでは、佐藤は自分の調査結果に基づいて千歳方言の人称体系の記述を提示しただけであって、中川の記述に対して疑義を提出しているわけでも論争を挑んでいるわけでも何でもないのである。「中川の記述に反論」（しかも、佐藤の記述に乗っかって）しているのは、あくまでも奥田自身なのだ、ということをごここではっきり述べておく。にもかかわらず、「佐藤の証拠は不完全で信頼度が低い」と述べることは、いわば佐藤の陰に隠れて中川を批判していることになるわけで、こういうやり方は姑息だと私は思う。奥田が疑義をまず提示しなければならないのは中川に対してであって、間接的にそうするために佐藤の主張に疑義を挟むのは論理がねじれている。議論の相手を間違えていると言わざるを得ない。中川に対してもの申すのは気が進まないが、佐藤に対しては構わないのだろうか。しかも、何らかの理由で奥田は中川が記述していない、千歳方言の雅語の2人称主格表示の不規則性の「発見」をどうしても自分の手に帰したいらしいのだが、奥田は、「佐藤の提示している例は「本当の例」ではない」と述べることによって、そうしようとしているのである。奥田は「自分は中川の記述を修正するための、佐藤よりも良い例

⁸ また、奥田が「沙流方言とも異なる」とわざわざ言っているのも解せない。それがどうだと言うのか。佐藤が千歳方言と沙流方言の差異を論じていてこの事実には言及していないのならともかく、佐藤は千歳方言の記述をしているだけであって、沙流方言のことなど何も論じてなどいない。また「違っている」ことがそんなに重要だと思うのなら、その学術的意義を明示すべきではないか。沙流方言と違うことがこの場合、一体どういう重要な意義を持つと言いたいのか。

を持っている」と言う。それは賀すべきことだが、それではどうして奥田は、佐藤の記述を見る「前」に、そんな「重要」な事実を佐藤に先んじて発表してくれなかったのだろうか。そうしてくれれば、筆者もこんな後味の悪い文章を書く必要もなかったのだが。奥田のここでの論述の態度は、意識している、していないは別として、相手の学問的努力をひたすら軽視することに全力を傾けることによって自分の主張の価値を高めようとする態度である。余人はどうか知らないが、私の目には正視に耐えないものに映る。さて、「物の言い方」は本質ではないので、奥田の批判の内容が、本当に学問的に正当で佐藤の挙げている例が「本当の例でない」と断言できるのかどうか、という本質的な問題の検討に移ろう。私が理解できなかったのは、奥田の批判の中の「意味上の命令表現」という部分である。意味上の命令表現だと、なぜ不十分なのだろうか。それこそ「ご教示いただきたい」。推測になるので、あるいは筆者の誤解かもしれないが、おそらく、命令形は主格人称接辞を欠くので、意味が命令の場合、主格人称接辞が省略されることがあり得る、という可能性を考えているのだと思われる。おそらく、iteki i-y-e kus ne na「お前は私を食べるのではないぞ」（佐藤 2008：262）という例文を念頭においてるのであろう。奥田ははっきりとは述べていないが、意味が命令であるため、主格人称接辞を欠く命令形に対する一種の「連想」によって、主格人称接辞の e-「お前が」が脱落した形式である可能性もあるので、通常の人称表示の例文としては不適切だ、と言いたいのだと推測される。なお、奥田（2015 28-29）でも同様な主張を行っている。もし、そうだと仮定しての話であるが、この奥田の主張には軽視できない疑義がある。ここで問題となっている「命令表現」は「2 人称主格人称接辞＋動詞＋kus(u) ne na」という構造を持つものであるが、筆者の資料の中には、数十例ある。これらが十分な量であるかどうかは別として、2 人称主格接辞が省略されているとみられる例は容易には見当たらない。2 人称主格接辞が欠如した例は、i-kore kus ne na, en-kore kus ne na, i-y-e kus ne na の 3 例程度しか見られず、これらはいずれも、「2 人称主格／1 人称目的格」という意味の事例である。ということは、「2 人称主格／1 人称目的格」という意味の場合以外で、命令を意味する問題

の構文において、ランダムに主格人称接辞が省略される、と解釈できる奥田の指摘は、量は別として筆者の資料では実証できないということになる。では、奥田は十分な例を持っているのだろうか。方言は異なるが、例えば奥田(1999)を調べて見ても、相当する「2人称主格人称接辞+動詞+nankon na」という構造において、2人称主格人称接辞がランダムに脱落するような現象を見いだすことはできなかった。電子資料の取り扱いに通じていないので、筆者のミスである可能性もあるが、筆者自身が同じ方言を調査した資料を見ても、そのような例を見いだすことは今のところできていない。では、奥田は、どういう事実に基づいて、「本書の示している例が意味上の命令表現だとも解釈できるので、議論を呼ぶかもしれない」と言ったのだろうか。奥田が実例も挙げずにあたかもアイヌ語において、命令表現(命令形にあらず)では2人称主格人称接辞が省略されることがあるかのように述べて、自分の挙げている例の優越性?を主張していることがそもそも大いに問題なのだが、彼ほどの人が例も挙げずに述べるからには、アイヌ語研究者なら誰しも知っているような現象なのであって、知らないのは自分だけなのか、と不安になってくる。憶測で物を言うのは慎まなければならないが、唯一、思い当たるのは、命令文を修飾する副詞節(他に呼びようがないので仮にこう呼ぶ)における人称表示である。2.1. の中川(2009)に対する反論で既に触れたが、ohaw pirkano ukopoye wa, itanki or o yan のような命令文では、確かに従属節(?)の動詞の人称が省略されているように見える(e-wkopoyeではなく、ukopoyeとなっている)。しかし、これは、waが命令文を結合する機能を持っていることによる見かけ上の現象であって、人称接辞の省略とみなすべきではない事例である。もしこの種の例をもって「命令表現では二人称主格接辞が省略可能である」、もしくは「主格人称接辞はアイヌ語の文法構造において重要度が低い」ことの証左の一つとしているのであれば、再考を促したいと思う。あるいは、筆者の思い至らなかった観点を提示して、徹底的に反論していただければもっとありがたい(頭は、どう考えても、奥田の方が良さそうであるから)。また、もしそうでなく、命令形以外の命令表現において二人称主格人称接辞が脱落する例を「多数」お持ちなのであれば、どうか、

それをきちんと示して議論していただきたいと思う。そのような建設的な態度によってこそ、アイヌ語に関する学問的議論の発展がある、と思うからである。

2.4. アイヌ語の疑問表現について

次に、奥田（2009）で述べられている、佐藤（2008）の疑問文の記述に関するコメントを見ることにする。奥田は以下のように述べる。

著者の考察はさらに進み、tanpe hemanta ne ruwe an?（これは・何・である・の・であるか）のように名詞化辞 ruwe の内部では ne，外部では an が用いられる例を，tanpe [hemanta ne ruwe] an? のように分析して「[hemanta ne ruwe]全体が tanpe と同格である」と述べている。この提案は単に疑問文中の an の説明にとどまらず、アイヌ語の名詞化辞を用いた表現の構造そのものの分析に関わる議論に発展するだろう。たとえば、平叙文の名詞化辞のあとの ne はどのような働きをしているのだろうか。また同じ課の例文（7）hunna a-ne hawe an? 「あなたは誰だというんですか」はどのような構造を持つ文として分析すべきだろうか。

奥田（2009：36）

この部分を見る限り、奥田は筆者（佐藤）の意図をあまりよく理解していないように思える。an 「ある、いる」という存在動詞は、アイヌ語では明らかに自動詞（一項動詞）であって、他動詞ではない。しかるに、疑問文では、tanpe hemanta an? のように、tanpe 「これ」、hemanta 「何」という二つの名詞項を取っているように見える。このような例をどう考えるか、というのは、アイヌ語研究においては些末な問題ではない、と筆者は考える。この点にも筆者と奥田との間の「アイヌ語観」に対する差異が現れていて、やはり相互理解は難しい、と感じる。奥田は仮説に対する反例の存在を認めない、という厳しいルールを課す一方、「言語の体系性」という一般的傾向に対しては懐疑的で、自動詞の an が名詞項を二つ取っているかにみえる疑問文の事例に対して、あまり深刻な問題を感じていないようである。そこから、「それでは

hunna a-ne hawe an はどういう構造を持つのか」という疑問も生ずるのであろう。筆者に言わせれば、この場合、疑問など、生ずる余地はない。tanpe hemanta ne ruwe an の場合は、an が自動詞である、という事実と、tanpe の語用論的な性質から考えて、tanpe を主文の要素として仮に分析したわけだが、hunna a-ne hawe an の場合は、an が自動詞であるということから一義的に[hunna a-ne hawe] an という分析しかないことは明らかであろう。あるいは tanpe hemanta ne ruwe an も、これに準じて分析して、[tanpe hemanta ne ruwe] an のように考えなければならないであろう。このような見解の相違の根底にあるのは、筆者と奥田とのアイヌ語の自他の区別に対する深刻な認識の違いである。アイヌ語において、動詞価 valency は重要な概念だが、奥田が指摘するであろうように、それに対する例外が絶対に皆無ではない、ということは筆者も認めるに吝かでない。しかしながら、これまでの事例におけるのと同じように、奥田は「例外が存在する」ことをもって、アイヌ語における自他の区別の重要性をあえて軽視する、という態度を取るのである。繰り返しになるが、アイヌ語において自他の区別、あるいは動詞価がゆらぐ事例というのは厳しく制約されており、常にみられる現象ではないのであり、その点に目をつぶることは生産的な議論に対して有害無益であると思う。奥田のような著名な専門家が、アイヌ語についてよく知らない読者を想定せずに、書評においてアイヌ語の専門家としてこのような論述をしているのだとすれば、真意を計り兼ねると言うしかない。一般読者への影響も非常に大きいと思われるので、発言には注意していただきたいと思うのである。

3. おわりに

以上、佐藤の論述と、それに寄せられた意見を中心としてアイヌ語学の諸問題について現時点での若干の見解を述べた。これらを通じてつくづく感ずるのは、「アイヌ語の難しさ」（及び「アイヌ語と真摯に向き合うことの難しさ」）である。一見、簡単で、自明に思えるような問題であっても、よく考えて見ると不明確な点があったり、新たな疑問がわくケースが珍しくないこと

がわかるであろう。本稿で筆者が反論の相手としている研究者は、おそらくもっとも良く諸事情に通じている、それぞれのアイヌ語方言の専門家ばかりである。にもかかわらず、ほとんどの場合、頭脳や能力の傾け先を完全に間違えているとしか思えない反応しか返ってこないのである。あえて事情をくむならば、实地調査が困難である、ということが影響しているのだろうか。もしそうだとしたら、それは言語研究者として誤った考えであるということ強調しておきたい。話者がいないか、多くない言語、というのは世界に多くあるわけであって、にもかかわらず、研究者の努力によって、日々、多くのことが明らかになり、知見が積み重ねられている。だから数千年も前の未解読の過去の文献も解読され、理解も進んで来たわけである。これらの偉大な研究も「話者が是認していないのだから、つまるところ、嘘だ！信じるな！」ということになるのだろうか。そんな不合理な話は通用しないだろう。つまり、この種の主張は、一般向けの一種のプロパガンダであって、頭脳の高下や学識の有無以前の、単なる示威行為にすぎないものである。こういうご都合主義の論法は、今後は一切やめるべきだ、ということは、ここではっきり言っておく。あくまでも一般論として述べるが、仮に「真偽を保証し難いアイヌ語の構造分析など今、誰も望んでいない。アイヌ語の音声資料を文字化してどんどん出すことがアイヌ語研究者の責務だ」という考え方があるとすれば、それは言語研究者のものではない。こういう考え方は、結局のところ「アイヌ語について深く知りたいと考えている人など誰もいない」と述べているに等しく、アイヌ語を尊重するという思想に逆行していると私は思う。だいたい、言語学的な分析を軽んじて、いったい何に基づいて正確な言語資料を作成することができるのか。アイヌ語研究はいつからそんな安易なものになってしまったのか……。いや、もうようそう。「老いの繰り言」ほど無益なものはない。今後、アイヌ語の研究も新しい方向へ向かうであろうが、残念ながら今や筆者には時代の激しい転換に対応するだけの能力も時間も気力もない。健全な学問的議論を通して、困難な状況の中でもアイヌ語の学術的な研究が継続されて行くことを望むばかりである⁹。

参考文献

- 服部四郎（2001/1961）「アイヌ語樺太方言の「人称接辞」について」（『アイヌ語考』4，69-88，東京：ゆまに書房 所収）
- 金田一京助（1931）『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』2，東京：東洋文庫。
- 岸本宜久（2019）「アイヌ語の複雑述語の研究」博士論文，北海道大学。
- 中川裕（2009）「佐藤知己著『アイヌ語文法の基礎』大学書林」『北方人文研究』2：107-111。
- 奥田統己（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』札幌：札幌学院大学。
- 奥田統己（2009）「佐藤知己著『アイヌ語文法の基礎』」『北海道民族学』5：34-36。
- 奥田統己（2015）「アイヌ語の人称表示における目的格の優勢」ブガエワ・アンナ，長崎郁（編）（2015）『アイヌ語研究の諸問題』27-36，札幌：北海道出版企画センター。
- 阪口諒（2020）「アイヌ語樺太方言における utara の用法」『北方言語研究』10：187-202。
- 佐藤知己（1987）「アイヌ語樺太方言の 'Uta' について」『ウエネウサラ』1：20-26。
- 佐藤知己（1991）「アイヌ語千歳方言における自称詞と対称詞について」『日本研究』5：89-104。
- 佐藤知己（2008）『アイヌ語文法の基礎』東京：大学書林。
- 佐藤知己（2021）「アイヌ語千歳方言の位置名詞 or の用法」『北方言語研究』11：81-98。
- 田村すず子（1988）「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典第一巻 世界言語篇（上）』6-94，東京：三省堂。

⁹ 本稿は基盤研究（C）「古記録の言語学的分析に基づくアイヌ語史の検証」（17K0270807）（研究代表者：佐藤知己）による研究成果の一部である。

Problems of Ainu Linguistics — with Reference to Recent Discussions

Tomomi Sato

In the present paper the author claims that it is important to note the following points in order to consider linguistic problems in Ainu:

- 1) The Ainu conjunctive particle *wa* has a special function of combining imperative clauses.
- 2) An Ainu auxiliary construction is a kind of quasi-incorporation.
- 3) In Ainu noun incorporations, object incorporations are the most common, while intransitive-subject and transitive-subject incorporations are strictly restricted. Quasi-incorporations also are most likely to follow this tendency.
- 4) A compound noun made from a noun phrase is marked as in many other languages.
- 5) An existential transitive verb takes two constructions: subject (place) + object (theme) or subject (theme) + object (place).
- 6) A personal affix cannot be eliminated in principle.
- 7) A second person pronoun in Ainu does not occur so often with the imperative form of a verb.
- 8) Verbal valency in Ainu is strictly determined.
- 9) An overall tendency counts more than exceptions in considering grammatical structures in Ainu.

ドイツ語から見たゲルマン語 (6)

— 3 人称代名詞, 再帰代名詞, 所有代名詞 —

清 水 誠

German as a Germanic Language (6)

— Anaphoric Pronouns, Reflexives and Possessives —

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 165.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2021. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1. 3 人称代名詞と指示詞標識

1-1. 指示詞標識の系列¹

3 人称代名詞に侵入した指示代名詞の目印には, 語頭の指示詞標識 th/p/d-

¹ 本研究は清水 (2019) (2020) (2021a) (2021b) (2021c) の続編であり, 科研費の助成による (ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述, 基盤研究 (C) (一般), 19K00540)。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア: アイスランド語, ア: アフリカーンス語, イ: イディッシュ語, 印欧: 印欧祖語, 英: 英語, オ: オランダ語, ギ: ギリシア語, ゲ: ゲルマン祖語, ゴ: ゴート語, 古英: 古英語, 古高ド: 古高ドイツ語, 古ザ: 古ザクセン語, 古ノ: 古ノルド語 (= 古西ノルド語), 古東ノ: 古東ノルド語, 古フ: 古フリジア語, ザ: (西) 低地ドイツ語北低地ザクセン方言, ス: スウェーデン語, チュ: スイスドイツ語チューリヒ方言, デ: デンマーク語, ド: ドイツ語, 西フ: 西フリジア語, ニュ: ノルウェー語ニューノシュ

がある。ほかにも仲間があり、1つの言語に混在していることもある。

まず、(1)のゴート語の母音で始まる is/ita/eis/ijōs/ija (主格のみ)が挙げられる。ド er/es はその^{こうえい}後裔である(英 it は古英 hit に由来する)。これを「母音系列」と呼ぶことにしよう。これは指示詞標識を欠くグループだが、本来、指示代名詞であり、ラテン語の指示代名詞 is/id/eī/eae/ea に対応する。そのルーツは印欧祖語の代名詞語幹 *ei- (基本階梯)/*i- (ゼロ階梯)(Krahe/Meid 1969⁷b: 56)であり、直示的機能もあった(Ramat 1981: 93)。つまり、現代語に見られる「3人称の代名詞は本来はなかった」(風間 1998: 101)のであり、日本語に似て、必要に応じて対象を明示していたと考えられている。古ゲルマン語からゴート語、古高ドイツ語、古ザクセン語の語形を例に取って、まとめてみよう(Krahe/Meid 1969⁷b: 55f.)²。

(1) 3人称：主格—対格—与格—属格

	ゴ	古高ド	古ザ
単数			
男性	is—ina—imma—is	er—in(an)—imu—sīn	hē/hī—ina—im(u)—is
女性	si—ija—izai—izōs	siu/sī—sia/sī—iru—ira	siu/sia—sia—iru—ira
中性	ita—ita—imma—is	iz—iz—imu—es	it—it—im(u)—is
複数			
男性	eis—ins—im—izē	sie—sie—im—iro	sia/sea—sia/sea—im—iro
女性	ijōs—ijōs—im—izō	sio—sio—im—iro	sia/sea—sia/sea—im—iro
中性	ija—ija—im—izē	siu—siu—im—iro	siu/sia/sea—siu/sia/sea—im—iro

次に、ゴート語の女性単数主格 **si** は、指示詞標識 s- を伴う「s-系列」に属する。ドイツ語では **sie** が該当し(英 she は語源不明、寺澤 1997: 1264)、古

ク、ハ：北フリジア語ハリゲン方言、ブ：ノルウェー語ブークモール、フ：フェーロー語、ベ：スイスドイツ語ベルン方言、メ：(東)低地ドイツ語メクレンブルク・フォアポマーン方言、モ：北フリジア語モーリング方言、ル：ルクセンブルク語

² 古ゲルマン諸語の代名詞の語形には異形が多く、類書の記述には差がある。

高ドイツ語 (siu/sī, sia/sī, sie, sio, siu) と古ザクセン語 (siu/sia, sia/sea, siu/sia/sea) の女性単数と複数主・対格もそうである。これは指示代名詞の男/女性単数主格 (ゴ sa/sō, 古ノ sá/sú, 古英 sē/sēo < ゲ *sa/*sō < 印欧 *so/*sā) と同源である)³。

さらに、古ノルド語は、(2) に示すように「単数：h-系列」↔「複数：p-系列」となっている。「h-系列」は代名詞 *hi- (< ゲ *xī, Orell 2003: 172 < 印欧 *ke) に由来する (Seebold 1984: 64-66)。「p-系列」(< ゲ *pa- < 印欧 *to-) は「th/d-系列」(英 *they*/ド *die*) の仲間である。フェーロー語は「t-系列」(t < p[θ]) なので、「th/p/d/t-系列」と呼ぶことにしよう。古ノルド語をアイスランド語に含めてまとめると、次のようになる。

(2) 3人称	ア/(古ノ)主格—対格—与格—属格	7主格—対格—与格—属格
単数 男性	hann—hann—honum ⁴ —hans	hann—hann—honum—hansara
女性	hún(古ノ hon)—hana—henni—hennar	hon—hana—henni—hennara
中性	það(古ノ þat)—það(古ノ þat)—því—þess	tað—tað—tí—tess
複数 男性	þeir—þá—þeim—þeirra(古ノ þeir(r)a)	teir—teir—teimum—teirra
女性	þær—þær—þeim—þeirra(古ノ þeir(r)a)	tær—tær—teimum—teirra
中性	þau—þau—þeim—þeirra(古ノ þeir(r)a)	tey—tey—teimum—teirra

これに疑問・不定代名詞の「h(w)-(<wh-)⁵/(h/k)v/w-系列」(< ゲ *hwa- < 印欧 *k^wo-) を加えれば (ド was/英 (some)what 何〜か?/何か, Krahe/Meid 1969⁷b: 74), 日本語の「コソアド」に似た体系になる。副詞を含む例を挙げてみよう。

³ 古ノ sá/sú/þat はギ ó/ý/tó (*ho/hē/tó* 指示代名詞起源の定冠詞) にあたる (ギ h-/t- は古ノ s-/p-/θ/ に対応する)。

⁴ 古ノ honum/henni のほかに honom/henne の表記もある。

⁵ 古英 hw- > 中英 w- からノルマン人の書記法によって、英 wh- のつづりになった。

(3)	母音系列	h-系列	th/p/d/t-系列	s-系列	h(w)/(h/k)v/w-系列
英	it/Ø	he/here	that/they/there	Ø/Ø/Ø/so/such	what/where/how
ド	es/er	Ø/hier	das/die/da	sie/Ø/sich/so/solch	was/wo/wie
ア	Ø/Ø	hann/hér	það/þeir/þar	Ø/sá/sig/svo/slíkur	hwað/hvar/hve(rnig)
フ	Ø/Ø	hann/her	tað/teir/Ø	Ø/Ø/seg/so, svá/slíkur	hvat/hvar/hvussu
ス	Ø/Ø	han/hår	det/de/dår	Ø/Ø/sig/så/Ø	vad/var/hur
ニ	Ø/Ø	han/her	det/dei/der	Ø/Ø/seg/så/Ø	kva/kvar/kor(leis)

1-2. 大陸北ゲルマン語と英語の3人称代名詞—h-系列と th/d-系列

現代語での異なる系列の混在例を紹介しよう。まず、大陸北ゲルマン語の4言語を取り上げる。両性と中性に簡素化したデンマーク語、スウェーデン語、ブークモールは、単数で「有生・人間（＋ペットなどの動物）：h-系列」⇔「無生・物事：d-系列」に分かれる。男・女・中性のニューノシュクは「男・女性：h-系列」⇔「中性：d-系列」である。ただし、どれも複数は指示代名詞由来の「d-系列」に移行している。

(4)	主格—目的格	デ	ス	ブ	ニ
単数：人間	男性	han — ham	han — honom	han — ham/han	男性 han — han/honom
	女性	hun — hende	hon — henne	hun — henne	女性 ho — ho/henne
物事	両性	den — den	den — den	den — den	中性 det — det
	中性	det — det	den — det	den — det	
複数：		de — dem	de/dom — dem	de — dem	dei — dei
		[d̥i] [d̥ɛm]	[d̥ɔm:] [d̥ɔm:]	[di:] [dɛm:]	

これに関連した有名な例が³、英語の「th-系列」(*they — them — their(s)*)である。古英語の時代にさかのぼって、古ノルド語と比べてみよう。

(5)	古英	主格—対格—与格—属格	古ノ	主格—対格—与格—属格
3 人称単数	男性	hē—hine—him—his		hann—hann—honum—hans
	女性	hēo—hie—hi(e)re—hi(e)re		hon—hana—henni—hennar
	中性	hit—hit—him—his		[bat—bat—þvi—þess]
複数	男性	hie—hie—him—hi(e)ra		[þeir—þá—þeim—þeir(r)a]
	女性	hie—hie—him—hi(e)ra		[þær—þær—þeim—þeir(r)a]
	中性	hie—hie—him—hi(e)ra		[þau—þau—þeim—þeir(r)a]

古英語は「h-系列」のオンパレードと言える。英語の he はドイツ語の er の -r が脱落し、指示詞標識 h-(<*hi) がついた語形である。一方、古ノルド語のカッコ内の語形は「th/p/d/t-系列」の指示代名詞の侵入であり、人称代名詞の表に記載されないこともある (Krahe/Meid 1969⁷b: 55f., Prokosch 1939: 274)。一方、現代のアイスランド語では、3 人称代名詞として定着している。この古ノルド語の語形がヴァイキング時代の 12 世紀以前にイングランド北部方言の主格に入り、近代英語が始まる 1500 年頃までに徐々に語頭音 h- の複数形をすべて駆逐して、th- で始まる複数形として定着した (宇賀治 2000: 174f.)。英 *they* — *them* — *their(s)* は古ノルド語の借用なのである。人称代名詞のような基礎語彙まで借用された事実は、言語接触の濃密さを物語っている。ただ、古英語の h- で始まる諸形が区別しづらかったことも、事実だったのだろう。

それにしても、弱い e を補強するなら、古英 hē だけで十分だったはずである。それが 3 人称すべての語形に及んだのは、「類推」(analogy) の持つ力の賜物だった (Krahe/Meid 1969⁷b: 57)。実際、(1) の古ザクセン語では、h- の侵入は単数主格 hē/hī のみである。英語の *he* — *she* — *it* と並んで、西フリジア語は *hy* — *hja*[ja] (<古フ *hiu*) — *it/sy* (オ *zij* の借用) となる。一方、北海ゲルマン語の影響を受けたオランダ語は *hij* — *zij* — *het*[ət] (<中オ *t, h-* は人為的添え物, Donaldson 1983: 163), ドイツ語は *er* — *sie* — *es* である。北海ゲルマン語の後裔では 3 人称代名詞に「h-系列」が残り、内陸ゲルマン語では「母音系列」が支配的と言える (清水 2021c: 21, 図表 1 参照)。

1-3. フリジア語群の3人称代名詞—弱形と統語的接語

古ノルド語起源の英 *them* に乗っ取られる以前の「h-系列」は、じつは現代英語にも h- を欠く弱形 *'em*[ə̃m] として、話し言葉で受け継がれている (英 I know *them/'em* well.)⁶。1480 年頃の後期中英語では、*them* (<古ノ *þeim*) と *hem* (<古英 *him*) が併存していた (Lass 2006: 75)。

さて、冠詞にも認められる「基本形—弱形」の併存を人称代名詞に体系化しているのが、フリジア語群である。次に示す (6) は、北フリジア語モーリング方言の例である (*me/de/et* の e は [ə])。3 人称の j- で始まる語形は、(9) に示すように、古フリジア語の *hi-* にさかのぼる (女性単数主格 *jū* (<古フ *hiu*), 複数主格 *ja* (<古フ *hia*), 複数目的格 *ja/jam* (<古フ *him*(*man*)/*hiam*)。2 人称複数主・目的格 *jam* は、古フ *ji* (主格)/*jemma*(*n*) (対・与格) に対応する (Sjölin 1969: 34)。

(6) モ	単数：主格	目的格	複数：主格	目的格
1 人称	<i>ik — 'k</i>	<i>me — Ø</i>	<i>we — Ø</i>	<i>ūs — Ø</i>
2 人称	<i>dū — Ø</i>	<i>de — Ø</i>	<i>jam — 'm</i>	<i>jam — 'm</i>
3 人称 男性	<i>hi — 'r</i>	<i>ham — 'n</i>	3 人称 <i>ja — 's</i>	<i>ja/jam — 's</i>
女性	<i>jū — 's</i>	<i>har — 's</i>		
中性 無生	<i>et/dāt — et/'t</i>	<i>et/dāt — 't/et</i> (再帰 <i>ham — Ø</i>)		
有生	<i>et/hat — et/'t</i>	<i>ham/et — 't/et</i> ⁷ (再帰 <i>ham — Ø</i>)		

弱形は直前のホストを必要とする前接語である。*ik — 'k*, *jam — 'm*, *dāt — et/'t*, *hat — et/'t* は、強弱の差による「音韻的接語」(phonological clitic) を含む「基本形—弱形」のペアである。

一方、3 人称代名詞を中心とするその他のペアは、語形に根本的な差が認

⁶ アイスランド語にも単数男性対格 *hann*/与格 *honum* (英 *him*) に対して、正書法に反映されない非公式の弱形 *'ann*/*'onum* がある (Thráinsson 2007: 5)。

⁷ Walker/Sjölin (1986: L 11.3) の表には、目的格 *ham* の弱形として *'n* が記載されている。モーリング方言の人称代名詞の記述には、類書によって微妙な差がある。

められる (モ 主格: hi — 'r, jü — 's, ja — 's; 目的格: ham — 'n, har — 's, ham — 't, ja/jam — 's)。異なる語幹が混在して、語形変化を形成する現象を「補充法」(suppletion)と言う。使用頻度が高く、類推が及びにくい語によく見られ、英 be 動詞に相当する語が好例で、英 go の過去形 went も wend 「行く」(<古英 wendan 転じる(ド wenden))の過去形の転用である。補充法による上記の弱形は統語的に制限され、主文定動詞と補文導入要素(従属接続詞、間接疑問文の疑問詞、関係詞)の直後でしか使えない。英語を除く大部分のゲルマン諸語の文構造は「枠構造」が基本であり、この両者の占める位置を「左枠」(ド linke Klammer)と言う。その直後に寄り添う代名詞などの無強勢の機能語が占める位置を「ヴァカーナーゲル位置」(Wackernagel-position)と呼んでいる。上記の3人称代名詞を中心とする弱形は、(7)に示すように、そこでしか使えない「統語的接語」(syntactic clitic)なのである。一方、基本形は強勢を持てば、(8)のようにどの位置でも使うことができる(用例は清水(1992: 101f), Petersen(2007: 174-177), Walker/Sjölin(1986: L11.2-Ü11))。

(7) モ **Hi** kamt gliks. 彼は(hi)すぐに(gliks)来ます(kamt)

↔Kamt **'r** lääser? 彼は('r)後で(lääser)来ますか(kamt 主文定動詞)

Ik liiw ai, dāt **'r** kamt. 私は(ik)彼が('r)来る(kamt)とは(dāt 従属接続詞)思いません(liiw ai)

モ **Jü** seet dāt bjarn aw en stölj. 彼女は(jü)その子供を(dāt bjarn)いすに(aw en stölj)すわらせます(seet 主文定動詞)

↔Koon **'s** ai luupe? 彼女は('s)歩く(luupe)ことができないのですか(koon 主文定動詞~ai)

Ik wiitj ai, weer **'s** booget. 彼女が('s)どこに(weer 間接疑問文の疑問詞)住んでいるか(booget)私は(ik)知りません(wiitj ai)

(8) モ {Heet **'r's**/Heet **hi's**} âl hâald? 彼は('r/強勢あり hi)彼(女)(ら)

を (‘s) もう (âl) 迎えに行ったのですか (heet~hååld)

Heet **hi** unt**i** **jü** dât schraawen? 彼 (hi 強勢あり) それとも (unti) 彼女が⁸ (強勢あり jü) それを (dât) 書いたのですか (heet~schraawen)

(6) の 3 人称代名詞にさらに注目しよう。主格の「男性単数：基本形 hi — 弱形 r」は「英 he — ド er」に対応する。基本形 hi-Ø (英 he-Ø) は由緒正しく北海ゲルマン語的な語形だが、弱形 r (ド er) はいかにも内陸ゲルマン語的である。同じく主格の「女性単数 jü (<古フ hiu) — ‘s」は「(5) 古英 hēo — (1) 古高ド siu/sī (>ド sie)」に対応しており、「複数 ja (<古フ hia) — ‘s」は「古英 hīe (5) — 古高ド sio (1) (>ド sie)」に対応している。このように、北フリジア語モーリング方言の主格では、「基本形：h-系列」↔「弱形：s-系列」が併存していることがわかる。

一方、目的格では、「男性単数 ham — ‘n」(ド 与格 ihm — 対格 ihn), 「女性単数 har — ‘s」(ド 与格 ihr — 対格 sie), 「複数 ja/jam (<古フ him (man) /hiam) — ‘s」(英 与格由来 them — ド 対格 sie) のように、「基本形：与格 -m/-r」↔「弱形：対格 -n/s-」という異なる格形が競合している。英語では、3 人称中性単数 (it (that/what)) を除いて、対格形は与格 (him/her/them (whom)) の前に姿を消した⁸。それが弱形に残っているのである。モーリング方言の「基本形—弱形」は、英語の与格のペア (them — ‘em) よりも多様なハイブリッド代名詞の複合体であると言える。(9) に挙げる古フリジア語の 3 人称の語形 (Sjölín 1969: 34f. 変更) から、このことを確認してみよう。

(9) 古フ 単数：	主格	対格	与格	属格
単数 男性	hi — re/-(e)r	hine/en(e) — ne	him — em	sin — (e)s

⁸ イングランド南西部デヴォン州 (英 Devon)、南デヴォン地方 (英 South Devon) の方言のように、男性単数目的格の弱形に古英語の対格 hine に由来する un を残す例もある (Trudgill 1999² 97f.)。

女性	hiu —se/-s	hia —s(e)	hire/her —Ø	hire/her(a) —Ø
中性	hit/het —(e)t	hit/het —(e)t	him —em	sin —(e)s
複数	hia —s(e)	hia —s(e)	him(man)/hiam —Ø	hi(a)ra —Ø

(6) のモーリング方言はこのパターンを受け継いでいることがわかる。同様の分布は、他の北フリジア語諸方言 (Wilts 1993: 20, 1995a: 23, 1995b: 21, 1995c: 20, 1995e: 24f., 1997: 21, Borchert et al. 1987: 90f.), 西フリジア語 (清水 2006: 149, Tiersma 1999²: 59), ザーターフリジア語 (東フリジア語 Kramer 1982: 21) ととも共通している。ただし、その由来はよくわからない (Boutkan 2001: 623)。Seebold (1984: 60) は、他の古ゲルマン諸語の弱形と合わせて古い時代からあったが、書き言葉としては認められず、文字表記されなかったために伝承されなかったと推測している。しかし、確証はなく、後代の発達かもしれない。

1-4. アフリカーンス語の人称代名詞—弱形の欠如と統一複数

これに対して、アフリカーンス語の代名詞には弱形がない。人称代名詞は無強勢で発音することが多いが、語形的に目立った相違はないのである。オランダ語には、次に示す「基本形—弱形」のペアがあり、基本形のつづりで書いても、日常会話では強調する場合を除いて、弱形で発音するのが普通である (オランダ語のカッコ内の ie/'m/(d)'r の表記は、非公式の文章や慣用句に限られる)。

(10)	単数	77 主格	目的格	↔	オ 主格	目的格
1 人称	ek[ɛk] ⁹	my[məi]		↔	ik[ɪk]—'k[k]	mij[mɛi]—me[mə]
2 人称 親称	jy[jəi]	jou[jœu]		↔	jij[jɛi]—je[jə]	jou[jou]—je[jə]
3 人称 男性	hy[ɦai]	hom[ɦɔm]		↔	hij[ɦɛi]—(ie[iː])	hem[hɛm]—(m[əm])

⁹ 強調形 ʔɛkke[ʔɛkə]/オ ikke[ʔɪkə]もあり、ʔɛkke? 「私なの?」/オ Ikke! 「私だよ」のように単独で使う (西ʔ ikke[ʔɪkə]/古高ド ihha (<印欧 *egō) 参照)。

女性	sy[səi]	haar[ɦar]	↔	zij[zei]—ze[zə]	haar[har]—ze[zə]/((d)'r[(d)ər])
中性	dit[dət]	dit[dət]	↔	Ø—het/'t[(ə)t]	Ø—het/'t[(ə)t]
複数 77 主格		目的格	↔	オ 主格	目的格
1 人称	ons[ɔ̃s]	ons[ɔ̃s]	↔	wij[vɛi]—we[və]	ons[ɔ̃ns]—Ø
2 人称	julle['jœlə]	julle['jœlə]	↔	jullie['jvli]—je[jə]	jullie['jvli]—je[jə]
3 人称	hulle['ɦœlə]	hulle['ɦœlə]	↔	zij[zei]—ze[zə]	hun[hvɪn]/hen[hɛn]—ze[zə]
単複					
2 人称敬称	u[y]	u[y]	↔	u[y]—Ø	u[y]—Ø

所有代名詞も同様である。オランダ語で「基本形—弱形」の区別があるものに限って、次に両言語を対比して示す。

- (11) 77 my[məi] 私の jou[jœu] 君の sy[səi] 彼・そのの
 haar[ɦar] 彼女の jul(le) ['jœlə(ə)] 君たちの
 オ mijn[mɛin]—m'n[mən] 私の jouw[jɔu]—je[jə] 君の
 zijn[zɛin]—z'n[zən] 彼・そのの haar[ha:r]—(d)'r[(d)ər]
 彼女の jullie['jvli]—je[jə] 君たちの

このように、アフリカーンス語では、オランダ語に見られる弱形が駆逐されていることがわかる¹⁰。一般にオランダ語の無強勢母音は、あいまい母音 e [ə] に弱化する。この傾向はアフリカーンス語にも認められる。ただし、アフリカーンス語の二重母音 y/ei[əi]は無強勢ではない (77 wy[vɛi] 私たち/wei[vəi] 牧場 /eie['əiə] 独自の↔オ wij[vɛi]/weide['vɛidə]/eigen['ɛiɣə(n)]。注意を要するのは、アフリカーンス語では、母音で終わる開音節と語末の無強勢あいまい母音 e[ə]が「完全母音」(full vowel) に強まることが

¹⁰ 弱形の唯一の残存は「se 構文」(77 Jan se[sə]hoed ヤンの帽子, オ Jan ɛ'n[zən]hoed, 7-3-4 参照)の se[sə]である (Ponelis 1993: 196)。不定冠詞: 77 'n[ə] (オ een[ən]/英 a(n)) は数詞: 77 een[e:n, ən]「1」(オ één[e'n]/英 one) との区別を示す。

ある点である。①指小辞 -tjie[ci] (オ -(t)je[cə(jə)]) による指小形: 77 hond-**djie**['hɔɪnci] 子犬 ← hond[hɔnt] 犬 (オ hond**je**['hɔncə] ← hond[hɔnt]), ②定冠詞: 77 die[di] (オ de[də] ↔ 指示代名詞 die[di]), ③副詞/R-代名詞: 77 daar そこ/それ, 例 77 daar(～)in その中で (オ er[ər] ↔ daar[da:r]) はその例である。個々の語彙では, 77 bagas**ie**[bə'xɑ:si] 「手荷物」/weduw**ee**['ve:dəve:] 「未亡人」(オ bagag**e**[ba'ʎa:zə]/weduw**e**['be:dy:və]) などがあり, 77 skadu**wee**/tomat**ie**/padd**a** 「影/トマト/ヒキガエル」は, 古くは語末音 -e[ə] を伴っていたオ schadu**w**/tomat**a**/pad (<schadu**w**e/tomat**e**/pad**d**e) に対応する。

このことから, (10) 77 dit — オ het/'t 「それ」の対応も説明できる。つまり, 77 dit[dit] 「それ」は近接指示詞: オ dit[dit] 「これ」(ド dieses) には由来せず, オ het/'t[(ə)t] 「それ」(ド es) に対する指示代名詞: オ dat[dat] 「それ, あれ」(ド das) の a[a] があいまい母音[ə] に弱まり, アフリカーンス語特有の [i] < [ə] という発音の明確化を経て, dit[dit] になったと考えられる (Ponelis 1993: 212, Howe 1996: 230f.)。

アフリカーンス語のこの傾向は, ゲルマン語として特異である。印欧祖語から分岐したゲルマン祖語は, 強勢(強さアクセント stress (accent)) による「語頭アクセント」(initial accent) への固定以降, 無強勢音節で完全母音の素性が中和してあいまい母音[ə] に弱まり, 脱落するプロセスを経てきたからである(例, ド hilft/macht (彼は) 助ける/作る < 中高ド hilfet/machet, e/ə/< 古高ド (er) hilf**it**/mach**ōt**)。したがって, このアフリカーンス語の発達は, 言語内の構造的要因による通常の音韻変化ではないと言える。

アフリカーンス語学の権威ライト女史 (Edith H. Raidt) は, アフリカーンス語には個々の語を明確に発音するという特徴があり, 代名詞弱形の駆逐をその好例に挙げている。そのルーツは, 17 世紀半ば以降, ケープタウン入植者 (オランダ人は 36.8% のみ, Vekeman/Ecke 1992: 223) に現地人を交えた人々の接触によるオランダ語の習得過程に求められるという (Raidt 1983: 96f.)。一般に代名詞の弱形の消失は, 混成言語の初期段階である「ピジン言語」(pidgin) の最初の過程で起こるという説もある (Howe 1996: 233)。「半

クレオール言語」(semi-creole)とみなされることの多いアフリカーンス語には、言語接触による特異性が随所で認められるようである。

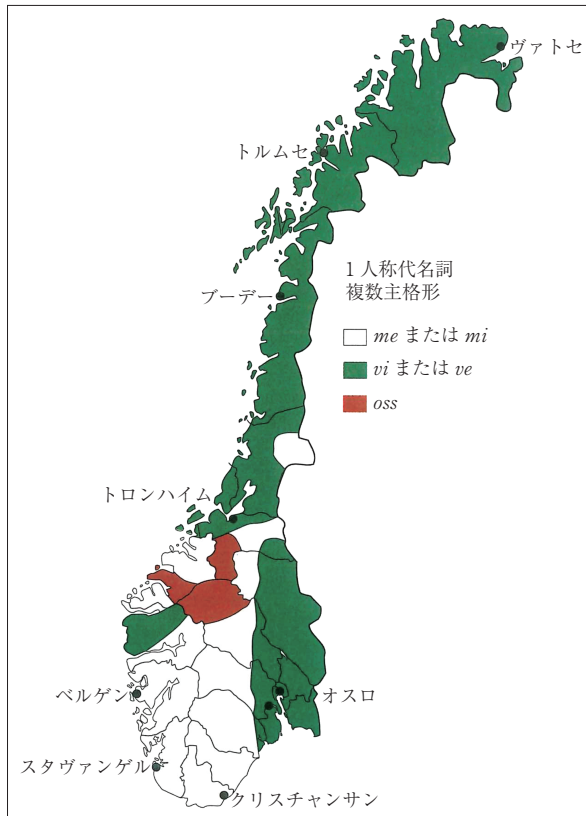
アフリカーンス語人称代名詞の第2の特徴は、複数形が所有代名詞を含めて同形で、すべての統語的機能を満たす点である。一般に複数では、語形変化が平均化する「統一複数」の傾向が認められる。アフリカーンス語の人称代名詞はその好例と言える(77 *Ons* kwyd *ons* goed van *ons* taak. 我々は(ons 人称代名詞主格)我々の任務を(van ons taak 所有代名詞)うまく(goed)やり遂げる(kwyd ons 人称代名詞目的格・再帰用法←jou kwyd 再帰動詞)。人称代名詞主・目的格と所有代名詞を合わせてオランダ語と比較すると、次のようになる。なお、アフリカーンス語には再帰代名詞(オ *zich*/ド *sich*)がなく、人称代名詞目的格を充当する。

(12)複数:	主格	目的格	所有代名詞	主格	目的格	所有代名詞
1人称	77 ons	ons	ons ↔ オ	wij — we	ons	両性 onze/中性 ons
2人称	julle	julle	julle	jullie — je	jullie — je	jullie — je
3人称	hulle	hulle	hulle	zij — ze	hun/hen — ze	hun

主格 *ons* 「私たち」は目的格 *ons* (オ *ons*/ド *uns*/英 *us*) の侵入である(主格 *ye*)。オランダ語ゼーラント方言(オ *Zeeuws*)や西フランドル方言(オ *Westvlaams*)でもそうであり(Howe 1996: 235), 英 *you* も目的格由来である。英語でも、イングランド南西部デヴォン州(英 *Devon*)の南デヴォン地方(英 *South Devon*)の方言に例があり(*Us'll go.* = 英 *We'll go.* Trudgill 1999²: 98), ノルウェー中部のノルウェー語方言も主格は *oss* である(図表1参照)。オランダ語ホラント方言(オ *Hollands*)には、17世紀に非公式の強調形 *ons* があり(比較: 英 *Me, too.*), 弱形を嫌うアフリカーンス語に適合したとも言われている(Howe 1996: 235)。

77 *julle* 「君たち」は、オ *jullie* (<je 君 + lie(den) 人々, Donaldson 1983: 171)と同類の複合語である。77 *hulle* 「彼(女)/それら」(<hunlui, lui 人々)もオランダ語の口語(*hullie* < *hunlieden*)に見られ, *hu-* は *ons* と同じ目的格

図表 1 ノルウェー語方言の 1 人称代名詞複数主格形



(Torp/Dahl 1996² : 164 変更)

(オ hun) である (Ponelis 1993: 195, Raidt 1983: 136)。かつての主格 (ʌʃ sulle < sylui, ʌʃ sy- = オ zij (ド sie)) と所有格 (ʌʃ haarle) も 20 世紀まで例証されている (Ponelis 1993: 219f, Howe 1996: 235-237)。フリジア語群でも、西 ʌʃ jimme/モ・ʌ jam 「君たち」は -men 「人々」との複合語である (Tiersma 1999²: 58)。

2. 再帰代名詞

2-1. 再帰代名詞の語形—無性代名詞としての3人称代名詞

再帰代名詞は語頭音 s-（オ/イ z-[z]）が目印の「s-系列」に属し、主格を欠き、性・数^{すう}の区別がなく、3人称に限られるのが原則である。話者と聞き手を指す1・2人称と違って、森羅万象に及ぶ3人称では、主語との一致の有無を再帰代名詞と人称代名詞で折半して表示する。

しかし、次に示すように、実際はもっと複雑である。「(自分の) 体を洗う」の例を挙げて、対照させてみよう。

(13) 英	ド	西フ	イ
I wash <i>myself</i> .	Ich wasche <i>mich</i> .	Ik waskje <i>my</i> .	Ik vash <i>zikh</i> .
You wash <i>yourself</i> .	Du wäschst <i>dich</i> .	(Do) waskest <i>dy</i> .	Du vashst <i>zikh</i> .
	Sie waschen <i>sich</i> .	Jo waskje <i>jo</i> .	Ir vasht <i>zikh</i> .
He washes <i>himself</i> .	Er wäscht <i>sich</i> .	Hy wasket <i>him</i> .	Er vasht <i>zikh</i> .
We wash <i>ourselves</i> .	Wir waschen <i>uns</i> .	Wy waskje <i>ús</i> .	Mir vashn <i>zikh</i> .
You wash <i>yourselves</i> .	Ihr wascht <i>euch</i> .	Jimme waskje <i>jimme</i> .	Ir vasht <i>zikh</i> .
They wash <i>themselves</i> .	Sie waschen <i>sich</i> .	Sy/Hja waskje <i>har(ren)</i> .	Zey vashn <i>zikh</i> .

「北海ゲルマン語的特徴」の一環として、すでに古英語の時代から再帰代名詞を失っていた英語は、すべての人称と数で「人称代名詞 + -self/-selves」として、再帰代名詞を二次的に補充している。一方、イディッシュ語の再帰代名詞 *zikh*（ド *sich*）は、すべての人称と数に用いる。これはスラブ語に属するロシア語の *sebjā*（себя）やポーランド語の *się*（ともに対格）と共通である¹¹。

¹¹ テル・アヴィヴ大学のヴェクスラー（Paul Wexler 1991）による「イディッシュ語はスラブ語起源である」とする大胆な仮説とも関連している（清水 2012a: 127-129）。

これに対して、フリジア語群には、英語と同様に「北海ゲルマン語的特徴」の一環として、古フリジア語の時代から再帰代名詞がない。(13)の西フリジア語の例が示すように、英語と違って二次的派生もしなかった。ただし、北フリジア語ハリゲン方言には、3人称主語(男 *hii*/女 *ju*/中 *dat*/複 *jä* (ド *er/sie/es/sie*))に対する再帰用法で、人称代名詞 *ham/här/ham/jam* と再帰代名詞 *sik* が併存している (Wilts 1997: 21)。Lorenzen (1982: 21) の文法書は、ハ |{Hii/Ju/Dat} froit |***ham/här/ham***|.「彼(女)/それは喜ぶ」/Jä froie ***jam***.「彼(女)らは喜ぶ」(←*ham* froie 喜ぶ, ド *sich* freuen) と記述し、「*sik* は低地ドイツ語である!」(ド *sik* ist plattdeutsch!) と力説している。それほど低地ドイツ語の影響力が強かったのだろう。

北海ゲルマン語に隣接する古オランダ語にも再帰代名詞はなく、高地ドイツ語の *zich* を借用して、16世紀以降に広まった (Donaldson 1983: 172)。-ch [x] < -k という「第2次子音推移」(secon consonant shift, 高地ドイツ語子音推移 (High German consonant shift)) を経ており、いかにも非オランダ語的である。低地ドイツ語のザ・メ *sik* は、由緒正しく -k に置き換えて取り入れた結果である。アフリカーンス語は人称代名詞で代用するが、英語の影響で -self を付加した語形も増えている (77 Hy was ***hom/homself***. 彼は体を洗う ↔ オ Hij wast ***zich***./西7 Hy wasket ***him***./英 He washes ***himself***.)。

ただし、3人称複数 (ド *sie*) を転用した (14) ①ドイツ語の *Sie*「あなた(がた)」は、上記の原則から除かれる (ド 再帰 *sich* ↔ 非再帰 *Sie/Ihnen*)。これに対して、②デンマーク語、③ブークモール、④ニューノシュクは、同じく3人称複数 (デ・ブ・ニュ *de* 一目的格 デ・ブ *dem/ニ dykk*) から転じた敬称 *De*「あなた(がた)」(使用は稀) には、再帰用法で人称代名詞 (デ・ブ *Dem/ニ Dykk*) を使う点で異なる。

(14) ① ド Denken |***Sie/sie***| an ***sich***? |あなた(がた) (Sie)/彼(女)ら (sie)| は自分のこと (*sich*) を考えているのですか

② デ ***De*** bør skynde ***Dem*** hjem, frue. あなたは (De) 急いで帰宅する (家へ (hjem) 急ぐ (skynde Dem ← skynde sig)) べきですよ

(bør), 奥さん (frue)

↔ *De* forsøgte at forsvare *sig*. 彼らは (de) 自衛し (at forsvare sig) ようとした (forsøgte) (Lundskær-Nielsen/Holmes (eds.) 2010²: 184, 186)

③ ブ *De* har penger på *Dem*. あなた (がた) は (De) 自分の手元に (på Dem) お金を (penger) 持ち合わせている (har) (Berulfsen 1985⁵: 43)

↔ *De* har penger på *seg*. 彼(女)らは (de) 自分の手元に (på seg) お金を持ち合わせている (ib. 43)

④ ニュ *De* vaskar *Dykk*. ↔ *Dei* vaskar *seg*. あなた (がた) (De)/彼(女)らは (dei) 自分の体を (Dykk/seg) 洗う (vaskar)
(Hallaråker 1983: 43)

古ゲルマン諸語で再帰代名詞の語形を対格・与格・属格ですべて備えているのは、ゴート語と古ノルド語だけである。古高ドイツ語では、属格 *sîn* が単数男・中性に限られていた。

(15) ① 古語：対格—与格—属格：ゴ *sik* — *sis* — *seina* 古ノ *sik* — *sér* — *sîn*
古高ド *sih* — $\emptyset$ — *sîn* (単数男・中性のみ)

② 現代語：対格—与格—属格：ア/フ *sig/seg* — *sér/sær* — *sîn/sîn*

↔ 対・与格：ド *sich/ル sech/チ *si(ch)/ベ sich, sech**

目的格：ス・デ *sig/ブ・ニ *seg/オ zich/低ザ・メ *sik***

すべての人称・数：イ *zikh/英 人称代名詞 + -self/-selves*

現代ゲルマン諸語では、アイスランド語とフエーロー語が「対格 *sig/seg*↔与格 *sér/sær*↔属格 *sîn*」を区別する。アイスランド語の例を(16)に示してみよう(ア þvo *sig* (自分の) 体を洗う (対格), greiða *sér* (自分の) 髪をとかす (与格), skammast *sîn* 恥じる (属格))。

(16) ア	体を洗う	髪をとかす	恥じる
単数 1 人称	ég	þvæ <i>mig</i>	greiði <i>mér</i> skammast <i>mín</i>
2 人称	þú	þvær <i>þig</i>	greiðir <i>þér</i> skammast <i>þín</i>
3 人称	hann/hún/það	þvær <i>sig</i>	greiðir <i>sér</i> skammast <i>sín</i>
複数 1 人称	við	þvoum <i>okkur</i>	greiðum <i>okkur</i> skömmumst <i>okkar</i>
2 人称	þið	þvoid <i>ykkur</i>	greiðið <i>ykkur</i> skammist <i>ykkar</i>
3 人称	þeir/þær/þau	þvo <i>sig</i>	greiða <i>sér</i> skammast <i>sín</i>

大陸北ゲルマン語には対格 (ス・デ sig/ブ・ニ seg) が残った。ドイツ語の sich も与格にも使う対格である。中高ドイツ語では、「対格 sich↔与格: 男・中 im(e)/女 ir(e)/複 in (>ド ihm/ihr/ihnen)」のように、与格に人称代名詞を使った (中高ド Er bat *im* trinken bringen. 彼は自分に (im) 飲み物を持って来させた (=持って来るように頼んだ) (Tristan 11666))。与格に対格 sich を転用したのは、16 世紀半ばのことである (Dal/Eroms 2014⁴: 78)。ド ihm/ihr/ihnen の再帰用法は長く続き、19 世紀にもメーリケ (Eduard Mörike 1804-1875) の詩『ランプに寄す』(ド Auf eine Lampe 1846) の有名な最終行には、ド Was aber schön ist, selig scheint es *in ihm* selbst. 「美しいものはしかし、自らの内に (in ihm selbst, 現在では in sich selbst) 浄福に輝く」とある。上部ドイツ語の一部では、人称代名詞与格 eam (ド ihm) を再帰用法に充当し、低地ドイツ語ヴェストファーレン方言の一部の地域では、1 / 2 人称代名詞与格 mir/dir との類推から、与格 ser が発達している (清水 2021c: 38 図表 2 参照)。

ドイツ語の再帰代名詞属格は、再帰代名詞起源 (3 参照) の男・中性 seiner (<古高ド・中高ド sin) と人称代名詞の女性単数・複数 ihrer からなり、所有代名詞 sein/ihr 「彼・それ/彼女・そのの」と同じく、再帰用法と非再帰用法が混在している。両者を区別する北ゲルマン語と比較されたい。とくに(18)では細心の注意を要する。

- (17) ド Er_i schämt sich **seiner**_{i/j}. / Sie_i schämt sich **ihrer**_{i/j}. 彼は {自分 (seiner_i)/他人の男性 (seiner_j)} のことを恥じている / 彼女は {自分 (ihrer_i)/他人の女性 (ihrer_j)} のことを恥じている¹²
- ↔ ア Hann_i skammast **sín**_i/**hans**_j. / Hún_i skammast **sín**_i/**hennar**_j. 彼は {自分 (sín_i)/他人の男性 (hans_j)} のことを恥じている / 彼女は {自分 (sinn_i)/他人の女性 (hennar_j)} のことを恥じている
- (18) ド Er_i liebt **seine**_{i/j} Frau. / Sie_i liebt **ihren**_{i/j} Mann. 彼は {自分の (seine_i)/他人の男性の (seine_j)} 妻を愛している / 彼女は {自分の (ihren_i)/他人の女性の (ihren_j)} 夫を愛している
- ↔ ア Hann_i elskar konuna **sína**_i/**hans**_j. / Hún_i elskar manninn **sinn**_i/**hennar**_j. 彼は {自分の (sína_i)/他人の男性の (hans_j)} 妻を愛している / 彼女は {自分の (sinn_i)/他人の女性の (hennar_j)} 夫を愛している

再帰代名詞の語尾は、基本的に1・2人称代名詞と同じである(対格 -k/-ch/-g ↔ 与格 -r)。本来の再帰代名詞は3人称の仲間だが、性を区別しないので、1・2人称と同じ無性代名詞の特徴を示すのである。元来、その使用は1・2人称代名詞と同じ人間に限られていたと言われている(Dal/Eroms 2014⁴: 74)。あくまで推定だが、太古の3人称代名詞は、「s-系列」の指示代名詞に属していた再帰代名詞の前身 *se であり、発話場面内の人間を指し、「今、述べた人」の意味だったと、Seebold (1984: 79) は述べている。その後、他の「s-系列」と「t-系列」(>th/p/d/t-系列)の指示代名詞が発達する中で、既出の対象を再現する機能に限定され、文中の主語の照応機能を担うようになり、現在の再帰代名詞に至ったという。

¹² 再帰用法を明示するために、ド selbst「自身」を付加することもある。ド Er/Sie, schämt sich **seiner/ihrer, selbst**. 彼/彼女は自分自身のことを恥じている。

2-2. 長距離再帰

英語などの二次的派生を除けば、一般に再帰代名詞には、性・数が指定されない。そこで、両者の素性を特定する先行詞が必要である。その最小領域は等位接続を除く単文または名詞句だが、話者の視点、「埋め込み文」(embedded sentence)を導く「母型文」(matrix sentence)の動詞(母型動詞 matrix verb)の意味、それに埋め込み文の動詞のムード(法 mood)などの要因も関係して、より大きな領域に及ぶことがある(Harbert 2007: 204-213)。従属文などの境界を越えて、埋め込み文の再帰代名詞が母型文の主語との同一指示を示す現象が「長距離再帰」(long distance reflexivization)または「長距離照応/束縛」(long distance anaphora/binding)である。その好例はアイスランド語とフェーロー語に見られる。フェーロー語の例を次に示す。

- (19) フェ ① *Marjun_i sigur, [at Jógván_j elskar seg_{i/j}].* マリユン(女名)は
 イェグヴァン(男名)が自分(seg_{i/j} マリユン/イェグヴァン)を
 愛していると言っている (Petersen/Adams 2009: 111f.)
- ② *Marjun_i sigur, [at Jógván_j elskar {*seg sjálva/seg sjálvan_j}.]*
 マリユンはイェグヴァンが自分自身(seg sjálvan 男性: イェグ
 ヴァン)を愛していると言っている (*seg sjálva 女性: マリユ
 ンは不可) (ib. 111)

①segは「単純再帰形」(simple reflexive)で、従属文の主語イェグヴァン以外に、文境界を越えて主文の主語マリユンを示すこともできる。マリユンを指す後者が長距離再帰である。一方、②seg sjálva(女性)/sjálvan(男性)は、「自身」(英 self/ド selbst)にあたる語を添えて強調や対比を表す「複合再帰形」(complex/compound reflexive)である。これは一般に長距離再帰には使えず、同一文内で「局所的束縛」(locally bound)の扱いを受けると言われている(「ピカの一般化」(Pica's generalization), Ferraresi 2005: 90, ただし、(25)の例外を参照)。

埋め込み文中の再帰代名詞(seg, ド sich)は母型文の主語の視点に立った

場合に用い、そうでなければ人称代名詞 ((20) hana, ド sie) も可能である。これはアイスランド語でも同様である。この点で、両言語の再帰形は日本語の「自分」と似ている。

- (20) フヱ *Hon_i sigur* [at eg havi svikið {*seg_i/hana_i/hana_j*}]. 彼女 (hon_i) は私が (eg) {自分 (seg_i 彼女) /彼女 (hana_i) /別の彼女 (hana_j)} をだました (havi~svikið) と (at) 言っている (sigur)
(Thráinsson et al. 2004: 334)

複合再帰形は、(19) elska「愛する」や (21) ①sláa「なぐる」のように、普通は非再帰的に使うことが多い他動詞の再帰用法に用いる。(20) ②stoyta seg「潜る」のように、他動詞の用法を欠く本来的な再帰動詞には使えない。

- (21) フヱ ① *Jógvan_i sló* {**seg_i/seg sjálvan_i*}. イエグヴァンは自分を (seg sjálvan_i) なぐった (sló←sláa) (Thráinsson et al. 2004: 329)
② *Hvalurinn_i stoytti* {*seg_i/seg sjálvan_i*} í kav. クジラは (hvalurinn_i) 深みに (í kav) 潜った (stoytti seg_i←stoyta seg)
(ib. 330)

不定詞句や分詞句の境界を越える長距離再帰でも同様である。(22) では人称代名詞 honum「彼」も使える (フヱ raka+与格「～の髭^{ひげ}をそる」↔ア raka+対格)。

- (22) フヱ *Jógvan_i bað meg* [raka {*sær_i/sær sjálvum_i/honum_j*}]. イエグヴァンは私に (meg) {自分 (イエグヴァン sær)/彼 (イエグヴァン honum_i)/別の男性 (honum_j)} の髭をそるように (raka) 頼んだ (bað)
(Thráinsson et al. 2004: 332 変更)

この現象は大陸北ゲルマン語でも観察される。しかし、従属文をまたぐ例

は正式には認められない。とくにデンマーク語 (23) とスウェーデン語では厳しいとされる。一方、ブークモールとニューノシュク (24) には用例が散見される (Faarlund 2019: 298f.)。ただし、人称代名詞が優先されることに変わりはない。なお、関係文では、デンマーク語やスウェーデン語 (25) についても非公式の話し言葉で許容されるようである (Faarlund 2019: 300)。とくに (25) のデンマーク語の sig selv 「自分自身」は、(19)②の説明で述べたとおり、長距離再帰では不可とされるはずの複合再帰形である。

- (23) デ *Marie_i* siger, [at du elsker {**sig_i*/*hende_{i,j}*}]. マリーは君が (du) {彼女 (マリー *hende_i*)/別の彼女 (*hende_j*)} を愛している (elsker) と (at) 言っている (siger) (Thráinsson et al. 2004: 331)

- (24) ブ *Hun_i* føler [at noe mangler i livet *sitt_i*]. 彼女は (*hun_i*) 何かがある自分の (*sitt_i*) 人生に (i livet) 欠けている (mangler) と (at) 感じている (føler)

ニュ *Dei_i* ventar på [at nokon skal gjere jobben for *seg_i*]. 彼らは (*dei_i*) だれかが (nokon) 自分のために (for *seg_i*) その仕事を (jobben) してくれる (gjere) のを (på at) 待っている (ventar)

(Faarlund 2019: 298)

- (25) デ Hun mente *hun_i* gjorde det [som var bedst for *sig_i selv_i*]. 彼女は (*hun_i*) 自分自身にとって (for *sig selv_i*) 最善 (bedst) だった (var) ことを (det som) した (gjorde) と思った (mente) (ib. 300)

ス *Han_i* skulle behöva någon [som besöker *sig_i*]. 彼には (*han_i*) 自分を (*sig_i*) 訪ねてくれる (som besöker) だれかが (någon) 必要だろう (skulle behöva) (ib. 300)

古ゲルマン諸語については、たとえばゴート語には、不定詞句 (26)、それに他の古語にはない特筆すべき現象として分詞句 (27) に関して、上記に準じた例が認められる。しかし、従属文 (28) の対応例はないようである (Ferraresi 2005: 90-97, Miller 2019: 383)。

- (26) ゴ jah **pro**_i gewaúrhta twalif_j [**PRO**_j du wisan miþ **sis**_i]. そして (jah) 彼は (pro_i) 12 人に (twalif_j) 自分 (sis_i) とともに (miþ) 居るように (PRO_j wisan 不定詞) した (gewaúrhta)

(Mark 3: 14, Ferraresi 2005: 91, 93 変更)

paiei_i qēmun [**PRO**_i hausjan imma jah hailjan **sik**_i saúhtē **seinaizō**_i] 彼 (の言うこと) を (imma) 聞こうとし (hausjan), そして (jah) 自分たちの (seinaizō_i) 病気から (saúhtē) 治ろうという (hailjan siki 不定詞) 人々が^s (paiei_i) 来ていた (qēmun)

(Luke 6: 18, ib. 92)

- (27) ゴ **is**_i qapub-þan jah þamma **haitandin**_j **sik**_i 彼 (= イエス) は (is_i) そして (-uh) それから (-þan) また (jah) 自分を (sik_i) 招いた人に (þamma haitandin_j 現在分詞←haitan 招く) 言われた (qap-)

(Luke 14: 12, ib. 93)

þanuh qap **Iēsus**_i [du þaim galaubjandam **sis**_i **Iudaium**_j] すると (þanuh) イエスは (Iēsus_i) 自分を (sis_i) 信じている (galaubjandam 現在分詞←galaubjan 信じる) ユダヤ人たちに (Iudaium_j) 言われた (qap)

(John 8: 31, ib. 93)

- (28) ゴ jah bēdun ina [ei uslaubidēdi **im**/^{*}**sis**¹³ in þō galeiþan] そして (jah) [彼ら (= 悪霊たち) は] その中へ (in þō) 入ることを (galeiþan) 彼らに (im/^{*}sis) 許すように (uslaubidēdi 希求法過去 3 人称単数) と (ei) 彼 (= イエス) に (ina) 頼んだ (bēdun)

(Luke 8: 32, Miller 2019: 383 変更)

jah faúrbaup im [ei mannhun ni qēþeina bi **ina**/^{*}**sik**] そして (jah) [彼 (= イエス) は] 自分のことについて (bi ina/^{*}sik) だれにも言わない (mannhun ni qēþeina 希求法過去 3 人称複数) よう

¹³ 古語の用例を挙げる際の慣例に反して、Miller (2019: 383) はあえて非文 (*) の判定を下している。Ferraresi (2005: 91) も同じ例を挙げているが、^{*}sik という記載はしていない。次例も同様。

に (ei) 禁じた (faúrbaup)

(Mark 8: 30, ib. 383 変更)

ゲルマン諸語の再帰代名詞は、再帰と受動の意味を兼ねた印欧祖語の「中動態」(medio-passive) を受動態として引き継いだゲルマン祖語以降、再帰の機能を補う機能語として発達した。北ゲルマン語では、(16) ア skammast「恥をかく」のように、10 世紀以降 (Haugen 1982: 134)、動詞の屈折語尾 (古西ノ -st/古東ノ -s<-sk<sik) への文法化も起きている。

3. 所有代名詞—属格と形容詞の間

3-1. 所有代名詞と人称代名詞属格

現代ドイツ語の所有代名詞は、① -n と② -r で終わる語形から成っている。一方、古高ドイツ語では、後者は② -ēr と③ 母音 -a/-o で終わる語形に分かれていた。

(29) 所有代名詞

ド ① *mein/dein/sein* 私/君/彼・それ(男・中性単数) の

↔ ② *ihr/unser/euer/ihr* 彼女・それ(女性単数)/私たち/君たち/彼(女)ら・それら(複数) の

中高ド ① *mīn/dīn/sīn* 同上 ↔ ② *ir/unser/iuwer/ir* 同上

古高ド ① *mīn/dīn/sīn* 同上 ↔ ② *unsēr/iuwēr* 私たち/君たちの

↔ ③ *ira/iro* 彼女・それ(女性単数)/彼(女)ら・それら(複数) の

ド sein「彼・それの」は再帰形が起源であることは、2-1 で述べた。古高ドイツ語では、男・中性にその *sīn* (<ド sein) が侵入し、1/2 人称の無性代名詞とともに、古高ド ① *mīn/dīn/sīn* 「私/君/彼・それの(男・中性単数)」のグループを構成していた。かたや古ザクセン語には、再帰形起源の *sīn* の侵入に加えて、古高ド *iro* 「彼女・それ/彼(女)・それらの」と同じく、英 his にあたる 3 人称代名詞属格 (1-1 (1) 参照) を転用した無変化の *is* (← *hē/hī*)

が残った。これに対して、1/2 人称複数は、古高ド ②*unsēr/iuwēr*「私たち/君たちの」という別のグループだった。①②の両者は形容詞強変化したが、古高ド ③*ira/iro*「彼女・それ(女性単数)/彼(女)・それら(複数)の」は無変化だった。なぜなら古高ドイツ語では、この場合に所有代名詞がなく、3 人称代名詞属格を転用して補ったからである。これを受け継いだ中高ド ②*ir/ir* (>ド *ihr/ihr*) は、属格から脱皮して形容詞強変化するようになり、今ではすべての語形に及んでいる。

一方、人称代名詞属格は無変化である。それに、動詞・形容詞・前置詞の目的語としてはたらき、所有代名詞とは意味・用法がまったく異なる(ド *Erbarme dich meiner*, o Gott! ああ神よ、私を憐れんでください/Sie ist *seiner* überdrüssig geworden. 彼女は彼がいやになった/statt *deiner* 君の代わりに)。それでも、次に示す人称代名詞属格は、語末に -er がつかない古語では、所有代名詞と語形がかなり似ていた。

(30) 人称代名詞属格

ド 単数: *meiner/deiner/seiner* (男・中性) *ihrer*

複数: *unser/eurer/ihrer* (> *Ihrer*)

中高ド 単数: *mīn/dīn/es, sīn/ir(e)* 複数: *unser/iuwer/ir(e)*

古高ド 単数: *mīn/dīn/sīn/ira/es* 複数: *unsēr/iuwēr/iro*

現代語の人称代名詞属格の語末に共通する -er は、*unser/euer*「私たち/君たちの」の古形の一般化による (Tiesema 1969²: 94)。16 世紀に始まり、19 世紀に広まった (Paul 2002¹⁰: 214)。属格: 中高ド *es* (↔ *ez* 主格) は廃れている。ド *Vergissmeinnicht*「忘れな草」(私を (-*mein*-<中高ド *mīn*) 忘れないで) は以前のなごりである。よく知られた文学作品の例を挙げると、ゲーテの名詩『恋人の傍らで』(ド *Nähe des Geliebten* 1795) の冒頭には、ド *Ich denke dein*, wenn mir der Sonne Schimmer / Vom Meere strahlt; / *Ich denke dein*, wenn sich des Mondes Flimmer / in Quellen malt. 「あなたを想います 日の光が海から輝き渡るとき あなたを想います 月のきらめきが

泉に照り映えるとき」(現在は *ich denke an dich*) という属格 *dein* (*deiner* の古形) の語形がまだ見られる。2-1 で引用した 1846 年のメーリケの詩『ランブに寄す』の直前の行にも、*Ein Kunstgebild der echten Art. Wer achtet sein?* 「真の芸術作品 だれがおまえに目を留めるといえるのか」(現在は *Wer achtet darauf?*) に属格 *sein* (*seiner* の古形) の語形がある。

古ゲルマン語で最も古形を豊富にとどめるゴート語では、1・2 人称は所有代名詞(形容詞強変化)と人称代名詞属格(無変化)が別形である。ゴ *unsar* 「私たちの」/*izwar* 「君たちの」/*igqar* 「君たち 2 人の」には、男性単数主格語尾 *-s* が欠けているが、これは *-sar/-war/-qar* が短語幹(-VC)であることによる。ゴ *meins* 「私の」/*peins* 「君の」、それに②の *seins* 「自分の」は長語幹(-VVC)なので、語尾 *-s* を伴う。一方、3 人称は「所有代名詞(再帰・形容詞強変化) ↔ 人称代名詞属格(非再帰・無変化)」の対立を保っている。

(31) ① 1・2 人称：ゴ

所有代名詞(形容詞強変化)：*meins/peins/unsar*/複数 *izwar*/双数 *igqar*

↔ 人称代名詞属格(無変化)：*meina/peina*/複数 *unsara*/双数 *izwara*

② 3 人称：ゴ

所有代名詞(再帰・形容詞強変化)：*seins* 自分の

↔ 人称代名詞属格(非再帰・無変化)：男・中性単数 *is*/複数 *izē*,
女性単数 *izōs*/複数 *izō*

両者の関係については諸説あるが(Seebold 1984: 47-56, Fulk 2018: 189), 有力な説では、そのルーツは所有代名詞は所有を表す形容詞語幹で、それが属格に転用されたようである(Ringe 2017²: 236, Gerdes/ Spellerberg 1986⁶: 65, Tiesema 1969²: 95)。また、(29)① *-n* のグループは「人称代名詞所格(locative) + 形容詞派生接尾辞：印欧 **-no-*」に由来し、「私/君/自分(>彼・それ)のもとに」>「～に属して」>「～の」と意味変化した結果とされている。

る。(29)② -ēr のグループは「人称代名詞語幹+比較・対立の接尾辞：印欧 *-ero-」が起源で、「(君たちに対する) 私たちの/(私たちに対する) 君たちの」の意味だったらしい¹⁴ (Krahe/Meid 1969⁷: 59f.)。

3-2. 北ゲルマン語の所有代名詞と人称代名詞属格

ドイツ語では、ルーツが似通った「①所有代名詞 (形容詞強変化) ↔ ②人称代名詞属格 (無変化)」の区別が「所有 (～の[もの]) ↔ 動詞・形容詞・前置詞の目的語」という意味・用法の差に反映している。これに対して、北ゲルマン語では、両者が「所有 (～の[もの])」の意味を折半している。

(32) ① 所有代名詞 (単・複数：男/女/中性・主格)

↔ ② 人称代名詞属格 (無変化)

ア ① 単数：男性 *billinn* {*mínn/pínn/sínn*} {私/君/自分 (再帰)} の車

女性 *bókin* {*mín/pín/sín*} {私/君/自分 (再帰)} の本

中性 *húsið* {*mitt/pitt/sitt*} {私/君/自分 (再帰)} の家

複数：男性 *bílnir* {*mínir/pínir/sínir*} 同上

女性 *bækurnar* {*mínar/pínar/sínar*} 同上

中性 *húsin* {*mín/pín/sín*} 同上

② 単数：無変化 {*billinn/bókin/húsið*} {*hans/hennar/okkar/ykkar/þeirra*} {彼 (非再帰)/彼女 (非再帰)/私たち/君たち/彼(女)たち (非再帰)} の {車/本/家}

複数：無変化 {*bílnir/bækurnar/húsin*} {*hans/hennar/okkar/ykkar/þeirra*} 同上

¹⁴ 同類の接尾辞：印欧 *-tero- によるラ *noster/vester* 「私たち/君たちの」、*dexter/sinister* 「右/左の」参照。印欧 *-ero- を場所の副詞を派生した接尾辞 *-er- に関係づける説もある (Fulk 2018: 189)。

(33) ① 所有代名詞 (単数: 両/中性一複数: 統一性)

↔② 人称代名詞所有格 (無変化)

ス ① 単数: 両性 {*min/din/sin/vår/er*} |bil/bok| {私/君/自分 (再帰)/
私たち/君たちの |車/本|

中性 {*mitt/ditt/sitt/vårt/ert*} hus {私/君/自分 (再帰)/私たち/君たちの |家|

複数 統一性 {*mina/dina/sina/våra/era*} |bilar/böcker/hus| 同上

② 単数: 無変化 {*hans/hennes/deras*} |bil/bok/hus| {彼 (非再帰)/
彼女 (非再帰)/彼 (女) たち (非再帰)} の |車/本/家|

複数: 無変化 {*hans/hennes/deras*} |bilar/böcker/hus| 同上

(32) のアイスランド語の例で確認すると, ① -n で終わり, 形容詞強変化する所有代名詞 minn/pinn/sinn 「私/君/自分 (再帰) の」と② -s/-r(a) で終わる無変化の人称代名詞属格 hans/hennar/okkar/ykkar/þeirra 「彼/彼女 (非再帰) 私たち/君たち/彼 (女) たちの (非再帰)」に分かれる。(18) で言及した「ア konan *sín* 正妻 (再帰) ↔ konan *hans* 人妻 (非再帰)」という意味の違いも, 明確に峻別できる。かつての属格の用法をかなりとどめているアイスランド語では, Ég get ekki lifað án {*þín/hennar*}. 「ぼくは君/彼女なしでは生きていけない」という þú/hún 「君/彼女」の属格を使った表現も可能である。ただし, ア A og B 「A と B」の等位接続では, 再帰形 B は A を指せない。したがって, ア *Jóni og konan hans* _{*ið/*} *sín* _{ið} eru heima. 「ヨウンと彼の (hans, ヨウン以外の男性の) 妻は家にいる」では, 依然として気が抜けない。同じく離島北ゲルマン語に属するフェーロー語も, 目的語としての属格の用法をかなり失った点を除けば, アイスランド語と同じ分布を示す。

②ア okkar/ykkar 「私たち/君たちの」は古ノルド語の双数 okkarr/ykkarr の転用であり, 語尾 -r (男性単数主格) が示すように, 形容詞強変化していた。本来の複数形は (33) のスウェーデン語の例など, 大陸北ゲルマン語に残っている (ス 単数両性 vår/中性 vårt/複数 våra 私たちの, er/ert/era 君たちの ↔ デ jeres, 2 人称代名詞 I の属格)。これは古ノルド語でも形容詞強

変化する所有代名詞だったが（古ノ単数男性 *várr*/女性 *vár*/中性 *várt*/複数 *várir*/*várar*/*vár*; 単数 *yð(v)arr*/*yður*/*yð(v)art*/複数 *yðrir*/*yðrar*/*yður*）、アイスランド語では無変化になり、以前の双数形（古ノ *okkarr*/*ykkarr*）とともに属格（ア *okkar*/*ykkar*）と同形になった（森田 2002³: 78-80）。再帰形 *sinn*（古高ド *sīn*）が3人称代名詞属格に侵入しなかった点と合わせて、ドイツ語との大きな違いであると言える。

参考文献

- Berulfsen, Bjarne (1985⁵) *Norwegian Grammar*. Oslo: Aschehoug (Nygaard).
- Borchert, Mina/Århammar, Nils/Århammar, Ritva (1987) *Wi lear Halunder*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
- Boutkan, Dirk (2001) Morphology of Old Frisian. In: Munske (Hrsg.) 620-626.
- Dal, Ingerid/Eroms, Werner (2014⁴) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.
- Donaldson, B. C. (1983) *Dutch. A Linguistic History of Holland and Belgium*. Leiden: Nijhoff.
- Faarlund, Jan Terje (2019) *The Syntax of Mainland Scandinavian*. Oxford: Oxford University Press.
- Ferraresi, Gisella (2005) *Word Order and Phrase Structure in Gothic*. Leuven/Paris/Dudley: Peeters.
- Frings, Theodor/Lerchner, Gotthard (1966) *Niederländisch und Niederdeutsch*. Berlin: Akademie-Verlag.
- Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Gerdes, Udo/Spellerberg, Gerhard (1986⁶) *Althochdeutsch — Mittelhochdeutsch*. Frankfurt am Main: Athenäum.
- Hallaråker, Peter (1983) *Norwegian/Nynorsk*. Bergen/Oslo/Stavanger/Tromsø: Universitetsforlaget.
- Harbert, Wayne (2007) *The Germanic Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haugen, Einar (1982) *Scandinavian Language Structures*. Tübingen: Niemeyer.
- Howe, Stephen (1996) *The Personal Pronouns in the Germanic Languages. A Study of Personal Pronoun Morphology and Change in the Germanic Languages from the First*

- Records to the Present Day*. Berlin/New York: De Gruyter.
- 風間喜代三 (1998) 『ラテン語とギリシア語』三省堂
- König, Werner (1998¹²) *dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969¹³) *Germanische Sprachwissenschaft II. Formenlehre*. Berlin: De Gruyter.
- Kramer, P. (1982) *Kute Seelter Sproakleere*. Rhaderfehn: Ostendorp.
- Lass, Roger (2006) Phonology and Morphology. In: Hogg, Richard/Denison, David (eds.) *A History of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. 43-108.
- Lorenzen, Jens (1982) *Halligfriesische Sprachlehre*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
- Miller, D. Gary (2019) *The Oxford Gothic Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 森田貞雄 (2002³) 『アイスランド語文法』大学書林
- Munske, Horst Haider (Hrsg.) (2001) *Handbuch des Friesischen/Handbook of Frisian Studies*. Tübingen: Niemeyer.
- Orel, Vladimir (2003) *A Handbook of Germanic Etymology*. Leiden/Boston: Brill.
- Paul, Hermann (2002¹⁰) *Deutsches Wörterbuch*. Tübingen: Niemeyer.
- Petersen, Adeline (2007) *Friesischer Sprachkurs. Mooringer Frasch*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
- Petersen, Hjalmar P./Adams, Jonathan (2009²) *Faroese*. Tórshavn: Stíðin.
- Ponelis, Fritz (1993) *The Development of Afrikaans*. Frankfurt am Main et al.: Lang.
- Prokosch, Eduard (1939) *A Comparative Germanic Grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America/University of Pennsylvania.
- Raidt, Edith H. (1983) *Einführung in Geschichte und Struktur des Afrikaans*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Ramat, Paolo (1981) *Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.
- Ringe, Don (2017²) *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford: Oxford University Press.
- Seebold, Elmar (1984) *Das System der Personalpronomina in den frühgermanischen Sprachen. Sein Aufbau und seine Herkunft*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- 清水 誠 (1992) 「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法. V. Tams Jörgensen: *Kort språkeliir foon dât mooringer frasch* 訳注」『北海道大学文学部紀要』40-3. 65-162.
- 清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会
- 清水 誠 (2019) 「ドイツ語から見たゲルマン語—名詞の性、格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158号. 37-76.
- 清水 誠 (2020) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (2) —属格と所有表現」『北海道大学文学

- 研究院紀要』160号. 37-96.
- 清水 誠 (2021a) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (3) 一名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162号. 35-101.
- 清水 誠 (2021b) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (4) 一冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163号. 1-22.
- 清水 誠 (2021c) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (5) 一人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164号. 19-41.
- Sjölin, Bo (1969) *Einführung in das Friesische*. Stuttgart: Metzler.
- 寺澤芳雄 (編) (1997) 『英語語源辞典』研究社
- Thráinsson, Höskuldur (2007) *The Syntax of Icelandic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thráinsson, Höskuldur/Petersen, Hjalmar P./Jacobsen, Jógvan í Lon/Hansen, Zakaris Svabo 2004 *Faroese*. Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.
- Tiersma, Pieter Meijes (1999²) *Frisian Reference Grammar*. Ljouwert: Fryske Akademy.
- Tiesema, H. D. (1969²) *Abriss der historischen Laut- und Formenlehre des Deutschen*. Vaassen: Uitgeverij Van Walraven.
- Torp, Arne/Dahl, Berit Helene (1996²) *Språklinjer*. Oslo: Aschehoug.
- Trudgill, Peter (1999²) *The Dialects of England*. Oxford/Malden: Blackwell.
- 宇賀治正朋 (2000) 『現代の英語学シリーズ 第8巻 英語史』開拓社
- Vekeman, Herman/Ecke, Andreas (1992) *Geschichte der niederländischen Sprache*. Bern/Berlin/Frankfurt a.M./New York/Paris/Wien: Lang.
- Walker, Alastair/Sjölin, Bo (1986) *Frasch for önjfångere. Programmierter Lehrgang des Mooringer Friesisch*. Kiel: Nordfriesische Wörterbuchstelle der Christian-Albrechts-Universität Kiel.
- Wilts, Ommo (1993) *Friesische Formenlehre in Tabellen I. Wiedingharde*. Husum: Matthiesen.
- Wilts, Ommo (1995a) *Friesische Formenlehre in Tabellen II. Föhr*. Husum: Matthiesen.
- Wilts, Ommo (1995b) *Friesische Formenlehre in Tabellen III. Amrum*. Husum: Matthiesen.
- Wilts, Ommo (1995c) *Friesische Formenlehre in Tabellen IV. Sylt*. Husum: Matthiesen.
- Wilts, Ommo (1995e) *Friesische Formenlehre in Tabellen VI. Nordergoesharde*. Husum: Matthiesen.
- Wilts, Ommo (1997) *Friesische Formenlehre in Tabellen VII. Halligen*. Husum: Matthiesen.

比較宗教教典研究をどう立ち上げるかに関する覚書

戸 田 聡

1. はじめに	61
2. 「教典」「聖典」「正典」	64
3. 教典を持たない宗教	66
4. 教典の成立	70
5. 教典の文学ジャンル	74
6. 正典の排他的な権威の源泉	78
7. むすびに代えて	80

1. はじめに

昨年度以来（正確には、交付が決まった昨年 2020 年の 7 月末以来）、筆者は幾人かの研究者の協力を得て「比較宗教教典研究」の立ち上げに関する研究プロジェクトを、日本学術振興会からの助成「挑戦的研究（開拓）」を得て進めつつある¹。助成を得られたのは単に宝くじに当たったようなもので、それ自体が本研究プロジェクトの意義や成功を保証しているわけでは全くないが、ともあれ目指しているのは、読んで字のごとく、比較の見地を持ちつ

¹ 「諸宗教における正典化をテーマとする、比較宗教教典研究の立ち上げのための総合的研究」、日本学術振興会 科学研究費助成事業 挑戦的研究（開拓）（課題番号：20K20499）。研究代表者及び研究分担者は以下のとおり。研究代表者：戸田聡（研究統括及びキリスト教（旧新約聖書）担当）、研究分担者：宮嶋俊一（宗教学及びその他諸宗教担当）、林寺正俊（仏教担当。以上は北海道大学所属の研究者）、勝又悦子（ユダヤ教担当。同志社大学）。

つ宗教教典の研究を営むことである。

と書くと、まず一方で、比較の見地を持ちつつ宗教教典を研究するのは当然のことではないか、そもそも宗教学という学問自体が比較を主眼とした学問ではなかったか、といった全くもったもなしな反応があるかもしれない。これに対しては、全くそのとおりと言いたい気もするのだが、しかしながら、宗教自体はいざ知らず、こと宗教「教典」に関しては、「教典」研究自体に比較の視点が採り入れられること、より具体的に言えば、或る特定の宗教教典の研究の際に他の宗教教典の研究が参照されるといったことは、実際問題としてふつうあまり見られないように思われる²。

² 因みに、筆者が知りえた限りでは、比較宗教教典研究に関する先行研究として言及に値する文献（少なくとも、邦語文献）としては唯一、北海道大学名誉教授であり北海道大学文学部教員だったという意味で筆者から見て大先達に当たる土屋博氏が、著書『教典になった宗教』（北海道大学図書刊行会、2002年）の中で展開した議論、が挙げられるように思われる（特に同書55頁の次の箇所。「教典は、読者をとりかこむ社会的場の中に位置づけられる。そこでは、教典のどのような受け取り方も、それなりの意味をもつのであり、従来関心の外におかれていた事柄にも光があてられる。そして、教典のさまざまな機能が明らかになってくるにつれて、その機能を媒介として、異なった宗教の教典を互に関係づけていくことも可能になるであろう」）。

但し、同書に関してあえて一言すると、比較宗教教典研究にかかわってくる部分（具体的には第一部）以外の部分（具体的には第二部及び第三部であり、特に第二部）に関しては、先行研究（具体的には特に、新約正典形成に関する研究）が或る程度でも網羅的に踏まえているとは到底言いがたく、少なくともそれらの部分に関する叙述は、学問的研究と言うよりはむしろ、学術風エッセイとの観が強いことが否みがたい。とは言うものの、今なお未開拓の分野である比較宗教教典研究にかかわってくる第一部に関しては、叙述が体系的たりえないのは不可避であり、さらに言えば、当然ながら言うべきだろうが、宗教学関連の研究に対する土屋氏の目配りは筆者のそれより遙かに優れており、それやこれやを踏まえるなら、第一部に関しては「先行研究」として扱うのが妥当だと考える。よって、本稿の以下の叙述の中では必要に応じて同書の議論を参照することとする。

しかしさらに、その第一部についても予めここで一言しておく、筆者が理解しえた限りでは、教典論に対する土屋氏の関心は、聖書学（特に氏の専門との関係で、新約聖書学）をより開かれたものにする（特に宗教学に対して開かれた、という意味）という目的意識に発しているようであり（この点は、文中で繰り返し出てくる「宗教学的教典論」という言い方からも明らかである）、筆者（戸田）の問題意識・研究関心とは明確に

そして他方で、今度はその宗教教典の研究（言うまでもなく、個別宗教の教典研究、という意味）の側から、教典のありようは個々の宗教によって様々であり、それら異なる背景・事情を有する教典の研究に比較の見地を採り入れて何の意味があるのか（要するに、何の意味もないのではないか）、といった反応があるかもしれない。あとで多少とも触れるところから明らかなように、確かに各宗教における教典の形成過程は、およそ容易に一般化を許すものではないようであり、この反応も全くもつともなように思えてくる。

しかしこの後者の反応に対しては、とはいえ何かしら比較は可能だろう、と反論したい気がする。実際例えば、およそそれが教典である限りで、何らかの時点で教典の範囲を限定する（言い換えれば、言わば「正典化」*canonization*）という動きは、教典を有するいかなる宗教の場合にも見受けられると言ってよいのではなかろうか。であれば、そのような共通の現象を説明・叙述するために共通の用語（例えば、「正典化」の過程の終焉という意味で「正典確定」——英語でなら *closure/closing of the canon* とでもなろうか——というような言い方）を用いることは、可能であるべきであり、さらに言えば、望ましくもあるとすら言えないだろうか³。

などと書いてきたが、現実を言えば、比較宗教教典研究は果たして立ち上がったかどうかはまだ定かでない段階にあり、どうやれば立ち上げができるか、またそもそもどういう状況に至れば立ち上げが成ったと言えるのか、を模索している段階にあるというのが正直なところである。以下多少その内情

異なっている。筆者自身は、土屋氏と異なりそもそも新約聖書学に対して強い思い入れを持っておらず、むしろ、新約聖書の研究は新約聖書学という形ではなく古代キリスト教史の研究の一環として行なわれるべきだという、言うなれば（「経済学批判」ならぬ）「新約学批判」的な立場に立っている。

³ ここで問題としている正典化の過程との関連では他に、「非正典化」或いは「正典からの排除」（英語で言えば *decanonization*）といった用語の使用も一部の研究には見られる。一例は A. VAN DER KOOIJ & K. VAN DER TOORN (eds.), *Canonization and Decanonization. Papers Presented to the International Conference of the Leiden Institute for the Study of Religions (LISOR), held at Leiden 9-10 January 1997* (Studies in the History of Religion (Numen Book Series), 82), Leiden/Boston/Köln: Brill, 1998。

を披瀝或いはむしろ露呈し、思考の整理を試みることによって、今後のさらなる展開を期するための踏み台にできればと思っている。

2. 「教典」「聖典」「正典」

話を進める前にまず用語の整理が不可欠な前梯を成す。と言って、続けてすっきりした定義・区別を語れば話は簡単なのだろうが、実際にはそうではない。というのは、とりあえず「正典」（英語では canon）という言葉は、上述のように何らか範囲が限定されているという意味で、一応区別しつつ説明することはできそうだが、これに対して「教典」「聖典」という語については、果たしてどちらを使ったほうが良いかは、少なくとも一見したところでは自明でないからである⁴。

とは言いつつも、本研究プロジェクトでは「比較宗教教典研究」という言い方を使うことによって、「聖典」でなく「教典」という用語をおもに用いるという態度表明を既に行なってしまうている。これはなぜかと言えば、1つには、「聖典」という単語には「聖なる」という形容辞が含まれているが⁵、この形容辞は分離して使いたい場合も今後出てくるのではないかと、という予想があるからであり、もう1つには、「教典」という単語は英語の scripture にほぼ対応すると考えることができ、用語の一意化が「聖典」に比べて容易なのではないかと思われるからである⁶。

⁴ 「教典」と同じ読みになる別の語として「きょうてん経典」もあるが、少なくとも筆者の語感では「経典」は仏教的な色彩がやや強いようであり、それよりは、どちらかと言えば宗教中立的に聞こえる（或いはむしろ、読める）「教典」のほうが良いのではないかと考えた。但し、国語辞典を見ると「経典」には「けいてん」との読みもあるようであり、筆者が参照した『広辞苑』第5版では、「けいてん」には「きょうてん経典」とは微妙に異なる語釈が施されている。用字・用語選択をめぐる話はなかなか容易には片づかないようではある。さらに言えば、「けいてん」という読みで「啓典」という漢字表記（無論、「啓示の書」という意味だろう）が用いられる場合もあるようである。

⁵ 因みに、「聖典」を英語で表すなら sacred book ぐらいだろうが、場合によっては sacred text あたりがそれに当たる可能性もある。

「教典」という語についても一言付け加えると、「教典」という言い方には、当該宗教の「教義」に関する書物だというニュアンスがどうしても付きまといがちだと思われる。実際、或る宗教の「教典」は当の宗教が持つ「教え」に対して何らかの根拠を提供しているからこそ「教典」なのだ、と言うことは全く可能であり、だからこそ当該書籍が「教典」になるわけである。しかしながら、実際には「教典」は、当の宗教の「教え」或いは「教義」⁷の根拠であるだけでなく、そういう言い方からイメージされるよりも遙かに広い内容を包含しているのがふつうである。実際、ここで言う意味での「比較宗教教典研究」において理解する（つまり、より具体的には筆者自身が理解する）「教典」という言葉は、字づらどおり当該宗教の「典」^{ふみ}（つまり、書かれたもの）⁸であって、それ以上でもそれ以下でもない⁹。この点はともし

⁶ 但し実際には、例えば欧語文献における scripture の使い方自体必ずしも一様でなく（一例を挙げれば、同一宗教の教典を論じる場合に scripture を単数形でのみ用いるか、それとも複数形 scriptures をも用いるかは、論者によって様々なようである）、本研究プロジェクトが将来欧語での発信を目指す際には、scripture の様々な使われ方のうちのどれが本研究で言うところの「教典」に最も適合的・整合的か、といったあたりにも注意する必要があるようである。

⁷ なお、ここでこれ以上掘り下げるべき論点ではないが、筆者としては宗教の「教え」（英語なら teaching か）と「教義」（英語なら doctrine 或いは dogma か）とは区別して考えたい。つまり、日本語の語感から窺われるように、「教え」のほうが漠然としかつ含む範囲が広く、他方「教義」は、何らかの程度体系化が図られた教え、或いは教えの総体、を意味する、といった形で両者は区別できるのではないかと筆者自身は考えている。

⁸ この「書かれたもの」というニュアンスは英語の scripture という語の中にも含まれている（script- はラテン語の動詞 scribo 「書く」から来る）。

⁹ このような言い方をした場合に筆者は、「宗教」の本質は何なのかといった、宗教学が好んで取り扱いかつ／或いは批判するたぐいの問題の中に足を踏み入れてしまっていることになるのかもしれない。が、無論それは筆者の本意ではなく（因みに言えば、筆者自身は、自分は宗教学者・宗教学研究者だとの自覚は全く持っていない）、むしろ筆者は、単に日本語の言い方として、宗教らしきものをなべて「～教」と呼ぶという、或る意味の都合良さ（日本人の或る種の秩序意識の反映であるのかもしれない都合良さ、ともいえるか）に便乗する形でこのように述べているにすぎない。全く別分野の類例を挙げるなら、文法論の中で品詞を扱う場合、日本語では各品詞のことを「～詞」と称し、呼称の統一が図られているが、これは決して世界共通の呼称方法ではなく、例えば欧語では各品詞の呼び名は、adjective, adverb, noun, preposition, verb 等々、全くばらばらであ

ると誤解されがちな点だと思われるので、ここで予め明確にしておきたい¹⁰。

但し、ここまで述べた上で、話を混ぜ返すようなことを記すと、ラビ的ユダヤ教（後1世紀の第1次ユダヤ戦争以降、そして一層決定的には後2世紀の第2次ユダヤ戦争以降、ユダヤ教の主流派となるに至った形態をここでは念頭に置いている）においては、いわゆる旧約聖書（より正確にはタナハ）とタルムードとが聖なる書物を成していると言ってよいが、しかしながらこれらのうち「聖典」という言葉が適用可能なのはタナハに対してのみで、タルムード（基本的にタナハの解釈の集成だと言ってよいだろう）は「聖典」とは呼べず¹¹、他方「教典」（本稿で言う意味での）という言葉は適用可能である、といった状況があるようである¹²。そうだとすると、「聖典」と「教典」は入れ替え可能な言葉だとしてきた上の議論は、少なくともラビ的ユダヤ教については当てはまらないことになってしまう。この点をどう考えたらよいか（換言すれば、「聖典」と「教典」を区別しつつ、前者すなわち「聖典」から「聖なる」という形容辞を抜いた別の語を見つけるにはどうしたらよいか）は、少なくとも筆者にとってはなお未解決の問題を成している。

3. 教典を持たない宗教

ところで、比較宗教教典研究において対象となるのが、何らかの意味で教

り、それら呼び名を見ただけでこれが「品詞」の一種なのだということが視覚的にわかる形にはなっていない。この統一性或いは（上述の意味での）「都合良さ」は、少なくとも日本語を用いた研究・分析の際には活用されてよい、というのが筆者の考えである。

¹⁰ 無論、宗教に関する書物であれば日本語では「宗教書」という言い方も可能だが、しかし「宗教書」は、いわゆる教典以外に様々な建徳的な書物をも含みうる言葉であり、大幅な誤解を招きかねない。したがって、「教典」という語で満足するのがこの場合妥当だろうと思われる。

¹¹ タルムードを聖典とは呼べないというこの感覚の背後には、（タナハの言葉と異なり）タルムードの言葉自体が仔細な釈義の対象になるわけではない、ということがあるのだろう。

¹² この点に関する具体的な典拠はないが、これまでに実施してきた比較宗教教典研究の研究会の際に、ユダヤ教を担当する勝又氏を交えた議論の中でこの論点は浮上してきた。

典と称しうるもの（しかも、上述したところに従えば、書かれたものとしての教典）を有する宗教に限られることは自明だが、議論を限定する前に、教典を持たない宗教についてもここで一言しておきたい。というのは、1つには、「教典」概念を「書かれたもの」に限らずに、口伝にまで広げて考えようとする学者が皆無ではないからである¹³。また、民族宗教とでも呼べる宗教については、当該宗教が教典を有しないと理解できる場合が少なくなく、この際その点にも言及しておくのは無意味でないと思われるからである。

具体的に言えば、例えばまさに日本の民族宗教と一応呼べなくはない「神道」には、教典がないと言ってよいだろう¹⁴。こう言った場合、例えば古事記は神道との関連でどう位置づけられうるか、が問題となるかもしれないが、これについては、少なくとも管見の限りでは、神道の何らかの行事の際に古事記が言わば典礼書として用いられているわけでもなければ、古事記の中の何らかの言葉（定型句）が神道の儀式において用いられているわけでもないようである、といったことを考えれば、（江戸時代の国学を神道との関連でどう考えるかといった論点はなおあるのかもしれないが）古事記を教典扱いするのは妥当でないと言ってよいだろう¹⁵。

そして、例えばいわゆるゾロアスター教についても、ゾロアスター教は教典を持たなかったということが言えるのかもしれない。無論、筆者はゾロアスター教研究に対しては全くの門外漢だが、世上ゾロアスター教の教典と言われる「アヴェスタ」は、それによって言葉が伝えられているとされる「教祖」ザラスシュトラの生きた時代（紀元前 1700～1000 年？¹⁶）から、文字化

¹³ そのような研究の一例は W.C. SMITH, *What is Scripture? A Comparative Approach*, Minneapolis, MN: Fortress Press, 1993.

¹⁴ 私事になるが、筆者は、何年も前に熊野三山の一社である熊野本宮大社を訪れた際に、こちらから尋ねもしないのに神主の 1 人が寄ってきて、「神道には教典（それとも「経典」だったか？）がありませんから」と言われたことがある。

¹⁵ なお、土屋『教典になった宗教』、6 頁には、神道が教典を有するかのごとき記述が見られるが（念頭に置かれているのはたぶん『古事記』だろう）、例えば『古事記』を神道の教典とする根拠は示されていない。

¹⁶ 青木健『新ゾロアスター教史』、刀水書房、2019 年、17-18 頁。

が行なわれたとされるササン朝の時代（後6世紀?）に至るまで、少なくとも「書かれたもの」としては存在しなかった。当該宗教の「成立」から、くだんの書物が成立するまでに千年以上の期間が経過している場合に、果たして当該書物を教典扱いするのが妥当かどうかは、自明でない、と言うよりむしろ疑わしい、と筆者には思われる。

付言すると、このような関連でゾロアスター教に言及したこと自体に意味がないわけではなく、つまりどうもゾロアスター教は、筆者の理解が大幅に間違っていないければ、一箇の独立した宗教と言うよりむしろ、古代のイラン宗教（これ自体は民族宗教と称することが可能だろう）の言わばザラスシュトラ版とでもいうべきものと解釈することが可能らしいのである¹⁷。

ゾロアスター教について以上述べたことは、インド宗教（いわゆるヒンドゥー教。これもまた、民族宗教と称することが可能だろう）と古代インドの文学（いわゆるヴェーダ他）にもかかわってくるかもしれない。無論、筆者はインド宗教の研究に対しても全くの門外漢だが、つまり例えばヴェーダ（これも文字化までには数百年の年数を要したとされる）が果たしてインド宗教の「教典」（本研究で言う意味での）だと言えるかどうかは、少なくとも自明でないように筆者には思える。

以上を本稿のこの段階で論じてきたことは、もちろん或る意図に基づいている。つまり、ユダヤ教或いは（民族宗教としての性格をより明確化する呼称を使うとして）イスラエル宗教の場合、いわゆる旧約聖書（より正確には「タナハ」という書物（正確には、まずはタナハを構成する個々の文書……そしてそれら諸文書をまとめて称する際に、我々は「教典」という語を使ってよいと思われる）が、当該宗教の「成立」からさほど時をおかずに成立し

¹⁷ 2021年7月2日実施の比較宗教教典研究の研究会における青木健氏による発題に拠る。より正確には、氏の発題の該当部分を筆者（戸田）はこう理解して、青木氏に確認の問いをしたところ、特段異論は聞かれなかった、ということになる。管見の限りでは、氏の掲げ『新ゾロアスター教史』ではこのような見解は示されていないようだが、とはいえ、古代のイラン宗教（様々存在したかもしれない）が歴史が下るにつれてゾロアスター教へと収斂していったと理解することは、無論不可能でないだろう。

たと一応言ってよいと思われるが¹⁸、このケース、すなわち一箇の民族宗教が、「成立」からさほど時をおかずに、書かれたものとしての教典を有したというケースは、様々な宗教との比較の中で考えるに、実は例外的だと言えるのではないか、そしてそれ自体が探究されるべき1つのテーマを成すのではないか。旧約聖書という書物が宗教研究者（特に筆者のようなキリスト教研究者）にとってあまりにもなじみの存在であるだけに逆に気づきにくい、ユダヤ教のこの例外性という点は、比較宗教教典研究を進めるに当たって留意しておくべき点だろうと思われる。そしてさらに、ユダヤ教のこのような文書生産的な性格は、ユダヤ教を取り巻く社会が文字を有する社会、すなわち識字社会（英語で言えば literate society となろうか）だったことと、当然

¹⁸ このあたりはもちろん、正確に言おうとすれば話は複雑化する。すなわちまず、このユダヤ教或いはイスラエル宗教がいつごろ「成立」したかという点については、例えばイスラエル宗教という呼び名（この場合念頭に置かれるのはもちろん、一箇の民族宗教ということになる）で当の宗教を呼ぶのであれば、その「成立」は紀元前一千年紀初頭、或いはさらに前二千年紀末にまで遡るかもしれない。これに対してユダヤ教（もちろんこれもまた民族宗教であることに変わりはないが）という呼称で当の宗教を呼ぶのであれば、最近の傾向としてユダヤ教の成立はいわゆるバビロン捕囚と結びつけられることが多いので、その「成立」は紀元前六世紀或いはそれ以降ということになる。そして次に、のちに旧約聖書という教典を成すこととなる個々の文書、つまり教典文書（この言い方については本文すぐあとを参照）の成立時期、そしてそれら教典文書が集まって教典というまとまりを成すに至った時期がそれぞれいつごろだったかについては、もとよりこの註での詳論は全く不可能だが、とはいえ、各教典文書は紀元前1千年紀の数百年の期間（その終期は、ダニエル書のうち的一部分など、下って紀元前2世紀に書かれた一部の文書を除けば、アケメネス朝ペルシアによる支配の時代だと、一応言っておいてよいだろう）に各々成立し、そしてそれらが或る程度まとめられるに至ったのはたぶん紀元前4世紀から前2世紀にかけてであり（いわゆる「旧約聖書統編」の一書であるシラ書の序言の「律法の書」「預言者の書」「先祖たちのその他の書物」という表現を想起！）、そして最終的に正典確定に至ったのは紀元後2世紀或いはそれ以降だと考えられる。と、こう書いてみると、ユダヤ教或いはイスラエル宗教の場合でも、当該宗教の成立から書かれたものとしての教典（そしてさらには正典）の成立までには数百年の時間が流れていることになり、「さほど時をおかずに成立」云々と本文で述べたのはやや（相当）不正確と言うべきなのかもしれない。但しそうであっても、他の民族宗教との比較で、ユダヤ教或いはイスラエル宗教が教典文書のたぐいを早くから多数書いた（書きまくった、とまで言わないとしても）ということは、言いえて大過ないものと思われる。

ながら不可分である、と付け加えておいてよいだろう。

4. 教典の成立

次に話を進めて、そもそも教典が、或いは（教典という語が文書群の集成全体を指して用いられる場合には）教典を構成する個々の文書（ここでは以下、言わば時期顛倒的でやや問題のある言い方ではあるが、教典文書と称することにする）が、どういう理由で成立したかについて少し考えてみたい。

キリスト教を例に考えてみると、教典、つまり特に新約聖書¹⁹は、イエス・キリストについて証言する文書の集成であると言える。ここで、いわゆるパウロ書簡が新約聖書の相当部分を占めていること（とはいえもちろん、パウロ書簡の著者はイエス・キリストに関する証人という立場で自らものを書いているつもりだったに相違ないが）、そして伝統的にパウロ書簡の著者とされる使徒パウロという存在がキリスト教の成立において占める重要性、といった特殊キリスト教的な事情を措くとすると、「イエス・キリストについて

¹⁹ キリスト教における狭義の教典は新約聖書であると言って差し支えなからう。旧約聖書がキリスト教の教典として残ったのは、もちろんキリスト教の最初期にそれが「聖書」として用いられたという歴史的事情にもよっており、また、マタイ伝が伝えるイエス・キリストの言葉などで旧約聖書の意義が否定されていないことにもよっているのだろう（具体的にはマタイ 5：17-18、及び——こちらはイエス・キリストに帰せられている言葉ではないが——Ⅱテモテ 3：15-16）が、しかしながら、マルキオンらの批判にもかかわらず旧約聖書が教典の地位を失わなかった理由としては特に、旧約聖書がキリスト（メシア）に関する預言を含んでおり、その預言がイエス・キリストにおいて成就した——つまり、イエスこそがキリスト（メシア）である——とする聖書理解こそがキリスト教とユダヤ教を隔てる最大の違いである、ということが挙げられるべきだと思われる。そしてこのように考えるならば、旧約聖書は、あくまでキリスト教を準備したもの（にすぎない）と位置づけられることになり、したがって、イエス・キリスト自身について語る新約聖書に比してその意義は小さいと言ってよいのではないだろうか。もちろん、このような考え方に対してはキリスト教の立場自体から批判がありうるだろうが、批判をする者は、聖戦の旗のもとに行なわれた殺戮を是とする旧約聖書の神がどのようにして新約聖書の神と調和しうるかを、一度真剣に考えてみる必要があろう。両者の調和は決して容易でないと筆者は考える。

証言する文書の集成」という部分を一般化することで次のように言うことができるのではないか。すなわち、宗教における教典とは、当の宗教の教祖・創唱者、(誤解を恐れずに言えば)宗教的天才について証言する文書(の集成)²⁰である、と言えるのではないか²¹。

そして、ではなぜ、そのようなものとしての教典が必要なのか、或いは歴史に即して言うなら、当該宗教が成立したとみなしうる時期において必要とされた(存在を求められた)のか。この問いに対しては次のように答えることが可能だろう。すなわち、人間のするあらゆる活動についてと同様、宗教的営為についても、人間の間には個人差(能力の大小という意味での)があり、宗教的天才の言行が、他の人間の真似しうるもので必ずしもないことは自明である。ここにこそ教典或いは教典文書が成立する原初的な理由が存する、と言ってよいのではあるまいか。例えばイエス・キリストの場合、有名な「山上の説教」やその他でイエス・キリストが語った教えは、常人の考えを超えるものと受け止められたのではあるまいか(但しイエス・キリストの場合、言葉だけでなく行ない、特にいわゆる奇跡も、人々がこれを記憶・記録するに至った所以として劣らず重要だったろうと思われるが)。そしてキ

²⁰ 近い将来においては、文書という形以外での教典を有する宗教の登場も考えられえよう。が、とりあえずここでは、文書(すなわち、言表の書き記されたものとしての記録)ということで議論を進めることにする。

²¹ この言い方では、例えばイスラム教の教典クルアーンをカバーできない、という批判があるかもしれない。しかし、クルアーンを文字どおり(ムハンマドを通じて語られたところの)神の言葉それ自体 *ipsissima verba Dei* と解するイスラム教の立場によるのならともかくも、少なくとも第三者的に見れば、クルアーンで語られている「神の言葉」とは、ムハンマドによって理解された(或いは少なくとも、仮にムハンマド自身の理解が追いついていなかったとしても、ムハンマドによって表出された)限りでの神(より正確には神観念)の表明であると解釈できる。そして当然ながら、イスラム教の立場によれば、ムハンマドの口を通して語られた神の言葉は歴史上一回(つまり、他に類例がないもの)である。つまり、そこでは何らかの宗教的天才(本稿で言う意味での)が作用していることは明白である(ムハンマド自身を宗教的天才と称するのであれ、ムハンマドを突き動かしたものをこそ宗教的天才と称するのであれ)。その意味で、クルアーンもまた「当の宗教の教祖・創唱者、換言すれば、宗教的天才について証言する文書」であると言って差し支えない、と筆者は考える。

リスト教以外に筆者が思いつく限りでは、原始仏教と釈迦の言行（釈迦の場合、言葉と行ないの比重を考えるなら、イエス・キリストの場合より遙かに、言葉の比重が別して大きかったと言ってよいのではあるまいか）、また、儒教と孔子の言行（儒教が宗教と称しうるか否かという問いをいったん措くとして）についても、やはり同様のことが言えるのではないだろうか²²。

しかし、「宗教における教典とは、当の宗教の教祖・創唱者、宗教的天才について証言する文書（の集成）である」というこの規定は、普遍的に妥当するかどうかはなお自明でない、と言わねばならないようである。そう考える所以を具体的に述べると、近世末期から近代初期にかけての動乱期に成立した、日本の代表的な新宗教の1つである天理教には、聖典として「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」の3つがあり（天理教ではこれらを「原典」と呼ぶ）、これら3つは教祖中山みき（1798-1887）、或いは、教祖の「理を受けて神意を取り次いだ²³」「本席」飯降伊蔵（1833-1907）の言葉を集めたもので、本稿で問題にしている「教典」に最も合致すると言ってよい（なお、すぐ後で述べるように、天理教では「教典」という語自体は別の意味で用いられており、混乱を避けるため、この段落及び次の段落では基本的に天理教の用語法に従うこととする）。しかしながら、これら聖典の刊行時期は、「おふでさき」が1928年であり²⁴、「みかぐらうた」は、それ自体は口伝で早くから信徒に伝えられ用いられていたもののようではあるが²⁵、活字化されたのは早くても20世紀になってからのようである²⁶。そして「おさしづ」は、昭和2～6年（1927-1931年）に最初に編集刊行が行なわれている²⁷。

²² イスラム教とムハンマド（或いはクルアーン）の関係については前註21で考察した。

²³ 天理大学附属おやさと研究所編『天理教事典』第三版、天理大学出版部、2018年、118頁「おさしづ」の項。

²⁴ 『天理教事典』第三版、137頁「おふでさき」の項。

²⁵ 教祖が「みかぐらうた」を教え始めたのは慶応2年（1866年）との由（『天理教事典』第三版、894頁「みかぐらうた」の項）。

²⁶ 中山新治郎『御神楽歌述義 全』1906年（筆者未見。書名から推察するに、みかぐらうた本文だけでなく、その解説ないし釈義も示されているのではなかろうか）が最初の活字化のようである（『天理教事典』第三版、894頁「みかぐらうたの研究」の項）。

ところで天理教には、如上述べてきた聖典（すなわち「原典」）のほかに「教典」があり、このうち旧教典（或いは「明治教典」）と位置づけられるものは、明治36年（1903年）に全10章の教典として内務省に提出され、承認を与えられている。この旧教典は、今日の天理教公認の見解によれば「信仰の拠りどころ、ないしは……教義書としては不十分なものであった」とされるが、とはいえ成立後しばらくの間は、天理教においてはこの旧教典を基に教学が行なわれたようである²⁸。そしてここで注目すべきは、この旧教典の刊行時期（1903年をそれとみなして差し支えないだろう）が、上述の聖典のいずれの刊行時期よりもかなり早いことである²⁹。つまり天理教の場合、「原典」が流布するよりも前に「教典」が流布し教学に用いられる、という時期があったのである。これは、本稿が用いている意味での「教典」をめぐる他の諸宗教の状況との違いを感じさせる事態だと言える。

門外漢の立場から言えば、天理教の場合、創唱者たる中山みきが人々の尊崇を集めるに至ったのは、当人が宗教的覚醒（天理教で言うところの「立教」或いは「親神のやしろとなること」。1838年のこと）を経て発するようになった言葉によるよりもむしろ、安産や病気の治癒といった奇跡的行為によるように思われる。そして、如上見てきたところからすると、それら奇跡的行為

²⁷ 『天理教事典』第三版、118頁「おさしづ」の項。

²⁸ 『天理教事典』第三版、296-297頁「教典」の項。そして、その不十分さを改めるべく、第二次大戦後の1949年に教典が新しく編纂され、これが今日『天理教教典』と呼称される書物だとのことである（同297頁）。

²⁹ みかぐらうたについては、確かに人々に伝わった時期は早いかもしれないが、「うた」との性格から言って、本稿が言う意味での「教典」には厳密には当たらないと評するべきかもしれない。いずれにせよ、典札（天理教の用語では「^{らいはい}礼拝」か）の時に用いられるたぐいの文言ではないかと思われる。

なお、天理教がこのように教典を「聖典」（天理教で言う意味での。つまり「原典」）よりも先に成立させるに至った背景事情としては、天理教の教派神道としての独立（「一派独立」。『天理教事典』第三版、47-50頁「一派独立」の項、及び、50-53頁「一派独立請願添付書類」の項を参照）を目的とする運動が推進され、独立実現の一助として、（言うなれば宗教としての体裁が整っていることを示すことを目的の1つとして）教典の整備がすすめられた、といったことがあったようである。

自体は、創唱者にまつわる事柄の言語化（つまり、教典文書形成）の対象と直ちになったわけではないようである³⁰。

かくて、教典或いは教典文書の成立に関して何らか普遍的に妥当する規定を宗教横断的に行なうことは、容易でないと、研究の現段階では言うほかなさそうである。但し、教典或いは教典文書が、（やや曖昧な言い方になってはしまうが）当の宗教の教祖・創唱者に何らか関連する文書として成立した、という程度のことは、やはりなお普遍的に妥当する言い方たりうるのではないだろうか。そして、この程度のことは言っておいたほうが良いと筆者は考える。なぜなら、のちほど正典の権威ということを少し問題にしたいのだが、正典の権威との対比で、正典になる前の教典が既にそれ自体として有する権威というものを考察する必要がある、そしてその結論は次のようにならざるをえない、と思うからである。すなわち、正典になる前の教典がなぜ権威を有するかと言えば、それは、そもそも教典が当の宗教の教祖・創唱者に何らか関連する文書であるということに存するのだ、と。

5. 教典の文学ジャンル

次に「教典の文学ジャンル」とでも呼べる事柄について少し考えてみたい。こういう言い方をする場合、キリスト教研究者が直ちに思い浮かべるのは、いわゆる旧約聖書（タナハ）の3区分、すなわちトーラー、預言者たち、その他諸書、ではないかと思われるが、ここではむしろ仏教の例を引き合いに出したい。すなわち周知のように仏教では「仏教聖典を総称して三蔵または三法蔵」という言葉が用いられており、それは具体的には次の3つ、すなわち「経蔵」つまり「仏陀の教説の要義である経の部類に属するもの」、次いで「律蔵」つまり「仏が制定した教団の生活規則である律の部類に属するもの」、

³⁰ 無論、天理教では「中山みき伝」と呼べる著作は作られているが（1956年刊の『稿本天理教祖伝』のこと。『天理教事典』第三版、339頁『『稿本天理教祖伝』』の項）、それは本稿で言う意味での「教典」と扱われてはいない。

そして「論蔵」つまり「仏陀の教説をさらに発展させて、すぐれた智慧によって組織し体系づけ論議解釈した阿毘達磨^{あびだつま}、つまり論に属するもの」から成っている³¹。

ここで注目すべきは、仏教の場合「律蔵」及び「論蔵」が聖典、本稿の言い方で言えばむしろ教典、に含まれているという点である。というのも、キリスト教との対比で考えると、キリスト教でまず「律蔵」に精確に対応するのは修道院の規則（ベネディクトゥス『戒律』など）であり、或いは現代で言えば（例えば筆者が所属する日本基督教団の言い方で言えば）「教憲教規」だが（但し、すぐ後述するように、「教憲教規」自体は精確に対応しているわけではない）、修道院規則にせよ「教憲教規」にせよキリスト教ではこれらは教典には含まれない。さらに言えば、仏教の律蔵に精確に対応するのがキリスト教の修道院規則である、というところには、2つの宗教の共同体（より正確には、教典成立時の共同体）のあり方の違いが反映されていると言える。つまり一方で仏教においては、共同体の十全な成員の資格を有するのは出家者であり³²、律蔵が聖典の一部を成すのはまさにこの事情と密接に関連している。これに対して他方でキリスト教においては、修道院の構成員である修道者（イコール出家者とも言えよう）は、もちろんキリスト教の成員であり、重要な成員であるとすら言うてよいかもしれないが、とはいえしかし、共同体の主要な担い手であるわけでは必ずしもない（主要な担い手と称されるべきは、例えば司教・司祭などといった聖職者だろう）。さらに言えば、キリスト教が成立し教典文書が生産されていた当時（後1～2世紀をここでは念頭に置いている）、キリスト教の中には修道制は未だ存在しなかった³³。別な

³¹ 引用は総合佛教大辞典編集委員会編『総合佛教大辞典』、法蔵館、2005年、493頁「三蔵」の項から。

³² ここでは仏教の出家者を「共同体の十全な成員」と位置づけた。理由は改めて言うまでもないが、在家もまた、出家者の生存にとって必要不可欠な行為である喜捨の担い手として、共同体の成員と位置づけられる（べきだ）からである。

³³ このあたりに関しては拙著『キリスト教修道制の成立』（創文社、2008年）、131-132頁を参照。

言い方をするなら、キリスト教は成立当初基本的に、社会（或いは「俗世」とも言えようか）の中で生活する小市民から成る宗教だった。こういった事情が、キリスト教において修道院規則が教典に含まれないことに関係しているということは、明白だと言ってよいだろう。

次に論蔵についても、キリスト教で論蔵に相当するのは聖書註解だろうが³⁴、キリスト教においては、古代の場合（例えば現代の場合と異なり）キリスト教著作家＝司教などキリスト教共同体の主要な担い手だったことに照応して、聖書註解はそれなりに重要な文献として受け止められていたと理解できるものの³⁵、しかしもちろん、それら聖書註解は決して教典と扱われてはいない。仏教とキリスト教の間のこのような違いが何に起因するのか、仏教の論蔵について全く不案内な筆者には大したことは言えそうにないが、とはいえ1つあるとすれば、仏教の場合、言うなれば「註解」（キリスト教的な用語法をあえて適用するとして）の対象となった「仏陀の教説」は、或る程度抽象的な形で受け止められていたのではないか、そしてそれゆえにその「発展・組織化・体系化・解釈」もまた「仏陀の教説」に準じないしはさらに比肩されると受け止められたのではないか。そしてこれに対してキリスト教の場合、聖書註解は基本的には具体的な文言の解釈であり、それら文言の具体性（或いは場合によっては、即物性、と言えるケースもあるだろう）のゆえに、聖書の文言を抽象的な教説と受け止めることが困難だったのではないか（抽象的な教説だといった受け止めが可能であれば、そこから「発展・組織化・体系化・解釈」もありえたのかもしれないが）³⁶。予想も込めて、一応

³⁴ なお、ラビ的ユダヤ教におけるタルムードは仏教における論蔵に相当する、或いはかなり精確に対応する、と言えるかもしれない。タルムードは「聖典」ではないが「教典」とは位置づけられる、という見方を上で記したが、そのことを考え合わせると極めて興味ぶかい（ここではこれ以上議論を深めることはできないが）。

³⁵ こう考えてよい根拠の1つは、いわゆる catena（聖書註解抜粋集）の存在である。

³⁶ もちろん、聖書の解釈手法の中にはいわゆる^{アレゴリカル}寓意的な解釈も存在し、そのような解釈手法が用いられた場合には、具体的・即物的な文言に対して抽象度の高い解釈が往々施されているが、しかしながら、筆者の理解する限りでは寓意的解釈は、聖書解釈の正しい手法として確固たる地位をキリスト教の中で占めるには至っていない。

この程度のことは言っておきたい。

そしてここで、教典の担い手を成す当該宗教の共同体についても一言しておく、仏教のように「論藏」という相当程度学知的な内容（を成すと思われるもの——筆者自身は内容に不案内なのでこの程度のことしか言えないが——）が教典の一部を成すということは、当該宗教共同体の成員の知的水準が相当に高かった（要するに、学者のたぐいが共同体内に少なからず存在した）ことの反映であると言ってよいように思われる。これに対してキリスト教の場合、かなり早い時期から教典文書（私見によれば、キリスト教の最古の教典文書を成すのはマタイによる福音書である³⁷⁾を、しかもギリシア語で、産み出したことから見ても、やはり原始キリスト教共同体の成員の知的水準は決して低くなかったであろうことが推測されるが、とはいえしかしキリスト教は、後2世紀に始まるいわゆる「キリスト教のギリシア化」³⁸⁾の過程が進展するまでは、キリスト教を取り巻く当時の社会（一応、＝ローマ帝国の社会、と言ってよいだろう）の知識人（ローマ帝国の社会の知識人は、とりわけ古代ギリシア文化を学んだ人々だったと考えてよい）からはまともに相手にされていなかったと見てよい。さらに言えば、これまで引き合いに出した宗教の中で例えば天理教の場合、^{おやさま}教祖の宗教的覚醒以降も相当の期間、当時の宗教共同体のおもな成員が庶民であってその知的水準が必ずしも高くなかったことが窺われ、このことが、上述したような「聖典」「教典」（両者とも天理教で言う意味での）の成立時期や成立の仕方にも影を落としているように思われる。また、イスラム教の場合には、いずれかの時点で当の宗教共同体が政治的共同体としての性格を帯びるに至っており、そのことが教典クルアーン（特に、後期に成立したとされる諸章）の内容自体にも影を落としているように思われる。以上を要するに、教典の成立及びその成立の言わば「あり

³⁷⁾ この点については拙著『古代キリスト教研究論集』（北海道大学出版会、2021年）第1部第1章「共観福音書問題のための覚書」を参照。

³⁸⁾ 「キリスト教のギリシア化」とは端的にはキリスト教の学知化を意味すると言ってよい。伊藤邦武・山内史朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史2 古代Ⅱ 世界哲学の成立と展開』（ちくま新書、2020年）所収の拙稿「第3章 キリスト教の成立」72頁を参照。

方」に対しては、当然ながら（と言うべきだろうが）、教典成立当時の、さらにはまた当該宗教自体の成立当時の、当の宗教共同体のあり方が、影を落としている、という点が指摘されるべきだろう。

6. 正典の排他的な権威の源泉

次に、既に上で用語として使ってきた言葉、すなわち「正典化」（の過程）、そしてその結果としての「正典確定」³⁹、についても少し考えてみたい。まず、これまで「正典」についてその意味を既知として論じてきたが、改めて辞典の語釈を見てみると、次のようにある。（なお、言うまでもなく、本稿では「正典」を宗教横断的に使用可能な用語として（或いはそういう用語とするべく）用いているが、辞典で説明される「正典」という語は基本的にキリスト教用語として扱われている。）

広辞苑第5版「正典 教会・教団に公認され、信仰の基準となる文書。」
The Oxford Dictionary of the Christian Church (3. ed. revised, Oxford: Oxford University Press, 2005) 「canon of Scripture The term, used also in a larger sense for a list or catalogue, gradually acquired a technical meaning for the Books which were officially received as containing the rule of the Christian faith.」

この2つの語釈から抽出できる共通の要素は「公認」と「信仰の基準」であり、これを裏返して眺めるなら、正典確定へと向かう背後には、信仰の基準が必要とされるような事態（キリスト教史に即するなら教義論争がこれに

³⁹ 仏教で使われる「結集」（けつじゅう、或いは、けちじゅう）という言葉は内容的に「正典確定」に近いのではないと思うが、筆者自身は仏教には全くの門外漢なので、断定は控えることにする。もちろん、仏教の結集の場合には、辞典の説明によれば「仏陀の滅後その教説の散逸を防ぎ、正しい教説を保持するために、仏弟子が集まっておのおのが記憶している法や律を誦しあつて、正しい仏説を確定するための編集会議を行った。これを結集という」とあり（『総合佛教大辞典』、327頁「結集」の項）、「記憶している法や律を誦し合う」のが結集だということなので、キリスト教の正典確定の場合のように書かれた文書を言わば並べて比較するのとは状況が相当異なる。

当たらだろう)が存在し、事態の収束のためには何らか「公的」な決定が必要だった、ということになる。キリスト教史に基づく語釈(定義と言ってもよい)だから、キリスト教史の事態にぴったり当てはまるのは当然だが、ともあれ、以上を踏まえて、必ずしもキリスト教の場合に限られない形で「正典」という語の意味を考えてみると、次のように整理することができよう。すなわち、

- ①当該宗教の教典文書が個々別々に成立・流布し、それらが何らかのきっかけでまとまって伝承されるようになる。まとまって伝承されるようになったこの文書群が、教典という語で一括できるものを成し、そしてこの段階では、何が教典に属し何が教典に属さないかということ、言い換えれば教典の輪郭或いは外延は、必ずしも完全に明確というわけではない。
- ②何らかのきっかけで当該宗教において信仰基準の明確化が必要とされるようになり、何が教典に属し何が教典に属さないかということが議論的となっていく。この議論の過程がすなわち正典化 canonization (或いは正典形成)の過程である。
- ③正典化の過程が煮詰まってくると、正典を確定させようとする動きが出てくる。正典というものが、その中に含まれる教典文書に言わば排他的な権威を付与し、その中から排除される教典文書(いわゆる外典^{がいてん} apocrypha 或いは外典文書)に対しては権威を認めない、という含意を有する以上、正典確定は何らか公的な仕方での認証(つまり公認)を必要とし、したがって具体的には、当該宗教におけるハイレベルの会議その他の決定という形で正典確定が行なわれる。
- ④このようにして輪郭或いは外延が明確に規定された教典が、正典と称されるものとなる。

さて、以上のように考えてくると、教典と正典の関係について例えば次のようなことが言えるのではないか。すなわち教典、或いは教典を成す個々の文書たる教典文書は、もちろんそれが上述のように(内容的に、と言ってよ

いだろう) 当の宗教の教祖・創唱者に何らかに関連する文書であるがゆえに、そしてさらに、それ自体が何らか教典たらしとする指向性のゆえに⁴⁰、教典或いは教典文書であるのであり、そして正典が確定していない間は、教典或いは教典文書の中には、のちに正典或いは正典文書とされるものもあれば、のちに外典或いは外典文書といった形で正典から排除されるものもある、と。そして、何らかのきっかけで正典化の過程が始まり(この過程の中では当然議論が惹起されることになる)、それが正典確定において極まる(その際には上述のように何らか公的な決定が行なわれる)と、それ以降は、正典或いは正典文書とそれ以外(つまり外典或いは外典文書)とは、当該宗教の立場からは明確に峻別されるようになる、と。そして、教典或いは教典文書として元来それ自体に何らかそなわっている権威は、それが正典或いは正典文書として位置づけられることによって排他的な権威へと高められる(或いは言い方を変えるなら、教典としての権威に正典としての権威が付け加わる、とも言えるだろうか)、と。

但し、排他的権威という表現を上で何度か使ったが、そのような排他性がどれほど強いかは、宗教によって様々でありえよう(筆者が日ごろ観察しているキリスト教の場合には、排他性は相当強いと言えるだろうが)。このあたりは、もっと色々な宗教の事例に即して学び、必要に応じて修正する必要があるそうである。と言うよりもそもそも、正典と外典との区別(の必要性)などといった事態に立ち至った宗教が果たして歴史上キリスト教(より正確には古代のキリスト教)以外にどれほど存在したかは、甚だ疑問だと言うべきなのかもしれない。

⁴⁰ ここであえて「指向性」という要素を前面に押し出しているのは、上註30で記したように、例えば天理教では教祖の伝記(『稿本天理教教祖伝』)は教典(本稿で言う意味での)と扱われていない、というようなケースが存在するからである。

7. むすびに代えて

以上、比較宗教教典研究に関してこれまでに何度か開催してきた研究会で出た話題などを想起しつつ順不同で書き連ねてきたが、内容が甚だとっちらかっている感は否めない。見られるように、論点の整理が行なえる段階にはまだまだ到達していないが、今後さらに学びを進めて、この研究プロジェクトが目指しているような、「宗教横断的な研究アプローチにも何ほどか意味はある」という段階或いは境地を、明確に肯定できるようになりたいものだと思う。

Creating Infidelity and Jealousy from Nothing: Iago's Rhetoric in *Othello*, 3.3.29–261

Yayoi MIYASHITA

1. Introduction

Iago's intelligence may be best demonstrated in his ability to capture the characteristics of the surrounding people, to manage them to act as his wishes, and to arrange the course of events totally for his own purposes. His seduction of Othello in Act 3 Scene 3, however, shows his capability with no less ruling power. After he has seduced Othello, the general shows a different personality, losing all his dignity and steadfast love for Desdemona. Iago's insinuating passage is composed of just 232 lines altogether (from the time when Iago and Othello appear on stage where Cassio asking for help from Desdemona, to the point when Othello leaves Iago), and it is performed within approximately ten minutes. It shows Iago's incredible capability to control others' minds with his words. The aim of this essay, therefore, is 1) to analyse Iago's facility to delude Othello's judgement with mere words, and, by doing so, to explain his fiendish, but also efficient, nature from the perspective of his skilful command of language; and 2) to show how the audience appreciates Iago's malignant tactics by being given an advantageous viewpoint.

J. E. Tiles insists in "Logic and Rhetoric: An Introduction to Seductive Argument" that a "successful seducer need not lie: it may be sufficient to control selectively the seduced's attention in such a way that the victim

10.14943/bfhhs.165.183

connects the truth to a desired pattern,” and he gives Iago’s seduction of Othello as an example.¹ Iago selects the truth for his end and lets “his victim draw the desired inference.”² Tiles’ view is very suggestive, capturing an important facet of Iago’s way of doing things: Iago never speaks of Desdemona’s unchastity explicitly, and he always makes Othello guess himself by giving clues. But if we scrutinise Iago’s concrete use of language, we will see that his tactics are much more complex and cunning than Tiles suggests.

2. Dramatic Device by Which Each Character’s Amount of Knowledge is Regulated and the Audience’s Sympathy is Controlled

On an apparent level, Shakespearean drama is composed merely of the characters’ speeches. However, there is embedded in the text the dramatic device by which each character’s amount of knowledge is regulated and the audience’s sympathy is controlled.

There are three perspectives in the seduction scene, Othello’s, Iago’s, and the audience’s. Othello is convinced of Iago’s honesty and believes that his suggestion is totally for his good. On the other hand, Iago shows his true nature to the audience in his soliloquy:

IAGO Divinity of hell!
 When devils will the blackest sins put on
 They do suggest at first with heavenly shows
 As I do now. (2.3.345-48)³

He believes in the “Divinity of hell,” compares himself to “devils,” and what he intends are “the blackest sins.” To pursue his design, he is to behave as if he were an agent of heaven. He then reveals his detailed scheme, supported by his precise analysis of the characteristics of the involved people:

IAGO For whiles this honest fool

Plies Desdemona to repair his fortune,
And she for him pleads strongly to the Moor,
I'll pour this pestilence into his ear.
That she repeals him for her body's lust.
And by how much she strives to do him good
She shall unto her credit with the Moor—
So will I turn her virtue into pitch
And out of her own goodness make the net
That shall enmesh them all. (2.3.348–57, emphasis added)

The audience, by being given this preliminary information, understands both Othello's perspective (how he understands Iago's words) and Iago's intrigue (what poison he is to administer to Othello). Thus, it sees the very process in which Othello's judgement is damaged little by little not knowing Iago's deeper intention. And by this procedure, the audience's sympathy for Othello is controlled, because each member sees his nobility and his confidence in Desdemona's love for him shattered step by step by Iago's fiendish rhetoric.

3. The Background in Which Iago's Strategy Works

So that Iago's strategy to abuse Othello can work properly and efficiently, Othello's situation is manipulated on the dramatic design level. One facet of this is Cassio's characterisation as a gallant aristocrat, and another is the probability that the marriage of Othello and Desdemona might not be sexually fulfilled.

First, Cassio's characterisation is significantly contrasted with Othello's. When Othello accepts Desdemona's "infidelity" after Iago's insinuation, he talks of some probable reasons for her betrayal, such as his black face, his lack of elegant aristocratic demeanour, and his advancing age:

OTHELLO Haply for I am black

And have not those soft parts of conversation
That chamberers have, or for I am declined
Into the vale of years—yet that's not much—
She's gone, I am abused, and my relief
Must be to loathe her. (3.3.267-72)

René Girard points out this situation succinctly:

Cassio is everything that Othello is not: white, young, handsome, elegant, and above all a true Venetian aristocrat, a real man of the world, always at ease among the likes of Desdemona. Othello appreciates Cassio so much that he selects him rather than Iago as his lieutenant.⁴

But Cassio's aristocratic feature is depicted, in the early part of the play, much more attractively and effectively than Girard suggests. When he receives Desdemona in Cyprus, he says:

CASSIO O, behold,
The riches of the ship is come on shore:
You men of Cyprus, let her have your knees!
Hail to *thee*, lady, and the grace of heaven,
Before, behind *thee*, and on every hand
Enwheel *thee* round!

DESDEMONA I thank *you*, valiant Cassio.
 What tidings can *you* tell me of my lord? (2.1.82-88, emphasis
 added)

She is merely a daughter of a Venetian senator and the wife of a general. But he praises her as a treasure ("The riches of the ship"), commands the people in Cyprus to kneel to her as if she were a queen, and craves the blessings of heaven in a pompous manner. Besides, what is noteworthy in this passage is his use of "thou" form, although she replies to him with "you." By these wordings, he succeeds in showing both his admiration and endearment to her at a time. This is exactly what Othello could not.

Soon Cassio greets Iago and Emilia. In this short welcome speech, Cassio's playboy aspect is attractively packed:

CASSIO

Good ancient, you are welcome. [*to Emilia*] Welcome, mistress.
Let it not *gall your patience*, good Iago,
That *I extend my manners*; 'tis my breeding
That gives me this *bold* show of courtesy. [*He kisses Emilia.*]

IAGO

Sir, would she give you so much of her lips
As of her tongue she oft bestows on me
You'd have enough. (2.1.96-102, emphasis added)

There is no stage direction for Cassio's kiss to Emilia in the First Folio, but Iago's speech supports the fact that Cassio kisses Emilia. Cassio is more gallant than courteous, and his attitude sometimes oversteps the ordinarily acceptable level as his phrase, "I extend my manners," suggests. He also acknowledges the possibility of arousing Iago's jealousy ("gall your patience"), but he dares to display his customary behaviour which is too "bold." This characteristic of Cassio's functions in two ways in 3.3: Iago discerns it and uses it for his machinations, and it also increases Othello's anguish.

Another situation in which Iago's strategy works effectively is the possibility that the marriage of Othello and Desdemona might not have been sexually fulfilled. In the probable source of the play, "Gli Hecatommithé" by Cinthio, the Moor and Desdemona spend some happy time in Venice after their marriage:

So propitious was their mutual love that, although the Lady's relatives did all they could to make her take another husband, they were united in marriage and lived together in such concord and tranquillity while they remained in Venice, that never a word passed between them that was not loving.⁵

In *Othello*, however, double-time scheme works. While the play gives the audience a natural feeling about the time duration of events (the elopement, going to Cyprus, the mutiny caused by Roderigo and Cassio, and so forth), everything in the play happens within a few days. The elopement is revealed on the night of the first day, it takes some days for them to get to Cyprus, and by the time they arrive in Cyprus separately, they have not enjoyed each other as Othello's speech indicates:

OTHELLO Come, my dear love,
The purchase made, the fruits are to ensue:
That profit's yet to come 'tween me and you. (2.3.8-10)

Iago also knows this, as he unfolds it soon after this with his gross expression:

IAGO Not this hour, lieutenant, 'tis not yet ten o'th' clock. Our general
cast us thus early for the love of his Desdemona—whom let us not
therefore blame; he hath not yet made wanton the night with her,
and she is sport for Jove. (2.3.13–17)

There might be the possibility of their lovemaking between the time Othello orders the night's guard to Cassio and the time Othello appears on stage after the mutiny, or between the settlement of the mutiny and the next morning. But there is no apparent reference to their intercourse. Rather, the lack of it is emphasised by the two speeches of Othello's and Iago's which I have cited above.

This situation works keenly on Othello in the whole course of Iago's seduction, for Othello must acknowledge that Cassio has already enjoyed enough what he has not tasted, and that maybe he cannot for the time to come as well. It is also significant that Iago knows the situation. He carries out an assault on Othello audaciously, feeling no remorse for his pain. This reinforces his diabolic character all the more effectively.

4. Cinthio's Case for Comparison

In Cinthio, although some details are different from those in *Othello* (for example, the Ensign's love for Disdemona and its change into hatred), the essential element, that the Ensign is going to deceive the Moor and make him believe that his wife and the Corporal (the equivalent to Cassio) are in love with each other, is the same. However, the very way that the Ensign in Cinthio seduces the Moor is quite different from Iago. The Ensign manifests clearly that she has sexual relations with the Corporal. After the sword fight, Disdemona grieves the dismissal of the Corporal, and she entreats her husband to reconcile with him many times. The Moor tells the Ensign that he is obliged to reinstate him. This becomes a cue to the Ensign and he says, "Perhaps Disdemona has good cause to look on him so favourably! . . . I do not wish . . . to come between man and wife, but if you keep your eyes open you will see for yourself."⁶ Then, another earnest solicitation by Disdemona follows. The angry Moor goes to the Ensign, and he *declares*, although reluctantly, "You must know therefore that it is hard for your Lady to see the Corporal in disgrace for the simple reason that she takes her pleasure with him whenever he comes to your house. The woman has come to dislike your blackness."⁷

5. What Iago is Doing with his Words

5.0 Iago's Preparation for the Seduction

After Cassio is dismissed by Othello, Iago advises him to ask Desdemona for help to "splinter" between Cassio and her husband (2.3.318). At the end of this scene, he makes us known his concrete plan in his soliloquy anticipating the seduction:

IAGO Two things are to be done:
My wife must move for Cassio to her mistress,
I'll set her on.
Myself the while to draw the Moor apart
And bring him jump when he may Cassio find
Soliciting his wife. . . (2.3.377-82)

At the beginning of 3.3, his plan works precisely as he intends: Desdemona willingly accepts Cassio's entreaty with Emilia's support, and Iago leads Othello to the very spot.

5.1 Poison 1: Some Secret between Desdemona and Cassio

Enter OTHELLO and IAGO.

EMILIA
Madam, here comes my lord.

CASSIO
Madam, I'll take my leave.

DESDEMONA
Why, stay and hear me speak.

CASSIO
Madam, not now; I am very ill at ease,
Unfit for mine own purposes.

DESDEMONA
Well, do your discretion. *Exit Cassio.*

IAGO Ha, I like not that.

OTHELLO
What dost thou say?

IAGO
Nothing, my lord; or if—I know not what.

OTHELLO

Was not that Cassio parted from my wife?

IAGO

Cassio, my lord? no, sure, I cannot think it

That he would steal away so guilty-like

Seeing you coming.

OTHELLO

I do believe 'twas he. (3.3.29–40)

The key to analysing this passage is the distance between Cassio and Othello/Iago. In the Globe Theatre, it is from the entry door of Othello and Iago to the exit door of Cassio, and they *do see* each other. Cassio regrets that he has hurt the Governor of Cyprus, and thinks that it is inappropriate to ask for his reinstatement (2.3.273–75): his feeling is expressed in “I am very ill at ease, / Unfit for mine own purposes.” On the other hand, Iago’s goal is to make Othello believe that Desdemona and Cassio have a sexual relationship. Hence, his “Ha, I like not that.” is “why these two are together to be shown to Othello? I do not like this situation discovered by him, if I consider his heart’s ease.” Because Iago sees Cassio, he can use the situation for his end, and because Othello sees Cassio, this speech disturbs him. Othello cannot understand Iago’s deeper meaning at this point, and his suspecting words come, “What dost thou say?”: that is, “Is there something ill about Desdemona and Cassio being together?”. Iago’s answer to this is very tricky. He first rejects his own ultimate goal of “adultery” by saying “Nothing,” but quickly he rejects this “Nothing” by “or if” suggesting that there may be the possibility of something, though he does not name it: “I know not what.” When Othello says, “Was not that Cassio parted from my wife?”, he sees that Cassio has departed from his wife. Therefore, he wants to ask Iago why he dislikes the situation and why he does not say the reason for it. When Iago says, “Cassio, my lord? no, sure, I cannot think it / That he would steal away so guilty-like / Seeing you

coming.” Iago twists the real reason of Cassio’s departure—his uneasiness to entreat his reinstatement—into some plausible feelings of guilt towards Othello. As a result, Othello wonders why Iago denies that it was Cassio, and why Cassio feels guilty towards him.

At this first stage of poisoning, Iago succeeds in making Othello think that there might be some secret between Cassio and his wife which Iago does not like, and that Cassio feels guilty towards him. The poison already begins to work on him, as his plea to his wife shows:

OTHELLO

Whereon I do beseech thee, grant me this,
To leave me but a little to myself. (3.3.84-85)

5.2 Poison 2: Cassio as an Intermediary of Othello’s Marriage Suit

IAGO

Did Michael Cassio, when you wooed my lady,
Know of your love?

OTHELLO

He did, from first to last.

Why dost thou ask?

IAGO

But for a satisfaction of my thought,
No further harm.

OTHELLO

Why of thy thought, Iago?

IAGO

I did not think he had been acquainted with her.

OTHELLO

O yes, and went between us very oft.

IAGO

Indeed?

OTHELLO

Indeed? Ay, indeed. Discern'st thou aught in that?

Is he not honest?

IAGO

Honest, my lord?

OTHELLO

Honest? Ay, honest.

IAGO

My lord, for aught I know.

OTHELLO

What dost thou think?

IAGO

Think, my lord? (3.3.94–108)

Now Iago broaches the subject of Othello's wooing of Desdemona. When he says, "But for a satisfaction of my thought, / No further harm," the word "harm," which is an irrelevant term to Othello's case, must disturb him. Thus, the negative form of "No further harm" cunningly hints at the contrary possibility. By this trick, Iago makes Othello think that there might have been something harmful in his suit, by Cassio being the intermediary. When Othello admits the fact that Cassio was the go-between, Iago's reply is "Indeed?". Here he makes use of Othello's trust in him and urges him to guess the meaning of Iago's "Indeed?". Because Othello has trusted Cassio so far, he asks, "Is he not honest?". Iago does not answer the question, but replies in an interrogative form, "Honest, my lord?". In this case, too, he does not say that Cassio is insincere, but by using the questioning form, he suggests that Cassio may not be honest. Iago's next restrictive phrase, "for aught I know," accepts Cassio's honesty under the condition that it is only true as far as Iago knows. He creates a negative sense in the affirmative sentence by imposing a condition.

In this passage, there is a discrepancy between the grammatical forms Iago uses and the sense he intends. In the negative expression, “No further harm,” Iago suggests the opposite case of danger. By using interrogative forms, “Indeed?” and “Honest, my lord?,” he implies that Cassio may not be honest, and that it might have been unwise for Othello to rely on Cassio, although he does not mention it. The expression “for aught I know” creates a negative impression of Cassio’s insincerity in the affirmative sentence.

The effect of Iago’s poisoning 2 on Othello is seen in the following speeches:

OTHELLO

Think, my lord! By heaven, thou echo’st me
As if there were some monster in thy thought
Too hideous to be shown. (3.3.109–11, emphasis added)

OTHELLO

And when I told thee he was of my counsel
In my whole course of wooing, thou criedst ‘Indeed?’
And didst contract and purse thy brow together
As if thou then hadst shut up in thy brain
Some horrible conceit. (3.3.114–18, emphasis added)

Othello realises that Iago’s thought is dreadful, and we can perceive the depth of his fear by the words, “monster,” “too hideous,” and “horrible.” The subjunctive mood in the two sentences of “As if...” shows Othello’s painful wish that it should remain false.

On the other hand, the audience always understands what is going on in the conversation between Othello and Iago, because it is given sufficient knowledge to judge things correctly. Othello trusts Iago from the heart:

OTHELLO

And for I know thou’rt full of love and honesty
And weigh’st thy words before thou giv’st them breath,

Therefore these stops of thine fright me the more.
For such things *in a false disloyal knave*
Are tricks of custom, but *in a man that's just*
They're close delations, working from the heart,
That passion cannot rule. (3.3.121–27, emphasis added)

In this speech, he counterposes two kinds of people, a dishonest man and an honest man. He misunderstands his own case the other way round. His lack of insight into Iago's true vicious nature will irritate the audience: each member is quite sure of his malignancy, while Othello trusts him as the most reliable fellow ever.

5.3 Poison 3: Reassessment of Cassio's Honesty

IAGO For Michael Cassio,
I dare be sworn, I think, that he is honest.

OTHELLO

I think so too.

IAGO Men should be what they seem,
 Or those that be not, would they might seem none.

OTHELLO

Certain, men should be what they seem.

IAGO

Why then I think Cassio's an honest man. (3.3.127-32)

Here the theme is whether Cassio is trustworthy or not. Iago's "I dare be sworn, I think, that he is honest" is an affirmative sentence, but it induces a negative sense in two ways: by saying "I dare be sworn," to warrant Cassio's honesty requires courage; and by inserting, "I think," Cassio's honesty might be restricted only to Iago's judgement. He then says that "Men should be what they seem," and Othello admits that. Thus, Iago does not say that Cassio is dishonest, but gives Othello two clues: 1) Cassio is honest, as far as Iago knows; 2) there may be some difference between one's outward appearance and one's

true nature. And once again, Iago says “I think Cassio’s an honest man,” urging him to guess himself. The way to create a negative sense in an affirmative sentence in this passage is principally the same that we saw in the expression “for aught I know” (3.3.106). Because of this contrivance of using affirmatives with a negative impression, he succeeds in keeping his apparent stance that he is a good friend to Cassio, and hinting at the possibility of Cassio’s insincerity at the same time. Moreover, the phrase, “I dare be sworn,” is tricky: while Iago exaggerates his friendship and consideration for Cassio by the decisive expressions, “dare” and “be sworn,” his posture is only ostensible.

As the result of Iago’s poisoning 3, Othello is eager to know Iago’s thoughts and begins to think that it may be the worst for him. Iago, however, refuses to reveal it. He knows that his flat refusal will make Othello more eager to know the truth:

OTHELLO

Nay, yet there’s more in this:

I prithee speak to me, as to thy thinkings,

As thou dost ruminate, and give thy *worst* of thoughts

The *worst* of words.

IAGO

Good my lord, pardon me;

Though I am bound to every act of duty

I am not bound to that all slaves are free to—

Utter my thoughts? (3.3.133–39, emphasis added)

What really is the content of Iago’s thoughts which seems to be the worst for him? And why Iago strongly refuses to reveal it? These two questions bind together to make him more anxious.

5.4 Poison 4: Iago’s Direction Not to Suspect Any More

IAGO

I do beseech you,

Though I perchance am vicious in my guess

—As I confess it is my nature's plague
To spy into abuses, and oft my jealousy
Shapes faults that are not—that your wisdom
From one that so imperfectly conceits
Would take no notice, nor build yourself a trouble
Out of his scattering and unsure observance:
It were not for your quiet nor your good
Nor for my manhood, honesty and wisdom
To let you know my thoughts. (3.3.147-57)

It is noteworthy that here Iago reveals his true nature and what he is actually doing. In the phrase, "I perchance am vicious in my guess," the primary meaning of "vicious" which is intended for Othello's understanding is "defective, faulty, bad."⁸ But the word also includes a secondary meaning of "malicious" which the audience can grasp. It knows that Iago's jealousy (his suspicious nature) shapes "faults that are not", that is, Desdemona's infidelity.⁹ It judges correctly that Iago's advice not to pay attention to his imperfect surmise is what Othello should do. It also foresees the outcome of rejecting Iago's advice: Othello is to lose his peace of mind ("It were not for your quiet nor your good"). The audience is given these facts about Othello's situation, but what it sees is the Othello who cannot resist Iago's underhand provocation:

OTHELLO

By heaven, I'll know thy thoughts! (3.3.164)

By the end of poison 4, Iago has succeeded in making Othello believe:

- 1) there must be some secret between his wife and Cassio,
- 2) Cassio may not be trustworthy,
- 3) it might have been harmful that Cassio was the intermediary of his wooing,
- 4) Iago's thoughts could be the worst for him.

So far, Iago's strategy has been linguistic. In the second half of his poisoning, however, he selects a common idea or fabricates *generally accepted* ideas and combines them with the situation in which Othello is placed.

5.5 Poison 5: The Torment of Suspecting Adultery and an Apostrophe to Othello

IAGO *O beware, my lord, of jealousy!*

It is the green-eyed monster, which doth mock
The meat it feeds on. That *cuckold* lives in bliss
Who, certain of his fate, loves not his wronger,
But O, what *damned minutes* tells he o'er
Who dotes yet doubts, suspects yet strongly loves!

OTHELLO

O misery! (3.3.167–73, emphasis added)

Iago's poisoning enters a new stage. By using the word, "cuckold," he makes it clear that the topic is adultery. The phrase, "damned minutes," powerfully describes the torment of suspecting infidelity. It is the agony *of hell* ("damned"), and by using a small unit, "minute," instead of "day" or "hour," Iago expresses that one can never escape the suffering. The chiasmus effectively presents a lover who cannot handle his own sentiment of love and suspicion.

In this passage, Iago speaks a general idea about the torment of suspecting infidelity and does not mention it as Othello's case. But by addressing Othello first, "beware, my lord, of jealousy," he makes Othello recognise it as his own. Therefore, Othello's response "O misery" shows his great fear, who takes it as his future image.¹⁰

Othello's following speech makes even clearer that he accepts Iago's words as his own situation:

OTHELLO

Why—why is this?

Think'st thou *I'd* make a life of jealousy
To follow still the changes of the moon
With fresh suspicions? No: to be once in doubt
Is once to be resolved. (3.3.179–83, emphasis added)

In this way, Iago succeeds in making Othello doubt Desdemona's inconstancy, not by stating it overtly, but by compelling him to apply a common idea to his own case.

Therefore, it is too naive to interpret Othello's flat denial of jealousy literally as he expresses:

OTHELLO 'Tis not to make me jealous
To say my wife is fair, feeds well, loves company,
Is free of speech, sings, plays and dances well:
Where virtue is, these are more virtuous.
Nor from mine own weak merits will I draw
The smallest fear or doubt of her revolt,
For she had eyes and chose me. (3.3.186–92)

He sees her merits in the sociable aspects of an aristocratic lady. When he enumerates Desdemona's merits, he also thinks about his own demerits, such as his black face and the lack of elegant aristocratic behaviour, which he describes later (3.3.267–72). Moreover, the person whom he envies is Cassio, a young, exceedingly sociable, and amiable aristocrat. Once he talks of his "smallest fear or doubt of her revolt," he acknowledges it, and therefore, what he feels could be the reversal of his apparent words.

The audience sees that Iago's plan has been successful hitherto, and each member is able to grasp the double meaning in Iago's speech here:

IAGO
I am glad of this, for now I shall have reason
To show the love and duty that I bear you
With franker spirit: therefore, as I am bound,

Receive it from me. I speak not yet of proof:
Look to your wife, observe her well with Cassio.
Wear your eyes thus, not jealous nor secure;
I would not have your free and noble nature
Out of self-bounty be abused: look to't. (3.3.196-203)¹¹

In the phrase, "I am glad of this," Iago enjoys that his plan is going smoothly. The audience knows that Iago's "love" for Othello is hatred, and that his "duty" is what he should do in accordance with his religion, "divinity of hell" (2.3.345). He is going to show this kind of "love and duty" sincerely to his evil nature ("with franker spirit"). Similarly, "I would not have your free and noble nature / Out of self-bounty be abused" has the opposite meaning: he desires that Othello's free and noble nature should be seriously damaged. Thus, the audience grasps Othello's understanding of Iago's words (Iago's ostensible concern for him) and his malice simultaneously. This system influences the audience's sympathy: each member may feel irritated that Othello's innocent and noble mind is manipulated easily by not seeing into Iago's true nature.

5.6 Poison 6: Venetian Ladies' Wantonness and Desdemona's Deception of her Father

IAGO

I know our country disposition well—
In Venice they do let God see the pranks
They dare not show their husbands; their best conscience
Is not to leave't undone, but keep't unknown.

OTHELLO

Dost thou say so?

IAGO

She did deceive her father, marrying you,
And when she seemed to shake, and fear your looks,

She loved them most.

OTHELLO

And so she did.

IAGO

Why, go to then:

She that so young could give out such a seeming

To seal her father's eyes up, close as oak—

He thought 'twas witchcraft. (3.3.204-14)

Iago fabricates a tale of the Venetian ladies' barefaced secrecy about their wantonness and claims it as a matter of fact among his countrymen, which Othello does not know as a foreigner. Then Iago combines it with the situation in which Desdemona eloped with Othello by deceiving her father. When Iago says, "She that so young could give out such a seeming / To seal her father's eyes up, close as oak," he does not say Desdemona's "deception" of Othello, but he encourages him to think in that way. Here, his use of metaphors evokes concrete images in Othello's mind: Othello's eyes cannot see the facts as if they were the sealed-up eyes of a falcon; Desdemona's secrecy would not reek as if it were packed up and concealed in an oak barrel, and everything seems like a "witchcraft." Iago converts Desdemona's faithfulness to Othello into the ground for the opposite case.

In the following passage, too, the audience discerns Iago's deeper intention which Othello cannot even imagine:

IAGO

I hope you will consider *what is spoke*

Comes from my love. But I do see you're moved;

I am to pray you not *to strain my speech*

To grosser issues nor to larger reach

Than to suspicion.

OTHELLO

I will not.

IAGO Should you do so, my lord,
My speech should fall into such *vile success*
As my thoughts aimed not at: (3.3.220-27, emphasis added)

When Iago says, “I am to pray you not to strain my speech / To grosser issues, nor to larger reach / Than to suspicion,” his design is the reversal of his words: he hopes that Othello’s suspicion would swell up. In the same way, “such vile success” is what he aims at. So far, the audience has seen Iago’s prosperity, and now it foresees the “vile success” which awaits Othello.

5.7 Poison 7: A *Natural* Tendency to Marry One’s Own Kind and Desdemona’s Refusal of it: An Oblique Assault on Othello’s Weakness
IAGO

Ay, there’s the point: as, to be bold with you,
Not to affect many proposed matches
Of her own clime, complexion and degree,
Whereto we see, in all things, nature tends—
Foh! One may smell in such a will most rank,
Foul disproportions, thoughts unnatural.
But pardon me, I do not in position
Distinctly speak of her, though I may fear
Her will, recoiling to her better judgment,
May fall to match you with her country forms,
And happily repent. (3.3.232-42)

At this stage of Iago’s poisoning, he insists that it is a natural tendency for ordinary people to marry someone of the same race and class, as if it were an accepted truth. And he condemns Desdemona’s numerous refusals of such marriage suits. Although the apparent target of censure is Desdemona, Iago makes Othello recognise his sore spots, the fact that he is a black soldier and not a white aristocrat, without mentioning them. By avoiding an apparent

attack on Othello's weakness, he maintains his posture that he is Othello's confidant, but by condemning Desdemona severely using such disgusting terms as "a will most rank" and "Foul disproportions," the assault on Othello is more violent, even though it is oblique.

Othello has been proud that he is a black, valiant soldier and that Desdemona has chosen him although he is not a white aristocrat. But Iago's indirect assault on Othello has destroyed his dignity completely. He cannot choose but leave the spot feebly:

OTHELLO Farewell, farewell.

 If more thou dost perceive, let me know more:

 Set on thy wife to observe. Leave me, Iago. (3.3.242-44)

6. Conclusion

For Iago's seduction to work properly and efficiently, situations are manipulated on the dramatic design level. First, Cassio's amiable and gallant characteristics are exaggerated in the early part of the play. This works later on Othello's inferior complex as a black soldier and not a white aristocrat. Second, the marriage of Othello and Desdemona may not be consummated by the cunning use of the double-time scheme. By this device, Othello's jealousy towards Cassio, who "has had" a sexual relationship with Desdemona, swells up. It also sheds light on Iago's fiendish character, for he knows the situation and pushes his plan forward audaciously.

During his seduction, Iago, unlike the Ensign in Cinthio, never declares that Desdemona has a sexual relationship with Cassio. He, however, gives Othello clues and makes him think himself. By these tactics, his suspicion of Desdemona's infidelity is created spontaneously. Thus, the venom becomes much stronger than that which is only given from outside. In the first half of his poisoning, his clues are linguistic. In the second half, his clues are *generally*

accepted ideas and the situation in which Othello is placed. The following is the diagram of Iago's strategy and Othello's response to it:

	Iago's clues	Othello's scope of understanding
Poison 1	Cassio leaves, seeing Othello coming. "I like not that."	What Iago does not like?
	"Nothing" "or if" "I know not what."	Possibility of something which Iago does not like
	Othello and Iago see Cassio leaving. "I cannot think it / That he would steal away so guilty-like"	Why does Iago deny that it is Cassio? Why does Cassio feel guilty?
Poison 2	"No further harm"	Possibility of harm.
	"Indeed?" "Honest, my lord?" (Correction of Othello's thought)	Cassio may not be honest.
	"For aught I know" (Conditional)	It might have been harmful that he was the intermediary.
Poison 3	"I dare be sworn, I think, that he is honest." (Requires courage, conditional) "Men should be what they seem."	Cassio may not be trustworthy, despite his appearance.
Poison 4	Do not suspect any more.	Becomes more suspicious.
Poison 5	"Cuckold" makes the topic clear. "O beware, my lord, of jealousy" A general idea about the torment of suspecting infidelity	Suspects that cuckoldry may be his own case.
Poison 6	A <i>well-accepted</i> idea about Venetian ladies' wantonness Desdemona's deception of her father (their elopement)	Suspects Desdemona of deception of himself.
Poison 7	A <i>common</i> idea that one marries one's kind Desdemona's refusal of proposals from white aristocrats Iago's criticism of Desdemona with disgusting terms	Thinks about his identity as a black soldier.

In the first half of Iago's poisoning, there is a discrepancy between his linguistic expressions and the impression he creates. When he says "nothing," he suggests the possibility of something by adding "or if." In "No further harm," he implies the possibility of harm. The conditional phrases, "for aught I know," "I dare be sworn," and "I think," to say that Cassio is honest, create a negative impression of his insincerity, even in affirmative sentences. By this trick, Iago maintains the pretence that he is a good friend to Cassio and makes Othello doubt Cassio's honesty at a time.

In the second half of his poisoning, his choice of *generally accepted* ideas and their combination with Othello's own situation is exquisite. By addressing Othello first, "O beware, my lord, of jealousy," Othello accepts Iago's general idea of suspecting one's wife's infidelity as a possibility in his own case. Then, Iago states the dubious ideas about Venetian ladies' wantonness and one's matrimony choice of one's own kind as common opinions. He then combines these ideas with the facts—Desdemona's deception of her father and her refusal of marriage proposals by white aristocrats. These clues which Iago chooses from Othello and Desdemona's background have nothing to do with her unchastity. On the contrary, they show Desdemona's true love for Othello: she has rejected all the "favourable" matches and chosen to marry Othello and to elope with him. But their combination with *generally accepted* ideas works on Othello to convince him of his wife's betrayal.

During the course of Iago's insinuation, the audience is always aware of Iago's black intention to ensnare Othello and Othello's restricted scope of understanding. Each member sees Iago who proceeds his machinations totally as he intends without damaging Othello's trust in him, and it also perceives Othello entrapped to destruction, not knowing Iago's true nature. Thus, while the audience's sympathy for Othello is controlled, it also appreciates Iago's malignant nature in his extremely efficient command of language.

Notes

This essay is based on my Japanese version of 'Fabrication of Infidelity: Iago's Rhetoric in Act 3 Scene 3', *English Usage and Style*, 38 (2021), 87–105, enlarged and elaborated by the author.

¹ J.E. Tiles, 'Logic and Rhetoric: An Introduction to Seductive Argument', *Philosophy and Rhetoric*, 28 (1995), 300–15 (p.308).

² Tiles, p.309.

³ All quotations from *Othello* are from William Shakespeare, *Othello*, The Arden Shakespeare, The Third Series, ed. by E.A.J. Honigmann (London: Bloomsbury, 2016).

⁴ René Girard, *A Theater of Envy* (Oxford: Oxford University Press, 1991), p.290.

⁵ Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare: Major Tragedies* (New York: Columbia University Press, 1973), p.242.

⁶ Bullough, p.244.

⁷ Bullough, p.245.

⁸ David Crystal and Ben Crystal, *Shakespeare's Words: A Glossary and Language Companion* (London: Penguin Books, 2002), p.482.

⁹ David Crystal and Ben Crystal, p.247.

¹⁰ William Shakespeare, *Othello*, The Oxford Shakespeare, ed. by Michael Neill (Oxford: Oxford University Press), p.293. Michael Neill says, "Some actors (including Kean and Macready) have made this the point at which Othello first glimpses his jealous destiny." Seen from the plot development of the play, this is the turning point: at this very moment Othello begins to suspect the adultery of his wife and he is to suffer a life of jealousy from now on. Michael Neill, however, adds another possible interpretation: "but it can be played as a general comment on the torment Iago has described." But Iago's poisoning steps have been so deliberately chosen and so successfully followed up to the present that it is appropriate to interpret "O misery" as Othello's own outburst of fear.

¹¹ Imperative sentences are conspicuous in this passage. It shows that Iago has gained an advantage over Othello.

『オブローモフ』と近代

大 西 郁 夫

0. はじめに

Гончаров И.А. (1812-1891) は 19 世紀リアリズムを代表する作家としてドストエフスキー、トルストイ、チャーホフ、ツルゲーネフに次いでしばしば名を挙げられ、また彼の長編『オブローモフ』(1859) はロシア文学の代表作のひとつとされてきた。だが同時に、ゴンチャロフは『オブローモフ』以外には言及されることが少ない作家でもあり、その位置付けは曖昧である。実際、上記の作家たちと違って、ゴンチャロフのアカデミー版全集全 20 巻の刊行開始は遅く、ようやく 1997 年に出版が始まったが、20 年以上経った現在も完結には至っていない。このようにその知名度の割に、ゴンチャロフ研究は未だ途上にある。とはいえ作家の伝記的側面や思想的転向といった部分に大きな議論があるわけではない。ゴンチャロフをめぐる問題はもっぱら彼の代表作『オブローモフ』に関わるものである。例えば 21 世紀の今日でも『オブローモフ』を扱った論文集『オブローモフ：定数と変数』の序文にはこう述べられている。

オブローモフの世界的な知名度は長編『オブローモフ』理解度とまったく釣り合っていない。[…] ゴンチャロフ生誕 200 年を前にして彼の長編は未だ多くの謎を秘めており、これについて以下 [= 同書] に述べられている¹。

『オブローモフ』の解釈を未解決ととらえる立場は研究書に限られるものではない。一般読者向けに書かれた解説書『みんなのロシア文学。素晴らしき読書！（ゴーゴリからチャーホフまで）』（スヒフ著）でも以下のように述べられている。

生き方として、哲学としてのオブローモフシチナ²は農奴制も帝政ロシアも越えて生き続けた。オブローモフ的な「なぜ？」という問いは人間の魂の二つの側面の永遠の対話の中でその意味を持ち続けている。

「オブローモフとは何か？」と「オブローモフシチナとは何か？」という問いは、あらゆる時代がつねに新たに解かねばならないのだ³。

スヒフが『オブローモフ』の提起する問題を「人間の魂の二つの側面の永遠の対話」と呼ぶように、確かに『オブローモフ』には二つの相対立する解釈が見られてきた。『オブローモフ』の謎とはこの解釈の対立が関わっている。本論はこの対立を近代が孕む問題としてとらえ、『オブローモフ』と作者ゴンチャロフが近代化を迎えつつあったロシアにおいて、どのように位置づけられるかの考察を試みるものである。

1. 『オブローモフ』の解釈における二極化

『オブローモフ』の解釈として最も影響力を持ったのは、言うまでもなく、早くも作品発表の翌月、雑誌「現代人」第5号に掲載されたH.A. ドブロリユーボフの『オブローモフ主義とは何か』（1859）である。よく知られたこ

¹ От редколлегии // Обломов: константы и переменные. Сборник научных статей. СПб., 2011. С. 9.

² 原語は обломовщина で「オブローモフ流儀」ほどの意味だが、邦訳では「オブローモフ主義」とも訳される。

³ Сухих, И.Н. Русская литература для всех. Классное чтение! (От Гоголя до Чехова). СПб., 2013. С. 173.

の論についてここでは詳述しないが、ドブロリユーボフはオブローモフの特質を農奴制の帰結としての「怠惰・無関心」や精神的隷属性とみなした。また彼はこの主人公を、オネーギン、ペチョーリン、ペリトフ、ルージンら過去の文学作品の主人公と結び付け、これを「余計者」として一括し、この主人公たちが総じてロシアの宿痼を表していることを、歴史的・社会的に展望してみせた。農奴制ロシアを批判したこの論は以後『オブローモフ』解釈の主流となった。『オブローモフ』発表の2年後に農奴解放が行われたこともあり、オブローモフシチナをロシアのネガティブな国民性の具現化とする考え方は革命以前においても広く見られたし、また帝政ロシアを否定的に見るソ連においても当然の流れとして引き継がれた。主人公オブローモフとオブローモフシチナを、社会的・歴史的観点から理路整然と論じたこの評論は、それだけの説得力をもっていた。事実ドブロリユーボフの評論を読んだゴンチャロフ自身もこの解釈を肯定している。

雑誌は受け取りましたか？『オブローモフ』についてのドブロリユーボフの論文を見てください：オブローモフシチナについて、つまりそれが何であるかについて、この後ではもう何も言えないと思います。彼はそのことを予見していて、誰よりも早く発表するのを急いだに違いありません。[...] この論文の後、これを繰り返さないでいるために批評に残されているのは、[作品の] 否定に走るか、オブローモフシチナは脇に置いて、女性像について語るしかありません [1859年5月20日付けアンネンコフ宛て書簡]⁴。

だがドブロリユーボフの解釈に対立して、彼と同時期のドルジーニンから始まり、ソ連時代に至るまで、この見解とは相容れない立場が続いてきた。それは主人公オブローモフを功利主義に対立する人間的・肯定的原理とみなそうとする立場である。

⁴ Гончаров И.А. Собрание сочинений в 8 томах. Т.8. М., 1980. С. 275-276.

例えばドルジーニンは評論『イワン・ゴンチャロフの長編『オブローモフ』』（1859、初出は雑誌「読書文庫」第12号）でこう述べる。

滑稽な側面や、哀れな人生、われわれと共通する欠点の現れ、それらゆえに私たちはイリヤ・イリイチ・オブローモフが大切なのではない。彼が大切なのはわれわれの土地、われわれの時代の人間だからであり、悪意を持たないやさしい子供だからであり、別の状況で別の発達をしたなら真の愛と慈悲を行うことができる人間だからなのだ。彼が大切なのは自立した純粋な性質ゆえであり、彼を軽蔑する大多数が汚染されている陳腐なスコラ主義的道徳から独立しているからなのだ。[…] そして最後に、彼が大切なのは、自己愛と策略と不正に満ちたこの時代に、だれひとり辱めることなく、だれひとり欺くことなく、だれひとりにも忌まわしいことを教え込むことなく、静かにその生を終えた畸人としてなのである⁵。

また 1892 年に詩人アンネンスキーはオブローモフをこのように思い描く。

なぜ彼 [=オブローモフ] の受動性はわれわれに対して苦々しさや恥ずかしさを呼び起こさないのだろう。

オブローモフの怠惰に対置されているものを見るといい。出世欲、俗なあがき、些細な諍い、シュトリツの商業文化的活動ではないか。オブローモフのガウンとソファには、人生の問題を解決しようとするこうした試みすべてへの否認が感じられるのではないか。[…]

彼は愛されている。彼はアガーファヤ・マトヴェーエヴナに愛と、そして崇拜さえ吹き込むことができる。小説の末尾、彼を追慕するザハールを思い出してほしい。弱く、わがままで、無能で甘やかされ、世話を

⁵ Дружинин А.В. «Обломов», роман И.А. Гончарова // И.А. Гончаров в русской критике. М., 1958. С. 183.

必要とするこの人間は、人々に幸せを与えることができたのだ、なぜなら彼にはハートがあったからである⁶。

ソ連時代になってもプリーシヴィンが日記に密かにこう記している。

オブローモフ。この長編において内的にはロシア的怠惰が賞揚され、外的にはそれが生命を欠いた活動的な人々（オリガとシュトリツ）の描写によって非難されている。だがロシアにおけるどのような「肯定的な」活動も、オブローモフの批判に耐え切れないだろう。彼の静穏の中には、そのためにこの静穏を失ってもいいほどの至高の価値への欲求が秘められているのだ。これは一種トルストイ的な「無為」である⁷。

あるいはソ連崩壊後には、こうした反功利主義的な側面をロシア正教の原理と結びつける解釈も見ることができる。

…彼の世界観の根底には疑いなく生の宗教的知覚と、何よりも「神と人」「神と人類」という問題が横たわっていた。ゴンチャロフは自らのキリスト教的歴史学を創り出したのである。彼にとって人類の歴史は「神意」の具現化である⁸。

現代においては、こうした二つの立場の対立を調停するかのように、『オブローモフ』という作品を、主人公の友人で実業家シュトリツの体現する功利主義・合理主義とオブローモフの人間像（無垢で、非利己的）が対置された、二つの原理（功利主義 vs 理想主義など）の拮抗もしくは併存を描いたものと

⁶ Анненский И.Ф. Гончаров и его Обломов // Книги отражений (Литературные памятники). М., 1979. С. 268-269.

⁷ Пришвин М.М. Дневники: Книга третья. Дневники 1920-1922 гг. М., 1995. С. 166.

⁸ Мельник В.И. Этюды о Гончарове. Ульяновск, 2012. С. 316.

する解釈が見られる。例えばネズヴェツキーは、オブローモフシチナに対して「シュトリツェフシチナ [штольцевщина] という概念を立てて、この二つの原理の対立に作品全体の意味を見出そうとしている。

ゴンチャロフの長編の深奥な論理にしたがえば、安らぎとしての生と活動としての生という調和しがたい両極は、前者が完全な停滞と死に変わるおそれがあり、後者が回し車の上にいるリスの、終わることのない自己目的的な駆け回りに変わるおそれがある。だから互いを修正し補完することのできる生の至高の統合へと、均等に結合されるべきなのだ⁹。

上述のスヒフもまたこうした解釈の延長上に位置付けられるだろう。これらは穏当な解釈と言えるのかもしれない。しかし問題も残る。主人公の人生が無駄に終わったとされる作品の展開から考えれば、必ずしもこの小説が二つの原理を拮抗させているようにも見えない点である。むしろここで興味深いのは、ドブロリユーボフ的な解釈に対峙するかのようになり、オブローモフの名誉回復を志向するベクトルが、現代に至るまで途切れることなく働いてきたという事実の方かもしれない。アカデミー版全集の『オブローモフ』への注釈者も以下のように指摘している。

20 世紀における（部分的には 21 世紀においても）この長編小説自体とオブローモフの生涯の意味付けは『オブローモフ主義とは何か』の仮説的なスローガンの命題からの漸進的なしかし絶えることのない解放の歩みであり、それはオブローモフシチナからオブローモフという人間への歩みだった¹⁰。

⁹ Недзвецкий В.А. Роман И.А. Гончарова «Обломов»: Путеводитель по тексту. М., 2010. С. 212.

¹⁰ «Обломов». Примечания. // И.А. Гончаров. Полное собрание сочинений в 20 томах. Т.6. СПб., 2004. С. 245.

もちろんテキストの各所には、こうした対立する意見の根拠とされてきた部分を見出すことは可能である。しかし果たして、それをもってゴンチャロフが『オブローモフ』においても前作『平凡物語』（1849）のような二項対立を目指していたようには見えるだろうか。それゆえここではあえてテキストを「読まない」解釈を考えてみたい。

2. 『オブローモフ』のクロノトポス

ここで、テキストの部分に踏み込まずに、作品を大きく捉えるためには、バフチンの提唱した「クロノトポス」が有効かもしれない。

文学において、実在した歴史的時間と空間およびそれらの中で開示される実在した歴史的人間を獲得するプロセスは複雑かつ断続的に進展した。そうして獲得されてきたのは、人類の歴史の当該の段階においてとらえることができた時間と空間の個々の側面であり、そうして獲得された現実のこれらの側面を反映し芸術的に加工するのにふさわしいジャンル上の方法が作り出されてきたのである。

文学において芸術的に獲得された時間と空間の本質的な相互関係を、われわれは「クロノトポス」と名付ける（文字通りの翻訳では「時空間」である）。この用語は数学で用いられるもので、相対性理論（アインシュタイン）をもとに導入され基礎付けられたものである。われわれに重要なのは相対性理論においてこの用語が持つ特殊な意味ではないので、われわれはここ、すなわち文学研究にほとんど比喩として転用する（ほとんど、であって完全にではない）。われわれに重要なのはこの語における空間と時間の不可分性である（空間の第四次元としての時間）。われわれはクロノトポスを文学の内容に関わる形式的カテゴリーとして理解する（ここでは他の文化領域におけるクロノトポスには触れない）。

文学的クロノトポスにおいては、空間的・時間の特徴は意味を付与された具体的な全体において統合されている。ここでは時間は圧縮され、

密になり、芸術的に可視化されている。空間は凝縮され、時間、シュジェート（プロット構成）、歴史の運動へ取り込まれている。時間の特性は空間の中で開示され、空間は時間によって意味を付与され計測される。[時間と空間という] ふたつの系の交差とこれらの特性の融合によってクロノトポスは特徴付けられている¹¹。

小説における場面や展開を、意味を付与された空間と時間の融合として捉える「クロノトポス」を利用して、『オブローモフ』における主人公の運動をまず空間的に考えてみると、実に単純であることに気づく。主人公は極度に移動を厭い、端的に言えば「動かない」。物理的にも社会的にも彼の行動特性を неподвижность（不動性）と規定できるだろう。第2部は、後述するように、例外となるが、それ以外の部にはこの行動特性を強調するエピソードが挿入されている。

	空間的位置	移動の忌避を強く示すエピソード
第1部	ソファから動かない	引越しの拒絶
第2部	(激しく移動)	「山にも登る」：垂直にも移動
第3部	ヴィボルグ区	ネヴァ川渡河を渉る。
第4部	ヴィボルグ区	シュトリツによる帰郷の誘いを拒絶

第1部では主人公が寝床代りのソファから結局最後まで起き上がらないのはよく知られている。さらにこの部では、家主に迫られている引っ越しについて、従僕ザハールと執拗にやり合い、オブローモフは頑として引っ越しを

¹¹ Бахтин М.М. Формы времени хронотопа в романе. Очерк по исторической поэтике // Литературно-критические статьи. сост. С. Бочаров и В. Кожин. М., 1986. С. 121-122.

受け入れない。

第3部では、別荘からヴィボルグ区に移ったオブローモフは次第にペテルブルグの中心部にあるオリガ宅を訪問することや結婚への具体的な道筋を負担に感じ始める。そうした折にネヴァ川の結氷を口実にして、ヴィボルグ区から市の中心部への移動を止め、オリガとの逢引きを延期する。

第4部で移動を強く拒否するのは、オブローモフがオリガと別れておよそ五年後、シュトリツが最後にオブローモフを訪れる場面である。オブローモフの念願であった故郷オブローモフカ村への帰還を強く慫慂するシュトリツに対して、オブローモフはきっぱりと拒絶し、アガーフィヤと彼女の持ち家に永遠にくっついてしまったと明かすのである。小説テキストの外部に問題を拡張するのは禁じ手かもしれないが、オブローモフのこの拒絶は腑に落ちない点がある。妻となったアガーフィヤは家政に優れた主婦であり、領地の立て直しについてはこの時シュトリツが全面的な支援を申し出ている。だとすれば故郷への帰還に関してもはや障害はないはずであるが、結局主人公はヴィボルグ区にとどまるのである。

ではオブローモフが「別荘の周囲5キロ以内の丘で、彼が何度か登らない丘はなくなった」第2部はどうだろうか。オリガとの恋愛が始まり頂点を迎える第2部では、もちろんオブローモフは動き回る。だがオブローモフの行動特性を「不動性」と見るなら、むしろこの部分では、彼の不動性とは、生理的理由ではなく心理的理由に起因するものであり、物理的に動けないわけではないことが露呈されているのではないだろうか。今更ではあるがドブローリューボフを引いておこう。

イリヤ・イリイッチ〔オブローモフ〕が **неподвижность**（不動性）を本質的、根本的な特徴とするような、ある特別の種類の人間に属していると想像する必要はない。彼が生まれつき思う通りに動く能力をもっていないと考えることは公正ではない。それはまったく違う。彼は生来、他のすべてと同じ人間である¹²。

本論でドブロリユーボフを後追いつもりはないが、彼が неподвижность という語を用いた点には注目しておきたい。そして彼もまたその不動性がオブローモフの疾病など、物理的理由によって生じているわけではないと考えている。そうであるならばオブローモフが動かないのは彼自身の意志のかたちなのである。

オブローモフが最後までとどまるヴィボルグ区は、当時にあつてはペテルブルグの郊外、というよりむしろ僻地である。行政的にはペテルブルグの一部であるが、道路の舗装も整っておらず周囲には畑地も広がっていた。小説内でもゴローホヴァヤ街の旧居からヴィボルグ区への引っ越しについて、従僕ザハールが「別荘から別荘へ引っ越す」ようなのだと不満げに述べている。だとすればヴィボルグ区とは先進的なペテルブルグの中心と停滞したままのオブローモフカ村の中間的トポスと見ることができるだろう。そしてクロトポスは空間表象に時間表象を含み込む。つまりこの場所は進歩しつつある近代と旧態依然たる過去の間、に位置する時空間ということになり、オブローモフとは近代と過去の間に立ち尽くす存在と見なすことができる。では作者ゴンチャローフはその近代をどのように思い描いたのだろうか。

3. 主人公たちの антиподы (対蹠点)：肯定的登場人物

ゴンチャローフは自身の3長編(『平凡物語』『オブローモフ』『断崖』(1869))を「一つの作品」(研究者によれば三部作)とみなしている。

今は私の3長編で私に見えているもの、それらの共通の意味について話そう。

今述べたように、私が見ているのは3つの長編ではなくひとつである。それらはすべて一本の共通の糸、一貫した一つの理念でつながっている。

¹² Добролюбов Н.А. Что такое обломовщина? // И.А. Гончаров в русской критике. М., 1958. С. 64.

その理念とは私が体験した一つの時代から、別の時代への移行であり、またこれらの長編は私の描写、人物像、場面、小さな現象の反映によってつながっている¹³。

この3長編を貫くライトモチーフは「眠りと覚醒」である。しかし「眠り」の系列である主人公たちには必ずしも一貫性が感じられない。それは「眠り」のありように違いがあるからかもしれないが、何よりオブローモフが他の2人と異質だからでもある。アレクサンドル・アドゥーエフ（『平凡物語』）とライスキー（『断崖』）はどちらも恋愛体質で移動を躊躇しない。この主人公の体質の違いを重く見るなら、むしろ主人公に対置される対蹠点としての「肯定的人物」に一貫性を見出せるかもしれない。そう思わせるのは『平凡物語』の叔父ピョートルと『オブローモフ』のシュトリツが極めてよく似ているからだ。2人はいずれも成功した実業家で活動的であり、何より合理主義的思考の実践者である。そしてシュトリツはむしろ叔父ピョートルの改良型とみなすことができるだろう。『平凡物語』においてピョートルの合理主義的思考は、その帰結として妻のエリザヴェータに悪影響を与えた。シュトリツには、このピョートルの不人情さをあたかも補填するかのよう、ロシア人の母からの影響として情緒性が付与されている（ただしそれは彼の音楽鑑賞趣味程度にしか描かれてはいないが）。

だが『断崖』においては明確にこうした系譜に相当する人物は見出せない。それは『断崖』が、他の作品に比べて複雑な人物配置を持ち、主人公ライスキーと1対1で対立する登場人物を想定しがたい点にもよっている。しかし『断崖』のストーリーを考えた場合、軸となるのはライスキーが従妹ヴェーラに恋をし、そっけなく身を躲されたあと、彼女の恋愛相手を探るというものである。したがってヴェーラの恋の相手をライスキーの対立点に想定することは可能であろう。だがそれは2人の人物に分かれている。すなわちニヒリ

¹³ Гончаров И.А. Лучше поздно, чем никогда. // Собрание сочинений. в 8 томах. Т.8. М., 1980. С. 107.

ストで警察の監視下にあるマルク・ヴォロホフと「木こり」を自称するトゥーシンである。ただしトゥーシンは実際のところ単なる「木こり」ではなく、最新のイギリス製機械を備えた製材工場の所有者なのである。「覚醒したオブローモフ」¹⁴でありながら、いまだ進むべき方向性を見出せない（だから彼は自称「ディレタント」なのだが）ライスキーに対して、新しい時代の二つの側面を示しているのがこの2人の登場人物となるのではないだろうか。

『平凡物語』	ピョートル（叔父）	功利主義，成功者
『オブローモフ』	シュトリツ（親友）	合理主義，活動的
『断崖』 ヴェーラをめぐって	ヴォロホフ（破局）	無政府主義，唯物論
	トゥーシン（結婚）	林業工場経営，素朴

整理してみよう。主人公の系列が「眠り」に属すとして、その現われはさまざまである。『平凡物語』のアレクサンドルはロマン主義的夢想であり、オブローモフは農奴制ロシアの帰結、『断崖』のライスキーは「眠り」から覚醒したものの未来図を描けない人物となる（彼は「眠り」と「覚醒」の分界線とも言えるだろう）。一方「覚醒」の側にはいずれも合理主義者の叔父ピョートル、シュトリツがおり、その先にはニヒリスト＝唯物論者ヴォロホフと技術的進歩を所有するトゥーシンがいる。つまり三部作を通じてゴンチャロフの思い描いた進歩とは、合理的思考を基盤に科学や技術の進歩を肯定しつつ、理念として唯物主義を拒否したということになるだろう。実際ベリンスキーのサークルに出入りしていた頃から、彼は進歩的理念には共感する一方で、唯物論には強い警戒心と危惧を抱いていた。

私は多くの点で、次のような考え方を共有していた。例えば農民の自由、社会と民衆の啓蒙に向けたより良い手段、発展にとってあらゆる種

¹⁴ Гончаров И.А. Лучше поздно, чем никогда. С. 117.

類の抑圧と制限がもたらす弊害などである。しかし私は決して、若者が興奮するような、理想の社会的平等や友愛といった青臭いユートピアには夢中にならなかった。私は唯物主義にも、そこから導き出すことが好まれたすべて、例えば人類の未来にとって素晴らしいもの、といったことも信じなかった¹⁵。

だからこそ『断崖』で唯物論者ヴォロホフはヴェーラの圏域から排除されるのである。だが今日から19世紀以降の時代の流れを振り返るならば、近代化や進歩は科学や技術の飛躍的な発展と結びついており、その中で科学の基礎としての唯物論的思考を排除できるかは疑問と言わざるを得ない。それゆえ『断崖』で示されるゴンチャロフの未来図は、あくまで願望にすぎないもの、あるいはご都合主義的とも見える。そして、近代化における唯物論的思考の位置付けが『断崖』で思い描かれたような形で解消できるかどうかは別問題として、『オブローモフ』が構想・執筆されていた段階では、この二つの側面、つまり進歩における唯物論的思考や合理主義の問題は、ゴンチャロフにとって、『オブローモフ』の10年後に発表された『断崖』にみられるような形で解決はされていなかったのではないか。オブローモフが「立ち尽くす人」として描かれてしまったことは、この問題が未解決だったことと関わっているとも言えるだろう。この点を示唆するのが旅行記『フリゲート艦パルラダ号』(1858)である。そしてこの時の体験はまさに『オブローモフ』の構想段階と時期的に一致している。

4. 『フリゲート艦パルラダ号』：西欧への矛盾した態度

『フリゲート艦パルラダ号』はゴンチャロフが幕末日本を訪れた1852-1855年の体験をもとに書かれた旅行記である。日本においては1853年のプ

¹⁵ Гончаров И.А. Необыкновенная история // Собрание сочинений в 8 томах. Т.7. М., 1980. С. 385.

チャーチンによる開国交渉として知られており、ゴンチャロフはプチャーチンの秘書として来航し、幕末日本に関するこの興味深い記録を残した。この時ゴンチャロフはまだ『オブローモフ』の構想を携えていた（正確には1849年に『オブローモフの夢』を発表した後、執筆が中断していた）。もちろんこの作品は事実に立脚した旅行記であるが、これを「地理的長編小説」と見なす立場がある。これにしたがえば、この作品にもまたゴンチャロフの理念や世界観が反映されていると見ることができる。

『フリゲート艦「パルラダ」号』は長編小説である。なぜならそこで作り出された「発展する世界像」は、経験的実在や、才能豊かに（つまり生彩に富みかつ抒情的等）紙の上に単に再現された現象ではなく、確かに体験された風俗ルポルタージュの素材に基づき、独自の人道的理念に照らしながら固有のイメージを手段として、芸術家の想像力が創造した現象だからである¹⁶。

こうした観点から見れば、ペテルブルグを出発してポーツマス、ケープタウン、インド洋、上海、日本、琉球などを訪れ、シベリアから陸路ペテルブルグに帰還したこの旅は、地理的移動であると同時に、（西欧的視点から見れば）文明のさまざまな段階の横断と捉えることも可能である。ただしゴンチャロフの文明観全体を概観するのは本論の範囲を超える。ここでは進歩の中心と考えられてきたヨーロッパに対する見方に限定したい。

この旅行記においてゴンチャロフは日本を「鍵をなくしたまま閉ざされた玉手箱」と例えている。

さあこれが、この鍵をなくしたまま閉ざされた玉手箱が、われわれが

¹⁶ Недзвецкий В.А. «Фрегат “Паллада”» И.А. Гончарова как географический роман. // Статьи о русской литературе XIX-XX веков. Нальчик, 2011. С. 153.

これまで、あるいは金あるいは武器と狡猾な政策を用いて、交際に向かうよう努力を無駄に重ねながら覗き見てきた国なのだ。これが、巧妙に文明の監督から遁れて、みずからの知力とみずからの掟によって敢えて暮らそうとし、頑として外国人の友情と宗教と通商を拒否し、この国を啓蒙しようとする私たちの試みを嘲笑し、その蟻塚の国内の法律を、自然法にも、民権にも、その他あらゆるヨーロッパ的な法律にもいっさいの不法にも対立させている、人間家族の中のいくつもある集団なのだ¹⁷。

美しい例えではあるが、その表現からは、この「玉手箱」が「開かれる」ことは当然の前提であり、西欧的な近代化は「文明」と同等視され、そこへ向かうことは必然だと考えられているのが窺える。もちろんこうした考えは、当時のヨーロッパ的観点から見たある種の使命感として当然と言えるものですらあった。

ゴンチャロフは、疑いの余地なく、当時のヨーロッパ中心主義を共有しており、その範囲内で、シベリアと極東における啓蒙的使命をロシアに割り当てている¹⁸。

同じような視点は、幕府側の実質的交渉相手川路聖謨に対する人物評にも現れている。ゴンチャロフは彼の聡明さを人類に普遍的なものと称えている。だがその褒め方にヨーロッパ的な立場が露呈されており、川路をわざわざヨーロッパ人に擬して眺めているのだ。

さて、彼〔川路〕はどんなところがヨーロッパ人と違っているのだろう

¹⁷ Гончаров И.А. Фрегат «Паллада» // Полное собрание сочинений в 20 томах. Т. 2. 1997. С. 314. なお邦訳は『ゴンチャロフ日本渡航記』高野明・島田陽訳（講談社学術文庫、2008）P.59. を参照した。

¹⁸ Туниманов В.А. О русском миссионерстве («Путешествие в Арзрум» Пушкина и «Фрегат Паллада» Гончарова) // Мир филологии. М., 2000. С. 44.

か。あるときは正餐の席でケーキを懷紙に包み込んだし、またあるときは、とても彼の気に入った皿からアンチョビー・ソースをなめたところだろうか？だが、そんなことはその土地の風習であってそれ以上のものではない¹⁹。

『フリゲート艦パルラダ号』が三部作と共通のモチーフ「眠りと覚醒」を持ち、またそこに見られるゴンチャローフの日本観にヨーロッパ寄りのバイアスが存在する点は、すでに澤田和彦の的確な指摘もある。

『日本渡航記』では日本国と日本人が「眠っている」様子がたびたび描き出される。「眠り」、「眠そうな」という語句が繰り返し用いられていることは注目に値する。ゴンチャローフは二百年間鎖国下にあつて沈滞した日本の国家機構と日本人を、大国の誇りを持ってアイロニカルに描き出している。即ち、ここでも長編三部作と同じく〈眠り〉と〈覚醒〉の原理の対比が見られるのであつて、それは言い換えれば、アジアとヨーロッパ、東洋と西洋の対比でもある。但し、三部作とは逆に、ここでは作者が西洋の先進国の高みから東洋の小国を眺め下ろしている点に特色がある²⁰。

このようにゴンチャローフは非ヨーロッパ国家に対したときには、自らをヨーロッパおよび「文明」の位置に置いてそこから発言する。そのとき彼にとってロシアとヨーロッパは一体であり、ロシアもまた、当然のように、文明の一部を成すものなのだ。

しかしその同じ人物が、当時の進歩の最先端と考えられていたイギリスを訪れたときには、その世界に皮肉な眼差しを注がずにはいられない。パルラダ号は老朽化した帆船であり、ペテルブルグを出港した後、イギリスのポー

¹⁹ Гончаров И.А. Фрегат «Паллада». С. 482. 『ゴンチャローフ日本渡航記』P.335-336.

²⁰ 澤田和彦「鍵をかけた玉手箱」の国、日本—解説』『ゴンチャローフ日本渡航記』P.424.

ツマスで大規模な修理を行なっている。その際にゴンチャローフはロンドンを訪れているが、そこで以下のように述べている。

誠実、公正、同情は石炭のように採取されており、だから統計表に銅鉄製品や木綿と並べて、しかじかの法によりこれこれの地方や植民地のためにこれだけの法の審理が入手され、これこれの事件のために、大衆に静謐や風儀の沈静化のための資材が投じられた等と示すことができるのだろう。こうした美德は、必要とするところに投入され、車輪のごとく回転しているが、それゆえにこそ、これらの美德は暖かみと魅力が欠けている。顔つきや動作、振る舞いにはくっきりと善悪についての実用的意識が不可避の義務として書き込まれているのであって、生や歓び、魅力としてではない²¹。

ゴンチャローフは、イギリスに対しては、清潔で整然とした社会運営を称賛しつつ、社会的公正や慈善行為のような美德ですら産業のように効率化され、「暖かみと魅力が欠けている」と皮肉っているのだが、このとき彼は明らかにヨーロッパ人ではなく、ロシア人としてイギリスを批判していることになる。このように少なくとも『フリゲート艦パルラダ号』においてゴンチャローフのヨーロッパ像には微妙な違和感が感じられる。進歩という理想と、その実際の現れとの齟齬といってもいいかもしれない。そしてその齟齬は解消されているようには見えない。

5. 終わりに

穏健な西欧主義者としてゴンチャローフは近代化（＝進歩）を肯定的にとらえていた。彼はロシアの近代化にとって叔父ピョートルやシュトリツのような合理主義者や行動力を必要だと考えていた。それゆえこれらの人物像が

²¹ Гончаров И.А. Фрегат «Паллада». С. 50-51.

現実的ではないとの批判に対しては、後年の『遅まきながら』（1879）においても執拗に、自らの力量不足を認める一方その必要性を主張し続けている。

第二のもの [=ピョートル・アドゥーエフに体现されるもの]、つまり仕事、労働、知識の必要性という意識は、叔父に表現されているが、この意識は生まれたばかりであり、最初の兆候が窺えるだけで、完全な発達には程遠かった。始まりは弱々しく、不完全に、ほんの数カ所の個々の人物や小グループに現れ得るものだというのはよくわかる話であり、だから叔父の人物像は甥よりも生彩のない表現だったのである²²。

私はこの人物 [=シュトリツ] のために非難を受けたが、一面でそれは正しい。彼の表現は弱々しく生彩がない。彼からはあまりに理念がむき出しである。私自身がそれを意識している。しかし私が非難されたのは、なぜ彼を長編に持ち込んだかだった。なぜロシア人ではなくドイツ人を私がオブローモフの対極に置いたのだと非難されたのだ。

これに対して私は、自然発生的なロシアの特徴として怠惰と無気力をその幅いっぱい根元から描いたのだから、このことからだけでも、エネルギーと知識と労働、総じてあらゆる力の模範としてロシア人を並べてしまえば、停滞と眠りと不動性を描くという自分自身の課題と矛盾をきたしかねなかった、と答えることもできたろう。それにそんなことをしていたら、私は自分が長編のために選んだロシア的な一つの側面の完全性を損なうことになったはずだ。

だが私は当時黙ってこの否定を聞き入れ、シュトリツの人物像は生彩がなく非現実的で、生きておらず単なる理念だと同意した²³。

このゴンチャロフのことばに見られるように、彼にとってピョートルや

²² Гончаров И.А. Лучше поздно, чем никогда. С. 109.

²³ Гончаров И.А. Лучше поздно, чем никогда. С. 115.

シュトリツが体现する活動や労働，知識はこれからの社会に必要と考えられるものだったのである。だが同時に，そうした合理主義や進歩が招き寄せるものへの危惧をおぼろげに感じていた。合理主義（あるいはその延長上にある唯物論的思考）は，数値化や計量化できない「暖かみと魅力」，言い換えれば精神的価値，の喪失を導くのではないかという『フリゲート艦バルラダ号』に示された齟齬は，解けない謎「アポリア」として『オブローモフ』に書き込まれてしまったのではないだろうか。『オブローモフ』という作品が，二つの原理を巡る物語ではなく，進歩にも過去にも向かうことができずただ「立ち尽くす」主人公を描く物語として造形されてしまった理由もそこに求めることができる。それはいわばゴンチャロフのアポリアのかたちそのものなのだ。だからこそオブローモフにはこうした進歩の帰結の果てに滅びることを危惧されるものが付与されているのかもしれない。あらためて小説からそれを拾い上げれば主人公の「鳩のようなやさしさ」や，彼に対するアガーフィヤと子供たち，ザハールの主人への思慕であり，オリガとシュトリツから寄せられた友情ということになるだろう。けれどもこうした要素はシュトリツやオリガのように「前に進む」人物への対抗原理として明示されてはいるわけではない。その意味で，虚しく滅びていくオブローモフにそっと添えられたこうした特徴は，決して主調音ではなく『オブローモフ』という作品の中で倍音のように響いている。だがそれはあくまで倍音的としか言いようのないものである。したがってこの作品を二項対立的に読むのは，『オブローモフ』という作品の問題ではなく，読み手の側の価値観の問題なのかもしれない。

しかしこの倍音を含みこむことによって『オブローモフ』は農奴制という過去に照準を当てた作品ではなく，未来に向けられた作品，すなわちロシアの近代化が抱えた問題を射程に入れた作品となったと考えられるだろう。あるいは19世紀半ばから顕著になっていく進歩そのものに潜む問題を問う意味を獲得したと言えるのかもしれない。例えば『オブローモフ』に株式にまつわるささやかな論争が書き込まれているのは偶然ではない。それは株式に無知なオブローモフと株式を熟知したシュトリツの対立を通じて，シュトリ

ツの体現する合理主義が近代資本主義とつながることを示唆している。林業の機械化を導入するトゥーシン（『断崖』）も含めて、ゴンチャロフの三部作の背後には、近代化に伴う同時代の変化が視野に入っていたことが十分に想像できる。また『オブローモフ』が発表された1859年は、イギリスでダーウィンの『種の起源』が表された年でもある。もちろんそれはただの偶然に過ぎないのだが、聖書の権威を決定的に否定することになる『種の起源』は、人類史において科学的思考が宗教に取って代わる分岐点を象徴的に示しているように思われる。あるいは『種の起源』がこの事態を引き起こしたというより、『種の起源』の出版を許容する程度に、この転換が熟成しつつあった証とも言える。こうした問題にまつわる意識がすでにこの時期のロシアに胚胎していたことは、例えば『オブローモフ』の5年後に発表された『地下室の手記』（1864）からも窺うことができる²⁴。「自然法則」（＝科学的必然性）を敵視してやまない「地下室人」はもちろんオブローモフと似ても似つかないが、それらは同じ圏域の問題系に関わっている。このように、近代化するロシアと精神的価値観の組み替えをアポリアとしてとらえたという観点から、あらためて『オブローモフ』と作者ゴンチャロフを位置付け直す必要があるのだろう。

²⁴ この時期のダーウィン受容については以下を参照されたい：高田映介『世界の瞬間 チェーホフの詩学と進化論』（水声社、2020）

«Обломов» и прогресс

Иккю ОНИСИ

И. А. Гончаров (1812- 1891) — один из классиков русской литературы 19-го века, особенно прославившийся своим романом «Обломов» (1859). В данной статье мы проанализировали это произведение в связи с прогрессом в понимании Гончарова.

Вокруг романа долго не утихали споры, о нём высказывались противоположные мнения. Например, Н.А. Добролюбов считал обломовщину и Обломова негативным явлением, порождением крепостничества в дореформенной России, а А.В. Дружинин рассматривал главного героя как светлую и чистую личность.

Не вдаваясь в подобные споры, отметим неподвижность героя романа как его отличительную черту. Применив в своём анализе понятие хронотопа Бахтина, мы видим, что Обломов остаётся в пространстве Выборгской стороны, то есть в промежуточном хронотопе между Петербургом и Обломовкой, и во временной неподвижности — не тяготея ни к прогрессу, ни к прошлому.

Будучи близким западной тенденции, Гончаров одобрял прогресс, что отражается в антиподах главных героев его трилогии, в которой, по словам самого писателя, изображается «сон и пробуждение». К пробуждению он относит рациональность ума, практичность поступков, распространение новейших технологий и так далее. Показательно, однако, что в последнем романе «Обрыв» (1869) автор вывел в качестве отрицательного персонажа одного из антиподов, нигилиста-материалиста Волохова.

Возможно, Гончаров опасался, что рационализм прогресса и практицизм неизбежно пронизывают общество материализмом и приводят к забвению нравственных ценностей. За десять лет до «Обрыва», работая над «Обломовым», он задавался этим вопросом: можно ли отрицать материализм, одобряя прогресс?

Подобные сомнения мы можем наблюдать и в другом его произведении, «Фрегате «Паллада» (1858). В своих путевых очерках а автор рассматривает Японию, как кажется, с позиции миссионера европейской цивилизации. В то же время, при посещении Англии, самой прогрессивной страны того времени, он с точки зрения русского иронизировал над чрезвычайной холодностью английской цивилизации.

В своём путешествии, обдумывая замысел будущего романа «Обломов», он так и не нашёл ответов на мучившие его сомнения. Возможно, противоречивое отношение Гончарова к прогрессу заставило его создать этот образ героя, неспособного развиваться ни в какую сторону. Иначе говоря, в нём отразилась искания самого автора, так и не определившего своего отношения к прогрессу.

Таким образом, мы можем перечитывать «Обломова» не ретроспективно, а перспективно в свете проблемы прогресса, начавшегося в середине 19-го века и продолжающегося в наши дни.

北海道太平洋沿岸における 津波浸水想定域の空間分析

橋 本 雄 一

1. はじめに

2011年3月11日に発生し、大きな人的被害および経済的被害をもたらした東日本大震災を教訓として、2012年3月27日に閣議決定された地理空間情報活用推進基本計画（第2次）では、地理空間情報やGISを利用した防災力の強化が目標の1つとされている（橋本，2013a）。この防災力を強化として、津波災害では津波浸水想定域の推定や地理空間情報の提供が重要となる。

推定された津波浸水想定域の地理空間情報は、ハザードマップなどの形で住民に公開される。ハザードマップは、単なる危険範囲の情報提供を行うだけでなく、行政と住民と間でリスク・コミュニケーションを行うツールとしても有効である（片田ほか，2007；本間・片田，2009）。また、GISなどで津波浸水想定域の人口推定を行うことができれば、地域の人口特性に応じた効果的な避難計画の策定が可能となる（橋本，2014）。さらに、その人口を年齢別に推定できれば、幼児や高齢者など自主的避難が困難な年齢層に対する具体的な避難計画を考えることができる（橋本，2013bc）。特に津波浸水想定の変更があった場合には、住民の受ける影響を明確化し、新たな災害対策の基礎的データとするために、この情報は有効に活用できる（橋本編，2017）。このように津波浸水想定は防災に欠かせない重要な情報である。

現在の日本における津波浸水想定の設定は、2011年12月7日に成立した「津波防災地域づくりに関する法律」（平成23年法律第123号）（以後、津波

防災地域づくり法)により定められ、それによって多くの都道府県で津波浸水の区域や水深に関する情報公開が都道府県から公表されるようになった。この法律は、東日本大震災の発生後、2011年7月6日に国土交通大臣からの要請を受けて社会資本整備審議会・交通政策審議会交通体系分科会計画部会から提出された緊急提言「津波防災まちづくりの考え方」(社会資本整備審議会・交通政策審議会交通体系分科会計画部会、2011)を基に作られ、「津波による災害を防止し、又は軽減する効果が高く、将来にわたって安心して暮らすことのできる安全な地域の整備、利用及び保全(津波防災地域づくり)を総合的に推進することにより、津波による災害から国民の生命、身体及び財産の保護を図る」ために、「公共の福祉の確保及び地域社会の健全な発展に寄与すること」を目的としている(国土交通省、2012)。

津波防災地域づくり法は、それ以前の大規模地震対策特別措置法などと較べて、頻度の高い津波(L1)よりも最大クラスの津波(L2)を想定するようになり、特定の津波災害への対策から将来発生しうる津波災害全般への対策にシフトしている。また、各主体が実施する政策を組み合わせた総合的な計画を市が策定することや、防災に加え地域づくりの観点から計画を策定することなども示されている。

この法律で重要視されているのは、ハードとソフトの施策を組み合わせた「多重防御」による防災のための地域づくりである。そのためには、災害で被害を受ける可能性がある範囲を特定することが重要となり、特に東日本大震災で生じたような津波に対しては浸水想定域の推定が必須となることから、国土交通省は2012年に「津波浸水想定の設定の手引き」を作成して(国土交通省水管理・国土保全局海岸室、国土技術政策総合研究所河川研究部海岸研究室、2019)、津波浸水シミュレーションやその活用方法を中心にとりまとめている。

北海道太平洋沿岸においては、この法律に基づき日本海溝及び千島海溝沿いの巨大地震で引き起こされる津波の浸水想定が行われている。日本海溝及び千島海溝沿いでは、プレート境界での地震や地殻内や沈み込むプレート内での地震などにより、過去に巨大地震や津波が発生していることから、中央

防災会議の日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に関する専門調査会は 2006 年に報告書「日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震の被害想定について」を公表し（中央防災会議 日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に関する専門調査会, 2006）、同年、中央防災会議で決定された「日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震防災対策推進基本計画」などに基づいた防災対策が推進されている。その後の検討で政府の地震調査研究推進本部は、2021 年 1 月 1 日の時点で、根室沖のプレート間巨大地震（マグニチュード 7.8～8.5 程度）について、30 年以内の発生確率を 80% 程度としている（地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2021）。

北海道は、日本海溝及び千島海溝沿いの巨大地震についての対策についての検討を重ねて、独自の津波浸水シミュレーションによって、2012 年に津波浸水想定（以後、「旧想定」と呼ぶ）を公表した（北海道, 2012）。その後、北海道は国土交通省が定める「津波浸水想定の設定の手引き」の設定方法に従って、2021 年 7 月に津波防災地域づくり法の第 8 条第 1 項に基づき、新しい津波浸水想定（以後、「新想定」と呼ぶ）を公表した（北海道, 2021）。この新想定と旧想定とでは浸水範囲が大きく異なる市町村もあるため、新想定での津波の影響を明らかにすることは急務である。

そこで本研究は、北海道で新たに公表された太平洋沿岸の津波浸水想定について、地理空間情報と GIS を援用して浸水想定域の面積や人口を推定し、旧想定との比較を行うことで地域特性を明らかにする。それによって、津波浸水想定の変更による太平洋沿岸地域全体への影響を明確化するとともに、新想定に基づく災害対策のための基礎的資料を提示する。

研究方法は以下の通りである。まず、第 2 章では津波浸水想定の新旧データについて解説し、第 3 章では浸水想定域の人口推定を行う方法について説明を行う。次に、第 4 章では北海道太平洋沿岸における浸水想定面積について、市町村別および深度別で新旧想定と比較を行う。第 5 章では、浸水想定域における夜間人口と昼間人口を推定し、市町村別、深度別、年齢階級別に新旧想定と比較を行う。第 6 章では、北海道太平洋沿岸に位置する 8 市を取り上げ、各市の浸水想定域に関する面積と昼夜間人口を深度別に推定し、新

旧想定を比較する。第7章では、この8市について新想定 of 浸水域における人口変化を深度別および年齢階級別に見ることで、浸水想定域における人口特性について検討する。ここでは特に、浸水想定域における高齢者の分布に注目する。最後に、以上の結果を統合して、北海道太平洋沿岸の津波浸水想定域における旧想定と新想定の違いを明確化した上で、新想定 of 浸水域における人口特性を明らかにする。

2. 北海道太平洋沿岸における津波想定域 of 人口推定 of 方法

2-1 2012 年公表 of 津波浸水想定 (旧想定)

まず、本研究で用いる北海道太平洋沿岸 of 津波浸水想定データについて解説する。2012 年度に作成された北海道太平洋沿岸における津波浸水想定 (旧想定) は、渡島総合振興局から根室振興局までの範囲で (図1)、最大クラス of 津波が発生した場合に想定される浸水 of 区域 (浸水域) と水深 (浸水深) を設定したものである。

この設定は、東日本大震災 of 生起後に北海道が、中央防災会議 of 「あらゆる可能性を考慮した最大クラス of 巨大な地震・津波を検討していくべきである」という考え方に沿って、津波堆積物 of データを重視し、太平洋沿岸 of 最大クラス of 津波 of 浸水シミュレーションを行った結果である (北海道, 2012)。このシミュレーションでは、沈み込む太平洋プレートと陸側プレート of 境界にある幅 140 km, 長さ 420 km of 矩形断層が津波波源を発生させるものとして設定され、北海道沿岸側 of 断層面上に 30 m, 海溝側の断層面上に 35 m of 一様なすべり量が与えられた。推定 of 結果, 旧想定における沿岸部 of 波高は、津波堆積物から推計される波高をほぼすべて上回るものとなった。

なお、旧想定に関する GIS データは、福島町から羅臼町までの太平洋沿岸に関する推定結果を平面直交座標系 (世界測地系) of シェープファイル形式として記録したものであり、市街地部分は 10 m メッシュ、それ以外は 50 m メッシュを単位として 2021 年 7 月まで北海道ウェブサイトにおける防災 of ページで公表された。

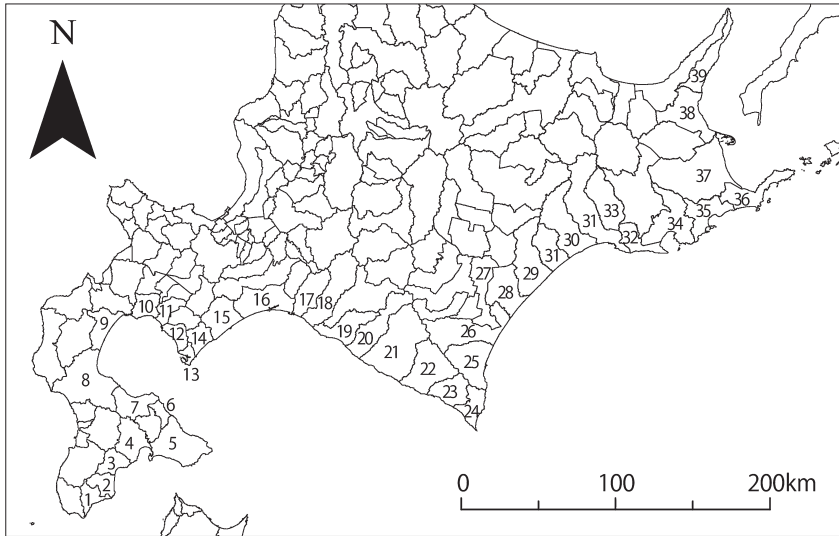


図1 北海道太平洋沿岸における津波浸水想定域の市町村

津波浸水想定が設定されているのは番号の付いている市町村。〈太平洋沿岸西部〉1. 福島町, 2. 知内町, 3. 木古内町, 4. 北斗市, 5. 函館市, 6. 鹿部町, 7. 森町, 8. 八雲町, 9. 長万部町, 10. 豊浦町, 11. 洞爺湖町, 12. 伊達市, 13. 室蘭市, 14. 登別市, 15. 白老町, 16. 苫小牧市, 17. 厚真町, 18. むかわ町, 19. 日高町, 20. 新冠町, 21. 新ひだか町, 22. 浦河町, 23. 様似町, 24. えりも町。〈太平洋沿岸東部〉25. 広尾町, 26. 大樹町, 27. 幕別町, 28. 豊頃町, 29. 浦幌町, 30. 白糠町, 31. 釧路市, 32. 釧路町, 33. 鶴居村, 34. 厚岸町, 35. 浜中町, 36. 根室市, 37. 別海町, 38. 標津町, 39. 羅臼町。

2-2 2021 年公表の津波浸水想定（新想定）

2021 年 7 月 19 日に公表された新しい北海道太平洋沿岸における津波浸水想定（新想定）は、津波防災地域づくり法の第 8 条第 1 項に基づいて、旧想定と同じ範囲で設定されたものである。

2020 年 4 月に、国が「日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデル」を公表したことを受け、北海道は北海道防災会議地震火山対策部会地震専門委員会に「津波浸水想定設定ワーキンググループ」を設置し、国が示した考え方を基本として、太平洋沿岸で最大クラスの津波（L2 津波）が発生した場合の浸水想定を新たに設定した。

新算定の計算手法は、国土交通省の「津波浸水算定の設定の手引き

Ver.2.10」(2019年4月)によるものであり、推定結果が公表されている地震は千島海溝(十勝・根室沖)モデルと日本海溝(三陸・日高沖)モデルである。千島海溝モデルの破壊開始点としては十勝沖、釧路沖、根室沖の3地点、日本海溝(三陸・日高沖)モデルでの破壊開始点としては三陸沖、日高沖の2地点が設定されている。

新想定に関するGISデータも、旧想定と同様に福島町から羅臼町までの太平洋沿岸に関する推定結果を平面直交座標系(世界測地系)のシェープファイル形式で記録したものである。このデータは、2021年7月から北海道ウェブサイト(<https://www.constr-dept-hokkaido.jp/ks/ikb/sbs/tsunami/shinsuisoutei/index2.html>)において10mメッシュ単位で公表されている。

なお、新旧の津波浸水想定深度は、任意の地区において想定される複数の津波浸水の中で、浸水深度が最大となる数値を採用したものであり、特定の津波による浸水の深度を示すものではない。

3. 津波浸水想定域における人口の推定方法

前述した新旧の津波浸水想定データと人口データを用いて、津波浸水想定域に分布する人口の推定を行う。人口データとしては、夜間人口と昼間人口の2種類を用いる。夜間人口のデータは、2000年および2015年の国勢調査小地域データ(総人口、年齢階級別人口)である。また、昼間人口のデータは、株式会社日本統計センターが作成した2000年および2015年の推計昼間人口データ(総人口、年齢階級別人口)である。この推計昼間人口データは、国勢調査小地域データの通勤通学者数などから推計されたもので、2015年の国勢調査の小地域を空間的単位として整備されている。なお、推計昼間人口データでは14歳以下については1つの年齢階級として合計されており、夜間人口の年齢階級区分とは異なる。

本研究は、橋本編(2017)を参考にして、以下の通りに津波浸水想定域の人口推定を行う(図2)。(1)まず、新旧想定津波浸水想定データを、津波深度1m間隔で分類し、GISのディゾルブ(dissolve)機能を使って同じ深

度帯のメッシュを結合させ、新しい空間データを作成する。(2)次に、国勢調査小地域データおよび推計昼間人口データの小地域ごとに総人口と年齢階級別人口について人口密度を算出する。(3)続いて、深度帯のメッシュを結合させた津波浸水想定データと、国勢調査小地域データおよび推計昼間人口データを重ね合わせ、GISのインターセクト(intersect)機能を使って両データの境界線と属性を併せ持つ新しい地区単位 of データを作成する。(4)さらに、新しい地区単位ごとに面積を計算し、この面積と人口密度との積から、地区ごとの人口を算出する。(5)最後に、地区ごとの人口を津波深度別、もしくは市町村別に集計する。

以上のように人口を新しい空間単位で面積按分し再集計することで、1m間隔の津波深度別、もしくは市町村別の津波浸水想定域人口を推定することができる。なお、本研究で示す推計人口は、この津波の浸水が想定される地域に分布する人口であり、被災予測人口とは異なる。

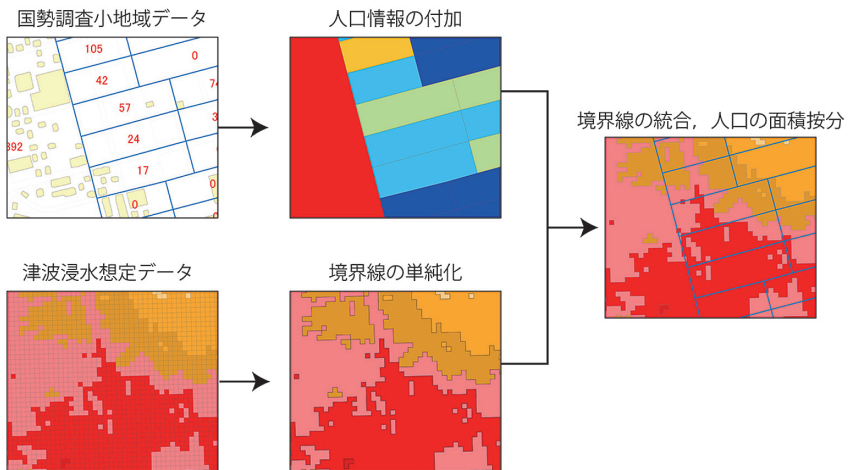


図2 津波浸水想定域における人口の推定方法

4. 北海道太平洋沿岸における津波浸水想定面積の比較

4-1 津波浸水想定域の市町村別面積

本研究で推定した福島町から羅臼町にかけての北海道太平洋沿岸における津波浸水想定面積を見ると、旧想定は約10万1千ヘクタール、新想定は約9万2千ヘクタールであり、新想定は旧想定面積の0.91倍になっている。

市町村別に新旧の想定面積を比較すると(図3)、旧想定で最も大きいのが釧路市の約1万4千ヘクタールであり、それに根室市、苫小牧市が続く。また、旧想定で浸水面積が5,000 ha以上の市町村は、これら3市に加え浦幌町、別海町、大樹町、浜中町である。

新想定で最も面積が大きいのは苫小牧市の約1万ヘクタールであり、それに釧路市、別海町が続く。新想定で浸水面積が5,000 ha以上の市町村は、これらに加え浦幌町、根室市、浜中町である。

旧想定面積を1.00とした場合の新想定面積として新旧面積比率を求めると、最も大きいのは福島町の1.87であり、それに北斗市の1.64、木古内町の1.52が続く。また、新想定になって浸水想定面積が最大となった苫小牧市の比率は1.40である。比率が最も小さいのは広尾町の0.58であり、それに根室市、豊浦町が続く。旧想定で面積が最大であった釧路市は0.65であり、新想定は旧想定面積の3分の2程度の面積となっている。釧路市における面積の縮小には、旧想定公表以降に釧路外環状道路が開通し、そのために市街地を囲む盛り土が行われたことなども影響していると思われる。

このように旧想定で比較的大きな浸水面積を示した太平洋沿岸東部の市町村は、新想定になって面積が小さくなり、逆に旧想定で浸水面積が小さかった西部の市町村では、新想定になって面積が大きくなっている。なお、苫小牧市は、新想定になって釧路市以西で突出して大きな浸水面積を示している。

4-2 津波浸水想定域の深度別面積

深度別に新旧の浸水想定面積を比較すると(図4)、いずれも深度が高いほ

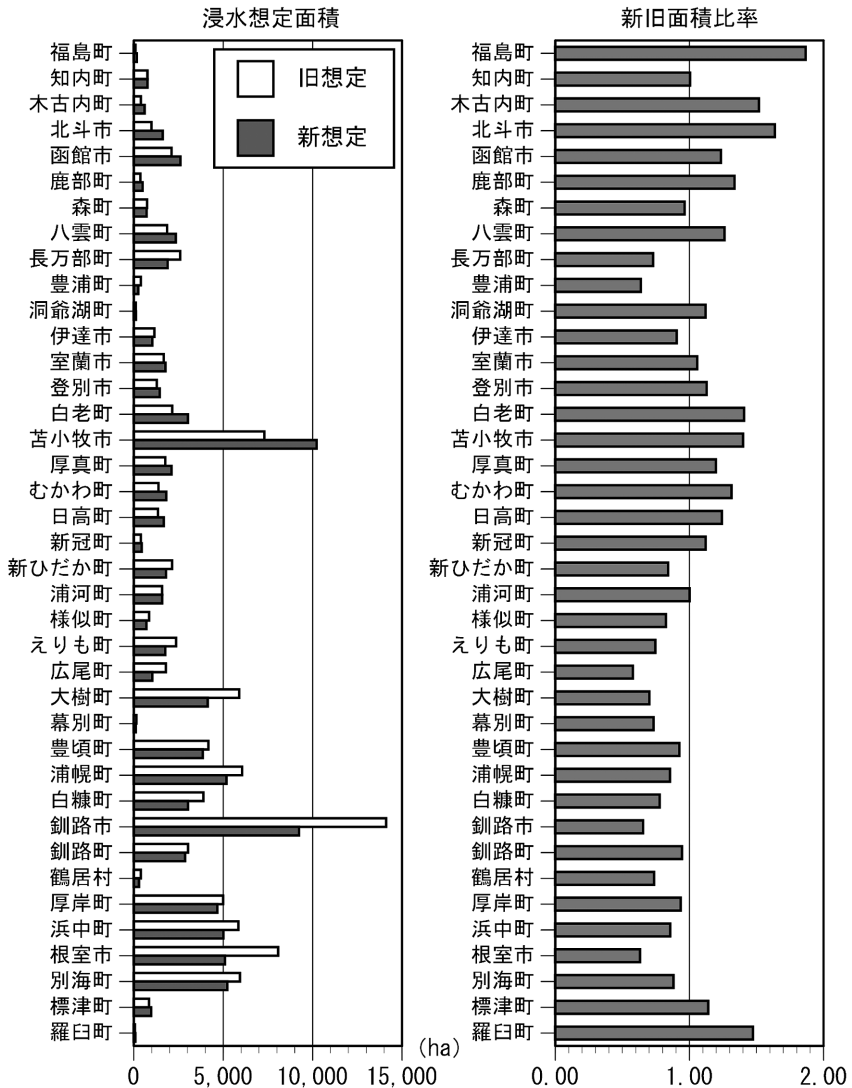


図3 新旧津波浸水想定在市町村別面積

新旧面積比率は旧想定を1.00とした場合の新想定の数値。旧想定は2012年、新想定は2021年に北海道が公表したデータ津波浸水想定GISデータにより作成。図4～図21も同様。

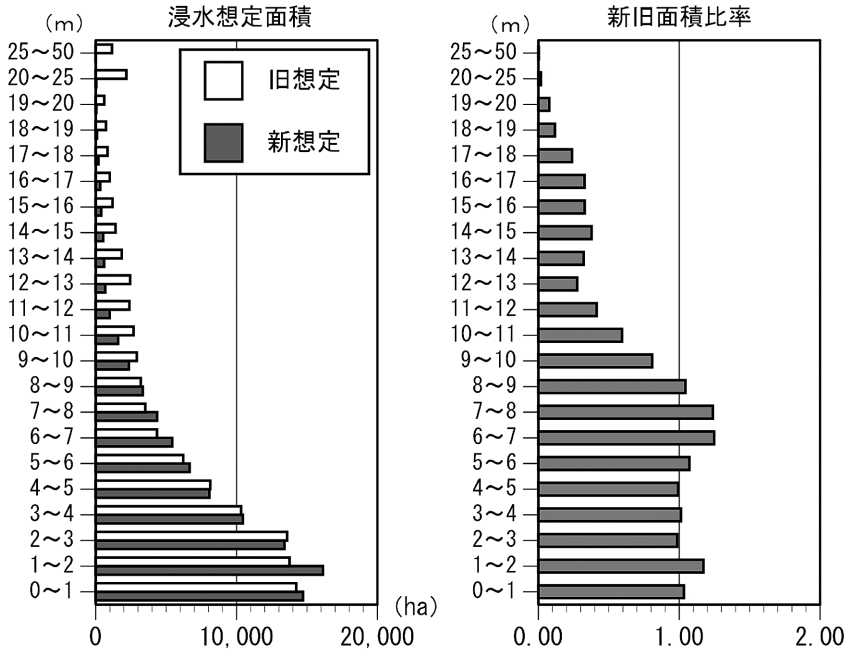


図4 新旧津波浸水想定の深度別面積

ど面積が小さくなる傾向がある。ただし、旧想定で最も面積が大きい深度は1 m未満であるが、新想定では深度1～2 mが最大となる。

新旧面積比率を見ると、深度2m未満、3～4m、5～9mは1.00を超えており、新想定の方が面積は大きい。深度2～3mと4～5mは0.99であり、ほぼ同じ面積となっている。深度9m以上では旧想定の方が大きく、特に11m以上において新想定の実績は旧想定の実績の半分以下になる。このように、新想定は旧想定と比較して、比較的低い深度の実績が大きく、逆に高い深度の実績が小さくなっていることがわかる。

5. 北海道太平洋沿岸における津波浸水想定人口の比較

5-1 津波浸水想定域の市町村別人口

(1) 新旧想定と比較

太平洋沿岸の津波浸水想定域に分布する夜間人口を、2015年国勢調査小地域データから推定すると、旧想定では約41万8千人、新想定では約48万人となり、6万2千人ほど新想定の方が多い。また、昼間人口は、旧想定では約45万7千人、新想定では約52万7千人となり、7万人ほど新想定の方が多くなる。前述のように新想定は浸水想定面積は旧想定より小さいが、新想定は昼夜間人口は旧想定より多い。これは東部で釧路湿原のような人口の少ない地域で浸水想定域が狭くなり、逆に西部では人口が多い市街地で想定域が広がったことによる。なお、昼間人口と夜間人口を比較すると、旧想定では3万9千人、新想定では4万6千人ほど昼間人口の方が多く、新旧想定とも昼間に浸水想定域へ流入する人口が、流出する人口を上回る。

2015年における市町村別の夜間人口を推定すると（図5）、旧想定で最も人口が多いのは釧路市の約12万5千人であり、それに函館市、苫小牧市が続く。新想定では釧路市の約11万6千人が最も多く、苫小牧市は2位に上がり、函館市は3位となっている。上位3市の浸水想定人口が全体に占める比率は、旧想定が56.51%、新想定が59.76%であり、浸水想定域に分布する人口の半分以上が、これらの市に集中していることがわかる。なお、新想定の方が旧想定より若干高いのは、苫小牧市と函館市の浸水想定域が広がり、約6万人の夜間人口が新たに浸水範囲に含まれたことによる。

2015年の昼間人口を推定すると、夜間人口と同じく、旧想定で最も人口が多いのは釧路市の約13万1千人であり、それに函館市、苫小牧市が続く。新想定では釧路市の約11万9千人が最も多く、それに苫小牧市、函館市が続く。上位3市の浸水想定人口が全体に占める比率は、旧想定で57.01%、新想定で60.05%と全体の半分以上であり、苫小牧市や函館市の浸水想定域に7万人近くの昼間人口が含まれたため、新想定は3市への集中が高くなっている。

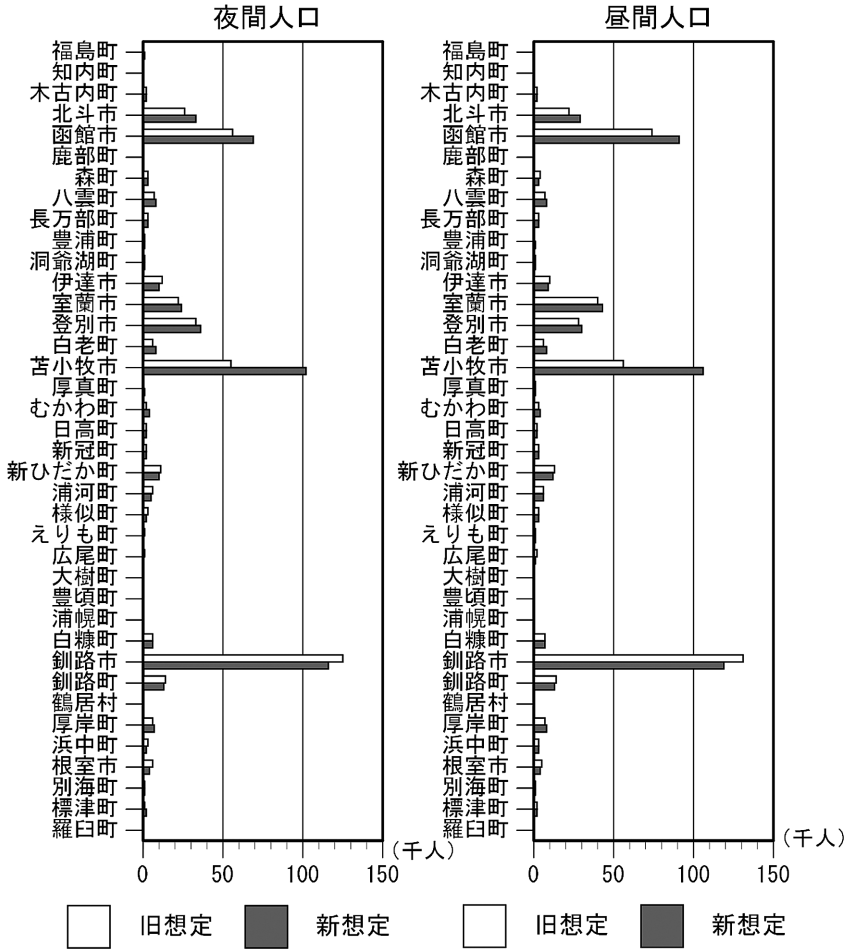


図5 津波浸水想定域における市町村別人口の新旧比較

国勢調査小地域データ，昼間人口は株式会社日本統計センターの推計昼間人口データにより推定。市町村の境界は国土地理院基盤地図情報を使用。図6～図21も同様。

(2) 新想定による人口変化

新想定 of 浸水想定域に分布する 2000 年と 2015 年の夜間人口を推定すると (図 6), 2000 年には約 53 万 9 千人であったのが, 2015 年には約 48 万人となり, 人口増減率は -10.80% である。

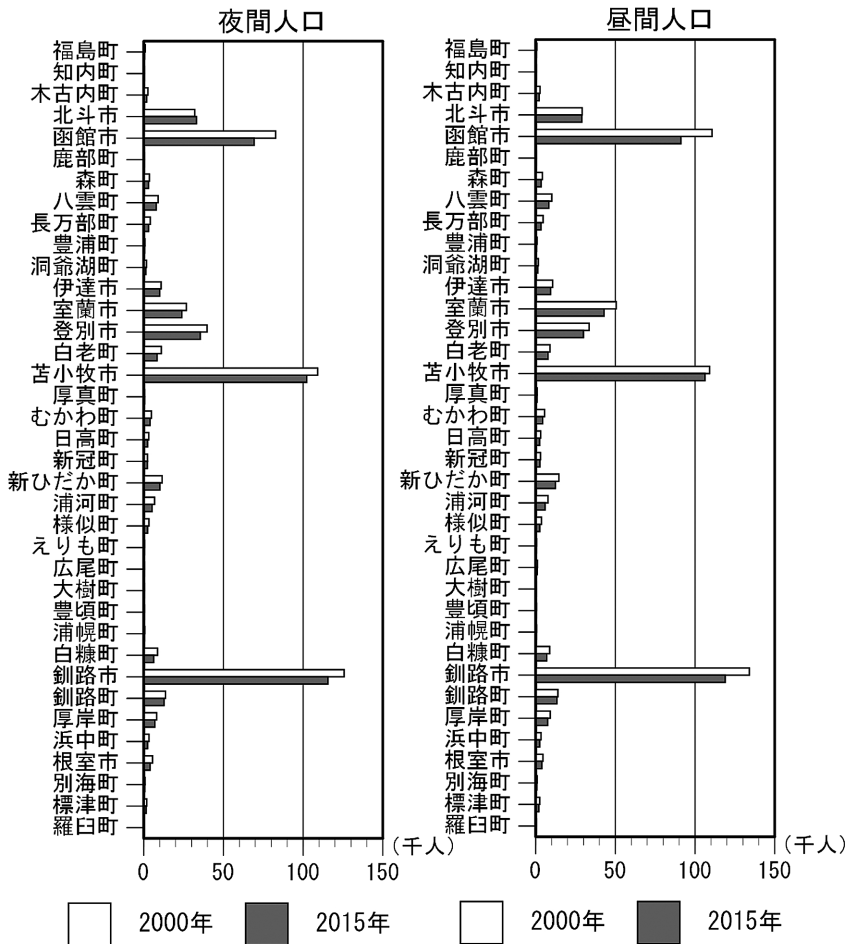


図 6 津波浸水想定域における市町村別人口の変化 (新想定)

市町村別の夜間人口で 2000～2015 年に増加が見られるのは、北斗市と厚真町の 2 箇所のみであり、他はすべて減少している。特に浸水想定域人口の多い釧路市は約 1 万人、苫小牧市は約 7 千人、函館市は約 1 万 3 千人と合計で約 3 万人が減少しており、減少数の 52.34%を占めている。

昼間人口は、2000～2015 年に、すべての市町村で減少している。苫小牧市の減少数は約 3 千人と夜間人口より少ないが、釧路市は約 1 万 5 千人、函館市は約 2 万人と、夜間人口よりも減少幅が大きい。これら 3 市の減少数の合計は約 3 万 8 千人であり、浸水想定域全体の減少数に占める割合は、夜間人口とほぼ同様の 52.54%となる。

なお、市部の人口増減率は夜間人口が-8.97%、昼間人口が-10.57%であり、町村部は夜間人口が-18.25%、昼間人口が-17.63%であることから、減少の比率としては町村部の方が大きい。

5-2 津波浸水想定域の深度別人口

(1) 新旧想定と比較

津波浸水想定域の夜間人口を深度別に見ると(図 7)、旧想定で最も人口が多い深度は 1 m 未満の約 6 万 7 千人であり、深度が低いほど浸水想定域人口が多くなる傾向がある。それが新想定では、深度 2～3 m の約 9 万人が最大で、続いて 1 m 未満、1～2 m と、旧想定よりも若干高い深度で人口が多くなる。

新旧想定とも人口の多い深度 3 m 未満に注目すると、旧想定は約 19 万 4 千人、新想定は約 25 万 1 千人となり、新想定の方が 5 万 7 千人ほど多い。また、この深度の人口が浸水想定域人口全体に占める割合では、旧想定が 47.94%、新想定が 52.30%となり、新想定の方が低い深度に人口が集中している。

深度別の昼間人口を見ると、深度 7 m 未満では新想定の方が多く、7 m 以上では旧想定の方が多い。深度 7 m 未満の人口を見ると、旧想定は約 34 万 9 千人、新想定は約 45 万 6 千人となり、新想定の方が 10 万 7 千人ほど多い。この 7 m 未満の人口が全体に占める割合は、旧想定が 86.34%、新想定が

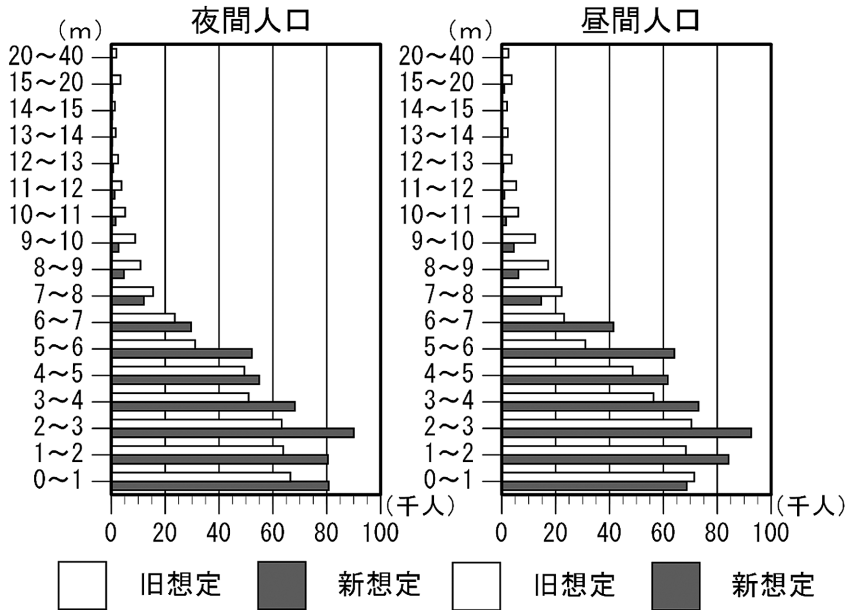


図7 津波浸水想定域における深度別人口の新旧比較

94.96%であり、いずれの想定でも人口の大部分が、この深度に分布している。

(2) 新想定による人口変化

新想定 of 浸水域について 2000～2015 年における夜間人口の深度別変化を見ると (図8)、すべての深度で人口が減少している。特に減少数が多いのは深度 2～6 m であり、2 m 未満の深度では減少幅は小さい。

深度 3 m 未満の人口を見ると、2000 年には約 26 万 7 千人であったのが、2015 年には約 25 万 1 千人となっている。全体に占める割合は、2000 年には 49.71%、2015 年には 52.30% と、低い深度における人口の割合が高まっている。

昼間人口でも、2000～2015 年には、すべての深度で人口が減少している。特に減少数が多いのは深度 2～7 m であり、夜間人口よりも若干高い深度に

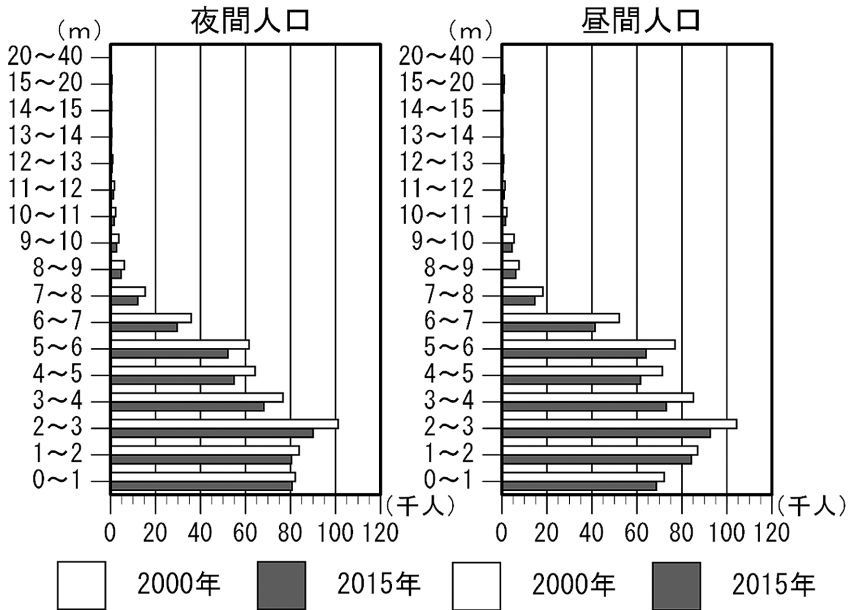


図8 津波浸水想定域における深度別人口の変化（新想定）

なっている。なお、夜間人口と同様に、2m未満の深度では減少幅が小さい。

深度3m未満では、2000年には約26万3千人であったのが、2015年には約24万5千人となっている。全体に占める割合は2000年が44.93%，2015年が47.61%と、低い深度における人口の割合が高まっているものの、夜間人口よりは、この深度への集中度が低い。そのため、いずれの年次でも昼間には高い浸水深での人口比率が高いことがわかる。

5-3 津波浸水想定域の年齢階級別人口

(1) 新旧想定と比較

2015年の夜間人口を年齢階級別に見ると（図9）、旧想定でも新想定でも75歳以上の人口が最大であり、30歳代以下は若いほど人口が少なくなる傾向にある。65歳以上の高齢者に注目すると、旧想定では約12万5千人、新

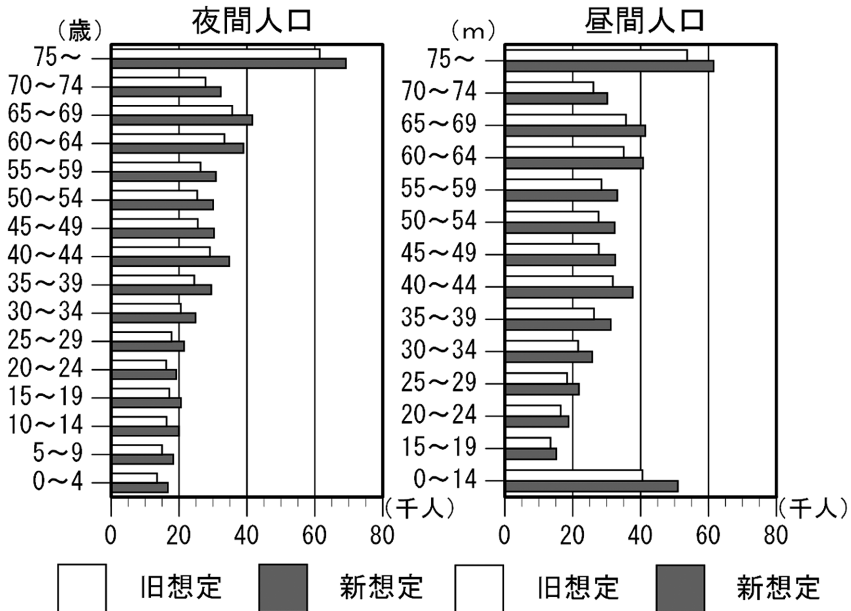


図9 津波浸水想定域における年齢別人口の新旧比較

想定では約14万3千人であり、新想定の方が1万8千人ほど多い。しかし、全体に占める高齢者の割合は、旧想定が30.80%、新想定が29.89%と同程度である。

2015年の昼間人口を年齢階級別に見ると、夜間人口と同じく75歳以上が新旧想定で最大であり、30歳代以下では若いほど人口が少なくなる。なお、前述したように、本研究で用いる昼間人口のデータでは、14歳以下の人口が合計されている。65歳以上を見ると、旧想定では約11万5千人、新想定では約13万3千人であり、新想定の方が1万8千人ほど多い。しかし、全体に占める高齢者の割合は旧想定が28.68%、新想定が28.13%と大きな差は見られない。

(2) 新想定による人口変化

新想定 of 浸水域に関して夜間人口の年齢階級別変化を見ると (図 10), 2000~2015 年には, 39 歳以下と 45~59 歳の人口が減少しており, 特に 25~29 歳は -44.74%, 20~24 歳は -32.26% と高い減少率を示す。逆に増加しているのは 40~44 歳と 60 歳以上であり, 75 歳以上の増減率が 81.58% と著しく高い。65 歳以上を見ると, 2000 年に約 9 万 7 千人であったのが 2015 年には約 14 万 3 千人と 47.42% の増減率を示す。浸水想定域の人口全体に占める高齢者の割合は, 2000 年の 18.03% から 2015 年の 29.92% へと高まっている。

次に昼間人口を見ると, 39 歳以下と 45~59 歳の人口が減っており, 特に 25~29 歳は -45.34%, 20~24 歳は -40.46% と減少が著しい。増加しているのは 40~44 歳と 60 歳以上であり, 特に 75 歳以上の増減率は 81.59% と高

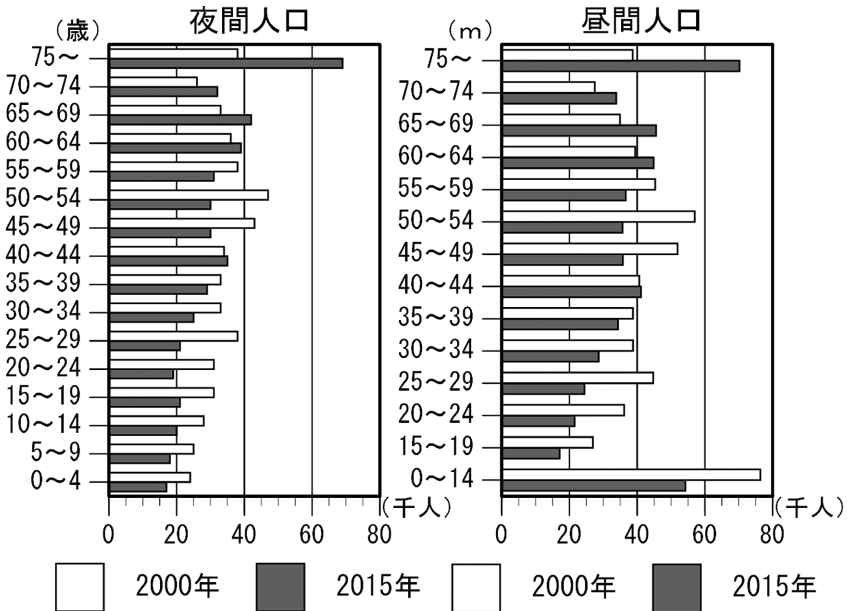


図 10 津波浸水想定域における年齢別人口の変化 (新想定)

い。65 歳以上の高齢者を見ると、2000 年に約 10 万 1 千人であったのが、2015 年には約 15 万人となり、増減率は 48.01%である。全体に占める高齢者の割合は夜間人口と同様に高まっており、2000 年には 16.93%、2015 年には 28.55%である。

6. 市部における津波浸水想定面積と人口の比較

6-1 津波浸水想定域の深度別面積

北海道太平洋沿岸に位置する 8 市（北斗市、函館市、伊達市、室蘭市、登別市、苫小牧市、釧路市、根室市）に注目し、より詳細に津波浸水想定域の面積と人口に関する分析を進める。まず、深度別の範囲を新旧想定で比較すると（図 11）、東部の釧路市や根室市では旧想定に較べて新想定は浸水範囲が狭くなっており、特に釧路市では釧路湿原の一部が浸水範囲から外れている。逆に西部の市では旧想定よりも新想定は浸水範囲が広がっており、特に苫小牧市、函館市、北斗市では、拡大した範囲に市街地が含まれる。

8 市について深度別の面積を新旧想定で比較すると（図 12）、太平洋沿岸東部にある釧路市はすべての深度で、根室市は深度 2 m 未満と 10～15 m を除く深度で、新想定は面積が旧想定よりも小さくなる。逆に、西部の 6 市では、高い深度ほど新想定は面積が旧想定よりも大きくなる。特に、北斗市と苫小牧では深度 3～7 m、函館市では 4～6 m、室蘭市では 3～6 m、登別市では 5 m 以上で、新想定は面積が旧想定は 2 倍以上となる。

このように旧想定と比較して新想定では、東部の市では高い深度ほど新想定は面積が小さくなり、逆に西部の市では高い深度ほど新想定は面積が大きくなる傾向にある。

6-2 津波浸水想定域の深度別人口

（1）夜間人口

8 市の夜間人口を深度別に見ると（図 13）、太平洋沿岸東部の釧路市は深度 2 m 以上で、根室市は 3～9 m と 15 m 以上で、旧想定より新想定の方が

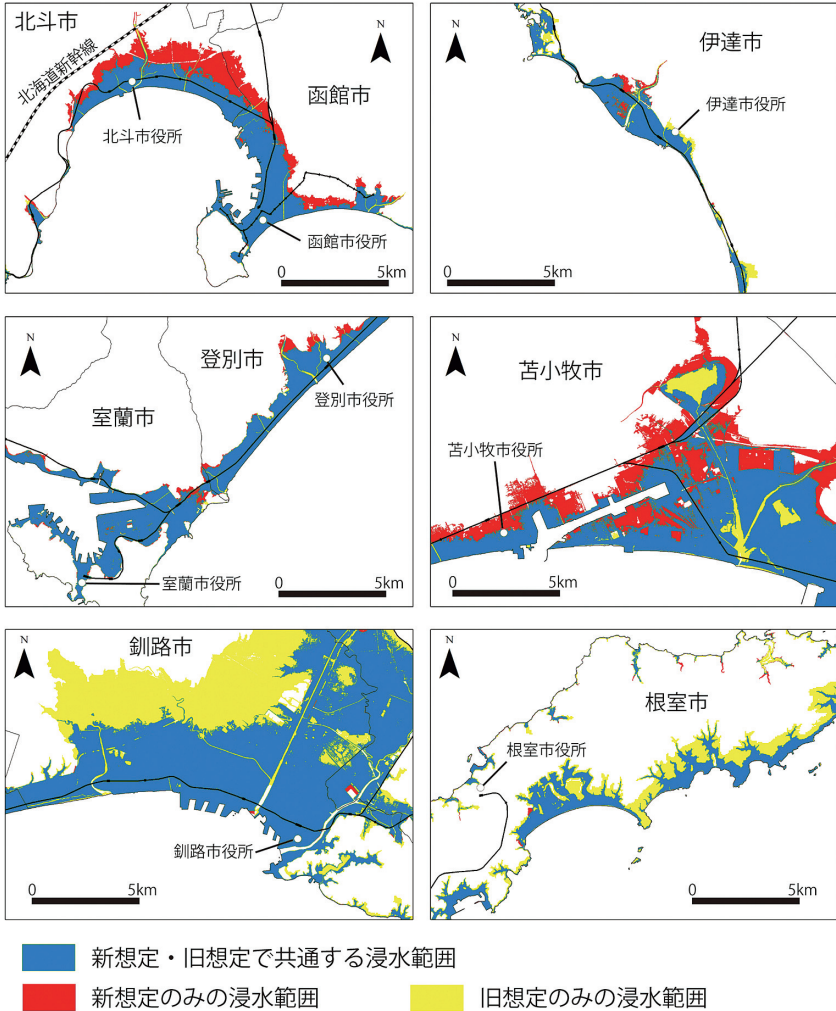


図 11 北海道太平洋沿岸の市部における新旧津波浸水想定範囲

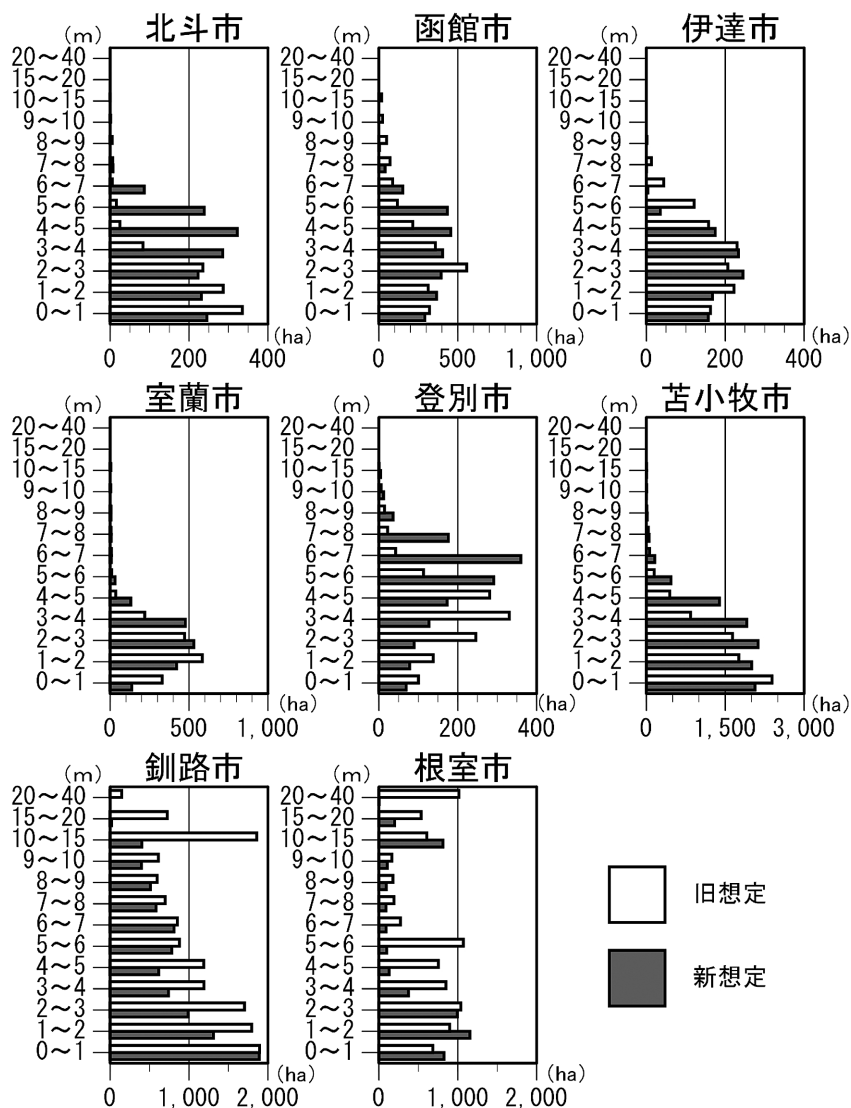


図 12 新旧津波浸水想定の市部における深度別面積

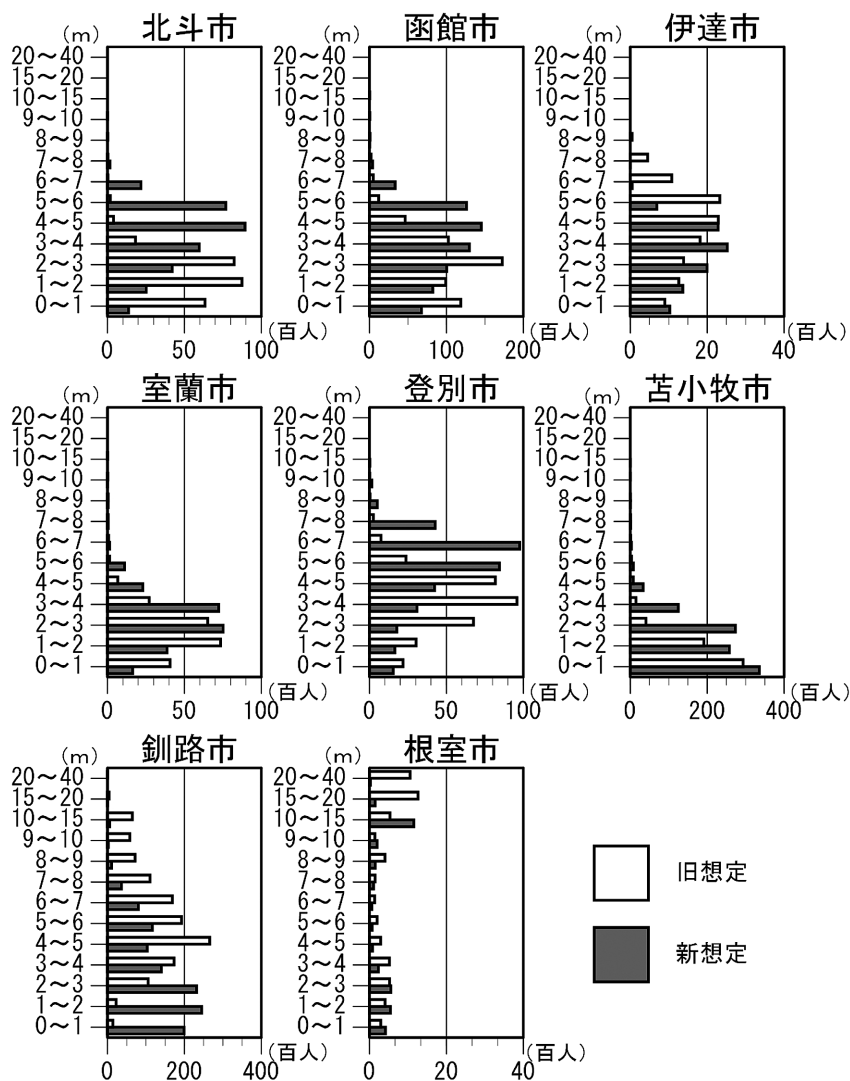


図 13 新旧津波浸水想定の市部における深度別夜間人口

小さくなる。釧路市の新想定の人口は、深度 5 m 未満で旧想定の人口の 1.58 倍なのに対し、5 m 以上の範囲では 0.38 倍である。また、根室市では深度 5 m 未満の範囲で 0.90 倍なのに対し、5 m 以上の範囲では 0.49 倍である。

西部では、ほとんどの市で、比較的高い深度で旧想定より新想定の人口が多くなる。新想定が旧想定の人口の 2 倍以上を示すのは、北斗市では深度 3 ～ 8 m、函館市では 4 ～ 8 m、室蘭市では 3 ～ 6 m 以上、登別市では 5 m 以上、苫小牧市では 2 ～ 7 m である。深度 5 m 以上を見ると、旧想定と較べて新想定の人間人口は、北斗市で 34.28 倍、函館市で 8.10 倍、登別市で 6.74 倍、室蘭市で 3.75 倍、苫小牧市で 2.28 倍と大きくなっている。なお、深度 5 m 未満の人口については、苫小牧市が 1.87 倍と特に大きく増加しているが、登別市は 0.41 倍と減少しており、その他の市では人口に大きな変化はない。

このように旧想定から新想定になって、太平洋沿岸東部の市では高い深度で夜間人口が減り、逆に西部の市では高い深度で夜間人口が増える傾向にある。

(2) 昼間人口

8 市の深度別昼間人口を新旧想定で比較すると（図 14）、東部の釧路市は深度 4 m 以上で、根室市は 1 m 未満と 3 m 以上で、新想定の方が旧想定より小さくなる。釧路市の新想定の人口は、深度 5 m 未満で旧想定の人口の 1.76 倍なのに対し、5 m 以上の範囲で 0.51 倍である。また、根室市は、深度 5 m 未満で 0.81 倍、5 m 以上で 0.46 倍である。

西部の市を見ると、旧想定と較べて新想定では、比較的高い深度の人口が多くなる。新想定の人口が旧想定の人口の 2 倍以上となるのは、北斗市では深度 3 ～ 8 m、函館市では 4 ～ 8 m、室蘭市では 3 ～ 6 m 以上、登別市では 5 ～ 10 m、苫小牧市では 2 ～ 8 m および 10 ～ 15 m である。5 m 以上の深度を見ると、旧想定と較べて新想定の人間人口は、北斗市で 31.52 倍、函館市で 11.85 倍、登別市で 6.13 倍、苫小牧市で 2.57 倍、室蘭市で 2.37 倍と大きくなっている。なお、5 m 未満の人口については、苫小牧市が 1.77 倍と特に大きくなるが、登別市は 0.40 倍と減少しており、その他の市では人口に大きな変化

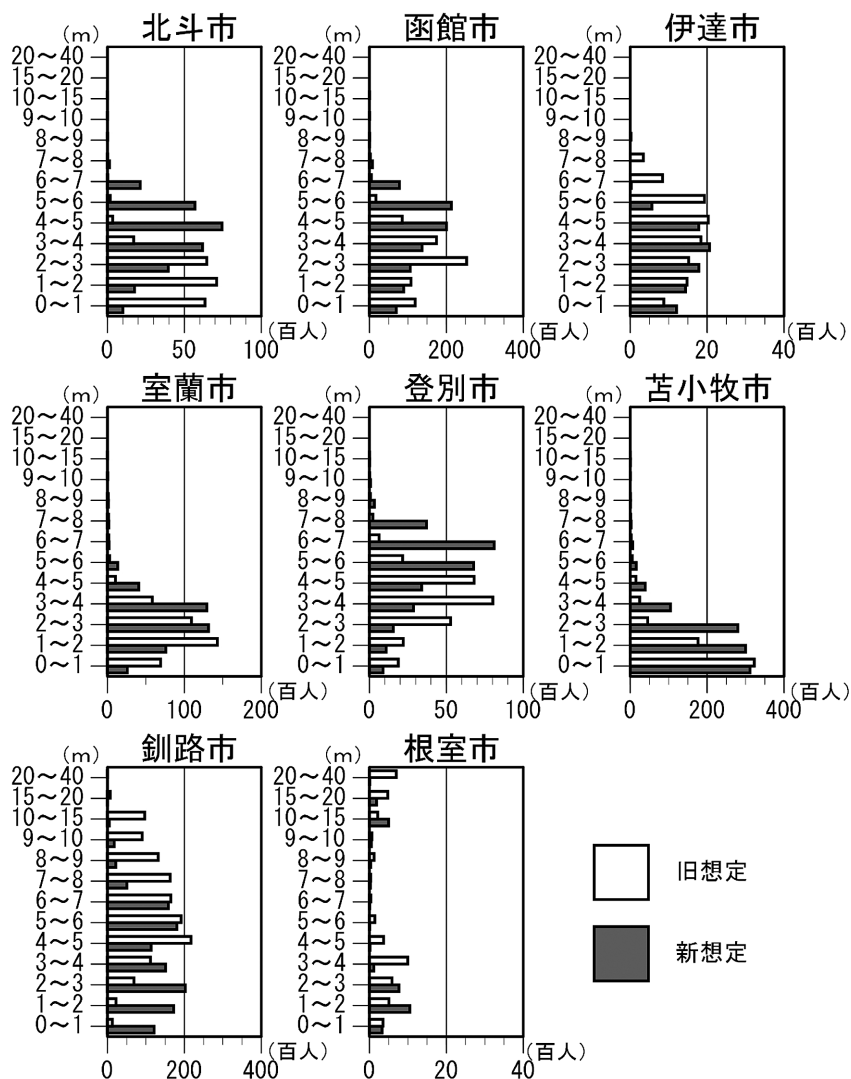


図 14 新旧津波浸水想定の市部における深度別昼間人口

はない。

このように昼間人口も夜間人口と同様に、旧想定から新想定になって、太平洋沿岸東部の市では高い深度で人口が減り、逆に、西部の市では高い深度で人口が増える傾向にある。

7. 市部における新想定での深度別人口の変化

7-1 深度別夜間人口の変化

ここまでは浸水想定域の面積や人口を新旧想定で比較した。ここからは新想定 of 浸水域において、2000～2015 年における深度別人口の変化を見る。

8 市の中で浸水想定域の夜間人口が増加しているのは北斗市のみである。他の 7 市の人口は減少しており、特に根室市では人口減少が著しい。

深度別に夜間人口の変化を見ると（図 15）、いずれの市でも、ほとんどの深度で人口が減少している。しかし、北斗市や苫小牧市など低い深度では人口が増加しており、中でも北斗市では、1 m 未満が 54.20%、1～2 m が 38.98%と増加率が大きい。

深度 5 m 未満の人口変化に注目すると、北斗市のみ 8.20%増加しており、他の 7 市は減少している。深度 5 m 以上では、すべての市で人口が減少しており、特に根室市が-28.19%、苫小牧市が-21.85%、室蘭市が-21.60%、釧路市が-21.07%と減少が著しい。なお、減少率では、すべての市で 5 m 未満より 5 m 以上の方が大きくなっている。

このように 15 年の間に、内陸部のような浸水深の低い範囲より、海岸部のような浸水深の高い範囲で夜間人口の減少が進んでいる。

7-2 深度別昼間人口の変化

新想定 of 浸水域における昼間人口を見ると、すべての市で減少している。減少率が大きいのは、函館市の-17.71%、根室市の-16.07%、室蘭市の-15.48%である。

深度別に人口変化を見ると（図 16）、各市ではほとんどの深度で人口が減

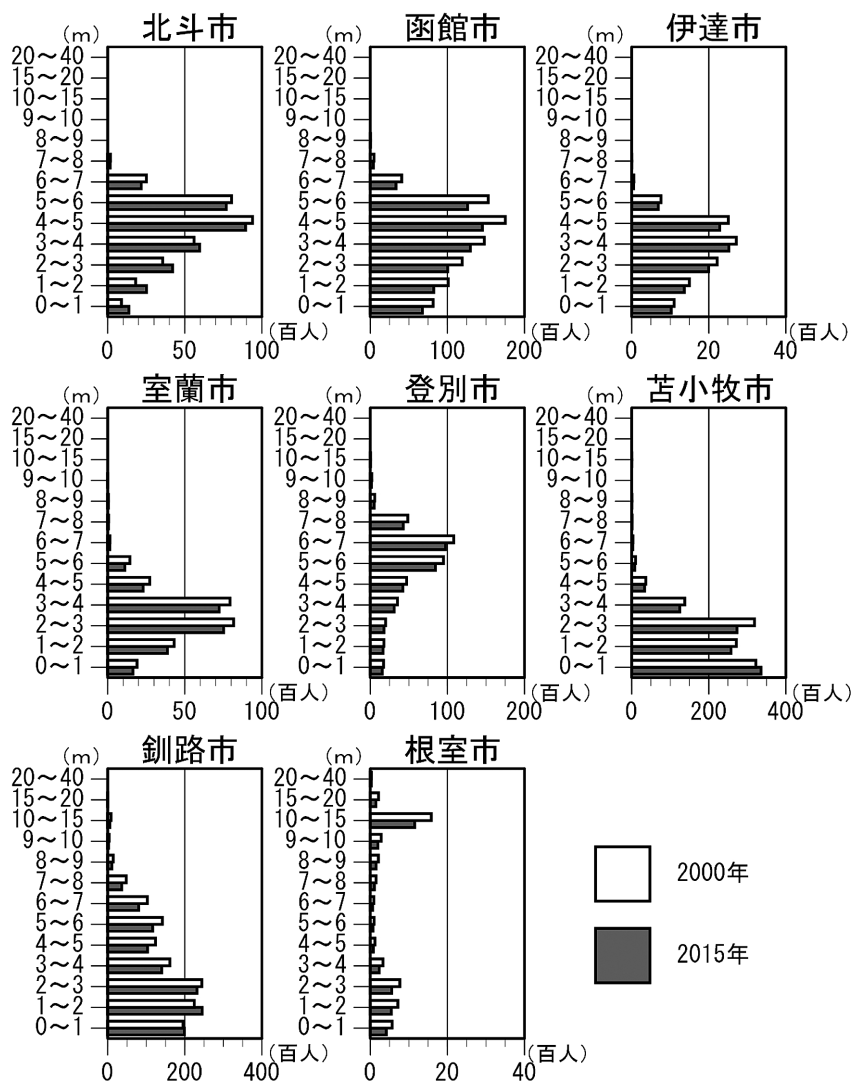


図 15 市部における夜間人口の深度別変化 (新想定)

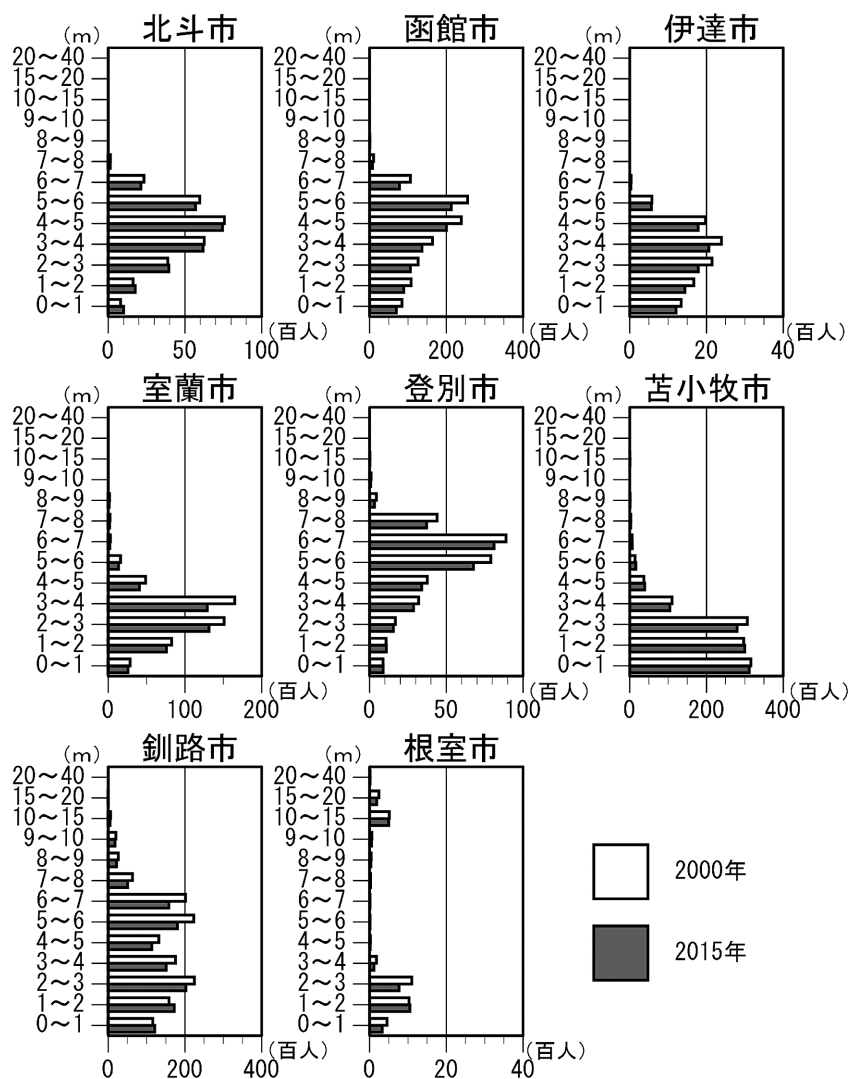


図 16 市部における昼間人口の深度別変化 (新想定)

少している。しかし、北斗市、登別市、釧路市、根室市では低い深度で昼間人口が増加している。また、苫小牧市だけは、深度1～2m、4～7m、10～15mと高い深度でも昼間人口が増えている。

深度5m未満の人口変化を見ると北斗市のみ僅かに増加するが、他の7市は減少している。また、深度5m以上では苫小牧市のみ増加しており、他の7市は減少している。

このように、昼間人口も夜間人口と同様に、15年間で内陸部のような浸水深度の低い範囲より、海岸部のような浸水深の高い範囲で減少が進んでいる。ただし、苫小牧市だけは高い深度でも昼間人口が増加しており、これは新たに浸水想定に組み込まれた範囲には、昼間に人口が集中する業務地区などが含まれることによると考えられる。

7-3 深度別人口の昼夜間比較

新想定 of 浸水域において2015年の昼夜間人口を比較すると(図17)、業務地区の規模が大きい室蘭市や函館市で昼間人口の方が多い。室蘭市は深度9m未満、函館市は深度4m未満で昼間人口の方が多く、これは高い深度の浸水想定域で昼間に通勤通学などの流入が多いことによる。

函館市や室蘭市に隣接する市を見ると、登別市ではすべての深度で、北斗市では深度3～4m以外、伊達市では2m以上で夜間人口が昼間人口を上回る。これは昼間に通勤通学などで浸水想定域内からの流出が多いことによる。

苫小牧市、釧路市、根室市では、昼間人口の多い深度と、夜間人口の多い深度が異なる。苫小牧市では、深度1～3mで昼間人口が多く、1m未満で夜間人口が多い。釧路市では、深度5～7mで昼間人口が多く、3m未満で夜間人口が多い。根室市では深度1～3mで昼間人口が多く、10～15mで夜間人口が多い。これらの市では浸水想定域に住宅地区と業務地区の両方が含まれ、その範囲内で通勤通学などの流動が起こるため、浸水想定域人口の総数として昼夜間の差は小さいが、深度ごとの昼夜間の差は大きくなる。

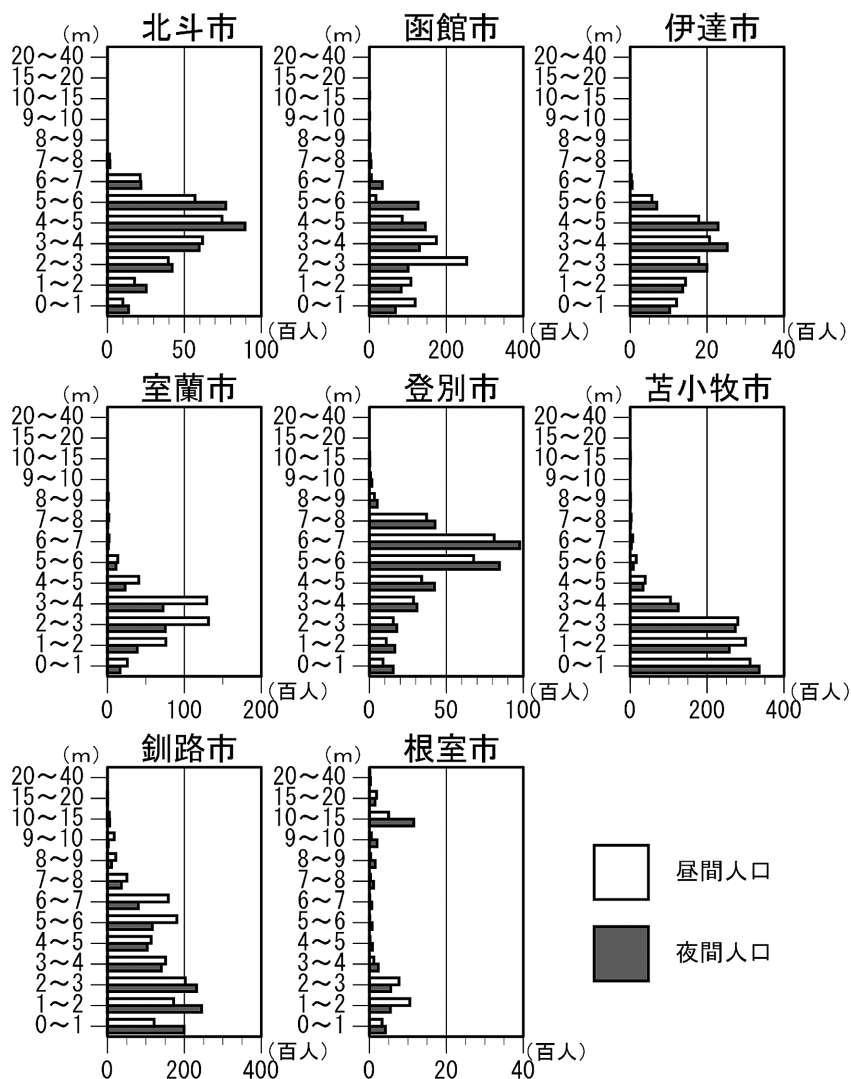


図 17 市部における深度別昼夜間人口（新想定，2015 年）

8. 市部における新想定での年齢階級別人口の変化

8-1 年齢階級別夜間人口の変化

太平洋沿岸の8市について、新想定 of 浸水想定域における2000～2015年の夜間人口の年齢階級別増減率を見ると（図18）、すべての市で65歳以上の高齢者が増加しており、中でも苫小牧市は75.75%、釧路市は69.12%、北斗市は58.27%、登別市は52.01%と高い値を示す。また、すべての市で最も増加率が高い年齢階級は75歳以上となり、苫小牧市は115.66%、釧路市は115.23%、北斗市は101.33%と2倍以上に増加している。

64歳以下の人口は、いずれの市でも減少が目立ち、特に根室市は-39.98%と減少率が高い。逆に北斗市の減少率は-6.87%と低く、他の6市は-20～-30%程度である。

8-2 年齢階級別昼間人口の変化

新想定 of 浸水域で2000～2015年にかけての昼間人口の年齢階級別変化を見ると（図19）、すべての市で65歳以上の高齢者が増加しており、中でも苫小牧市は77.05%、釧路市は69.11%、北斗市は55.90%、登別市は55.02%と増加率が高い。また、いずれの市でも増加率が最も高い年齢階級は75歳以上であり、苫小牧市は121.76%、釧路市は117.30%、伊達市は102.88%、北斗市は101.48%と2倍以上に増加している。さらに伊達市と登別市を除く6市では60～64歳も増加している。

64歳以下では人口の減少が目立ち、登別市では-31.82%、伊達市は-31.10%となる。逆に北斗市では-12.90%、苫小牧市では-16.77%と減少率は低く、他の4市は-20～-30%程度である。

8-3 年齢階級別人口の昼夜間比較

新想定 of 浸水域において2015年の昼夜間人口を年齢階級別に見ると（図20）、函館市では20～74歳、室蘭市では15～74歳で昼間人口が夜間人口を上

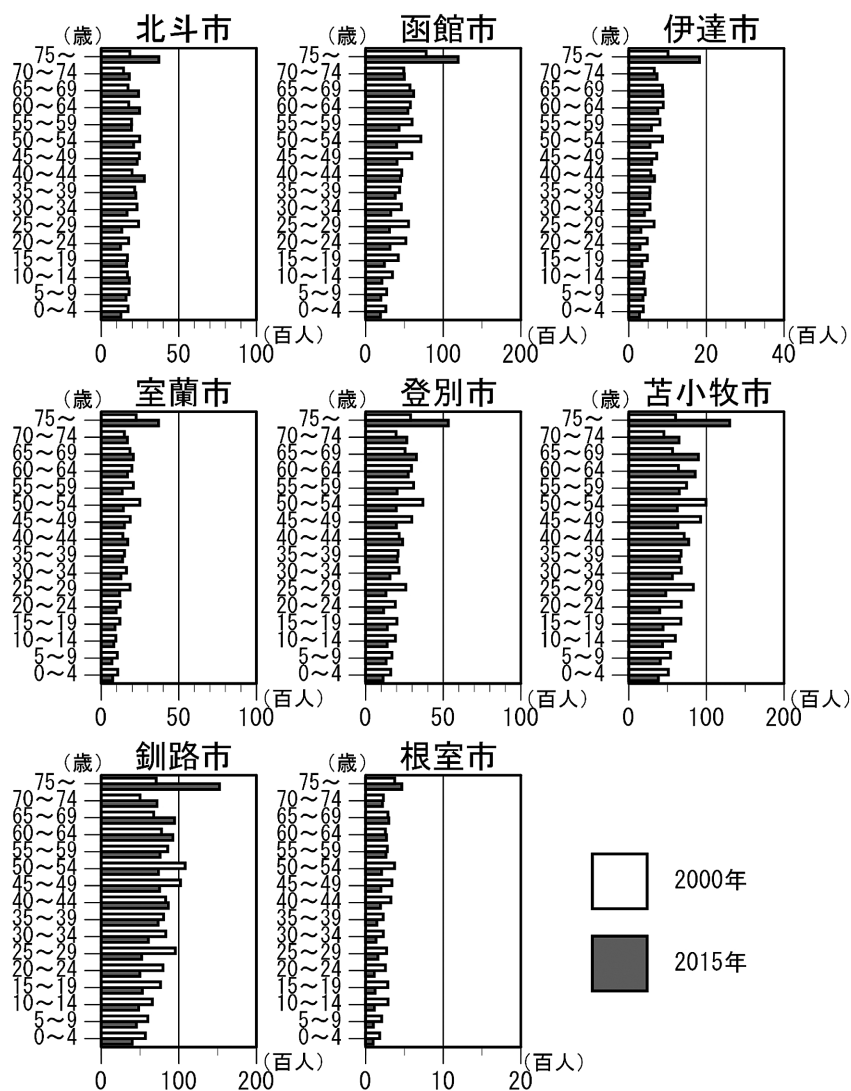


図 18 市部における年齢別夜間人口の変化 (新想定)

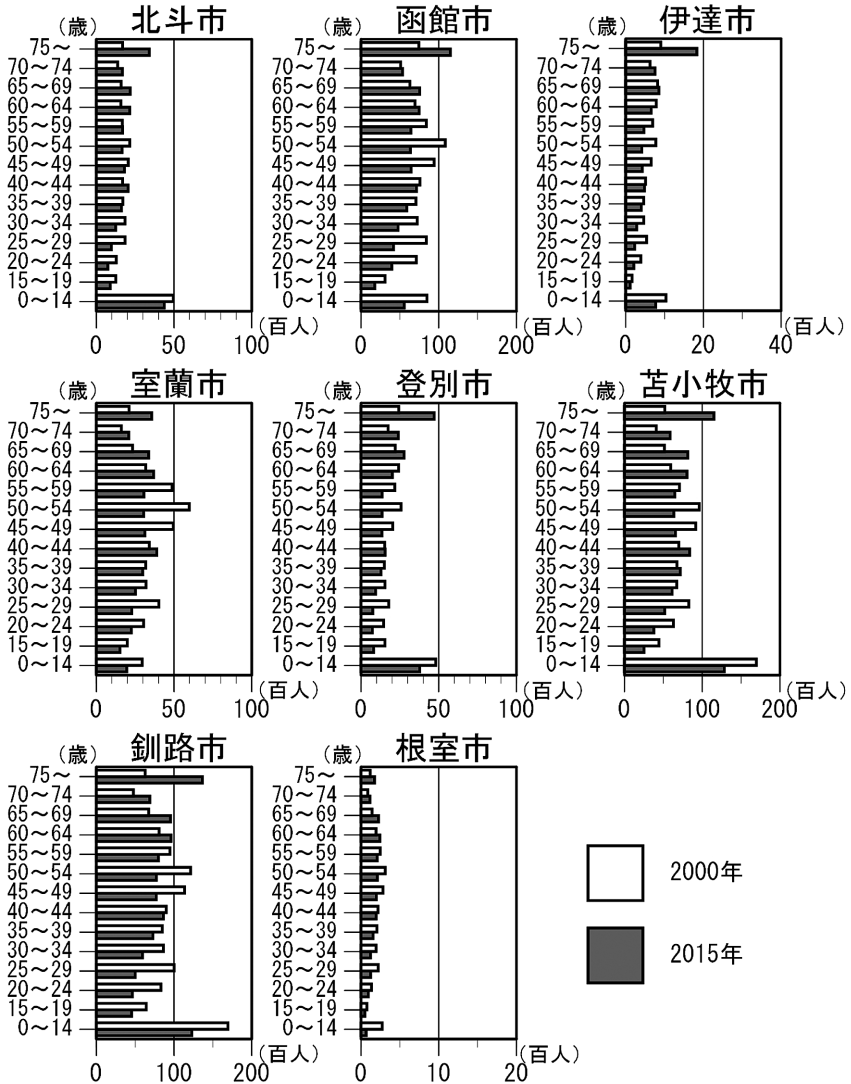


図 19 市部における年齢別昼間人口の変化 (新想定)

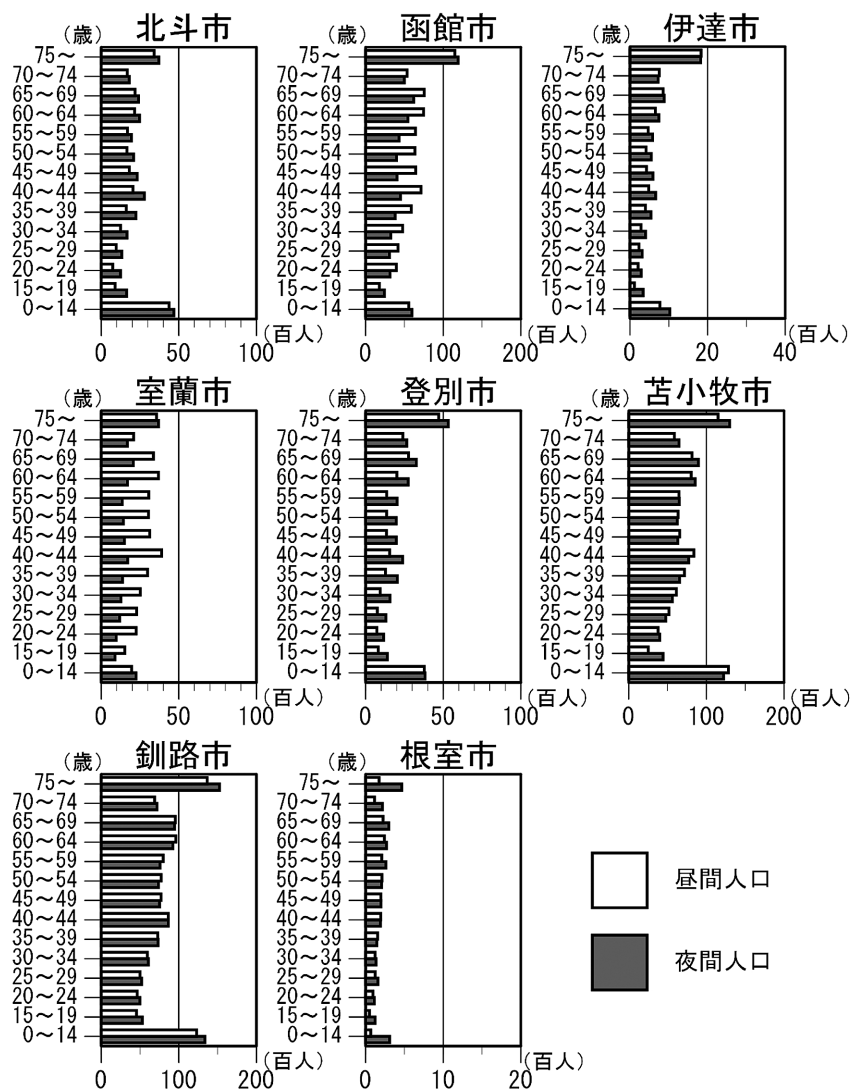


図 20 市部における年齢別昼夜間人口 (新想定, 2015 年)

回る。特に室蘭市では、20～24 歳と 35～64 歳の昼間人口が夜間人口の 2 倍以上となる。逆に、北斗市と登別市は、すべての年齢階級で夜間人口の方が多く、伊達市も 69 歳以下において夜間人口の比率が高い。また、苫小牧市、釧路市、根室市では、いずれの年齢階級でも夜間と昼間の人口に大きな差はない。

このように昼夜間の人口の差が大きい市では、生産年齢人口が大きく変化していることから、通勤通学などによる流入や流出が、前述したような深度間の昼夜間人口の差に関係すると考えられる。

8-4 深度別高齢者数の昼夜間比較

ここで新想定 of 浸水域に関し、2015 年における 65 歳以上の人口を見ると(図 21)、昼夜間とも最大なのは釧路市(夜間人口は約 3 万 2 千人、昼間人口は約 3 万人)であり、それに苫小牧市、函館市が続く。浸水想定域の夜間人口に占める 65 歳以上の比率を見ると、最大は伊達市の 36.69%であり、函館市、根室市、登別市、室蘭市も 30%以上となる。昼間人口でも最大なのは伊

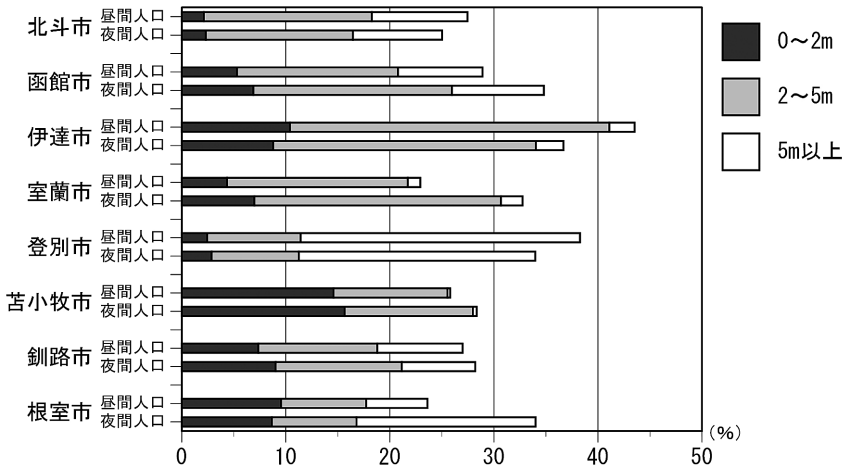


図 21 市部における深度別高齢者率 (新想定, 2015 年)

達市の 43.53%であり、他には登別市のみが 30%以上となる。

この 65 歳以上の比率を深度別に見ると、夜間人口では北斗市、函館市、伊達市、室蘭市、釧路市の 5 市が 2～5 m で最大となる。5 m 以上が最大となるのは登別市と根室市であり、逆に 2 m 未満が最大となるのは苫小牧市のみである。また、昼間人口でも北斗市、函館市、伊達市、室蘭市、釧路市の 5 市が 2～5 m で最大の比率となる。根室市と苫小牧市は 2 m 未満が最大となり、5 m 以上が最大となるのは登別市のみとなる。

このように浸水想定域における高齢者の人数や比率、深度別の分布状況は市ごとに異なる。多くの高齢者数が比較的低い深度に分布している苫小牧市、高齢者数は少ないものの高い深度に分布している登別市、多くの高齢者が高い深度に分布している釧路市や函館市というように、それぞれの特性に応じた高齢者の津波避難対策が必要となる。

9. おわりに

本研究は、2021 年 7 月に公表された北海道太平洋沿岸の新しい津波浸水想定について、地理空間情報と GIS を援用して浸水想定域の面積や人口を推定し、旧想定との比較を行うことで地域特性を明らかにした。分析結果は以下の通りである。

(1) 浸水想定面積を見ると、東部の市町村では旧想定より新想定で浸水面積が小さく、逆に西部の市町村では旧想定より新想定で面積が大きい。深度別面積では、新想定 of 面積は旧想定よりも比較的低い深度で大きく、高い深度の面積は小さい。

(2) 浸水想定域における人口推定の結果、昼夜とも新想定の方が大きい。旧想定では昼夜間とも釧路市の浸水域人口が突出して大きかったが、新想定では苫小牧市の昼夜間人口も釧路市に近い数値となる。なお、新想定 of 浸水想定域では、2000～2015 年に市町村の大部分で昼夜間人口が減少しており、低い深度に人口が集中する傾向が強まっている。また、昼夜間とも高齢者が増加し、浸水想定域全体に占める高齢者比率が高くなっている。

(3) 北海道太平洋沿岸の8市に注目し、深度別の浸水想定面積を求めると、新想定は旧想定よりも東部で小さく、逆に西部で大きくなり、この傾向は高い深度で顕著となる。また、浸水想定域の昼夜間人口は、旧想定から新想定になって東部の高い深度で減り、逆に西部の高い深度で増える傾向にある。

(4) 新想定 of 浸水想定域では、2000年からの15年間で、内陸部のような深度の低い所より、海岸部のような浸水深の高い所で人口減少が進んでいる。2015年の浸水想定域を見ると昼夜間で人口の差が大きい市があり、大規模な業務地区が海岸近くの浸水想定域に含まれる函館市や室蘭市では、比較的高い深度で昼間人口が夜間人口を上回る。逆に、通勤通学者の居住地が海岸近くにある北斗市、伊達市、登別市では昼間人口が夜間人口を上回っている。苫小牧市、釧路市、根室市では業務地区と住宅地区の両方を浸水想定域が含んでいるため域外への人口流出が小さく、昼夜間人口の総数の差は小さくなるが、深度ごとの昼夜間の差は大きくなる。

(5) 新想定 of 浸水想定域における8市の年齢階級別人口を推定すると、2000～2015年には、いずれの市でも高齢者が増加している。各市において昼夜間の差が大きいのは生産年齢人口であり、この年齢階級が昼間に増えるのは函館市や室蘭市、夜間に増えるのは北斗市や登別市である。また苫小牧市、釧路市、根室市では大きな違いはない。この年齢階級の通勤通学などによる流入や流出が、前述したような深度間の昼夜間人口の差に関係すると考えられる。

(6) 8市における深度別高齢者比率を見ると、高齢者数は多いが比較的深度の低い範囲に分布している苫小牧市と、高齢者数は少ないものの高い深度の範囲に分布している登別市、高い深度の範囲に多く的高齢者数が分布している釧路市や函館市というように、高齢者の分布状況が大きく異なるため、それぞれの特性に応じた高齢者の津波避難対策が必要となる。

以上のように、新想定に関しては、範囲が旧想定より東部での縮小し、西部で拡大したこと、それにより西部では浸水想定 of 深度が高い範囲 of 人口が多くなったことが分かった。また、この範囲では、2000年以降に人口が減少し、高齢化が進んだことも明らかになった。さらに、津波浸水想定 of 範囲に

住宅地区と業務地区のいずれが含まれるかにより、昼夜間で大きな人口の違いが生じることも確認できた。これにより、昼間に生産年齢人口が流入して避難時に混雑が起きる場合や、昼間に生産年齢人口が流出して高齢者や幼児の避難の補助が不足する場合などが考えられる。このような地域特性を考慮した各自治体における津波防災計画の策定が必要であり、そのために、浸水想定域における津波深度別の到達時間など詳細な空間データの利用と成果の公表が望まれる。

本研究で用いた津波浸水想定データは、避難を中心とした津波防災対策を進めるためのものであり、被害の発生範囲を示すものではない。そのため本研究の分析結果である津波浸水想定域の人口は被災人口とは異なる。なお、津波浸水想定は現在の科学的知見を基に、過去に実際に発生した津波や今後発生が想定される津波から設定したものであるが、これよりも大きな津波が発生する可能性が否定されているわけではない（北海道，2021）。さらに、津波のような自然現象は不確実性を伴うため、条件設定により結果が異なる場合もある。そのため、新想定になって旧想定よりも浸水想定面積が小さくなった太平洋沿岸西部でも、油断なく防災対策を進めることが重要である。

本研究で用いた浸水想定域人口は、北海道から公表された津波浸水想定 of GIS データと国勢調査小地域データを用いて算出したものである。国勢調査については、市街地以外の集計単位の面積が大きいため、それによって誤差が生じる可能性がある。また、本研究では、両データを重ね合わせた上で、面積按分により人口推定を行っているが、この手法に関しても内藤・橋本（2018）や工藤・橋本（2020）のように、近年では新しい手法が提案されている。このデータと手法の改良については、今後の課題としたい。

付記

本研究は、文部科学省「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画（第二次）」及び JSPS 科研費 19K01166「千島海溝地震による津波の避難行動モデル化と情報統合システム構築」における成果の一部である。

文献

- 片田敏孝, 木村秀治, 児玉真 (2007): 災害リスク・コミュニケーションのための洪水ハザードマップのあり方に関する研究. 土木学会論文集 D, Vol.63, No.4, 498-508.
- 工藤由佳, 橋本雄一 (2020): 積雪寒冷都市における複合災害時の避難困難地域に関する空間分析—北海道留萌市の津波浸水想定域の事例—. 地理情報システム学会講演論文集, 29, B24-2-4.
- 国土交通省 (2012): 『津波防災地域づくりに関する法律について』国土交通省.
- 国土交通省水管理・国土保全局海岸室, 国土技術政策総合研究所河川研究部海岸研究室 (2019): 『津波浸水想定の設定の手引き Ver.2.10』国土交通省水管理・国土保全局海岸室, 国土技術政策総合研究所河川研究部海岸研究室.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2021): 『長期評価による地震発生確率値の更新について』地震調査研究推進本部地震調査委員会.
- 社会資本整備審議会・交通政策審議会交通体系分科会計画部会 (2011): 『緊急提言「津波防災まちづくりの考え方」』社会資本整備審議会・交通政策審議会交通体系分科会計画部会.
- 中央防災会議 日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に関する専門調査会 (2006): 『日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震の被害想定について』中央防災会議.
- 内藤健裕, 橋本雄一 (2018): 積雪寒冷都市における津波避難困難地域に関する空間分析—北海道釧路市を事例に一. 地理情報システム学会講演論文集, 27, B-5-3.
- 橋本雄一 (2013a): 国家基本計画における地理空間情報の災害対策. 北海道大学文学研究科紀要, 140, 131-174.
- 橋本雄一 (2013b): 『GIS とジオマイクロデータを用いた臨海都市における冬季災害時避難の地理学的研究』一般財団法人第一生命財団 平成 24 年度研究助成調査研究報告書.
- 橋本雄一 (2013c): GIS を援用した北海道沿岸都市における積雪期の津波災害時避難に関する地理学的研究. 北海道開発協会 平成 24 年度助成研究論文集, 163-183.
- 橋本雄一 (2014): 北海道における津波浸水想定域人口の推定. 北海道大学文学研究科紀要, 144, 31-65.
- 橋本雄一編 (2017): 『二訂版 QGIS の基本と防災活用』古今書院.
- 北海道 (2012): 『北海道に津波被害をもたらす想定地震の再検討のためのワーキンググループ「太平洋沿岸の見直し」報告書』北海道.
- 北海道 (2021): 『北海道太平洋沿岸の津波浸水想定について (解説)』北海道.
- 本間基寛, 片田敏孝 (2009): 津波予報と連動した津波ハザードマップに関する研究. 土木学会論文集 B2, Vol.65, No.1, 1321-1325.

ひらがなの天使

——谷川俊太郎におけるクレーとモーツァルト——

中 村 三 春

1 現代芸術としての谷川俊太郎の詩

一九七五年に発表された谷川俊太郎の詩集『定義』（一九七五・九、思潮社）は、百科事典文体のパロディ集であり、言葉が世界をとらえることの不可能性という、谷川が発現時から根底に秘めた詩の理念を改めて展開したテクストである。⁽¹⁾ 一般には今でも初期一九五〇年代の『二十億光年の孤独』（一九五二・六、東京創元社）や『六十二のソネット』（一九五三・一二、同）によって抒情詩人としてのイメージの強い谷川は、一九七〇年代中盤から、小田茂一の言ういわゆる流用アート（appropriation art）に類する作品を継続的に発表している。⁽²⁾ 『定義』の巻頭に置かれた「メートル原器からの引用」は、平凡社版『世界大百科事典』からの引用であった。また、『コカコーラ・レッスン』（一九八〇・

一〇、思潮社）所収作品は、いずれも詩と関わりながら詩そのものではない。それは、これから詩になるはずの言葉の断片や、未定稿、「偽書」の「残闕」、質問集やロールシャッハ図版など、断片的で必然性を欠いた言葉のスクラップによって構成されたモンタージュである。さらに、『日本語のカタログ』（一九八四・一一、同）は、タイトル詩が二二個の異なる既成の他人のテキストからの引用であり、日本語のサンプリング（見本抽出）となっていることを始めとして、マンガ、ビデオのプリント、シャム双生児の百貨店記事と写真、谷川の足型など、これもまた徹底的に断片化された既製品の集積である。

『日本語のカタログ』に触れた谷川の「インタビュー 言葉への通路・私への通路」において、谷川は、自分が写真・ビデオ・絵本など映像的なものに惹かれるのは、「エディティングとかモンタージュっていう考え方」を共有しているからであり、カタログという詩および詩集のコンセプトはそれと合流するものであると述べていた。^③エディティングによるモンタージュを宗とする詩人、それがこれらに見られる谷川の相貌なのである。これは榎木野衣が、一九八〇年代以降ニューヨークを舞台に展開したネオ・エクスプレッションイズム、ネオ・ジオ、さらにネオ・ポップなどと呼ばれた動向に対してシミュレーション・アートまたはシミュレーションイズムと名づけた潮流、^④あるいは、小田茂一が、デュシャンからウォーホル、ミニマリズムからゴミ・アート、ボディ・ペインティングに至る幅広い現代芸術について、流用アートのラベルで一括して呼んだことにも通じる。^⑤現代日本を代表する詩人・谷川俊太郎は、まさに現代芸術としての詩を追求した詩人として再評価されなければならない。^⑥

また、そのことと関連して、谷川作品の特徴の一つであるひらがな詩の成立は、翻訳活動との関わりが濃厚である。すなわち一九七三年の『ことばあそびうた』（一九七三・一〇、福音館書店）以降におけるひらがな詩の旺盛な創作は、

同時期にそれよりもやや先行して開始されたひらがなによる翻訳活動、すなわち一九六九年以降のレオ・レオニ『スイミー』『フレデリック』などの絵本、一九七〇年以降のマザー・グースの詩集シリーズなどが契機となった。ひらがな詩は、本稿で再び問題とするように、谷川にあつてはその本質的な原初性によつて機能している。また、翻訳は、他者のテキストを受容し解釈する営為であるから、触発の一契機と見なしうる。さらに、注文を受けて書く職業詩人としての谷川の状態も、外部または他者によつて触発され、外部的な要素を取り込んで変換するという意味で、このような経緯とも密接に関わる。谷川には、依頼によつて書かれた膨大な数の校歌がある。あるいは幾つもの贈答詩・連詩の実践も、文字通り他者との連繋による詩作にはかならない。このように、触発は、外部・他者との接続による発語を詩様式の内部に組み込み営為として、エディティングやモンタージュ、さらにアプロプリエーション（流用）やシミュレーション（模造）とも連なる機能であり、それによつて谷川の詩は、いわゆる「私」ならぬ虚構的な「私」を発生させる。^①

一九五〇年代、六〇年代の、いわば現代っ子詩人として登場し、異邦人意識や沈黙の凝視などに注力した時期から、一九七〇年代、八〇年代のポップ・アートのな営為を経て、一九九〇年代以降の谷川は、実験的・前衛的な試みと、認識的・本質的な表出とを止揚していく時期へと展開したように見える。父・谷川徹三の死を契機として書かれた一九九三年の詩集『世間知ラズ』（一九九三・五、思潮社）から、中国旅行を基盤として俳諧・漢詩などにも接近した文字通りの短詩集である二〇〇二年の『minimal』（二〇〇二・一〇、同）までの間、谷川はいわゆる本格的な詩集を発表しない、「沈黙の十年」を経過したことが知られている。ただし、これは谷川本人も認めていることであるにしても、その実質的な意味は、尾崎真理子の言葉によれば、「現代詩の絵本山、思潮社から新作の詩集を出版しなかった期間を

指している」に過ぎない。⁽⁸⁾『世間知ラズ』と『minimal』の間にも、思潮社以外から、谷川は『モーツァルトを聴く人』(一九九五・一、小学館)、『真っ白でいるよりも』(一九九五・五、集英社)、『クレーの絵本』(一九九五・一〇、講談社)、『みんな やわらかい』(一九九九・一〇、大日本図書)、『クレーの天使』(二〇〇〇・一〇、講談社)などの作品を刊行している。そして、触発・接続という観点から就中注目されるのは、一九九五年に相次いで出版された『モーツァルトを聴く人』および『クレーの絵本』と、『クレーの絵本』の続編として二〇〇〇年に発表された『クレーの天使』である。

2 『モーツァルトを聴く人』と『クレーの絵本』概観

既に『コカコーラ・レックスン』や『日本語のカタログ』あるいは『詩めぐり』(一九八四・一二、マドラ出版)などの詩集でも実証されていたこととして、谷川は詩そのものと同時に、詩集の形状についても様々な試みを行っている。この詩集『モーツァルトを聴く人』には二つのヴァージョンがあり、一つは詩集のみで刊行され、もう一つはモーツァルトおよびベートーヴェンの楽曲と、谷川自身による詩の朗読が収録された音楽CDが窓空きの函にセットになっている。⁽⁹⁾音楽CDに収められたのは、一九編から成るこの詩集から、収録作品の相当の部分となる一二編の詩の朗読であり、モーツァルトはよく知られたピアノ・ソナタ第一一番イ長調K三三一「トルコ行進曲つき」第一楽章(主題)以下の九曲、ベートーヴェンは弦楽四重奏曲第一三番変ロ長調作品一三〇第五楽章「カヴァティーナ」で、詩「このカヴァティーナを」に因んだ曲の一曲、計一〇曲である。この詩集の詩の内容と朗読、そして音楽との取り合わせは

取り合わせがよく、総じてこの詩集は完成度の高い作品となっている。なお、この詩集のカバー、扉、および内部の五点の挿し絵、さらにCDのカバーは、すべてパウル・クレーの作品から採られている。詩集カバーは一九二九年の「肥沃な国の境界に立つ記念碑」(Monument an der Grenze des Fruchtlandes, 1929)であり、挿画はヴァイオリンなど、音楽にまつわる素描から採られている。附属CDの解説書の冒頭に収められたエッセー「とらえ難い一瞬」において谷川は、「音楽を聴きながら言葉を書くことは私には出来ません。しかし音楽がインスピレーションのように働いて、私に言葉を与えてくれることは珍しくありません」と、また「モーツァルトの作品が多いのは、モーツァルトを好んで聴くことが理由であるとともに、彼のうちに私が音楽のもっとも深い魔力を感じ続けているからです」とも述べている。

さらにこの詩集の「あとがき」においては、「音楽は昔から私にとってなくてはならぬものだった」こと、「ここに収めた作のほとんどは、前集『世間知ラズ』(思潮社・一九九三)と並行して書いていたものである」こと、自分にとっては、詩と音楽と自分という人間に対する疑問が「結びついている」ため、「本集と前集は兄弟分みたいなのだろうと思う」こと、さらに「CDに収められた曲には、詩と直接に関わっているものもあれば、そうでないものもあって、それらが私の聴いて感動した音楽のすべてではないこと」、「私はただ自分が感じたものを、読者と頒ち合いたいと思っただけにすぎない」ことなどについて語っている。「それともう手遅れなのか／ほくは詩人でしかないのか三十年あまり昔のあの朝からずっと／無疵で」と閉じられる巻頭の詩「そよかぜ 墓場 ダルシマー」を読むと、その基調が「行分けだけを頼りにかきつづけて四十年／おまえはいったい誰なんだと問われたら詩人と答えるのがいちばん安心／というのも妙なものだ」とうたう詩「世間知ラズ」と確かに近いところにあることが確認できる。すなわち、どちらも

自らが詩人であることの意味に対する自問を含む。

ところで、同じ一九九五年の一〇月に谷川は『クレーの絵本』（一九九五・一〇、講談社）を刊行した。この本は、絵と詩とを組み合わせた「アートルピナス」シリーズの一冊であり、他にこのシリーズから、田村隆一の『ロートレックストーリー』、与謝野晶子の『夢想 ミュシャ小画集』、立原えりか編『夢みたものは… 立原道造詩画』などが出ている。なぜクレーなのか。『クレーの絵本』のあとがきである「魂の住む絵」は、それについて詳しく述べている。四段落のうち最初の段落ではクレーの絵の本質について、「言葉で彼の絵をなぞることは出来ない」と私たちは思う」と語り、第二段落では、「若いころから私は彼の絵にうながされて詩を書いてきた。ちょうどモーツアルトの音楽にうながされてそうしてきたように」と、クレーと自分との関わりがモーツアルトと同じく深いものであることを語っている。しかし、よく読むとこの第一と第二の段落は、一見矛盾したことを述べている。「言葉で彼の絵をなぞることは出来ない」にもかかわらず、「彼の絵にうながされて詩を書いてきた」とは一体どのような事態なのか。「なぞる」ではなく「うながされて」書くとはどのような営為なのか。この問題は、触発という、アプロプリエーションおよびシミュレーションの縁辺に位置づけられるところの、創造と表現に関する現象に関わる問題となる。

このあとがきの第三段落で、かつて「ある出版社でクレーを絵本にする企画がもちがった」こと、第四段落では、それが「今回初期作もふくめた新しい形で初めて実現した」ことが明らかにされている。後述のように既に明らかにされていることとして、一九七五年の詩集『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』（一九七五・九、青土社）には、連作「ポール・クレーの絵による『絵本』のために」が収録されており、これは『雪の降る前』1929から『黄金の魚』1923に至る一一編のパウル・クレーの絵のタイトルを題名に採った詩によって構成されていた。

『クレーの絵本』収録作品は、この一一編の外、巻頭の「愛」が一九五五年の詩集『愛について』（一九五五・一〇、東京創元社）より、また中間に挿まれた「在るもの」と「線」は、一九六五年に刊行された思潮社版の全詩集『谷川俊太郎詩集』（一九六五・一、思潮社）に「未刊詩篇」として収録され、その「後記」によると「一九六一から六四」に書かれたとされる。⁽¹⁰⁾この三編は、初出ではそれぞれ「愛」は「Paul Klee に」、後の二つは「クレーに寄す」と題名の後に献辞が呈されていたのが、『クレーの絵本』では、いずれも「Paul Klee に」と詩の上部に横書きで入れられた。以上をまとめると、確かにあとがきに「この本に収められた作のもっとも古いものは、私がまだ二十代の初めのころに書かれた」と記された通り、「愛」は『二十億光年の孤独』『六十二のソネット』に続く第三詩集『愛について』にまで遡るものの、一四編のうち一一編を占める大半の作品については、詩集『夜中に台所ではくはきみに話しかけたかった』の問題としても考えなければならない。ちなみに、この詩集に収められたクレーの図版は、詩にタイトルが採られた一一作品を含め、全部で四〇葉に及ぶ。

ここまでの趣旨をまとめると、谷川にとつて、ある意味狂騒の時代であった一九七〇年代後半から八〇年代における前衛的な詩集の後、甘美な恋愛詩を含む『魂のいちばんおいしいところ』（一九九〇・一二、サンリオ）から特に『世間知ラズ』に至り、表向き父の死を契機として詩人としての自己の見直しが介在し、そしてそのような自己凝視とそれ以前に開発されたアプロブリエーションおよびシミュレーションとが合体していく契機として、『モーツァルトを聴く人』と『クレーの絵本』という瀟洒な二冊の詩集が作られたと考えられる。むしろそのような観点からは、『モーツァルトを聴く人』が重視されなければならないだろう。なぜならば、『モーツァルトを聴く人』は『世間知ラズ』と同時期に書かれた詩であることから、文字通り一九九〇年前後の所産として理解できるのに対して、『クレーの絵本』

の詩はすべて過去に遡り、リアルタイムの意味で同時代性を滲ませるものではないからである。とはいえ、『クレールの絵本』についても、出版時から二〇年前、一部は四〇年前の自作を復活させ、自己引用し、詩と詩、詩と絵とを組み合わせたモンタージュ作品であるという意味で極めて興味深いものである。ここには新作の詩は一編も含まれていないが、それでいて、芸術品として一級のものに仕立てている。このように、『クレールの絵本』は、一九五五年から九五年までの実に四〇年間を掛けて作られた所産と呼ぶ外にない。

3 『クレールの天使』概観

しかし、二〇〇〇年に同じ講談社の「ルピナス」シリーズの一冊として、さらに『クレールの天使』（二〇〇〇・一〇、講談社）が上梓されるに至って、事態にはいっそうの捻りが加わった。クレールの絵、特に晩年の一九三九年に多く描かれた線描画の天使シリーズと、それにつけられた詩から成るこの詩集は、ある意味で谷川俊太郎の詩の頂点をなすものである。そのある意味とはどのような意味なのかを問うのが、本稿の趣意である。あとがきの「天使という生きもの」に、「前作『クレールの絵本』に続かたちで、今回はクレールの描いた天使たちを主題にしてこれらの短詩を書いてみた」とあることから、『クレールの天使』は『クレールの絵本』の続編であると言ってよいだろう。ただし、クレールの四五作品の図版とともに収録された一八編の詩は、すべて新作の詩であり、旧作のパッチワークであった『クレールの絵本』とその点は異なる。彩色画である「天使、まだ手探りしている」(Engel, noch tastend, 1939)と「哀れな天使」(armer Engel, 1939)、黒地に白のペン画である「用心深い天使」(wachsammer Engel, 1939)の三点を除けば、残る一五

編の詩がつけられたクレーの作品は、すべて白地に黒の線描画であり、その多くは細い線で描かれている。すべての詩は、漢字なども含む題名と、ごくわずかなカタカナで書かれた外来語を除けば、ひらがなで書かれたひらがな詩である。白地の線描画とひらがな詩とのカップリングが、少なくとも詩集としての『クレーの天使』の基調をなしている（なお、挿画にのみ採られたクレー作品には、彩色画も多く含まれる）。

ここで注意すべきは、『クレーの絵本』に含まれる一編の『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』由来の詩は、すべて同様のひらがな詩であったことである。谷川のひらがな詩が系統的に多数書かれるようになるのは、『こ』と『あそびうた』（一九七三・一〇、福音館書店）からである。翻訳や絵本作との関わりが深い多数のひらがな詩集を発表している谷川の作品の中で、『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』の一部をなすに過ぎないクレー連作「ポール・クレーの絵による『絵本』のために」は、量的には片々たるものに過ぎない。しかし、ある意味では谷川の頂点を示す詩集『クレーの天使』の基礎を形作った『クレーの絵本』の中核をなし、しかも『クレーの天使』の詩すべてと同じくひらがな詩であり、また一九七三年に本格的に始まったひらがな詩の初期の重要な営為として一九七五年に発表された作品であるという点においても、この連作は軽視できない問題を含んでいるのである。

なぜならば、第一に前衛詩人・谷川のコルネとしてとらえることのできるアプロプリエーションおよびシミュレーションの要素、すなわち他者・他物・他作品による触発・接続の要素と、第二に谷川の詩の本質的な原初性の徴表として理解できるひらがな表記の要素とが、厳しく切り結んだ場が、この連作、ひいては詩集『クレーの天使』だからである。第一の要素は、一九七〇年代後半から八〇年代にかけて行われた詩的表現の種々相の追求に、また第二の要素は、一九五〇年代の出版期以降、谷川の根底的な問題意識としてあった、沈黙、すなわち言葉による世界把握の不可能性

の追求に、遠くその淵源があるものと考えられる。ここでの課題は、その二つの要素の合流・止揚によって成立した詩作品そのものを読み解き、その詩的様式を記述することと、そこに介在したパウル・クレー (Paul Klee、一八七九—一九四〇) の作品や思想、ひいてはヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart、一七五六—九二) の業績とが、どこでどのように関わるのかを明らかにすることである。これらのことからすれば、手に取るに容易で口ずさみやすく、見て美しく聴いて心地よいからと言って、『モーツァルトを聴く人』『クレーの絵本』そして『クレーの天使』を論じることが、決して容易とは言えない。

4 展望——谷川、クレー、モーツァルト

一九九五年に相次いで発表された、いわゆる触発詩集である点において『モーツァルトを聴く人』と『クレーの絵本』には共通の属性があり、さらに後述するように、音楽とクレーにも決定的な繋がりがあるため、谷川におけるクレーとモーツァルトにも必然的な結びつきが生じてくることは確かである。しかし、手順としてまずは谷川俊太郎とパウル・クレーに絞ってみる。これまで谷川とクレーの領域について何が言われてきたのだろうか。実際のところ、今回取り上げる詩集群について、研究水準における言及は非常に少ない。それは結局、『二十億光年の孤独』が、いまだに文学史上は谷川の代名詞となっている現状と重なる。それ以外は初期作品の『六十二のソネット』や『定義』であつても、議論沸騰というような状態とはほど遠いのである。

その中で、望月あすかの論考は、この分野に関してほぼ唯一の本格的な研究である。⁽¹²⁾ 望月による長編論文は、「第I

章『クレーの絵本』について」と「第Ⅱ章『クレーの天使』について」の二章から成る。これは、『クレーの絵本』『クレーの天使』の概略、クレーがバウハウスでの講義の内容をまとめた主著である『造形思考』(Das Bildnerische Denken, 1956)などに依拠して把握されたクレーの芸術思想の概観を記述し、『クレーの絵本』所収の谷川の詩と、クレーの芸術思想および所収作品との繋がりを検証し、さらに『クレーの天使』についても、クレーによる天使連作の概要分析、所収作品と線描画との関わり、そしてひらがな詩という表現形式の問題にまで触れた、非常に本格的な論考である。その後には書かれた、シルヴィア・プラス、ジョン・キンセラ、アンヌ・シンプソンらの現代詩人と並べて谷川のも論じた岡田和也の論文においても、望月のこの論考が引用されている。⁽¹³⁾

望月の論文は、まず第Ⅰ章では、谷川は父・徹三もクレーに造詣が深いことから、早い時期からクレーと接触があったとしている。また、二〇〇一年の鼎談における谷川の発言を引用し、『クレーの絵本』の最初の構想が、「編集部から送られてきた絵を見て、というよりは絵の題名に触発されていくつかの詩を書き」、というものであったことを紹介する。⁽¹⁴⁾クレーの有名な言葉として、「芸術は見えるものを再現するのではなく、見えるようにするのである」というフレーズがある。⁽¹⁵⁾これは一九二〇年、ベルリンの雑誌『芸術と時代の演壇』^{トリヒエネ}に掲載されたクレー「線描芸術について——創造的信条告白——」(“Schöpferische Konfession”, 1920)の冒頭の一文であり、後に『造形思考』の第一編「造形論の概念」の第一〇章に組み込まれたものである。⁽¹⁶⁾望月は『造形思考』の論旨から、「つまり、クレーは芸術家として目に見えない『彼岸(宇宙的)』の領域を、自らの絵を通じて『見えるようにすること』を目指したのである」と要約する。そして、『クレーの絵本』所収の「愛」「線」の読解から、「つまり、谷川はここで『世界』が『もつれたまま』⁽¹⁷⁾途切れず、『どこまでもむすばれている』ものであるという自らの世界観を語っているのだ。実は、このような『すべ

てがつながっている』という考え方は、クレーの方法論に通じている」と論じる。この言葉にならないものを、「在るもの」の言葉で「魂」と言い換え、それがあとがきの題名とされた「魂の住む絵」としてクレーを見る見方に繋がるものとする。

続いて望月は『クレーの絵本』中の「黄色い鳥のいる風景」(Landschaft mit gelben Vögeln, 1923)の絵と詩について、美術全集の解説による鑑賞文と谷川の詩とが「まったく違っている」ことを明らかにし、『造形思考』に見る絵画空間の組成に関する構造論と世界観に触れ、「谷川の詩は、言ってみれば、クレーの絵の内部にあるそのような本質を把握したうえで、いわばその骨格だけを『……があるから……がある』という強い因果律の表現で示していることになる」と分析する。そこから、「魂の住む絵」を引用しつつ、「つまり、『言葉になる以前のイメージ、あるいは言葉によつてではなく、イメージによつて秩序を与えられた世界』を見つめ、そこからクレーが線を取り出し表現したのと同じように、言葉より奥深くのものを、谷川は詩によつて表現しようとしたのだと言える」と導く。また、「ケトルドラム奏者」(Der Paukenspieler, 1940)を例に採り、「題名と絵のイメージと両方を鑑賞して書かれた詩」と推測し、その内容は『造形思考』の「静力学的な範疇」に属するものと見なし、特に題名を介して二人の芸術が世界を共有することに触れている。

次いで望月は論文の第Ⅱ章において、クレーの天使シリーズの成り立ちに触れ、「天使の絵を描いているにもかかわらず、クレーの絵は宗教画ではないのである」と明確に指摘している。それを『クレーの天使』のあとがき「天使という生きもの」の言葉により、クレーの描く天使は「人間的」であるとすると。二〇〇四年に翻訳の出たイングリッド・リーデルの研究書を参照し、また『造形思考』⁽¹⁷⁾にいう「此岸(地上的・人間的)―彼岸(宇宙的)」の対概念に結びつ

けて、此岸と彼岸との間で「まさに『変容する』途中の天使がクレーの天使なのだ」と言う。さらに『造形思考』を援用して、『純粹な根本の表現』を指摘したからこそ、クレーはもつともシンプルな技法である線描画にこだわったのである」とし、その「幼児性」「原始性」がクレーの天使絵に現れているとする。そして、あの「魂」への指向こそそのような「原始性への指向」なのであり、それが「谷川という詩人の生理」にも共通し、「画家のクレーが線であらわそうとしたのに対し、詩人である谷川は平仮名で、そこへ向かうとした」として、ひらがな詩の問題にも論及するのである。こうして、「クレーの絵に『魂』が住んでいるのだとすれば、谷川の詩にも同じように『魂』が住んでいるのだと言えよう。詩画集のなかで、ジャンルの違う双方は題名だけでなく、根源的な共通性——つまりは、『魂』——で、しっかりとつながれている」と結ぶのである。

この望月の論は、傑出した研究である。これを基礎とし、批判的に継承して、次の段階へ進んでみよう。第一に、既に見たように『クレーの絵本』『クレーの天使』は、それだけが独立して出現した営為ではない。それは、アプロプリエーションおよびシミュレーションの流れを汲む、触発の方法の帰結と考えることができ、たとえば望月が注目した題名からの触発なども、その観点から見必要がある。さらに、ひらがな詩という手法も、決して谷川とクレーとの対峙の中から直接に出てきたものではなく、一九七〇年代より培われてきた、谷川による触発の一契機としての翻訳と、ナンセンス詩の試みにも接続して考えなければならない。

第二に、『クレーの絵本』の成立が望月が先駆的に検証しているように、既に見た二〇年から四〇年に互る歳月の中で完成を迎えた作業であったことは確かであるが、それがまた詩集『モーツァルトを聴く人』と相前後して発表されたこともまた、偶然ではないと言わなければならない。詩集における音楽と詩との組み合わせと、絵画と詩との組み

合わせが、同じ年に発表されたのである。このことは右に第一の流れと見なしたその流れの中に浮かぶ二艘または三艘の船として、これらの詩集をとらえる契機となる。

第三に、この第二のポイントと深く関わる事柄として、詩・音楽・絵画との間の連絡を問題にしなければならない。パウロ・クレーの父は音楽の教授、母は声楽家であり、自身もヴァイオリンをよくし、自ら楽団で演奏し、彼の若き日の日記には、美術以上に音楽会の記事が豊富に綴られている。⁽¹⁸⁾クレーはバッハやモーツァルト、ひいては同時代の新音楽も含め、音楽に関して幅広い教養を培っていた。バウハウスでの講義録『造形思考』にも、音楽論の濃厚な投影が認められる。一方、前述の通り、『クレーの絵本』のあとがき「魂の住む絵」に、谷川はことさらモーツァルトの名前を挙げている。谷川の詩および詩論と、音楽特にモーツァルトとの関わりも視野に入る。⁽¹⁹⁾第二のポイントとも絡めて、これらのことは見過ごせないモメントとなる。

そして第四に、その『造形思考』およびクレーと谷川の芸術様式、特にその現代芸術としての様式についてである。『造形思考』は、驚嘆すべき先端的な構造主義の書物である。ここでは「フォルム」(形態)と呼ばれる要素を組み合わせ、それを時間的・空間的な静力学と動力学のダイナミズムを駆使して造形することによって、偶然的な要素を調和させ、実在的な生命を実現するプロセスとして、芸術創造の理論が語られている。これについて克明に分析した前田富士男は、ゲーテの形態論との関わりをも視野に、フォルム、コンポジション、コンストラクションなどの術語を解明している。⁽²⁰⁾たとえば、そこで前田がロマン・ヤコブソンの換喩と隠喩の記号学を引き合いに出しているように、⁽²¹⁾一九二一年から三一年にバウハウスで講義された『造形思考』の内容は、同時代のフォルマリズムや記号学の展開との親近性が高い。さらに、フォルムの組み合わせや、一種のプログラミングによって作品を造形する手法は、

後代における新音楽の末流としてのブーレーズのセリー主義にも通じるものがある。実際、ブーレーズはクレーに心酔し、タイトルをクレーの作品から借用した *Le pays fertile* (肥沃な国) と題するクレー論を書き、「遠近法に関するクレーの講義のおかげで、私は、シェーンベルクやドビュッシーのスコアの中に、ただしひたすら音楽的な観点からだけ漠然と理解していた問題を解き明かすことができた」としているほどである。⁽²²⁾ すなわち、『造形思考』などクレーの芸術論は、美術にとどまらず、まさに音楽なども含めた現代芸術の理論としての側面から見る必要があり、これこそ、谷川の詩を現代芸術として評価する際の示唆とならなければならない。

そのことは第五に、望月の結論が、「魂」という把握不能の本質に落ち着いていることも関連する。望月はこの二人の芸術家に共通するものについて、「谷川に倣って、それを『魂』という語であらわしてきたものの、それが何かと問われると、明白な答えは未だに出せない。名づけられる前の存在、本質、原始的なもの、純粹なエネルギーの塊……言い換えられる言葉は多々あるが、明確な枠に閉じ込めることはできない」と論じている。さて、「魂」とは何だろうか。そのようなものがあるのだろうか。望月のこの一種プラトニックな結論は、曖昧な反面、あながち否定できないとも言えるのだが、これまでの論点を総合するならば、いかにクレーと谷川の営為が「魂」に肉迫するものに見えようとも、それをイデア論的に収斂させるのは一種の逆行ではないだろうか。あくまでもそれを、技術あるいはフォルムの面から解明しなくてはならない。

ちなみに、「魂に行く傾向」は、近代から現代への芸術の転回点でその橋渡しを試み、そして躓いた有島武郎のモットーであった。この言葉は、「草の葉(ホイットマンに関する考察)」(『白樺』一九一三・七)に現れる。有島の場合、これは印象派からポスト印象派、さらにそれ以後の現代芸術総体の理想を指し示す言葉であった。生命に基づいた主

観主義、自己一元の境地を理想とした有島が、特にその現代における最高の達成として評価しようとしたのは、『惜みなく愛は奪ふ』（一九二〇・六、叢文閣）で論じられた未来派の美術であったが、この評論が、まさに一九二〇年に発表されていることに注目しよう。有島は一八七八年の生まれ、パウル・クレーが生まれたのはその翌年である。有島とクレーとは、完全な同時代人であった。しかし、有島自身はこの様式を十分に実践に移すことはできず、「宣言一つ」の自己批判の後、一九二三年にこの世を去る。有島に一九三〇年代は到来しなかったのである。なぜ不十分だったのだろうか。それは有島が、「魂」は純粋な主観でも自己でもなく、常に既に他者と接続されてある雑多な存在であることを、理論としては理解しながら、すなわち愛は他者から奪われるものであると理解しながら、初期から培った主観主義の軀を外すことができなかったためである。「宣言一つ」（『改造』一九二二・一）の階級論的な自己批判も、個人の階級移行を否定する点において、この発想を踏襲している。⁽²³⁾

アプロプリエーションイズム、シミュレーションイズム、そしてそれらの縁戚としての触発とは、自己を他者と、主観を客観と接続する方法の一つである。これはまた、フォルムによって造形されるべき作品を、他者・外部の偶然的要素に曝し、緊密な一体性を打ち破る行為でもある。竹内敏雄は、『現代藝術の美學』において、主著である『アリストテレスの藝術理論』でも問題とした偶然（テュケー）の要素を、現代芸術の本質としてとらえようとした。⁽²⁴⁾アレクサンダー・カルダーのモビールや、ジョン・ケージのチャンス・オペレーションについて、それらは芸術を偶然と接続する芸術であり、結局は自然美または現実の芸術への再導入に外ならないと論じたのである。⁽²⁵⁾偶然が自然美や現実そのものと言えるかどうかは議論の余地があるが、これはたとえばジャック・アタリが、音楽の歴史は楽音と雑音の境界線の変更の歴史であり、現代音楽は楽音に雑音をどこまで再導入するかによって規定されると論じたことを想起さ

せる。⁽²⁶⁾ 強いて「魂」という言葉を利用するならば、触発とは、自己の「魂」を他者の「魂」に接続することであり、「魂」の中に偶然と雑音を導入することに外ならない。そして、望月が重視した「すべてがつながっている」という視点の横溢した『クレーの絵本』に対して、むしろ断絶と死とが前面に出て来る『クレーの天使』の方において、この性質はより強く現れているように見える。

既に論じたように、⁽²⁷⁾『夜中に台所でほくはきみに話しかけたかった』というタイトルには、「何を」が欠けている。これは、何を話しかけるのかそのメッセージを志向するのではない、メッセージを欠いた、話しかけることによつて人と人との接触を実現するコンタクト志向の詩としての、谷川の様式を暗示する事柄である。まさにその詩集『夜中に台所でほくはきみに話しかけたかった』に含まれる連作「ポール・クレーの絵による『絵本』のために」一一編を中核として編まれた『クレーの絵本』が、望月のいう「すべてがつながっている」とする傾向に満ちているのは自然である。しかし、時期的には詩集『夜中に台所でほくはきみに話しかけたかった』以降に展開した、サンプリング、流用アート、そしてひらがな詩への強烈な訴求が、同じく触発を根底とする詩作にドッキングされ、止揚されたところに成立したのが『クレーの天使』であると考えられる。そしてそのような意味においてこそ、『クレーの天使』は谷川俊太郎の到達点の一つと言えるのである。

5 対位法

前述のように、『モーツァルトを聴く人』と『クレーの絵本』は一九九五年、『クレーの天使』は二〇〇〇年に刊行

ひらがなの天使

されたが、これらの中で最も古い作品が収録されているのは、旧作を輯めた『クレーの絵本』である。巻頭の「愛」が一九五五年の詩集『愛について』より、また中間に挿まれた「在るもの」と「線」は、一九六五年に刊行された思潮社の全詩集『谷川俊太郎詩集』より、さらにそれら以外の一一編としては、一九七五年の詩集『夜中に台所ではくはきみに話しかけたかった』に含まれる、連作「ポール・クレーの絵による『絵本』のために」がそのまま再録されている。最初に、「Paul Klee に」という献辞の冠された「愛」を見てみよう。

いつまでも

そんなにいつまでも

むすばれているのだどこまでも

そんなにどこまでもむすばれているのだ

弱いもののために

愛し合いながらもたちきられているもの

ひとりで生きているもののために

いつまでも

そんなにいつまでも終らない歌が要るのだ

天と地とをあらそわせぬために

たちきられたものをもとのつながりに戻すため

ひとりの心をひとびとの心に

塹壕ざんこうを古い村々に

「…」

樹がきこりと

少女が血と

窓が恋と

歌がもうひとつの歌と

あらそうことのないように

生きるのに不要もののひとつもないように

そんなに豊かに

そんなにいつまでもひろがってゆくイメージがある

世界に自らを真似させようと

やさしい目差でさし招くイメージがある

「いつまでも／そんなにいつまでも／むすばれているのだどこまでも／そんなにどこまでもむすばれているのだ」と開幕するこの詩について、望月が、「このような『すべてがつながっている』という考え方は、クレーの方法論に通じている」と論じたことを念頭に置きたい。しかし、この詩において印象に残るのは、第一にその広い意味での音楽

性である。この四行の間に、「いつまでも」「そんなに」「むすばれている」「どこまでも」の四つの言葉が、少しずつ位置を変えながら反復されている。各行は字数・語数を少しずつ増やし、それによって言葉の強さは累加される。三行目には倒置法があり、そのために最初の三行は「までも」の脚韻を踏む。一種のカノン、フーガのように反復し、四行の間でクレッシェンドして序奏が終わり、五行目からは、それよりはやや緩やかだが、顕著に感じられる言葉の波が感じられる。すなわち、「弱いもののために」「ひとりで生きているもののために」などの「ために」「ため」が四回、「ひとりの心をひとびとの心に」「塹壕を古い村々に」などの、「何々を何々に」の目的語と補語の列挙が五回、「まるで自ら終ろうとしているように」「まるで自ら全いものになろうとするように」などの直喩表現が六回、「いつまでも」と「どこまでも」が詩の全体でそれぞれ五回、同じく「そんなに」が七回反復される。また「天と地とをあらそわせぬために」は、後に「樹がきこりと少女が血と」のように敷衍されて「あらそうことのないように」と、変形されてやはり反復される。そして結末では、「イマージュがある」が二回反復されて終幕を迎える。

谷川自身はこの作品について、エッセー「リズムについての断片」(『短歌研究』一九五六・六)において、「私にこの詩を書かせたのは、クレーのある一枚の絵である。そうして、クレーのそのイマージュのリズムが、私を感動させ、私の中にこのようなリズムを呼びおこした」と、また「ここではリズムは、クレー―私―読者の三者をむすぼうとしている」と書いている。⁽²⁹⁾ このリズムとは、音数律ではなく、明らかに反復のリズムであり、むしろフーガ、リチェルカーレ、あるいはカノンに準えることができる。これらの技法は対位法(Kontrapunkt)の一種であり、対位法とは、複数の独立した旋律を組み合わせる書法(作曲法)である。⁽³⁰⁾ カノンは、この複数の旋律において、ある声部(旋律)を他の声部が模倣する形式をいい、それには反行・逆行・拡大・縮小などがある。対位法は、水平方向(楽曲の時間

的進行の方向)の旋律的次元において、複数の声部が独自性を保ちつつ動くポリフォニー(Polyphonie)と関係が深い。対位法と和声(Harmonie)は対になる概念とされることもあるが、両者は対立するものではない。一方でポリフォニーは、垂直的次元において独自性をもつ声部が単独であり、また和声に重点を置くホモフォニー(Homophonie)とは対立する概念である。いずれにしてもこの「愛」という詩は、反復と列挙のリズムを印象づける対位法的、特にポリフォニー的な作品であり、そのような音楽性が、共有されるべき一種の身体感覚として、接続の機能を果たすものと期待されたのである。

ちなみに、「愛」は詩集『愛について』のⅡ(第二部)の冒頭に置かれ、当初この詩の次の詩は「John Cage」の献辞のある「音たち」であった。このことから、この詩「愛」は、絵よりもむしろ音楽と繋がり深い作品と言わなければならない。そしてこのような反復と列挙によるポリフォニーは、『クレーの絵本』所収作品や、ひいては谷川の詩のかんりの部分において同様に見て取れる。「雪の降る前」(Vor dem Schnee, 1929)、「階段の上の子供」(Kind an der Freitreppe, 1923)、「黒い王様」(Schwarzer Fürst, 1927)、「ケトルドラム奏者」、「黄色い鳥のいる風景」、「選ばれた場所」(Auserwählte Stätte, 1927)など、連作「ボール・クレーの絵による『絵本』のために」由来の作品群は大半がそうである。また、『これはのみのび』(一九七九・四、サンリード)、『みみをすます』(一九八二・六、福音館書店)、『みんなやわらかい』(一九九九・一〇、大日本図書)など、広く普及した児童詩や絵本詩の多くもまた、このような反復と列挙による対位法を用いている。子ども向けの詩法解説書である『詩ってなんだろう』(二〇〇一・一〇、筑摩書房、二〇〇七・五、ちくま文庫)には、「いろはかるた」「あいうえお」「つみあげうた」などの、反復・列挙・重畳を基調とするポリフォニックな詩形式が多く取り上げられている。要するに、言葉による反復と列挙の展開にお

いて何らかの変容を加えていくような、シンブルとも言える詩法が、谷川の詩様式の根幹にある。

ところで、前述のように音楽家でもあったクレーと音楽との関連について論じた、アンドリュ・ケーガン⁽³¹⁾、ピーエル・ブーレーズ⁽³²⁾、ハーヨ・デュヒティンク⁽³³⁾の各々の著作において、異口同音に述べられているのは、クレーが目指したいわば対位法の絵画についてであった。たとえばケーガンは、クレーの作品で『クレーの絵本』でも挿画とされている「アド・パルナッスム」(Ad Parnassum, 1932)について、ヨハン・ヨーゼフ・フックスの音楽理論書である『グラドウス・アド・パルナッスム』(Johann Joseph Fux, *Gradus ad Parnassum*, 1725)「パルナッソスへの階梯」への仄めかしと見なし、この説はこの作品の解説としてよく採られている⁽³⁴⁾。なお、フックスの『グラドウス・アド・パルナッスム』には、『古典対位法』と題する邦訳がある⁽³⁵⁾。ケーガンによれば、「モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェンはいずれも、基礎的な対位法の作曲技法をフックスの論文から学んだ」という⁽³⁶⁾。モーツァルトは一七八一年から八三年のウィーン滞在中に、バロック音楽の楽譜を収集していたゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵のサークルでバッハとヘンデルの音楽に深く接し、フーガを始めとして対位法・ポリフォニーの理論に基づく作品を多数作曲し、その技法を身に付けた⁽³⁷⁾。ケーガンらが論じているように、対位法、ことにポリフォニーの理論は、クレーによって音楽理論から絵画理論へと導入された。一九一七年七月一三日付けのクレーの日記には、時間的な要素を消去し、同時に確保するために「音楽でのポリフォニーは、この要求にある程度応えることができた」として、「モーツァルトとバッハは、一九世紀の音楽よりも近代的だ」と書かれている⁽³⁸⁾。さらにその後で、「ポリフォニーの絵画は、時間的なもの⁽³⁹⁾がここではむしろ空間的となるという点で、音楽に勝っている」とまで述べるのである。

またバウハウスにおける講義をまとめた名著『造形思考』においても、その傾向は明らかである。『造形思考』の第

二章「造形フォルム論によせて」の「5 構造的な形成、個体的な性格と分割可能な性格／造形過程としての長さの単位と重さの計量／時間単位と長さの単位」(一九三二年一月二六日)において、クレーはまずチェスの盤面や数学の行列式のように絵画の構造を説明する。次いで「人工的なリズム」の節において、クレーは二拍子、三拍子などのリズムを線描を中心とする絵に変換し、その後で、「さて、わたしはこれらを基礎にして、主題のある音楽作品を、単声またはポリフォニーのものを、造形的に表現しようと試みることができる」として、バッハの三声の曲を図式に拡大してみせる。⁽⁴⁰⁾それは一種のダイヤグラムのようにも見える。ケーガンはこれらのことを指摘し、また形態のみならず色彩についても対位法に頼ったことにも触れている。すなわち、クレーについて、「彼は『しだいに強く―^{デクレッシェンド}しだいに弱く』なる色彩『主題』を別の『声部』につぎつぎと繰り返すことによって、そこにカノンの構造ないしパターンを生み出した」というのである。⁽⁴¹⁾

ケーガンと並んでデュヒティングもまた、クレーの技法を「ポリフォニーの絵画」と呼ぶ。⁽⁴²⁾実際、クレーの作品には、その名も「ポリフォニー」(Polyphonie, 1932)や、それ以外にも「ポリフォニーに囲まれた白」(polyphon gefasstes Weiß, 1930)その他、題名に「ポリフォニー」や、「バッハの様式で」(Im Bach'schen Stil, 1919)、「赤のフーガ」(Fuge in Rot, 1921)など、音楽関係の言葉を含むものがある。また、前掲の「アド・パルナッスム」は作品「ポリフォニー」と同工の技法によっている。⁽⁴³⁾『クレーの絵本』でも谷川が詩を寄せている「ケトルドラム奏者」の外、楽器や音楽家を描いた作品も多い。谷川の『モーツァルトを聴く人』のカバーや挿画が、すべてクレーの音楽関係の作品で占められているのは、全く偶然ではない。ちなみに、クレーは一九三一年にデュッセルドルフ美術学校に勤めた頃、このポリフォニーの手法を本格的に開発したが、その中には、一連をなす「天使の保護」(Engelschut, 1931)の作品群の

ように、天使の題材をポリフォニックに描いたものも含まれている。⁽⁴⁴⁾そしてまた、作品「愛」における谷川が言うところの「リズム」が、このようなクレーによるポリフォニーの絵画と響き合うとすると、一九五五年の段階で、谷川とクレーとの出会いは、絵画を介した、音楽と音楽性の領域において行われていたと意味づけることができる。

6 ジャンル間パステイシュー

詩集『モーツァルトを聴く人』の「あとがき」には、「音楽は昔から私にとってではなくてはならぬものだった」が、ただし「二十代ですでに私は音楽に淫することをみずから戒めていた」と述べられている。また、「ここに収めた作のほとんどは、前集『世間知ラズ』（思潮社・一九九三）と平行して書いていたものである。音楽に懂れながら詩を書いた私には、詩に対する疑問と音楽に対する疑問が、そのまま自分という人間に対する疑問に結びついている。その点で本集と前集は兄弟分みたいなのだろうと思う」とも説明する。一九九五年のこの詩集を読んで感じるのは、その二年前に刊行された『世間知ラズ』と内容上の共通点が多いことと、またタイトルの通り、モーツァルトを中心とする音楽への言及がほぼ全編に見られることである。たとえば、「どけよ猫」には、歌劇『魔笛』からパミーナとパパゲーノの名前が、モーツァルトゆかりの「ザルツブルグ散歩」ではモーツァルトテウム（音楽院に由来する大学）が登場し、「ふたつのロンド」では「ロンド ニ長調 K485」と「ロンド イ長調 K511」が、また「アリヅナのモーツァルト」では『ドン・ジョバンニ』からツェルリーナの Aria が引用される。モーツァルトの外にも、この詩ではクライスラーにも触れられ、「ラモーが小鳥の羽ばたきと囁きを聞いて」と題する詩もあり、また「TGV à Marseille」では

ハイドンが出てくる。「このカヴァティーナを聞き続けたいと思う気持ち」と始まる「このカヴァティーナを」では、これが何のカヴァティーナかは明記されないものの、「そして楽器はヴァイオリンとヴィオラとチェロ」とされるため、附属CDでこの詩の朗読の後に挿入されたベートーヴェンの弦楽四重奏曲第一三番第五楽章の「カヴァティーナ」と見てよいだろう。しかし、この詩集と音楽との関わりは、単に詩の話題として音楽が導入されていることに止まるものではない。

巻頭に置かれた「そよかぜ 墓場 ダルシマー」はその意味で序の性質を持つ。

騒がしい友達が帰った夜おそく食卓の上で何か書こうとして

三十年あまり昔のある朝のことを思い出した

違う家の違うテーブルでやはりぼくは「何か」を書いていた

夏の間に知り合った女に宛てた「別れ」という題のそれは

未練がましい手紙のようにいつまで書いてもきりがなかった

「…」

だがいまだにこんなふうにして「何か」を書いていいのだろうか

ぼくはマルクスもドストエフスキーも読まずに

モーツァルトを聴きながら年をとった

ぼくには人の苦しみに共感する能力が欠けていた

ひらがなの天使

一所懸命生きて自分勝手に幸福だった

ぼくはよく話しくよく笑ったけれどほんとうは静かなものを愛した
そよかぜ 墓場 ダルシマー ほほえみ 白い紙
いつかこの世から消え失せる自分……

だが沈黙と隣合わせの詩とアンダンテだけを信じていいのだろうか
日常の散文と劇にひそむ荒々しい欲望と情熱の騒々しさに気圧されて

それとももう手遅れなのか

ぼくは詩人でしかないのか三十年あまり昔のあの朝からずっと

無疵で

ダルシマーはヨーロッパにおけるタイター型楽器の総称で、板に張ったたくさんの弦を撥で叩いてトレモロ奏法で演奏する。ツインバロムなどとも呼ばれ、ハープシコード、ピアノなど鍵盤楽器の前身とされる。「三十年あまり昔のある朝」に書いていた「何か」、それは「女に宛てた『別れ』」の言葉であった。それを今、思い出した「ぼく」は、今も同じように「『何か』」を書いていいのだろうか」と自問する。「ぼくはマルクスもドストエフスキーも読まず

に／モーツァルトを聴きながら年をとった／ぼくには人の苦しみ共感する能力が欠けていた／一所懸命生きて自分勝手に幸福だった」「それとももう手遅れなのか」。この詩の基調は、『世間知ラズ』のタイトル詩に、「行分けだけを頼りにかきつづけて四十年」「私はただかつこい言葉の蝶々を追っかけてただけの／世間知らずの子ども／その三つ児の魂は／人を傷つけたことにも気づかぬほど無邪気なまま／百へとむかう」とあることに通じる。「詩は／滑稽だ」と語る「世間知ラズ」は、一種の自己批判の色が濃いが、ただしそれでもそれが外ならぬ詩として語られるのと同じく、こちらの詩においても、「それとももう手遅れなのか」と自問しつつも、その自問は詩によってなされている。ここでモーツァルトはどのような位置づけにあるのか。「ぼくはよく話しよく笑ったけれどほんとうは静かなものを愛した／そよかぜ 墓場 ダルシマー ほほえみ 白い紙／いつかこの世から消え失せる自分……」、それらの自分の愛したものと同列であるか、またはそれらのあり方を「ぼく」に教えてくれるのがモーツァルトである。そのことは「沈黙と隣合わせの詩とアンダンテ」という一節からも分かる。「詩とアンダンテ」、つまり詩とモーツァルトの曲、ひいては音楽は、「沈黙」と表裏をなし、そのことによつて「ぼく」にとつては本質的なものである。ここで「ダルシマー」は、モーツァルト、さらにこのような性質を共有するモーツァルト的な音楽全般のメタファーとなっている。そしてそれは、「そよかぜ」「墓場」「ほほえみ」「白い紙」などと、この本質的な沈黙の側にある世界の構成物として、メトニミー的な相互関係を緩やかに構築している。このような発語の様態は、これまでも論じてきた、谷川の詩における沈黙の意味と、物や人などの事象の間における存在の意味に深く通じるものである。⁽⁴⁵⁾すなわち、この詩において、モーツァルトは「ぼく」にとつての詩の本質と繋がるものであり、またそのような本質を大義として自分が存在することへの、倫理的な問いかけをも担保すべきものとして導入されているのである。

ひらがなの天使

またこのことから、現代芸術におけるアプロプリエーションやシミュレーションと並列すべき手法としての、谷川の詩ひいては現代芸術一般における触発 (creation by incitement, by contact) の現象について推論できる。「ぼくはマルクスもドストエフスキーも読まずに／モーツァルトを聴きながら年をとった」とは、思想的影響ではなく感性的陶冶によって成長し、その感性を汲み取った泉がモーツァルトであったということである。すなわち、触発とは、他のテキストに言及し、それと重ねて自らのテキストを構築するテキスト操作である。その点においては第二次テキスト形成の一手法と言えるが、しかし触発は、たとえば一般にアダプテーション (翻案・改作) と呼ばれるところの、原作を持つ作品制作のように、外形的にもテキストの起源を原テキストに置くことではない。ただしそれは、引喩 (allusion) として原テキストを導入し、そのようにすることによってテキストを複数化させ、一種の対位法を構成する。この詩集の二番目に置かれた「つまりきみは」によってこのことを検証してみる。

モーツァルトの音楽を信じすぎてはいけない

なにかにつけてきみはそう言った

酒に酔って言ったこともあるししらふで言ったこともある

だがぼくにはその意味が分からなかった

ついこの間まで

このように開幕するこの詩では、一見、モーツァルトの音楽の重要性・重大さが示されている。この詩には、「ぼく」

の外に、死んだ「きみ」と、かつて決裂したと思われる「あの女」が登場する。確かに、「モーツァルトは許してくれた」が、「だがあの女は一瞬たりともぼくを許さなかった／当然だ」と言われるのだから、差し当たりは罪を許すモーツァルトの曲の包容力や浄化作用が示唆されている。しかしそのような包容力が基盤とされるのではなく、現実にはいずれも自分という軀から逃れられず、他者を不幸にしてしまう「きみ」や「ぼく」が、そのような包容力を持つモーツァルトの音楽を単純に愛することは許されないと自認するのに対して、「きみ」だけが「死ねばもうなんの悔いもなく／モーツァルトを愛せると知っていて」死を選んだかも知れないと想定することにより、問題は自己の限界という自己批判にやはり帰ってくることになるのである。ここでも、「モーツァルト」はモーツァルトの作品や様式の換喩あるいは提喩（モーツァルトの曲、あるいはモーツァルト的なものの意）として用いられ、それら作品や様式の個性を引喩とする形で導入されながらも、その個性の声部と、それとは異なる「ぼく」「きみ」「あの女」にまつわる声部とが、対位法を構成していると言うことができる。

そして同様の内実は、やや変奏されて、「人を愛することの出来ぬ者もモーツァルトに涙する／もしもそれが幻ならばこの世のすべては夢にすぎない」という二行のある詩「人を愛することの出来ぬ者も」などにも認められる。この詩集の掉尾を飾るタイトル詩「モーツァルトを聴く人」の最終連は、「モーツァルトを聴く人は立ち上がる／母なる音楽の抱擁から身を振りほどき／答えることの出来る問いを求めて巷へと階段を下りて行く」と結ばれる。ここにおいて比喩としてのモーツァルトは至純・純美の理想的境地だが、そこに耽溺することは、現実を見失うことに繋がりがかねない。この両義性・パラドックスこそが、詩集『モーツァルトを聴く人』全体を緩やかに貫くモチーフに外ならない。そこに感じ取れるのは、この詩の言葉を借りれば、「この世にあるはずがない優しすぎる愛撫」であり、「あらゆ

る no を拒む yes」なのである。

以上、反復と列挙を基調とした文体は、構文論軸において言葉を重畳・累加させ、触発・引喩による重ね合わせは、意味論軸においてテキストを多重化させる。このような仕方では、谷川の詩は対位法として構造化されている。このような対位法の導入が、クレーさらにモーツァルトから触発されたものであるとすれば、その触発は、言語、絵画、そして音楽をまたいだ文体模倣（様式模倣）として、一種のジャンル間パステイシユ（inter-generic pastiche）を行つたと見なすことができるだろう。

7 ひらがな詩

既に論じたように、ひらがな詩は、言葉を文字記号に返すという意味でのエクリチュール（言語表記）の原初性と、それが子どもの最初に覚える表記方法であり、また子どもについての詩でもあるという意味での意味内容における原初性との、これら二つの意味で原初性（primitivity, radicality）を帯びている。⁽⁴⁶⁾この立論を引き継ぎ、ここでは触発との関わりから、ひらがな詩の機能について再考してみよう。

『クレーの絵本』収録の詩において、『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』所収「ポール・クレーの絵による『絵本』のために」に由来する一一編の詩はすべてひらがな詩であり、それらはいずれも触発と対位法に彩られている。例えば「選ばれた場所」は、一九二七年のクレーの作品に寄せた詩である。

そこへゆこうとして

ことばはつまずき

ことばをおいこそうとして

たましいはあえぎ

けれどそのたましいのさきに

かすかなともしびのようなものがみえる

そこへゆこうとして

ゆめはばくはつし

ゆめをつらぬこうとして

くらやみはかがやき

けれどそのくらやみのさきに

まだおおきなあなのようなものがみえる

クレーの絵「選ばれた場所」は、コンスタンス・ノベール＝ライザーの解説によれば、クレーが休暇を過ごしたコルシカ島など「実物にかなり忠実なデッサンの線描から出発して、彼は入り組んだ線と、重なり合った面によって、古い町のプロフィールを浮かび上がらせる」と、また「月のなかの入り組んだ構造」が「町のそれと同じ」であることから、月が町から「切り離された断片」に見えると描写されている。^⑭この幾何学模様で構成された都市建築と楕円

形に縁取られた月が、さらにポリフォニー的に展開すると、見方によっては構図の似た、前述の「アド・パルナッスム」(一九三二)に発展するとも言える。それ以上に谷川の詩は、「ことばはつまずき／ことばをおいこそうとして／たましいはあえぎ」のように、次々と目標を先へ進めていくフーガ的反復が顕著である。全体としても、「そこへゆこうとして」から「かすかなともしびのようなのが見える」までと、「まだおおきなあなのようなのが見える」までの前後二部構成の反復によったポリフォニック・スタイルを採っている。ちなみに、詩集あとがきの「魂の住む絵」において、谷川は「それらは主として彼の絵の題名に、触発されて出来たものだが」(傍点引用者)と述べていたことが望月によって確認されていた。しかし、谷川の言に反して、大半の作品は絵そのものとも関連し、それに触発されているとは思われない。この詩の場合も、「くらやみ」(全体、特に下部の大地にあたる背景)や特に「おおきなあなのようなもの」(いわゆる月)は、明らかに絵の内部にも存在する要素として認められる。

ひらがな詩には、カタカナやまれに漢数字が混じることもあるため、実際はそれは漢数字以外の漢字を排除した仮名表記ということになる。さて、仮にこの「選ばれた場所」を、適当に漢字ひらがな交じりの文章に書き換えてみよう。すると、まず直観的には、漢字かな交じりの方がはるかに読みやすく感じられる。日本語学習を終えた大人はこの表記に慣れているからであり、具体的には、漢字かな交じりによって句読法や文節が明確になり、また漢字の意味が文の理解を容易にするからである。ひらがな詩においては、それらが相当程度、排除されることにより、先に述べた文字記号としての原初性への回帰がなされる。

山田兼士は谷川のひらがな詩について、「和語を大切にしたいという気持と音を重視する谷川詩字のあらわれである」と述べた。⁽⁴⁸⁾ 和語は、たとえば「簡」(カン)を語源とすると言われる「紙」(かみ)などのように、外来語(この

場合は漢語）も含む場合もあるとする見方もあるようだが、この場合の和語とは、ほぼ、漢語・外来語を除いたやまとことばと同一視されているのだらう。しかし、たとえば「選ばれた場所」には、「ばくはつ」（爆発）という漢語由来の言葉もある。他の詩を参照しても、「黄色い鳥のいる風景」には「ふうせん」（風船）、「じめん」（地面）、「せかい」（世界）など、「死と炎」には「じぶん」（自分）という言葉も見られ、決して漢語を完全に排除しているわけではないが、確かに少なくともやまとことば由来の語彙がまさっているとは言えるだらう。やまとことばは、歴史的・日本語史的な意味でも原初的（primitive）であり、その感覚はひらがな表記によって強調される。もちろん、やまとことばも当初は漢字（万葉仮名）によって書かれたのであり、またカタカナやローマ字で書くこともできるのであつて、ひらがなとやまとことばとの結びつきは、必然的なものではない。しかし、現代における表記実態の経験則から、発達における原初性が、歴史的な原初性と連合（連想）関係にあるとは言えるのではないだらうか。

またその原初性は、漢字かな交じり文から見た場合の意味の多層性にも繋がる。漢字かな交じり文に通じた読者は、たとえば「ともしび」は「燈」と書くのか「灯」の字か、あるいは「灯火」と「火」を補って二文字に書くのか、一文字に収めるのかなどのいわば翻訳・変換をして意味をつかもうとする。一方、「ばくはつ」という漢語がひらがなで綴られると、それは言わばふりがなを本筋に格上げしたような印象があり、音が強調されるとともに漢語の意味が相対化される。いわば、子どもが身の丈に合わない難しい言葉をあえて使った時に起こるような、意味への注視を余儀なくされるのである。これらの記号的な揺らぎが、ひらがな詩には常につきまとい、いわば一種の得体の知れなさを伴って表出されることになる。

そして、これらはひらがな表記自体が作り出す対位法と言えないだらうか。ひらがな表記の原初性とその上に積み

ひらがなの天使

重なる意味の多層性、記号的な揺らぎは、常に一語を多重化し、一文を多様化させる。そこには重なり合った声部が聴き取れるとは言えないだろうか。あるいは、複数の旋律の重なり合いとしてのポリフォニーに対して、それを和声を中心とするホモフォニーと呼んでも、ここでは意味が通るかも知れない。ただし、そこに発生するのが協和音なのか不協和音なのかは、多分に解釈に依存すると言わなければならない。

これが『クレーの天使』に至ると、触発の状態はさらに複雑というか模糊としたものとなる。そもそも、クレーの描いた線描の天使たちそのものが、タイトルと直結する絵にはなっていない。「泣いている天使」(es weint, 1939)などはまだよい方で、確かにこれは泣いているように見える。しかし、天使として見れば、これはもしかしたら翼で体を抱え込んだ姿だろうかと見えてくるが、題名に「天使」と入っていない限りは、この絵を初めて見せられた人は決してこれが天使だとは言わないだろう。「醜い天使」(hässlicher Engel, 1939)の顔の部分は、ピカソなどの立体主義を思わせるが、醜いかどうかは甚だ相対的である。「幼稚園の天使」(Engel im Kindergarten, 1939)になるとどこが幼稚園なのか分からず、「おませな天使」(altkluger Engel, 1939)の絵柄はおませ (altkluger) とは何の関係もない。ただし、そのようなものとして見れば見えないこともない。この「として」見る操作は、これも一種の触発と呼ぶことができる。ただしそれは、触発元の作品と無関係ではないが、触発先の作品がそれとはかなり隔たつていてもよいという極めて緩い条件付きである。クレーの天使画は、むしろ天使に触発されたクレー独自の絵であつて、それ自体が既に触発によるものである。従つて谷川の詩は、いわば触発の触発という形で天使と繋がっているのである。

以上、これらの詩において、触発、ひらがな表記、そして天使は、谷川の詩における対位法的な多重性・多層性の構築において、相互に、そして緩やかに結びついているのである。

8 天使

(1) クレーの天使

クレーの天使連作について、諸文献を参照して説明する。一八七九年生まれのクレーは、一九三五年、皮膚硬化症を発病し、一九四〇年に亡くなる。闘病中は、一時は作品制作が激減したが、一九三七年からは制作数を増やし、特に死の前年の一九三九年には一二五三点もの作品を作り、そのうちの九五七点が素描と言われる（クレーの作品の総数は九〇〇〇点に上る）。パウル・クレーの子息フェリックス・クレーのリストでは「天使」のグループに分類されるのは四九作であるが、そのうち一九三九年に二九点、四〇年に四点が描かれ、この二年で三三点を占め、それらの大半は素描である。⁽⁴⁹⁾ ちなみに、フェリックスのリストでは、クレーの最初の天使作品は一九一三年のものだが、ボリス・フリーデヴァルトによれば、クレーが初めて描いた天使画は、一八八三年、三歳の時のクリスマスに描いた絵に遡る。⁽⁵⁰⁾ ちなみに、クレーには絵柄が天使シリーズとも似たエイドラ連作の素描もある。エイドラはギリシャ語で「幻」「幽霊」を表し、それらには「かつての音楽家」(weiland Musiker)・「かつての哲学者」(weiland Philosoph)・「かつてのピアニスト」(weiland Pianist) のようなタイトルが付されている。⁽⁵¹⁾ エイドラ・シリーズは一九四〇年に描かれ、この年の一月には父ハンスが九一歳で亡くなり、その後を追うようにパウルが亡くなるのは六月二九日のことであった。クレーの「天使の年」一九三九年を中心とする天使連作についてまず言うべきは、先に触れたように、これは天使だと言われない限り、天使には見えないということである。新藤真知は、「天使は、人間界と神とをつなぐメッセン

ジャーであるが、クレーの天使たちは神の御使と呼ぶにはほど遠い。／画家は、鑑賞者が天使という題名に惑わされて、この世ならぬ不思議な存在を夢想することを意図したのかもしれない。だが、その卓越した描線がとらえた天使の表情は、どれも飾らない人間の喜怒哀楽を表している。まさにクレーの天使は人間そのものだ。そこには、戦争の時代を生き、不運な境遇を受け入れてもなお、人間を愛すべき存在にとらえていたクレーの想いが託されているように⁽⁵²⁾と述べている。クレーの天使画の本質を「転移の擬人化」(personification of transition)としてとらえたクリステイーネ・ホッフェンガルトも、「クレーの作品は、しばしばその詩や機知、色彩や複雑な線の戯れのために魅惑的なものであるとはいえ、微妙に強調されたアイロニーはしばしばその特殊な内容をとらえどころのないものとする。そのため人間の実存についての普遍的な表明をクレーに求める者は、誰しも一般には失望するだろう。『…』この規則に對して、天使画だけは例外となる。それらにおいて、私たちは我々自身を認識する。なぜなら、それらは『人間的な、あまりに人間的な』を表現するとともに、来世、死後の生への内省への実存的な必要を満足させるものでもあるからだ。それらはその非常な不完全性によつて、天上と地上とを共に接近させ、それらを気の合った援助者に変える」と論じている。⁽⁵³⁾ホッフェンガルトにとつて、クレーの天使は天使ではなく、いわばその翼を持った形態によつてのみその異種性が認識されるような、「人類の突然変異種」(mutations of the human species)なのだ。⁽⁵⁴⁾また、いずれもクレーの専門家である前田富士男と宮下誠との対談において、宮下は「一方向的な制作や解釈からすり抜けつづけた画家なのだから、天使を描いたからといって、肯定的なプラスの要素だけを持つているとは到底考えられない。場合によつては善にも悪にもなる、アンビヴァレントな存在のはずです」と言う。⁽⁵⁵⁾「喜怒哀楽」あるいは「アンビヴァレント」の両義性・多義性がこれらの線描には確実に認められ、同じことはエイドラ連作についても言える。

クレーの天使画に暗黒面が濃厚に現れるのは、一九三三年以降とされる。⁽⁵⁶⁾ 西洋美術史の岡田温司は、天使の図像学を歴史的に辿り、まずキリスト教の天使はギリシア、ローマのキューピッドなど異教の神々と結びつき、イエス・キリストその人とも結びつけられたこと、また合唱・器楽など音楽との関わりも深いこと、さらには墮天使という形で悪魔とも同一視されたことを論じている。⁽⁵⁷⁾ そして岡田によれば近代に至ってこれらの天使のイメージはそれぞれの作家によって、より自由に展開されることになった。岡田はかつてベンヤミンが所蔵した「新しい天使」(Angelus Novus, 1920)を皮切りとして、クレーの作品についても述べている。それによると、それらは「男性と女性の境界はもろんのこと、天使と悪魔、聖と俗、幼児と大人の境界すらもまた揺らいでいる。彼等はもはや、神聖でもなければ不死の者たちでもない」と見なし、「しかも、それらはいいてい、人間や獣や鳥類、植物や鉱物など、自然界のあらゆるものを組み合わせたような姿をしている。『…』森羅万象がそうであるように、これらクレーの天使たちも、つかの間に生まれては消えていくようなはかない存在である」と、そのエフェメラルな性質を認めている。⁽⁵⁸⁾ これは、ホッフェンガルトのいう、トランジション(転移・変異)にも通じるだろう。そして、岡田は谷川の『クレーの天使』より「老いた音楽家が天使のふりをする」を引用し、「谷川俊太郎もまた、音楽をこよなく愛した画家の死のイメージを重ねていたのだろうか」と評している。⁽⁵⁹⁾ 難病に取り憑かれ、迫り来る自らの死を否応なく意識せざるを得ない時期に制作された一九三九年におけるクレーの天使は、死の影や、死の世界へのトランジションの位相をそこはかなく身に纏っている。

クレーの天使画について、ここに引いた美術史の専門家の言葉を越える批評を筆者は持っていない。特に、ホッフェンガルトや岡田の挙げたトランジションや境界の揺らぎ、それは最終的にこの線描そのもののあえかな両義性・多義

ひらがなの天使

性によって実現されている。一方、谷川の『クレーの天使』についても、そのような両義性は同様に顕著に認められる。仮に挿画を全部なくしてこれらクレーの天使画論を参照したら、それはあたかも谷川の詩の分析と見紛うものだろう。それでは、谷川にあつてクレーには明記されていないものはないのだろうか。それは、言葉だけに許される否定の契機ではないか。天使に触れたひらがな詩という一見、親しみやすいこれらの詩は、ことの外、厳しい限界状況を語っていると思われぬ。クレーによる触発の上に谷川が展開したのは、否定と不可能性、それに加えるところの一片の希望の要素である。ただし、それはクレーにおいても、言語的には明示されていないというだけで、決して作品から読み取れないものではない。

(2) ひらがなの天使

それについては後に述べることとして、まずは谷川の『クレーの天使』の主な所収詩編を読んでみよう。

まにあうまだまにあう

とおもっているうちに

まにあわなくなつた

ちいさなとくにこたえられなかつたから

おおきなとにもこたえられなかつた

「…」

なにひとつこたえのない

しずけさをつたわってきこえてくる

かすかなすすりなき……

そしてあすがくる（「泣いている天使」）

かみさま……とよびかけて

ひとをあいした

「…」

あいされたものは

あいするもののあいをうたがい

びじゅつかんは

かみのにすがたであふれていた（「醜い天使」）

ほほえみでつたえることができるとおもった

だまっけても

ひらがなの天使

それができないとして
なぐった

なんどもなんども

「∴」

したにあるものをふみにじり
うえにあるものにあこがれて

いいわるいはしない

てんしはいつだつてめをそらした（「用心深い天使」）

うたがうことばかりしつていて
しんじることをしらなかった

きずつくまいとして

あいするものからめをそらし
かぎりないそらを見て

かぜにゆれるきぎをみて

「…」

あたらしくうまれてくるものたちだけが

つかのまてんしのすがたをして

みえないつばさではばたき

こころのくらやみをふきちらした（「おませな天使」）

かごめかごめのわのなかに

てんしがいた

おとなになっておもいだしたとき

もうてんしはいなかった

どこにも

「…」

だれがすきか

なにがきらいかも

わからなくなったとき

ひらがなの天使

あくまがやってきた

ほほえんで（「幼稚園の天使」）

くりかえすこと

くりかえしくりかえすこと

そこにあらわれてくるものにささえられ
きえさっていくものにいらだって

いきてきた

わすれっぽいてんしがともだち

かれはほほえみながらうらぎり

すぐそよかぜにまぎれてしまいうたで
なぐさめる

「…」（「忘れっぽい天使」）

のはらにもうみべにも

まちかどにもへやのなかにも
すきなものがあつて

でもしぬほどすきなものは
どこにもなくて

よるをてんしとねむった

「∴」（「希望に満ちた天使」）

なんでもしつてゐるおとななのか
むじやきなことなのか

つばさはどろだらけで

きのうモーツアルトのソナタの
すみっこにいた

きょうゆうやけぐものうえに

ひらがなの天使

ちよこんとこしかけていた

おんなでもおとこでもないにおい

「…」(「天使というよりむしろ鳥」)

すなわち、「泣いている天使」では、もう決して間に合うことのない、決定的な事態の前に、静けさの中で天使のすりなきだけが聞こえている。天使だけが慰めだったが、もはや取りかえしはつかない。けれど、そのような限界状況の中で、「あすがくる」。この明日は、どのようなものか分からない。明日もまた駄目かも知れないが、微かな一片の可能性はあるかも知れず、ないかも知れない。

「醜い天使」では、神に呼び掛けるが、神は美術館に似姿の形でいるだけであり、絵に描いた餅であって、要するに神はいない。愛する行為は、神には決して守られず、叫び・囁き・呟きなどの、元々不完全で不可能なコミュニケーションによる外にない。そこでは、醜い天使のように人はばたばたと愛に向かい、愛はどこまで行っても疑いの対象でしかない。

「用心深い天使」では、コミュニケーションの失調から来る暴走を、さらに過激な形で語っている。微笑んでいれば伝わると思っていたのにそれができず、何度も殴った。弱い者虐めをし、善悪も知らず、天使はそのような様子からいつも目を逸らした。

他方、人を愛することは畢竟できない技であるとする感覚は、「おませな天使」においても繰り返される。そこでは、

心の暗闇を吹き散らし、天使の姿をしているのは、新しく生まれてくる者だけである。ということは、生まれるとすぐ、人は天使ではなくなり、今日から明日への日々の暮らしの中で、人は人を決して愛することができなくなるのである。

「幼稚園の天使」もそれと状況が似ている。かごめかごめをしていた幼い日には天使がいたが、大人になったら天使はどこにもいなくなった。祈りも愛も好きも嫌いも分からなくなり、そこへ悪魔がやってきた。大人になるということとは、あらゆる感情・感覚の不可能な世界へ入ることであり、あるいは、悪魔と同居して生きるといことなのである。

「忘れっぽい天使」(Vergesslicher Engel 1939)は、同じことを日々の生活に展開する。日々現れ、消え去るものの繰り返しにおいて、天使は忘れっぽい友たちであり、消え去ること、忘れることを慰めてくれる。この天使は守護天使のようでもあり、そのような繰り返しを見守り、諦めを受容させる。「天使、まだ手探りしている」でも、「わたしにはみえないものを／てんしがみてくれる」と、私の代行をするような守護天使として現れる。

「希望に満ちた天使」(Engel voller hoffnung, 1939)の、どこが希望に満ちているのか。この詩はすべて過去形で語られている。好きなものは幾つもあったが、死ぬほど好きなものはなく、山・空・砂などに人の形を棄てて融合吸収されたかったが、それもできなかった。その、希望に満ちた少年時こそ、天使とともにあった時間であった。希望に満ちた天使とは子どもであり、そのような少年の感受性の中にこそ希望はあった。そして今はない。

詩集『クレーの天使』の基調をなすのは、第一に自分の中にいる、あるいは、いたはずの子ども、それも年齢というよりは、人間の生地の状態を表すものとして想定される、その意味では虚構的な、絶対的な子どもの感性とでも呼

ひらがなの天使

ぶべきものである。その想定された純粹で純美な感性は、すぐに不可能性の色に染められ、子どもと大人は見分けがつかなくなる。そしてこのような子どもの感覚もまた、クレール作品からの触発と繋がる。挿画だけのものも含めれば、「無題／子供と鳳」(ohne Titel (Kind und Drache), 1940)、「子供の遊び」(ein Kinderspiel, 1939)、「幼稚園の天使」(町の前に立つ子供たち) (Kinder vor der Stadt, 1928)、「ホフマン風の童話風景」(Hoffmanneske Märchenszene, 1921)、「おませな天使」、「少年 Ph.」(Kind Ph., 1933)、「子供とおばあさん」(Kind und Tante, 1937)、「未熟な天使」(unfertiger Engel, 1939)、など、子供に関わる天使画は多数に及ぶ。

谷川の「天使というむしろ鳥」(mehr Vogel als Engel, 1939)では、天使について「なんでもしってるおとなのか／むじゃきなことなのか」と語り始めるが、この詩もやはり絵の図柄と関係しており、この絵は確かに、こどもっぽいとも言えるが、反面大人のようにも見えなくはない。クレールにおいて、大人・子ども、女・男の間で両義的なその天使は、谷川の場合はモーツァルトのソナタにも夕焼け雲や木の年輪や子犬の瞳にもいて、かくれんぼをしていた。ここで天使は隠れており、それは人間の隠された感性を見守るものなのである。

そして、『クレールの天使』は特に終わりに近づくにつれ、生と死の両義性について歌う。

ほんのいっしゅん

てんしになったことがあった

ひとはみなせをむけて

どこかとおくへいってしまった
たぶんふかいもりのなかへ

「…」

そしてしぬひがきた（「老いた音楽家が天使のふりをする」）

してはいけないことをして
しなければいけないことをして
したいこともすこしはした

（だろっか？）

ちじょうにさく

すべてのはなのなまえをおぼえてる
うみにおよぐ

すべてのさかなをとらえても
うまれなかったこどもはなきやまない

「…」（「未熟な天使」）

ひらがなの天使

ほんとうにかきたかったものは
けつしてことばにできなかったもの

「…」

どこまであるきつづければよかったのか
しんだあとがうまれるまえと
まあるくわになってつながっている

もうだまっついていてもいい

いくらはなしても

どんなにうたっても

さびしさはきえなかったけれど

よろこびもまたきえさはしなかった（「鈴をつけた天使」）

「老いた音楽家が天使のふりをする」（ein alter Musiker tut engelhaft, 1939）では、いずれにせよ音楽家の死ぬ日に
ついて語っている。この画は、ふりをしているのだから、身にまとうのは翼ではなく燕尾服なのだろうか。

「未熟な天使」では、生まれなかった子どもとは、尽きせぬ世界の事象の群れの謂であり、それが言葉となることを

求めて泣き止まないが、むしろ世界のすべてを言葉に直すことはできない。天使は、悲しみは喜びと同義だと言うが、その天使には会ったこともなく、まるで怒っているかのようであり、つまり世界の不可触性は肯定が否定と同居するような事態なのである。

詩集の掉尾を飾る「鈴をつけた天使」(Schellen-Engel, 1939)では、死んだ後と生まれる前とが円環をなし、最も書くべきことは決して言葉にならず、そのような沈黙の状態を演出するのが天使である。

以上のことから見て、谷川の『クレーの天使』は、谷川の様式論的な特徴としての、触発とひらがな表記によって構築される対位法的な詩が、クレーによる天使画という格好の対象と出遭い、世界の不可触性、言葉の限界性、様々な境界の揺らぎ、など、これもまた谷川が初期から培ってきた思想を、否定性に彩られた超絶的な緊張感溢れる作品群として結集した詩集と言える。

実に、谷川の詩における魂とは、このようなものの総体を言うのである。それは、宗教や霊的世界(spiritual world)とは似て非なるものであり、純粹に詩的・芸術的な次元において実現される魂の表現にほかならない。そして、このこともクレーの様式と響き合う。グレゴール・ヴェーデキントによれば、クレーの芸術は「より高い何ものか」を伴って表現されているが、もはやそれは宗教的告白や世界観、さらに疑似宗教的なものとも結びついていない。「クレーの芸術は世俗の芸術概念を基礎として絶対的なものを希求することを具現化する。その根本的な教義、つまり絶対的なものは到達不可能で、芸術は憧憬の媒体であるということとは、生のあらゆる領域にまで拡張された懷疑とそれらの妥当性を越えて位置づけられている」⁽⁹⁾。それは、信仰なき精神性であり、純粹に霊(魂)的なものではなく、パラ・スピリチュアルな空間なのである。従って、クレーにあっても、否定性は芸術の様式自体として存在しているのである。

さらに、谷川のこのような詩法、特に触発は、影響やアダプテーションと似ているものの、それらとは異なつて強力で明確なテキスト間の繋がりを演出しない。有島武郎がホイットマンと、小川洋子が『アンネの日記』との間で作り出した強い絆は、谷川とモーツァルト、クレーの間には存在しない。とはいえ、それが無視できるようなものでないことは確かだろう。核心をなす対位法を焦点として、谷川、モーツァルト、そしてクレーは緩やかに、しかし確かな繋がりを持ち、最終的には『クレーの天使』という到達点に達した。またこの触発と対位法の帰結は、コロージュやブリコラージュ、モンタージュとも近いところがあり、その意味で現代芸術として谷川の詩を評価する視点をも導入する。

ジャック・アタリが、音楽史は雑音の制度的統制の歴史であり、現代音楽は楽音への雑音の再導入による革新であつたと論じ、またロラン・バルトが、生産と受容と二極化した音楽の現場を再統合し、モーツァルト以前にそうであつたように、受容することがまた生産でもある状態を再現することであり、それが現代における音楽の実践、ムシカ・ブラクティカである、と論じてから、もはや半世紀が過ぎた。⁽⁶⁾ 谷川がモーツァルト、クレーからの触発によつて行つたジャンル間パステイシユの作業は、触発によつて獲得した他者的なもの、すなわち雑音や偶然を介在させることにより、受容と生産とを融合させ、テキストに非同一的な要素を取り入れることによつて、極度の緊張感・限界性を詩の中に作り出す営為であつた。クレーが絵画的な靈感を得たのも音楽からであつたことを思えば、クレーの絵画的な実践と、またそれらから触発された谷川の詩的実践は、それぞれにおいて独自の形を採つた一種のムシカ・ブラクティカとも言える。またそれは、初期から谷川が抱えていた沈黙の問題系に、他者のテキストを接続し、それによつて詩の可能性を拡張し充実させるという意味で、アプロプリエーションやシミュレーション、あるいは翻訳や校歌・

唱歌の作詞とも地続きのものなのである。

谷川の詩はそれ以後も、純粹と不純、ポエジーと資本戦略とが渾然一体となった、えも言われぬ水準で維持されている。二〇二一年の今年になってもなお、九〇歳を迎える谷川は、『朝日新聞』掲載の詩をまとめた詩集『どこから言葉が』（二〇二一・六、朝日新聞出版）を刊行した。そこにも、天使や言葉、沈黙に触れた作品が収められている。変貌をつづけた詩人、谷川俊太郎はまた、七〇年に互って自らの様式を守り続けてきた、一貫性の詩人でもある。

(1) 詳細は中村三春「谷川俊太郎——テキストと百科事典——」（『フィクションの機構2』、二〇一五・二、ひつじ書房）参照。

(2) 小田茂一『流用アート論 一九二一—二〇一一年』（二〇一・七、青弓社）。

(3) 谷川俊太郎「インタビュー 言葉への通路・私への通路」（『現代詩手帖』一九八五・二）。

(4) 榎木野衣『増補 シミュレーションイズム』（二〇二〇・一二、ちくま学芸文庫）。

(5) 小田前掲書。

(6) 詳細は中村三春「谷川俊太郎と〈流用アート〉序説——『定義』『コカコーラ・レッスン』『日本語のカタログ』など——」（『北海道大学文学研究院紀要』158、二〇一九・七）参照。

(7) 詳細は中村三春「序説・現代芸術としての谷川俊太郎の詩——ひらがな詩・翻訳・私性——」（『北海道大学文学研究院紀要』160、二〇二〇・三）参照。ちなみに、谷川は前衛音楽家の武満徹と親交を結んでおり、一九七五年の『夜中に台所ではくはきみに話しかけたかった』のタイトル詩では、二番目の詩に「武満徹に」と献辞が記されている。また、武満は勅使河原宏監督の『砂の女』（一九六四）外、多くの映画に音楽を提供しているが、篠田正浩監督についても『心中天網島』（一九六九）その他多数の映画音楽を担当した。その最初は篠田監督の第二作である『乾いた湖』（一九六〇）であったが、この映画で篠田に初めて脚本を提供した寺山修司が、篠田と武満を介したらしい（詳細は中村三春『擬古典化と前衛性——篠田正浩監督「心中天網島」——』、『原作』の記号学 日本文芸の映画の次元、二〇一八・二、七月社参照）。谷川と寺山には、一九八三年に寺山が亡くなる直前にやり取りされたビデオに

ひらがなの天使

よる往復書簡である『ビデオ・レター』があり、また谷川は篠田とも交友関係にある。谷川と篠田は同い年の一九三一年生まれ、勅使河原は二八年、武満は三〇年、寺山は三五年の生まれである。谷川は、現代日本を代表する前衛芸術家たちの交流圏にあった詩人なのである。

(8) 谷川俊太郎・尾崎真理子『詩人なんて呼ばれて』(二〇一七・一〇、新潮社)、291ページ。

(9) 『モーツァルトを聴く人』の所収作品は次の通りである。「そよかぜ 墓場 ダルシマー」「つまりきみは」「どけよ猫」「ザルツブルグ散歩」「ふたつのロンド」「なみだうた」「人を愛することの出来ぬ者も」「アリゾナのモーツァルト」「オレゴン波の波」「問いと満足」「ラモーが小鳥の羽ばたきと囁りを聞いて」「このカヴァティーナを」「コーダ」「浄土」「地べた」「Hotel Belvoir, Rûschlikon」「Quai Brandy」「TGV a Marseille」「モーツァルトを聴く人」

また附属CD『A Man Who Listens to Mozart』の内容は次の通りである(演奏家情報省略)。
①モーツァルト：ピアノ・ソナタ第11番 イ長調 K331「トルコ行進曲つき」：第1楽章(主題) ②詩「そよかぜ 墓場 ダルシマー」 ③モーツァルト：クラリネット五重奏曲 イ長調 K581：第2楽章 ④詩「つまりきみは」 ⑤モーツァルト：歌曲「すみれ」K476 ⑥詩「どけよ猫」 ⑦モーツァルト：歌劇「魔笛」K620：パミーナのARIA「愛の喜びは露と消え」 ⑧詩「ザルツブルグ散歩」 ⑨詩「ふたつのロンド」 ⑩モーツァルト：モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」K618 ⑪詩「人を愛することの出来ぬ者も」 ⑫モーツァルト：ピアノ協奏曲第15番 変ロ長調 K450：第2楽章 ⑬詩「アリゾナのモーツァルト」 ⑭モーツァルト：歌劇「ドン・ジョヴァンニ」K527：ツェルリーナのARIA「恋人よ、さあこの葉で」(葉屋の歌) ⑮詩「このカヴァティーナを」 ⑯ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第13番 変ロ長調 作品130：第5楽章(カヴァティーナ) ⑰詩「コーダ」 ⑱詩「地べた」 ⑲モーツァルト：「レクイエム」K626：「ラクリモサ」 ⑳詩「モーツァルトを聴く人」

(10) 谷川俊太郎「後記」『谷川俊太郎詩集』、一九六五・一、思潮社、775ページ。

(11) 詳細は中村三春「序説・現代芸術としての谷川俊太郎の詩——ひらがな詩・翻訳・私性——」(前掲)参照。

(12) 望月あすか「詩と絵画について——谷川俊太郎とパウル・クレー——」(『国際関係・比較文化研究』4-1、二〇〇五・九)。

(13) 岡田和也「クレーへの重奏——詩人はクレーのように、クレーは詩人のように——」(『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』149、二〇一七・一)。

- (14) 谷川俊太郎・田原・山田兼士『谷川俊太郎《詩》を語る——ダイアログ・イン・大阪2000〜2003』(二〇〇三・六、澤標、49ページ)。
- (15) パウル・クレー「^{シュプリアット}線描芸術について——創造的信条告白——」(Paul Klee, "Schöpferische Konfession", 1920, 岸野悦子訳、土肥美夫編『表現主義の美術・音楽 ドイツ表現主義4』、一九七二・六、河出書房新社)、171ページ。
- (16) パウル・クレー「造形思考」上下(Paul Klee, *Das Bildnerische Denken*, Bemo Schwabe & Co. Verlag, Basel, 1956, Switzerland, 土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎訳、一九七三・五、新潮社、二〇一六・五、ちくま学芸文庫)。ちくま学芸文庫版上巻の162ページより「創造についての信条告白」の章が展開される。
- (17) イングリッド・リーデル『クレーの天使』(Ingrid Riedel, *Engel der Wandlung*, Verlag Herder, Freiburg, 2002, Germany, 三宮桂子訳、二〇〇四・一、青土社)。
- (18) パウル・クレー「クレーの日記」(Paul Klee, *Tagebücher 1898-1918*, bearbeitet von Wolfgang F. Kelten, Verlag Gert Hatje, Stuttgart, Germany, 1988, ヴォルフガング・F・ケルステン編、高橋文子訳、二〇一八・五、みずす書房)。
- (19) 『モーツァルトを聴く人』の外、堀内誠一・谷川俊太郎『音楽の肖像』(二〇二〇・一一、小学館)は、堀内の遺した二人の作曲家に関するエッセーに、谷川が三二編の詩をつけたものである。その最初と最後にモーツァルトの記事があり、谷川は『モーツァルトを聴く人』より「人を愛することの出来ぬ者も」と「つまりきみは」、それに「魂に触れる(『詩の本』、二〇〇九・九、集英社)を寄せている。
- (20) 前田富士男『パウル・クレー 造形の宇宙』(二〇一一・一〇、慶應義塾大学出版会)。
- (21) 前田富士男「結晶としての造形 クレーとモデルネ」(同書)、97ページ。
- (22) ピエール・ブーレーズ「クレーの絵と音楽」(Pierre Boulez, *Le pays fertile Paul Klee*, Éditions Gallimard, Paris, 1989, 笠羽映子訳、一九九四・六、筑摩書房)、46〜47ページ。
- (23) 詳細は中村三春「色は遂に独立するに至つた」有島武郎文芸の芸術史的位置(『新編言葉の意志 有島武郎と芸術史的転回』、二〇一一・二、ひつじ書房)参照。
- (24) 竹内敏雄『アリストテレスの藝術理論』(一九六九・二、弘文堂)、および『現代藝術の美學』(一九六七・六、東京大学出版会)。

ひらがなの天使

(25) 竹内敏雄『現代藝術の美學』には次の記述がある(149～151ページ、傍点原文)。

芸術のみが真に美的—技術的存在であり、「ポエジー」と「クンスト」といふような両極の契機の綜合は嚴密な意味では芸術に對してのみ妥当するのであつて、美的存在一般の規定ではありえない。かうして自然美が芸術美から區別され、これに関連して美的なるものは芸術的なるものの構造規定によつては律せられないとすれば、テクネーを排してテュケーにたようとする偶然性の芸術が、芸術の概念になつた真正な芸術ではないにもかかはらず、一種の美的効果をあらはしうるといふ、一見奇異な事態を理解することができるであらう。「…」芸術においては天才が一面では自然のやうに、無意識的に、非意図的に美を創造するのであるが、モビールのやうな場合は自然そのものが作品を快適な運動にもたらしてその美を助成するのである。その運動は草木が風になびきそよぐのと同様に、無意識な運動であり、一般に自然美が偶然的に生成するのとおなじ意味での偶然性をもつて、美的対象としてあらはれるのである。それだから、運動する彫刻なるものは、空間的形象それ自身としては一個の造形的芸術品であるにしても、その運動に関してはもはや芸術本来の領域のそとに逸脱し、自然美の領域に帰属するといふべきであらう。「…」さてまた風鐸の発する音の美しさが自然美に属するとすれば、おなじく音の世界においてチャンス・オペレーションに美的効果を託する音楽こそ、それと類比的に説明されるであらう。

(26) ジャック・アタリ『音楽／貨幣／雑音』(Jacques Attali, *Bruits*, Presses universitaires de France, Paris, 1977, 金塚貞文訳、一九八五・九、みすず書房)。

(27) 中村三春「谷川俊太郎——テクストと百科事典——」(前掲)。

(28) 『クレーの絵本』の所収詩は次の通りである。「Paul Klee に 愛」雪の降る前 Vor dem Schnee 1929 「階段の上の子供 Kind an der Freitreppe 1923」黒い王様 Schwarzer Fürst 1927 「ケテルドラム奏者 Der Paukenspieler 1940」「まごめな顔の Ernst Meier 1939」黄色い鳥の風景 Landschaft mit gelben Vögeln 1923 「Paul Klee に 在るもの」(Paul Klee に) 線 「選ばれた場所 Ausgewählte Stätte 1927」「あやとり人形劇場 Puppentheater 1923」「幻想喜歌劇 船乗り」から格闘の場面 Kampfszene aus der komisch-phantastischen Oper 'Der Seefahrer' 1923 「死と炎 Tod und Feuer 1940」黄金の魚 Der Goldfisch 1925。この「在るもの」と「線」は見開き二ページの左右にそれぞれ配置され、右ページの右上に「Paul Klee に」と一箇所だけ記載されている。この記載方法は、巻頭の「愛」も同様である。

ちなみに、『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』（一九七五・九、青土社）の所収作品は次の通りである。「芝生」「夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった」「一九六五年八月十二日木曜日」「ニューヨークの東二十八丁目十四番地で書いた詩」「My Favorite Things」「干潟にて」「シェークスピアのあとに」「ポール・クレールの絵による『絵本』のために」

- (29) 谷川俊太郎「リズムについての断片」(『短歌研究』一九五六・六、『世界へ』、一九五九・一〇、弘文堂)。引用は、再録本『沈黙のまわり 谷川俊太郎エッセイ選』(二〇〇二・八、講談社文芸文庫、94ページ)、または「詩を考える 言葉が生まれる現場」、二〇〇六・六、思潮社、詩の森文庫、163ページ)より。

- (30) 以下、「対位法」等の概念は、ウルリヒ・ヒミエルス編『図解音楽事典』(一九七七・一九八五、角倉一郎監修、一九八九・一一、白水社)、海老坂敏・上参郷祐康・西岡信雄・山口修監修『新編 音楽中辞典』(二〇〇二・三、音楽之友社)などの項目記述を参考として、筆者が自分の理解に従ってまとめたものである。

- (31) アンドリュウ・ケーガン『パウエル・クレール 絵画と音楽』(Andrew Kagan, *Paul Klee / Art & Music*, Cornell University Press, 1983、西田秀穂・有川幾夫訳、一九九〇・七、音楽之友社)。

- (32) ビエール・ブーレーズ前掲書。

- (33) ハーヨ・デヒティンク『パウエル・クレール 絵画と音楽』(Hajo Dichting, *Paul Klee - Malerei und Musik*, Prestel Verlag, Munich, Berlin, London, New York, 1997、後藤文子訳、二〇〇九・五、岩波書店)。

- (34) ケーガン『アド・パルナツスム』クレール美術のモデルとしての18世紀ポリフォニーの理論と実践」(ケーガン前掲訳書)。

- (35) ヨハン・ヨゼフ・フックス『古典対位法』(Johann Joseph Fux, *Gradus ad Parnassum*, 1725、坂本良隆訳、一九五〇・一〇、音楽之友社)。対位法だけに(？)、対話体により、分かりやすく解説されている。

- (36) ケーガン前掲訳書、40ページ。

- (37) 海老沢敏『モーツァルトの生涯』(一九八四・五、白水社)、404～405ページ。西川尚生『作曲家・人と作品 モーツァルト』(二〇〇五・一〇、音楽之友社)、137～140ページ。

- (38) 『クレールの日記』(前掲)、397ページ上段。

- (39) 同、下段。

ひらがなの天使

- (40) クレー『造形思考』上（前掲訳書）、445ページ。
- (41) ケーガン前掲訳書、43ページ。
- (42) デュヒティンク前掲訳書、65ページ。
- (43) これらの関係作品は、デュヒティンク前掲書に図版として豊富に収録されている。
- (44) 本稿において、クレーによる天使に関わる作品の業績総体については、次の文献を参照した。①*Paul Klee: The Angels*, edited by Zentrum Paul Klee, Bern, Hayje Cantz Verlag, Ostfildern, 2012, Germany. これは二〇一二年から二〇一三年にかけて「ベルン・エッセン」、ハンブルクを巡回したクレー展のカタログである。その中には、ユルグ・ハルターと谷川がクレーの四つの作品に詩をつけた“The Invisible Gift: A Poetic Dialogue”も収められている。②Boris Friedewald, *The Angels of Paul Klee*, translated from German by Catherine Hickey, Arcadia Books, 2016, U.K. 原著 *Die Engel von Paul Klee*, DuMont Buchverlag, 2011, Cologne, Germany. 本書にはクレーの孫（フェリックスの子息）であるアレクサンダー・クレーが序文を寄せている。フリーデヴァルトの本書とは、一九三一年の「天使の保護」(Angel's care) の作品群としては、六作品が数えられている (p.60)。それらの図版は①にも掲載されている。
- (45) 詳細は中村三春「谷川俊太郎——テクストと百科事典——」(前掲 参照)。
- (46) 詳細は中村三春「序説・現代芸術としての谷川俊太郎の詩——ひらがな詩・翻訳・『私性』——」(前掲) 参照。
- (47) コンスタンス・ノベール＝ライザー『クレー』(Constance Naubert-Riser, *Klee*, Fernand Hazan, Paris, 1986 本江邦夫訳、岩波世界の巨匠、一九九二・一一、岩波書店)、90ページ。
- (48) 山田兼士「(絵本)の詩学——『由利の歌』から『赤ちゃんから絵本』まで——」(『谷川俊太郎の詩学』、二〇一〇・七、思潮社)、208ページ。
- (49) クレーの作品のグループやグループに含まれる作品については、クレーの子息フェリックス・クレーによる「様式の変化と《集合概念の連作》」(『パウル・クレー 遺稿、未発表書簡、写真の資料による画家の生涯と作品』、Felix Klee, *Paul Klee: Leben und Werk in Dokumenten, ausgewählt aus den nachgelassenen Aufzeichnungen und den un veröffentlichten Briefen*, Diogenes, Zürich, 1960, Switzerland, 矢内原伊作・土肥美夫訳、一九六二・五、新装版二〇〇八・一〇、みすず書房) 参照。
- (50) Boris Friedewald, *op. cit.*, p.11.

- (51) エイドラ連作については、コ罗纳・ブックス編集部編『クレーの贈りもの』(二〇〇一・一一、平凡社) 参照(114～116ページ)。また、フェリックス・クレー「様式の変化と《集合概念の連作》」にも「エイドラ＝ヴァイラント (EIDOLA=WELAND)」のグループがリストアップされている。
- (52) 新藤真知『もっと知りたい パウル・クレー 生涯と作品』(二〇一一・五、東京美術)、72～73ページ。
- (53) Christine Hopfengart, "Hovering: Klee's Angels as Personifications of Transition", translated from German by Melissa Hause, *Paul Klee: The Angels, op.cit.*, p.9. ホップエンガルトが指摘する「クレーの作品が「転移」の過程にあることを示す徴表は、「天使」まだ手探りしている」(Engel, noch tastend) などの題名にしばしば現れる noch (still「まだ」という語彙である (p.12))。
- (54) Christine Hopfengart, *op.cit.*, p.10.
- (55) 前田富士男・宮下誠ほか『パウル・クレー 絵画のたぐらみ』(二〇〇七・一、新潮社)、95ページ。
- (56) 前掲の *Paul Klee: The Angels* の年代を追った作品解説では、「堕天使、神と悪魔の間で」の表題の下に、「一九三三年にクレーの天使画に「暗黒面」(the darker side) が初めて現れるとされている。それらには、ルシフェル、メフィストフェレス、堕天使が描かれ、善と悪との混合、二重の意味、攻撃や崩壊の相が見られると云う」(“Works”, translated from German by Melissa Hause, *Paul Klee: The Angels*, p.36)。
- (57) 岡田温司『天使とは何か キュービッド、キリスト、悪魔』(二〇一六・三、中公新書)。
- (58) 同書、200～201ページ。
- (59) 同書、202ページ。なお、クレーの「新しい天使」が、ベンヤミン、テオドル・W・アドルノ、ゲルシヨム・ショールームの手を転々とし、最終的に一九八七年、イスラエル美術館に所蔵されるに至った経緯については、前掲の *Paul Klee: The Angels* に収録された Reto Sorg, "The Angel of Angels: Paul Klee's Angelus Novus" が詳しう(translated from German by Melissa Hause)。
- (60) Gregor Weckind, "With a View to Something Higher: The Para-Spiritual Art of Paul Klee", translated from German by Melissa Hause, *Paul Klee: The Angels, op.cit.*, pp.110-111.
- (61) ジャック・アタリ前掲書「およびロラン・バルト「ムシカ・プラクティカ」(Roland Barthes, "Musica practica", Arc, 1970' 沢崎浩平訳『第三の意味 映像と演劇と音楽と』一九八四・一〇、みすず書房)。

ひらがなの天使

《主な参考文献》（再掲を含む）

- 望月あすか『詩と絵画について——谷川俊太郎とパウル・クレレー——』（『国際関係・比較文化研究』4—1、二〇〇五・九）ウルリヒ・ヒミエルス編『図解音楽事典』（一九七七・一九八五、角倉一郎監修、一九八九・一一、白水社）
- 海老坂敏・上参郷祐康・西岡信雄・山口修監修『新編 音楽中辞典』（二〇〇二・三、音楽之友社）
- 海老沢敏『モーツァルトの生涯』（一九八四・五、白水社）
- 西川尚生『作曲家・人と作品 モーツァルト』（二〇〇五・一〇、音楽之友社）
- 海老沢敏監修『モーツァルト大事典』（一九九六・四、平凡社）
- ニール・ザスロー、ウィリアム・カウデリー編『モーツァルト全作品事典』（*The Complete Mozart: A Guide to The Musical Works of Wolfgang Amadeus Mozart*, edited by Neal Zaslaw, William Cowdery, New York & London, W.W. Norton, 1990）森泰彦監訳（二〇〇六・一一、音楽之友社）
- 一、音楽之友社）
- 榎木野衣『増補 シミイレ・シヨニズム』（二〇一〇・一一、ちくま学芸文庫）
- 小田茂一『流行アート論 一九二二—二〇一一年』（二〇一一・七、青弓社）
- 竹内敏雄『現代藝術の美学』（一九六七・六、東京大学出版会）
- パウル・クレレー『クレレーの日記』（Paul Klee, *Tagebücher 1898-1918*, bearbeitet von Wolfgang F. Kelten, 1988）ヴォルフガング・F・ケルステン編、高橋文子訳（二〇一八・五、みすず書房）
- パウル・クレレー『造形思考』上・下（Paul Klee, *Das Bildnerische Denken*, 1956）土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎訳（一九七三・五、新潮社）
- 二〇一六・五、ちくま学芸文庫）
- フェリックス・クレレー『パウル・クレレー 遺稿、未発表書簡、写真の資料による画家の生涯と作品』（Felix Klee, *Paul Klee: Leben und Werk in Dokumenten, ausgewählt aus den nachgelassenen Aufzeichnungen und den unveröffentlichten Briefen*, Diogenes, Zürich, 1960, Switzerland）矢内原伊作・土肥美夫訳（一九六二・五、新装版二〇〇八・一〇、みすず書房）
- Paul Klee: *The Angels*, edited by Zentrum Paul Klee, Bern, Hayje Cantz Verlag, Ostfildern, 2012, Germany.
- Boris Friedewald, *The Angels of Paul Klee*, translated from German by Catherine Hickey, Arcadia Books, 2016, U.K.

- 前田富士男『パウル・クレール 造形の宇宙』(二〇一一・一〇、慶應義塾大学出版会)
 宮下誠『越境する天使 パウル・クレール』(二〇〇九・一二、春秋社)
 新藤真知『もっと知りたい パウル・クレール 生涯と作品』(二〇一一・五、東京美術)
 コロナ・ブックス編集部編『クレールの贈りもの』(二〇〇一・一二、平凡社)
 大岡信解説『クレール』(座右宝刊行会編、世界の美術24、一九六四・九、河出書房新社)
 大岡信解説『クレール』(日本アートセンター編、新潮美術文庫50、一九七六・五、新潮社)
 西田秀穂解説『クレール』(一九七五・八、カンヴァス世界の名画23、中央公論社)
 エンリック・ジャルディン『PAUL KLEE』(Enric Jardi, PAUL KLEE, 1990, Ediciones Polígrafa, Barcelona, Spain、佐和瑛子訳、一九九二・一二、美術出版社)
 コンスタンス・ノペール＝ライザー『クレール』(Constance Naubert-Riser, Klee, 1986, Fernand Hazan, Paris、本江邦夫訳、岩波世界の巨匠、一九九二・一一、岩波書店)
 ダグラス・ホール『クレール』(Douglas Hall, Klee, 1992, Phidon Press, Singapore、前田富士男訳、二〇〇二・一〇、新装版二〇一二・六、西村書店)
 岡田温司『天使とは何か キュービッド、キリスト、悪魔』(二〇一六・三、中公新書)
 アンドリュウ・ケーガン『パウル・クレール 絵画と音楽』(Andrew Kagan, Paul Klee / Art & Music, 1983, Cornell University Press、西田秀穂・有川幾夫訳、一九九〇・七、音楽之友社)
 ピエール・ブーレーズ『クレールの絵と音楽』(Pierre Boulez, Le pays fertile Paul Klee, 1989, Editions Gallimard、笠羽映子訳、一九九四・六、筑摩書房)
 ハーヨ・デュヒティング『パウル・クレール 絵画と音楽』(Hajo Dichting, Paul Klee - Malerei und Musik, 1997, Prestel Verlag、後藤文子訳、二〇〇九・五、岩波書店)
 荒木博之『やまとことばの人類学 日本語から日本人を考える』(一九八三・一二、朝日選書)
 河出書房新社編集部編『やまとことば 美しい日本語を究める』(原題『ことば読本 やまとことば』、一九八九・七、河出書房新社、二〇〇二・一〇、新装版二〇一二・六、西村書店)

ひらがなの天使

〇〇三・三、河出文庫)

中西進『ひらがなでよめばわかる日本語』(二〇〇八・六、新潮文庫)

今野真二『漢字とカタカナとひらがな 日本語表記の歴史』(二〇一七・一〇、平凡社新書)

谷川俊太郎・尾崎真理子『詩人なんて呼ばれて』(二〇一七・一〇、新潮社)

谷川俊太郎・山田馨『ぼくはこうやって詩を書いてきた——谷川俊太郎、詩と人生を語る』、二〇一〇・七、ナナロク社)

堀内誠一・谷川俊太郎『音楽の肖像』(二〇二〇・一一、小学館)

本稿は筆者による二つの口頭発表「ひらがなの天使——概観 谷川俊太郎とパウル・クレー——」(二〇二〇年度第二回日本比較文学会北海道研究会、二〇二二年三月二七日)、および「ひらがなの天使2——モーツァルト、クレー、谷川俊太郎——」(二〇二一年度第一回日本比較文学会北海道研究会、二〇二二年七月一〇日、いずれもオンライン開催)の内容を基にしたものである。

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

後 藤 康 文

一 ― 右大将の少将と姫君の契り ―

【本文】（底本＝高松宮本）

昔物語などにぞ、かやうのことは聞ゆるを、いとありがたきまであはれに、浅からぬ御契りのほど見えし御ことを、つくづくと思ひつづくれば、年の積もりにけるほども、あはれに思ひ知られけり。

大納言の姫君二人ものし給ひし、まことに、物語に書きつけたるありさまに劣るまじく、何ごとにつけても生ひ出で給ひしに、父大納言も母上も、うちつづき隠れ給ひにしかば、いと心細きふるさとながめ過ごし給ひしかど、はかばかしく御乳母だつ人もなし。ただ、常にさぶらふ侍従、弁などいふ若き人々のみさぶらへば、年に添へて、人目まれにのみなり行くふるさに、いと心細くておはせしに、右大将の御子の少将、知るよしありて、いとせちに聞え

わたり給ひしかど、かやうの筋はかけてもおぼし寄らぬことにて、御返りごとなどおぼしかけざりしに、少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人、何のたどりもなく、二所御殿籠りたる所へ導き聞えてけり。もとより御心ざしありけることにて、姫君をかき抱きて、御帳のうちへ入り給ひにけり。おぼし呆れたるさま、例のことなれば書かず。推し量り給しにも過ぎて、あはれにおぼさるれば、うちのびつつかよひ給ふを、父殿聞き給ひて、

「人のほどなど口惜しかるべきにはあらねど、何かは、いと心細き所に」

など、許しなくのたまへば、思ふほどにもおはせず。姫君も、しばしこそしのび過ごし給ひしか、さすがにさのみはいかがおはせむ。さるべきにおほし慰めて、やうやううちなびき給へるさま、いとどらうたくあはれなり。昼など、おのづから寝過ごし給ふ折、見奉り給ふに、いとあてにらうたく、うち見るより心苦しきさまし給へり。

何ごともいと心憂く、人目まれなる御住まひに、人の御心もいと頼みがたく、「いつまでか」とのみながめられ給ふに、四五日いぶせて積りぬるを、「思ひしことかな」と心細きに、御袖ただならぬを、われながら、「いつ慣らひけるぞ」と思ひ知られ給ふ。

人心あきのしるしのかなしきはかれ行くほどのけしきなりけり

「など、手習ひに慣れにし心なるらむ」などやうにうちなげかれて、やうやう更け行けば、ただうたた寝に、御帳の前にうち臥し給ひにけり。

少将、内裏より出で給ふとて、おはしてうちたたき給ふに、人々おどろきて、中の君起こし奉りて、わが御方へ渡し聞えなどするに、やがて入り給ひて、大将の君のあながちにいざなひ給ひつれば、初瀬へ参りたりつるほどのことなど語り給ふに、ありつる御手習ひのあるを見給ひて、

常磐ときばなる軒のしのぶを知らずしてかれ行くあきのけしきと思ふ

と書き添へて見せ奉り給へば、いと恥かしうて、御顔引き入れ給へるさま、いとらうたく児こめきたり。

【注解】

○積つもりにける——底本以下「つもりける」に作る伝本も少なくないが、この場合「ける」は「にける」である方が望ましいため、三手文庫本等により、完了の助動詞「ぬ」の連体形「に」を補った。○思おもひ知られけり——けり」は底本ほか諸本「けむ」。しかし、文末が過去推量の助動詞「けむ」で結ばれたのでは、以下の出来事を回想する語り手の前口上はうまく解釈できない。よって、「む（毛）／ん（无）」は「り（利）」の誤写である可能性が高いと判断して改めた。○父大納言——底本ほか諸本「こ大納言」。「こ（古）」は「ち（知）」の誤写とみて改めた。参考「父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて」（『源氏物語』桐壺巻）。○知るよし——つてとなる人物の意。ここは、右大将の少将と昵懇の間柄にある女房のことであり、このあと彼を手引きする「少納言の君」と同一人物と考えられる。参考「奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり」（『伊勢物語』初段）「尾張の国に、しるよしありて、しばし侍るけるころ」（『千載集』羈旅・よみ人知らず）など。○たどり——底本ほか「たより」「よ（与）」は「と（止）」の明らかな誤写であるため、李下亭文庫本等末流伝本本文と同形の「たどり」に改訂した。「たどり」は思慮分別の意。○導き聞えてけり——聞えてけり」は、底本「聞てけり」と写したあと、「て」を見せ消ちにして「え」に訂正する措置を施している。「え（衣）」と「て（天）」の字形相似に原因する書写上の混乱が読み取れておもしろいが、こうした経緯からしても、完了（強意）の助動詞「つ」の連用形「て」は元来あったと考えてよい。よって、三

手文庫本等によりこれを補った。「てけり」とあつてこそ、当該文脈にふさわしい「本来すべきではない／しない方がよいのに、とうとうしてしまつた」のニュアンスが付加されることになるのである。参考「この男がいまみてけり」(『伊勢物語』初段)「あるじ許してけり」(同第五段)○御帳のうち―底本ほか「みずのうち」とする。この注記に従えば「御簾のうち」と読めるが文脈にそぐわない。「て」は漢字「丁」の誤写と考えて「御帳」の意に解くべきことと論を俟たない。○例のこと―物語のお約束。冒頭で自身が見聞した実話を披露するやに思わせた語り手が、ちらりと「馬脚」を顕してみせるのである。○給ひしにも―底本ほか諸本ほとんどが「給にしも」に作る。だが、これではまったく意味が通じず、「にし」が「しに」の転倒形にほかならないこと明白である。ゆえに、二文字の順序を入れ替えて本文を正した。○ほどなど―底本ほか「なと」ナシ。「ほ(保)」と「な(奈)」の目移りによる脱落を想定し、三手文庫本等によりこれを補った。○姫君も―底本ほか「君も」。また、三手文庫本等で「女君」。作中、故大納言家の長女は、主従、姉妹といった他者との関係性に基づく場合を除けば、一貫して「姫君」と呼ばれるので、ここに関しては「ひめ」または「姫」の脱落を想定するのが妥当。なお、「女君」の異文は、「ひめ君」↓「め君」↓「女君」の過程をたどって生成された産物。○しのび過ごし―この「しのぶ」は、我慢してこらえる、堪え忍ぶの意。○何ごとともいと―底本表記「何事いと」。「こと(己止)」と「も(毛)」が連続したための目移りが原因で、ある時「も」一字が脱落したのであらう。よって、三手文庫本等諸本によりこれを補った。○いつまでか―底本ほか諸本「いつまで」。転写の過程で「か」一字が脱落したものとみてこれを補った。「壁に生ふるいつまで草のいつまでかかれず問ふべき篠原の里」(『堀河百首』・藤原公実)を引く。参考「松も昔の、とのみながめらるるにも、もとよりなどのたまふ筋は、まめやかに頼もしうこそは」(『源氏物語』蜻蛉巻)など。なお、この公実歌は、『浅茅が露』や『とはずがたり』

など他の後代作品にも引かれている。○ながめられ給ふに―「られ」は自発の用法。○かなしきは―底本ほか主要諸本「かなしきに」。この一首は「ののくはくなりけり」の類型に属する歌と判断して、「に」を「は」に改めた。おそらく「者」↓「爾」の誤写であろう。第三句「かなしきに」のままではどう足掻いても解釈不能歌となる。参考「たよりにあらぬ思ひのあやしきは心をつくるなりけり」（『古今集』恋一・在原元方）「山隠れ消えせぬ雪のかなしきは君まつの葉にかかるなりけり」（『兼盛集』）など。○うちなげかれて―ふいにため息が漏れるのである。「れ」は自発。

【現代語訳】

昔物語（の中）などに限って、このよう（に摩訶不思議）な話は見聞きするものであるのに、ほんとうに比類ないまで愛情深く、（決して）浅くはない御縁のありようが（如実に）窺われた（あの）出来事を、（今こうして）感慨に耽りながらとめどなく思いつづけると、（無情にも）過ぎ去った歳月の積み重なりも、しみじみと思い知られるのであった。（さて、その出来事とは…）

大納言のお嬢様が二人いらしたのだが、ほんとうに、どの点を取ってみても、物語に描いた（姫君の）様子に劣るはずがなく、（美しく）成長なさったのに、（何ともご不幸なことに）父大納言殿も母上様も、（折から）たてつづけにお亡くなりになってしまわれたので、（やむをえず）たいそう心細い昔ながらのお屋敷で、もの思いに沈んでお過ごしになったのだけれど、しっかりとして乳母の代役を果たす（年配の）女房もいない。わずかに、いつもお側でご利用を勤める侍従や弁などといった、若輩の女房だけがお仕える（ありさまだった）ので、年が経つにつれて、訪れる

人もなくなつていく一方の昔からのお住まいに、(物心ともに)とても頼りない状態でいらしたところ、右大将殿の御子息の(近衛の)少将が、(そのお屋敷にたまたま)懇意な女房がいて、(そのつてを介して)たいそう切実に(胸の内を)申し上げつけなされたのだけれど、(姫君は)このような(恋愛の)向きは(もはや)まったく念頭に置いておられないことであつて、お返事(をなさる)など思いも寄られなかつたのに、少納言の君といつて、根っから好色な様子の若い女房が(情に絆されて)、何の慮りもなく、(とうとう)お二人がお休みになつてゐるお部屋へ(と少将を)導き申し上げてしまつたのだつた。(実は)以前から(恋慕の)お気持ちがありだつたこととて、(少将は、姉である)姫君(の方)を素早く抱いて、御帳台の中へお入りになつてしまわれた。(突然の出来事とて、姫君が)呆然自失の状態である様子は、(物語では)いつものことなので(敢えて)書かない。

(少将は、事前に)予想しておられたよりもはるかに、(姫君のことが)しみじみと愛しくおのずとお思いになられるので、すぐに人目を忍びつつお通いなさるのを、父(右大将)殿がお聞きになつて、

「(相手の姫君の)身分(や家柄)などに不満があるうはずはないけれども、どうして(わざわざ)ひどく生活不如意なお宅に(通う必要があるのか)」

などと、容赦なくおっしゃるので、(少将は、)思っているほど(頻繁)にもおいでにならない。(一方、)姫君も、しばらくの間こそ(少将を素直に受け入れられず)我慢して過ごしていらしたけれど、とはいえ、いつまでもそのような(心理)状態でいらつしやれるはずもない。こうなる運命だつたのだと、みずからにいい聞かせなかつて、徐々に(少将の愛の)虜とおなりになるありさまは、一段と可憐で胸を打たれる。(そうした状況の中で、やっと一夜を過ごされた翌日の)昼間など、自然と寝過ごしなされた折に(少将が)ご覧になると、(白日のもとに晒された姫君は)と

ても上品でかわいらしく、一目見るやいなや胸の痛む様子をしていらつしやる。

（姫君は）何もかもが辛く、減多に來客もない（寂しい）お住まいで、（肝心な）少将のお気持ちもたいしてあてにしがたく、「いつまで（通つていらつしやることやら）」と、おのずからもの思いに耽るのが習慣になっていらしたところ、四五日（少将の訪れが途絶えて）鬱々と経過したのを、「予期していたことだわ」と（思うにつけ）心細いので、（涙で濡れるお召し物の）袖も尋常（な状態）でないのを（ご覧になって）、われながら、「（いったい）いつ身についた習慣なのだ」と痛感されなさる。

あの方の御心に秋、いいえ、（私に対する）飽きが来る前兆が悲しいのは、草木が枯れるようにあの方の足が遠く気配（を实感してのこと）だったのだなあ。

「なぜ、（こうした）すさび書きに慣れっこになった（私の）心なのだろうか」などともいいたげに、ふつとため息が漏れて、（今日こそはと、少将の來訪を待つ夜が）しだいに更けていくので、ほんの仮眠とて、御帳台の（中にはお入りにならず、その）前にふと横になってしまわれた。

（すると、少将が、（職務を終えて）宮中から退出なさるということで、（久方ぶりに、姫君のもとへ）お出でになって（門を）叩きななさるので、（すでに就寝していた）女房たちは飛び起きて、（姉君のお部屋で一緒にお休みになっていた）中の君を（急ぎ）起こし申し上げて、ご自分のお部屋へお移し申し上げなどしているうちに、（少将は）直ちに（姫君のもとへ）お入りなさって、（父右）大將様が強引にお誘いになったために（断ることができず）、長谷寺へ参詣していた間の出来事などをお話しなさっていると、先刻の手習いが（そのままにして）あるのを御覧になって、

常緑の軒忍のように、永遠に（あなたを）恋い慕う（私の）気持ちをご存じなくて、（やむをえぬ事情によるほん

の数日の途絶えを、早計にも）草木が枯れる秋の景色、いいえ、私が疎遠になる気配だとお決めつけのなるのですか。

と書き添えてお見せ申し上げると、（姫君は、）ひどく恥ずかしくて、お顔を（袖の中に）引き入れ（てお隠し）になる様子が、たいそう可憐で幼げな印象を与える。

【余説】

両親を失った姉妹の物心両面で頼りない日常が、形容詞「心細し」の四度におよぶ使用により印象づけられる。別途「心憂し」の語も見えているが、こちらは次節で二度用いられ、「心細し」から「心憂し」へという様相の推移が見て取れる。

ところで、【注解】で述べたように、姫君の心中思惟「いつまでか」（諸本「いつまで」）が、堀河院歌壇の重鎮であり名歌人でもあった、藤原公実（天喜元年（一一〇五）〜嘉承二年（一一〇七））歌の第三句を引いた表現だと認めるならば、本作品の成立は、十二世紀初頭頃である可能性が高くなるう。ただし、先行歌第三句の引用は引歌の作法としては異例であり、この点なお後考に俟ちたい。

二——右大臣の少将と中の君の契り——

【本文】

かやうにて明かし暮らし給ふに、中の君の御乳母なりし人は失せにしが、娘一人あるは、右大臣の少将の御乳母子の左衛門の尉じようといふが妻なり。たぐひなくおはするよしを語りけるを、かの左衛門の尉、少将に、

「しかじかなむおはする」

と語り聞えければ、按察使あぜちの大納言の御もとには心とどめ給はず、あくがれありき給ふ君なれば、御文などねむころに聞え給ひけれど、つゆ「あるべきこと」ともおぼしたらぬを、姫君も聞き給ひて、

「思ひのほかにあはあはしき身のありさまをだに、心憂く思ふことにて侍れば、まして、強きよすがおはすなる人を」などのたまふもあはれなり。さるは、いくほどのこのかみにもおはせず。姫君は、二十に一つなどやあまり給ふらむ。中の君は、今三つばかりや劣り給ふらむ。いと頼もしげなき御さまどもなり。

左衛門、あながちに責めければ、太秦に籠り給へる折をいとよく告げ聞えてければ、何のつつましき御さまならねば、ゆくりなく入り給ひにけり。

姉君も聞き給ひて、

「わが身こそあらめ、『いかでこの君をだに人々しくもてなし聞えむ』と思へるを、さまざまにさすらふも、世の人聞き思ふらむことも心憂く、亡き影にも、いかに見給ふらむ」

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

と恥かしう、契り口惜しうおぼさるれど、今はいふかひなきことなれば、「いかがはせむ」にて見給ふ。これもいとをろかならずおぼさるれど、按察使の大納言聞き給はむところをぞ、父殿いと急に諫め給へば、今一方よりは、いと待ち遠に見え給ふ。

この右大臣殿は、右大将の北の方の御兄人^{せうと}にもおし給へば、少将たちもいと親しくおはする。かたみにこのしのび人も知り給へり。

右大臣の少将をば、権の少将とぞ聞ゆる。按察使の大納言の御もとに、この三年ばかりおはしたりしかども、心とどめ給はず、世とともにあくがれ給ふ。このしのび給ふ御ことをも、「大将殿におはする」など思はせ給へり。いづれも、いとほしき御ふるまひを、あながちに制し聞え給へば、いといたくしのびて、大将殿へ迎へ給ふ折もあるを、いと軽々しうつつましき心地し給へど、

「今は、のたまはむことをたがへむもあいなきことなり。あるまじき所へおはするにてもなし」
など、さかしだち勧め奉る人々多かれば、われにもあらず、時々おはする折もありけり。

【注解】

○右大臣の少将―底本はか少数の伝本で「右大臣の中將」。「中」は「少」の頻繁に起こる誤写。よって、他本により改めた。○失せにしが―「が」は逆接の接続助詞。○まして―底本以下現存諸本すべて「まこと」に。しかし、「まことに」では、この語がわざわざ用いられた必然性が説明できないように思う。ゆえに、「し(之)」「し(事)」「漢字「事」」「こと(己止)」、かつ「て(天)」「に(耳)」の誤写を想定し、本文を「まして」に改めた。姫君は、まだ正妻のいな

い、右大将の少将と自分との思いがけない契りでさえ不安定で嘆かわしいのに、「まして」、揺るぎない正妻が、すでにと聞く右大臣の少将を妹のもとに通わせるなど論外だ、と述べているのである。「副助詞「だに」」接続助詞「ば」+副詞「まして」」の構文。参考「六条わたりにだに」、離れまざりたまふめれば、まして荒れたる宿は、あはれに思しおこたらずながら、ものうきぞわりなかりける」（『源氏物語』末摘花巻）「しばし籠りたまへりしほどだに天の下の騒ぎなりしかば、まして悲しと思ふ人多かり」（同薄雲巻）「御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見過ぐしがたげにうち鳴きて渡るめれば、まして、『春や昔の』と心をまどはしたまふどちの御物語に、をりあはれなりかし」（同早蕨巻）等々。○何のつつましき御さまならねば」ならねば」は、底本ほか諸本「なれば」。しかし、これでは文意が通らないため、「れ（礼）」は「ね（襦）」の誤写、かつ、「ら（良）」一字の連綿に伴う消失を想定して、「ならねば」に改めた。○ゆくりなく—底本以下主要諸本「故／ゆへもなく」。「故」は仮名表記の方がもとであり、「へも（部毛）」は「くり（久利）」の明白な誤写。よって、李下亭文庫本等と同形本文「ゆくりなく」に改訂した。○いと急に—形容動詞「急なり」は、その人物の短気性急な性格を表す。参考「いとよき人なれど、いと急に強き人になむ侍る」（『うつほ物語』国譲下巻）「さればよ、いと急にものしたまふ本性なり」（『源氏物語』夕霧巻）など。○この右大臣殿は—底本ほか諸本「右大臣殿の少将」。この誤謬本文が、以下の系譜説明に混乱を来す元凶となる。すなわち、圈点を付した「の少将」の三文字は、「この」が指示する人物を「父殿」ではなく息子の「少将」と勘違いした書写者某によるさかしらな補入なのであって、これを削除するのが正しい措置といえるのである。○右大将の北の方—「右大将」は底本以下ほとんどの伝本で「右大臣」。「臣」と「将」の交替はしばしば見られる現象であり、ここも「将」↓「臣」の誤写と判断しなければならない。要するに、右大臣と右大将の北の方が兄妹だったので二人の少将は従兄弟同士の間

柄となり、そのためお互いの秘めごとを共有できるほど仲がよかったというのである。○いとほしき御ふるまひを——底本「いとおかしき御ふるまひも」。まず「いとおかしき」の部分だが、諸本「お／を」の仮名遣いの相違があるだけで一致している。けれども、「いとをかしき」＝「たいそう風流な」では意味がそぐわない。よって、「か」を衍字とみて本文を「いとほしき」に改訂した。当該文脈における形容詞「いとほし」は、（父親たちから見て）困った、好ましくないなど、困惑、嫌悪の心情を表す。参考「しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむもうたてあるべし」（『源氏物語』空蟬巻）など。また、「御ふるまひを」の「を」は、底本ほか多数の伝本で「も」。これも不審本文といえ、「を（遠／越）」↓「も（毛／茂）」のありふれた誤写を想定するのが至当。ゆえに今、三手文庫本と同形の「を」に改めた。

【現代語訳】

（姫君が）このような状態で日々を過ごしていらしたところ、中の君の御乳母だった方は亡くなったけれど、娘が一人いるのは、右大臣の少将の御乳母子の左衛門の尉という者の妻であった。（ある時その妻が、故大納言家の中の君が）比類なく（美しくて）いらつしやるしだいを語ったのを、先ほどの左衛門の尉が少将に、

「これこれしかじかでいらつしやいますこと」

とご報告申し上げたところ、（右大臣の少将は、正妻である）按察使の大納言のお嬢様の所には愛着を感じにならず、あちらこちらの女性のものとへふらふらとお出でになる（ようなご性分の）方だったので、（この情報を得てから、恋心をお訴えになる）お手紙などを熱心に差し上げなされたけれど、（中の君の方は）まるっきり「お受けするのがよい

こと」ともお思いでないのを、姫君もお聞きになって、

「思いがけず（独身のあの方と関係をもった）私自身の不安定な現況でさえ憂慮される状態ですので、ましてや、磐石の正妻が（すでに）いらつしやると聞くお方を（通わせるなどもつてのほかです）」

などとおつしやるのも健気である。とはいうものの、どれほどの年長でもいらつしやらない。

（姉の）姫君は、二十歳に一歳ほど超えておられるのであろうか。（一方、妹の）中の君は、

（姫君より）もう三つほど年下でいらつしやるのだらうか。（今さらながら）たいそう頼りなく見える（お二人のご様子である）。

（さて、）左衛門（の尉）が、強い口調で責め（立て）たので、（妻は、姫君が）太秦に参籠なさる時期を（知らせ、左衛門の尉がそのことを）たいそう首尾よく申し上げてしまったために、（右大臣の少将は、姫君ご不在の折から）何のご遠慮もいららない（お屋敷の）ありさまゆえ、（中の君のお部屋に）突然侵入してしまわれたのであった。

姉君も、（戻られてからその話を）お聞きになって、

「自分の身はともかく、『どうかして、この（妹）君だけでも普通の人並みにお世話申し上げたい』と思っていたのに、（二人）それぞれに落ちぶれて寄るべないのも、世間の人が聞いて思っているであらうことも嘆かわしく、（また、）亡き両親にも、どのようにご覧になつてゐるだらう」

と恥ずかしく、（こうした）宿縁を残念にお思いになるけれど、（すべてが既成事実となつてしまった）今となつては、いっても仕方のないことなので、「どうにもしようがあるまい」といった（諦めの）心境で（成り行きを）静観なさる。こちら（の少将）も、（中の君のことを）並一とおりでなく（愛しく）お思いになるけれど、按察使の大納言が（この

ことを）お聞きにな（つたら、さぞや不快にお思いに）るであろうその点を、父右大臣殿が仮借なくお諫めなさったので、（少将は氣ままに出向くこともできなくなり、そのために中の君は）もうお一方（の姉君）に比べて、（訪れが）ひどく待ち遠しそうな様子である。

（ところで、ご子息を嚴重注意なさった）この右大臣殿は、右大将の奥方の御兄弟でいらしたので、（従兄弟同士となる）少将たちもたいへん親密（な間柄）でいらつしやる。（だから、）お互いに密会している女性（のことについて）も（当然のごとく）ご存じであった。

（お二人のうち、）右大臣の少将を、権の少将と申し上げる。（正妻である）按察使の大納言の（姫君の）お所に、こ三年ほど（しぶしぶ）いらつしやつたけれども、（その姫君）には愛情をお感じにならず、折に触れて（他の女性たちのもとへと）情念の趣くままにお越しになる。（そのようなありさまだだったので、この故大納言の中の君）との秘密になさっているご交際をも、「（今宵は）大将のお屋敷においでになる」などと（周囲に）思わせ（欺い）ておられた。どちら（のお父上）も、（ご子息の）好ましくないご行動を、過剰なほどご制止申し上げなされたので、（少将たちは、）極秘裏に、（ご姉妹を）大将邸へお迎えなさる折もあるのを、（ご身分柄、そのようなかたちでの密会は）ひどく軽率でできれば避けたい気分がなさるが、

「今となつては、（少将様から大将邸に出向かれるよう）ご指示があった場合、もしそれに背くとするなら無益なことです。お出でになつてはならない所へいらつしやるわけでもありません（し）」

などと、利口ぶつてお勧め申し上げる女房たちが多いので、（ご姉妹は、まるで何かに）操られたかのように、時々いらつしやる折もあったのだった。

【余説】

父親からともに嚴重注意を受ける破目に陥った少将たちは、それぞれのお相手を口実を設けやすい右大将邸に呼び出すという苦肉の策に出る。故大納言家の姉妹にとつては屈辱的な召人待遇だったが、周囲の勧めるままに赴いていた。と、この状況こそがその後の思いがけない運命のいたずらと呼ばひ込む伏線となるのである。右大将の北の方を軸に二人の少将の血縁關係を設定した作者の、けだし巧妙な趣向と評せよう。

三 — 右大臣の少将と姫君の契り —

【本文】

権の少将は、大将殿の上の、御かぜの氣おはすることにづけて、例のとまり給へるに、いともの騒がしく、客人な
ど多くおはするほどなれど、いとしのびて御車奉り給ふに、左衛門の尉もさぶらはねば、時々もかやうのことにいと
つきづきしき侍にささめきて、御車奉り給ふ。大将殿の上例ならずものし給ふほどにて、いたく紛るれば、御文もな
きよしをのたまふ。

夜いたく更けて、かしこにまうでて、

「少将殿より」

とて、

「しのびて聞えむ」

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

といふに、人々皆寝にけるに、姫君の御方の侍従の君に、

「少将殿より」

とて、御車奉り給へるよしをいひければ、寝惚^はけにける心地に、

「いづれぞ」

と尋ぬることもなし。「例も参ることなれば」と思ひて、

「かうかう」

と君に聞ゆれば、

「文などもなし。『かぜにや、例ならぬ』などいへ」

とのたまへば、

「御使ひ、こち」

といはせて、妻戸を開けたれば、寄り来るに、

「御文など侍らぬは、いかなることにか。また、『御かぜの気のものし給ふ』とて」

といふに、

「大将殿の上、御かぜの気のむつかしくおはして、人騒がしく侍るほどなれば、『このよしを申せ。前々御使ひに参り侍る人もさぶらはぬほどにて』など、かへすがへすおほせられつるに、むなしく帰り参りては、かならずさいなまれ侍りなむず」

といへば、参りて、

「しかじか」

と聞えて、勧め奉れば、例の、人のままなる御心にて、薄色のなよやかなるが、いと染み深うなつかしきほどなるを、いとど心苦しげに染ませて、乗り給ひぬ。侍従ぞ参りぬる。

御車寄せて降りし奉り給ふを、いかで「あらぬ人」とはおぼさむ。かぎりなくなつかしうなごやかなる御けはひは、いとよくなひ給へれば、少しもおほしも分かぬほどに、やうやう「あらぬ」と見なし給ひぬる心惑ひぞ、うつつとはおぼえぬや。かの昔夢見しはじめよりも、なかなか恐ろしうあさましきに、やがて引き被^かき給ひぬ。

侍従こそは、

「いかに侍ることにか」

と、

「これはあらぬことになむ。御車寄せ侍らむ」

と泣く泣くいふを、さばかり色なる御心には、許し給ひてむや。寄りて引き放ち聞ゆべきならねば、泣く泣く几帳のうしろにゐたり。

男君は、ただにはあらず、「いかに」とおぼさるることもやありけむ、いと嬉しきに、いたく泣きしづみ給ふけしきもことわりながら、いと馴れ顔に、かねてしも思ひあへたらむことめきて、さまざま聞え給ふこともあるべし。隔てなくさへなりぬるを、女は、死ぬばかりぞ心憂くおほしたる。かかることは、例の、あはれも浅からぬにや、たぐひなくぞおぼさるる。

【注解】

○ほどなれど—底本ほか「ほどあれと」。「あ(阿)」は「な(奈)」の明らかな誤写。よって、三手文庫本等多くの伝本と同形の「ほどなれど」に改めた。○時々も—下に「使ひ給ひし」ほどの意を補つて解いた。このあたり不文。○君に「姫君」のことだが、ここは女房からみた主人の意なので、「君」と記される。○侍らぬは—底本ほか主要諸本「侍ねは」。そのまま「侍らねば」でもひとまず意味は通じるが、「ね(櫛)」は「ぬ(奴)」の誤りと考えた方がよい。したがって、李下亭文庫本等一部末流伝本と同形の本文「侍らぬは」に改めた。○御かぜの氣—姫君の口実に対し第三者の事実をもつて応酬させるおもしろさ。読者をも混乱に巻き込む設定と物語展開を図る作者の工夫は、こういった細部にも施されているのである。○勧め奉れば—底本ほか「すゝめたてまつれと」。この「と(止)」は、いうまでもなく「は(者)」の誤写。よって、三手文庫本等により改めた。接続助詞「ば」と「ど」が書写の次元で容易に交替することを、この際強調しておきたい。○いと染み深うなつかしき—参考「ありつる扇御覧すれば、もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさび書きたり」(『源氏物語』夕顔卷)「唐の縹の紙の、いとなつかしうしみ深う匂へるを、いと細く小さく結びたるあり」(同胡蝶卷)など。○いとど心苦しげに染ませて—異文も多く不審。釈然としないが、あるがままに解釈した。○なごやかなる—底本ほか「なめやかなる」の本文だが、形容動詞「なめやかなる」は用例がない。「なご(己)やかなる」↓「なに(二)やかなる」↓「なに(兎)やかなる」↓「なめ(免)やかなる」の誤写過程が想定可能であるため、本文を「なごやかなる」に改訂した。「己」と「二」、「兎」と「免」の草体はいずれもきわめて紛れやすい。参考「いますこしなまめかしき氣添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします」(『源氏物語』賢木卷)「月影のけはひなつかしく、なごやかなるさま」(『夜の寝覚』卷二)など。○いかに侍るにか—

底本「いかにと侍事にか」。諸本同じだが、「いかにと」の「と(止)」は、上の「に(二)」との字形相似に惑わされて生じた衍字とみるべきである。ゆえに今これを削除した。「いかに侍る」は「いかにある」『「いかなる」の丁寧形。参考「いかに、いかにほべりけることにか」(『源氏物語 行幸卷』「人々も、いかにほべりしことにか」など、御氣色見たてまつれど」(同総角卷)など。○「いかに」と底本ほか諸本「いかに」。ここは、権の少将の心底を推し量る草子地であり、前項とは逆に、「いかに」に下接する引用の格助詞「と」は不可欠。よって、今これを補った。○かねてしも思ひあへたらむことめきて―右大臣の少将は、事態をまるで予見していたかのように振舞うのである。

【現代語訳】

(そんなとある夜、)権の少将は、(右)大将殿の奥方が、お風邪の症状がおりであるのかこつて、いつものように(大将邸に)お泊りになっていらしたので、(お屋敷の中が)ひどく落ち着かず、(お見舞いの)客人などが大勢来訪なさる時分ではあるけれど、たいそうこつそりと、(中の君のもとに)お(迎えの)車をご手配申し上げなさるが、(折しも、事情を熟知しているあの)左衛門の尉も(お側に)お仕えしていなかったので、(少将は、これまでも)幾度か(起用したことのある)、このような役目にたいそう向いている侍に(段取りを)耳打ちして、お車を差し向け申し上げなさる。(何せ、右)大将殿の奥方が(お風邪を召して)体調不良でいらつしやる時分とあつて、(邸内が)とてもごたごたしているの、(今夜は、いつも差し上げる)お手紙(をご用意する余裕)もない事情をご説明なさる。(さて、その侍が、)夜がたいそう更けて、あちらに参上して、

「少将様から(の使いです)」

といて、

「(ご主人に) 密かにお伝え願えませんか」

といったのだが、(あいにく、中の君方の) 女房たちは全員寝てしまっていたので、(侍は仕方なく、) 姫君のお部屋(付き)の侍従の君に、

「少将様から(の使いです)」

といて、(お迎えの) お車をご用意申し上げたしだいを伝えたところ、(侍従の君は、) すっかり寝ぼけ(て、いまだぼんやりし) た心地であつたがために、

「どちら(の少将様) ですか」

と確認することもない。「普段も(こうして) 参上することなので」と思つて、

「これこれ(このようないでございます)」

と姫君に申し上げたところ、(姫君は、)

「(おかしいわ。いつもは必ずくださる) お手紙もない。(お断わりする口実として、) 『風邪だろうか、体調が優れない』 などといいなさい」

と(慎重に) ご指示なさるので、

「お使いの者、こちらへ」

と(取次の侍女に) いわせて、妻戸を開けると、(使いの侍が) 近寄ってきたので、

「(普段どおり) お手紙などがありませんのは、どうしたことでしょうか。加えて、(姫君は) 『お風邪の症状がおあ

りになる』ということ（今夜はお断わりします）」

というと、

「（実はこちら、右）大將殿の奥方がお風邪の症状がしつこくていらして、人でごった返しております（折も）折なので、（少將様は、）『この（緊急の）事情を申し上げよ。以前からお使いに参上してありました者も側にいない時分で』などと、何度も何度もおっしゃられたのに、（もし私が）手ぶらで帰参したならば、間違いないお叱りを受けることでしょう」

というので、（侍従の君は、姫君のもとに）参上して、

「（いつもと違っておりますのは、）しかしか（の御事情によるのだそうです）」

とご報告して、（あちらへ向かわれるよう）お勧め申し上げると、例のごとく、女房の指図に素直に従うお心であつて、薄紫色の柔らかなお召し物が、たいそう深く（薫物の香りが）染みて好ましい加減であるのを、一段と（相手の）心を締めつけるかのように染み込ませて、（お迎えの牛車に）お乗りになる。ほかならぬ侍従（の君が、同車してお供に）参上なさる。

（さて、右大將邸に到着すると）お車を（車寄せに）寄せて、（権の少將が手ずから）お降ろし申し上げなさるのを、（姫君は）どうして「別人だ」とはお思ひにならうか。このうえなく慕わしく温和なご様子は、（お二人）たいへんよく似通っておられたので、（姫君は）まったく識別できなくていらっしゃったところが、しだいしだいに「（この方は、右大將の少將様）ではない」と見きわめなされた（その時の）お気持ちの取り乱しようといったら、（とても）現実とは思えないことよ。（姫君は、）あの、昔見た悪夢のはじまりよりも、かえって恐ろしくどうしてよいかわからないの

で、そのまま（お召し物を）引き被りなされた。

（頼みの綱である）侍従（の君）は、

「（いったい）どうしたことでしょうか」

といい、

「これは（明らかに）間違いで（ごさいます）。（すぐさま、先ほどの）お車をお寄せください」

と涙ながらに抗弁するけれど、たいへんに好色な（権の少将の）お心からして、（姫君をひとたび捉えなされた）お手を、（素直に）緩めてしまわれるはずがあらうか。（だからといって、みずから）近寄って（無理やり）引き放し申し上げられることではないので、（侍従の君は、）泣く泣く几帳の背後に座ってい（るよりほかに術がなかつ）た。

（こうして、姉君とも契りを交わす機会を得た）男君（の心境）は、（もちろん）尋常ではなく、（前々から）「（姉君は）どのような（な）方）であらうか」とご興味を抱かれることもあったのだろうか、とても嬉しいので、（あまりの衝撃に）ひどく泣き臥していられしやる（女君のご）様子も道理とはいえ、たいそう親しげな素振りで、（まるで）予期していたことであるかのように、あれこれと申し上げなさる（お）ことばもあるのだろう。（とうとう）隔て（となる最後のお着物）まで（剥ぎ取られて）なくなったのを、女（君）はまさに、死ぬほど辛くお思ひになった。こうした（思いがけない）契りは、例によって、しみじみとした愛情も浅くないのだろうか、（少将は姫君のことを）比類なくお思ひになる。

【余説】

本節に見える創作上の趣向は、右大将の北の方の「御風邪の氣」を案出した点にある。権門の奥方の病氣であるから、屋敷に仕える人間が右往左往するのみならず、権門に阿る見舞客も多く訪れ、邸内は騒然として落ち着かない。こうした「非常事態」の最中であるにもかかわらず、無謀にも恋人を迎えようとした少将たちの若さ、周到な配慮の欠如が、重大な過失を招く結果を生むという寸法である。

四 — 右大将の少将と中の君の契り —

【本文】

あさましきことは、今一人の少将の君も、母上の御かぜよろしきさまに見え給へば、「かしこへ」とおほせど、「夜などきと尋ね給ふこともあらむに、折節なからむも」とおほして、御車奉り給ふ。

これは、前々も御文なき折もあれば、何とものたまはず。例の、清季参りて、

「御車」

といふを、申し伝ふる人も、一所はおはしぬれば、疑ひなく思ひて、

「かく」

と申すに、これも、「いとはかに」とはおほせど、今少し若くおはするにや、何とも思ひいたりもなくて、人々、御衣など着せ替へ奉りつれば、われにもあらでおはしぬ。

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

御車寄せに少将おはして、ものなどのたまふに、あらぬ御けはひなれば、弁の君、

「いとあさましくなむ侍る」

と申すに、君も心とく心得給ひて、日ごろも、いとにほひやかに見まほしき御さまの、おのづから聞き給ふ折もありければ、「いかで、『思ふとだにも』」など、人知れず思ひわたり給ひけることなれば、

「何か、『あらず』とて疎くおぼすべき」

とて、かき抱きて降ろし給ふに、いかがはすべき。さりとして、われさへ捨て奉るべきならねば、弁の君も降りぬ。女君はただわななかれて、動きだにし給はず。弁、いと近うつととらへたれど、何とかはおぼさむ。

「今は、たださるべきにおほしなせ。よに人の御ためあしき心は侍らじ」

とて、几帳押し隔て給へれば、せむ方なくて泣きあたり。これも、いとあはれ限りなくぞおぼえ給ひける。

【注解】

○なからむも——底本ほか「あからんも」。「あ(阿)」は「な(奈)」の明白な誤写であるため、本文を改めた。なお、三手文庫本等「なる覧も」に作るが、これも「か(可)」↓「る(留)」のありふれた写し間違い。○清季——隨身の名。仮に漢字を当てた。○今少し若くおはするにや——中の君が精神的により幼いことを付度する草子地。○日ごろも——平生も、普段もの意で、「思ひわたり給ひける」に係る。○おのづから聞き給ふ折もありければ——右大臣の少将から聞くのである。先に「かたみにこのしのび人も知り給へり」とあった。○思ふとだにも——壬生忠岑の歌「わが魂を君が心に入れかへて思ふとだにも知らせしがな」(『忠岑集』)を引く。

【現代語訳】

（さらに） あきれたことは、もう一人の少将様も、母上のお風邪が小康を保っているように見えなかつたので、「あちらへ（伺おうか）」とお考えになるけれど、「（母上が）夜分に急用があつて（自分を）お探しになることがあつた場合に、折しも不在であつたならば（さすがに具合が悪いだろう）」とお思ひになつて、（先方に迎への）お車を差し上げなさる。

こちら（右大将の少将）は、従来お手紙がない時もあつたので、（この度も、詳しくは）何ともおっしゃらない。いつものように、清季が（故大納言邸に）参上して、

「（お迎への） お車（でございます）」

というのを、（主人に）申し伝える女房も、（ご姉妹のうち）お一人は（すでに）お出でになつていたので、疑う余地なく思つて、

「（こう（いうしだいでございます）」

と（中の君に）申し上げると、こちらも、「たいそう急（な呼び出し）だこと」とはお思ひになるが、（姉の姫君に比べると）幾分未熟でいらつしやるのか、何ともお考えが行き届くこともなくて、女房たちがお召し物などを着せ替え申し上げなされると、わけもわからぬままにお出でになつた。

（到着なされると、）お車寄せに（右大将の）少将がいらして、お声などお掛けになると、違う（殿方の）ご様子なので、（同乗して参上した）弁の君が、

「（これは）とんでもない事態でございます」

と申し上げると、(男) 君も敏感に察知なさつて、普段も、たいそう輝くように美しく(是非実際に) 見てみたい(と思われる中の君の) ご容姿(の噂) が、自然とお耳に入る機会もありだったので、(右大将の少将としては) 「何とかして、『あなたを』愛しているとだけでも(お知らせしたい)」などと、心密かに思いつづけていらしたことで、

「どうして、『人違いだ』という理由で(私を) 疎ましくお思いになる必要がありますようか」

といって、(牛車から) 素早く抱き降ろしなさるので、(中の君側としては、どうにも) 抗いようがない。だからといって、自分まで(主人を) お見捨て申し上げてよい道理はないので、弁の君も(やむなく車から) 降りた。女君は(恐怖のあまり) おのずとおからだが震えるばかりで、身じろぎ一つなさらない。弁(の君) は、至近距離にいてずっと(女君のお着物を) 掴んでゐるけれど、(男君は、それを) 何(の障害) とお思いになろうか。(いとも簡単にその手を) 引き放して、女君に、

「今となつては、ただそうなるはず(の宿縁) だったのだとご観念なさいませ。決してあなたをご不幸にするつもりはありません」

といって、几帳で一方的に隔てなさつたので、(弁の君は、もはや) どうする術もなく(無念の) 涙を流しながら座っていた。こちら(の少将) も、(新たに契りを交わした女君に対して、) たいそうしみじみとしたご愛情をこのうえなくお感じになるのであった。

【余説】

本節の内容は、いわば予定調和的で前節とシンメトリックな展開となっているが、右大将の少将は、姫君を迎える際に必ずしも手紙を添える習慣がない。右大臣の少将は、中の君を迎える際には必ず手紙を添える習慣がある、という設定のはずが、いつしか逆になって崩れてしまったように見える。そうだとすれば、それは作為か、それとも、錯誤か。

五 — それぞれの契り —

【本文】

おのおの帰り給ふ暁に、御歌どもあれど、例の、漏らしにけり。男も女も、いづ方もただ同じ御心のうちに、あいなう胸ふたがりてぞおぼさるる。さりとしてまた、もとをおろかにはあらぬ御思ひどもの、めづらしきにも劣らず、いづ方も限りなかりけるこそ、なかなか深きしも苦しかりけれ。

「権の少将殿より」

とて御文あり。起きも上がられ給はねど、人目あやしさに、弁の君、ひろげて見せ奉る。

思はずにわが手に馴るる梓弓深き契りの引けばなりけり

「あはれ」と見入れ給ふべきにもあらねば、人目あやしくて、さりげなくて、包みて出だしつ。

今一方も、

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

「少将殿より」

とてあれば、侍従の君、胸つぶれて見せ奉れば、

浅からぬ契りなればぞ涙川同じながれに袖濡らすらむ

とあるは、「いづ方にもおろかにおぼされじ」とにや。かへすがへす、ただ同じさまなる御心のうちどものみぞ心苦しう、とぞ本にも侍る。

「劣り優るけちめなく、さまざま深かりける御心ざしども、果てゆかしくこそ侍れ」「なほ、とりどりなりける中にも、めづらしきは、なほたち優りやありけむに、見馴れ給ふにも、年月もあはれる方は、いかが劣るべき」と、本にも「本のまま」と見ゆ。

【滴注】

○包みて出だしつ——弁の君が返歌をしたため、立文にして取次の侍女に渡すのである。○とあるは——底本以下諸本「とあるを」。格助詞「を（遠）」は係助詞「は（者）」の誤りとみて改めた。「は」は「+意志の助動詞+とにや」の構文。参考「かくのたまふは、おとどに悪しと思はせてまつらむとにやあらむ」（『うつほ物語』忠こそ巻）「ただにこそ見めと思さるるは、人には言はせじ、我ひとり恨みきこえんとにやあらむ」（『源氏物語』宿木巻）など。○いづ方にもおろかにおぼされじ——「おほされじ」は、底本ほか現存諸本ことごとく「おほせられん」。だが、この文脈における「おほせらる」の使用には疑問が残るうえに、文末が意志の助動詞「む／ん」ではいかにも不自然であって、むしろその打消し形「じ」とありたいところ。ゆえに、「おほせら（世良）れ」は「おほさ（左）れ」の、「ん（无）」は「し（之）」

の誤写とみて改めた。どちらの女性にも愛情疎かには思われたくない、という虫のよい男性心理を指す。○御心のうちども―「うちども」は、底本ほか「うちと」。三手文庫本等により「も」一字を補った。「と（止）」と「も（毛）」の字形酷似に原因する脱落と思われる。

【現代語訳】

（女君たちが）銘々お帰りなさる明け方に、それぞれ（男君からの）お歌があるけれど、例によって、書き漏らしてしまった。男君も女君も、どちら（の組）もまったく同じご心境であるが、（男君たちは）むやみに胸がいっぱいになって感慨無量でいらつしやる。だからといってまた、本来のお相手を疎かにはなさらない（お二人の）ご愛情が、新たなお相手にも（勝るとも）劣らず、両方ともこのうえなかつたのが、かえってその深い愛があだとなって苦しいことであつた。（中の君のもとに）

「権の少将殿からです」

といって、（右大将の少将から後朝の）お手紙がある。（中の君ご自身は、衝撃の甚大さゆえに）起き上がることもお出来にならないが、（そのままにしては）周囲が怪しむので、弁の君が、（ご主人にお手紙を）広げて見せ申し上げる。偶然私の手に馴染んだ梓弓よろしく、思いがけず私のものとなつたしなやかなあなた（の肢体）よ。これも、まるで梓弓を引くように、前世からの深い因縁が私たちを引きつけたからだつたのですね。

「ああ嬉しい」と（お思ひになって、中の君がこのお歌を）じつくりとご覧になるはずもないので、（弁の君は）人目を憚って、何食わぬ顔で（返歌をしたため、きちんと）包んで（使いのもとへと）出した。

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

もうお一方（に）も、

「少将殿からでございます」

といって（右大臣の少将からの後朝のお手紙が）あるので、侍従の君は、肝を冷やして（姫君に）見せ申し上げると、浅くない（前世からの）ご宿縁だからこそ、私の（自然と溢れ出る）涙は川となって流れ、（本来のお方と）一つご血縁（のあなた）を思つて、同等に袖を濡らしているのでしょうか。

とあるのは、「どちらの女君にも、愛情疎かにはお思いになられまい」という（おつもりな）のだろうか。（それにつけても）重ね重ね、まったく同じ（女君たちの）ご胸中だけがひたすらお気の毒に（思われて…）、と（もとの）本にも（書いて）あります。

「優劣の区別なく、それぞれに深かった（男君たちの）ご愛情が、その後どうなったのかを（何よりも）知りたいことです」「やはり、とりどり（に魅惑的）だった間柄でも、目新しいお相手は、何といつても（当初は）優位であつただろうが、（しだいに）見馴れなさるにつけても、長いことご愛情を注いできたお方は、どうして劣るはずがあらうかと、（もとの）本のも「本のまま」と見える。

【余説】

事実Ⅱマコトは「昔物語」より奇なりということであろうか、語り手が遠い過去に身近で見聞した「いとありがたき」話の回想録として始動したはずの本作は、すぐにそれが「物語」Ⅱソラゴトの世界にほかならないことを、何の悪びれる様子もなく暴露し、対称的かつ複雑な趣向を盛り込みながら物語は進行する。

そして、締め括りがこれである。享受者の関心の的となるそれぞれの恋の顛末についてはもとより描くべくもなく、「本にも侍る」「本にも『本のまま』と見ゆ」と二重韜晦の手法を用いることで、体よく糊塗し、完結させてしまうのだから恐れ入る。あえて本作を評価するならば、全篇を通じて策士策に溺れた感なきにしもあらずといえるのではなかろうか。

執筆者紹介

佐藤知己 (言語科学)
清水誠 (言語科学)
戸田聡 (欧米文学)
宮下弥生 (欧米文学)
大西郁夫 (欧米文学)
橋本雄一 (地域科学)
中村三春 (映像・現代文化論)
後藤康文 (日本古典文化論)

北海道大学
文学研究院紀要
第一六五号

令和3年12月8日 発行

編集者

北海道大学文学研究院長

藤田 健

発行者

北海道大学

(株) アイワード

Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University

CONTENTS

Problems of Ainu Linguistics — with Reference to Recent Discussions	Tomomi SATO	(Left) 1
German as a Germanic Language (6) — Anaphoric Pronouns, Reflexives and Possessives —	Makoto SHIMIZU	(Left) 31
Some Reflections on How to Get Started Comparative Studies in Religious Scriptures	TODA Satoshi	(Left) 61
Creating Infidelity and Jealousy from Nothing: Iago's Rhetoric in <i>Othello</i> , 3.3.29-261	Yayoi MIYASHITA	(Left) 83
«Обломов» и прогресс	Ikuo ONISHI	(Left) 107
Spatial Analysis of Tsunami Inundation Zone on the Pacific Coast Region in Hokkaido	Yuichi HASHIMOTO	(Left) 129
Angel of <i>Hiragana</i> : Klee and Mozart in poetry of Tanikawa Shuntaro	Miharu NAKAMURA	(Right) 1
A Commentary on <i>Omowanukata ni Tomarisuru Shosho</i>	Yasufumi GOTO	(Right) 61